

一般国道9号(羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県東伯郡羽合町

MINAMIDANIOOYAMA

南谷大山遺跡

MINAMIDANI

南谷ヒジリ遺跡

MINAMIDANI

南谷22・24～28号墳



寄贈

1993

財団法人 鳥取県教育文化財団

建設省 倉吉工事事務所

正 誤 表

一般国道9号(羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

ページ	行	誤	正
序文	21	発掘発掘委託契約	発掘委託契約
例言	28	島根大学文学部	島根大学法文学部
図版目次	図版14	南谷大山遺跡BS I 10内 SK 3完掘状況(西より)	南谷大山遺跡BS I 10内 SK 3完掘状況(東より)
6	19	関金町峰遺跡	関金町横峰遺跡
24	24	底面で円形呈し	底面で円形を呈し
58	9	同定	比定
77	13	Bピット群1	Bピット群01
85	36	BSD06の4条検出された。	BSD06の4条が検出された。
136	23	Po 1	Po 6
153	3	⑬⑭層溝の埋土	⑬⑭層は溝の埋上
164	19	BS I 29-1. BS I 29-2.	BS I 29-1 BS I 29-2
164	29	BS I 29-1. BS I 29-2.	BS I 29-1 BS I 29-2
169	19	これは、BS I 30-3のもと	これは、BS I 30-3のP23と
181	20	U字形	「U」字形
207	17	底部長径1.11×	底部長径1.11m×
240	8	掘り込まれ	掘り込まれ
図版14	キャプション	南谷大山遺跡BS I 10内 SK 3完掘状況(西より)	南谷大山遺跡BS I 10内 SK 3完掘状況(東より)

序

東郷池周辺は、古くから遺跡の宝庫として知られています。東郷池の北東に位置する羽合町には、国史跡の橋津古墳群や砂丘下の大集落であった長瀬高浜遺跡など全国に知られた遺跡があります。また泊村では、集落跡や古墳のほか銅鐸などの貴重な遺物も出土しています。さらに、東郷町では国史跡の北山古墳をはじめとする古墳群や集落跡などがあります。なかでも、伯耆園（鳥取県西部）の一宮であった倭文神社では、経筒・金銅仏などの遺物が出土し、「伯耆一宮経塚出土品」として国宝に指定されています。

当財団では、このような遺跡地帯を、昨年度にひきつづき建設省の委託を受け、「一般国道9号（羽合道路）改築工事に伴う発掘調査」として、羽合町で行いました。

その結果、砂丘下の大集落であった長瀬高浜遺跡の空白期間を埋める時期の集落跡が丘陵地で調査されました。これらは、郷土の歴史を解き明かしていくうえでの、貴重な資料です。今回、この調査成果を報告書にまとめ刊行することができました。本報告書が教育および学術研究のため広く活用され、歴史の解明の一助になればと期待するとともに、文化財に対する理解や認識がより深まり、その成果が永く後世に伝えられれば幸いです。

最後に、建設省會古工事事務所ならびに交通の不便な所にもかかわらず調査に参加して下さった地元の方々をはじめ、ご協力いただいたの方々、その他関係各位に對して心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 西 尾 邑 次

序 文

建設省が管理する一般国道9号は、京都市を起点として福知山を経由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、山口県下関に至る延長約609kmの路線であり、山陰地方の産業・経済活動の動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省倉吉工事事務所では、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）まで76.4kmを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。そのうちの一つに東伯郡羽合町及び泊村地区において、将来の国土開発幹線道路として当面、活用できる機能を有する高規格な自動車専用道路である羽合道路の整備を進めています。

羽合道路は、泊村原地内でインターチェンジにより現道9号及び①倉吉青谷線とアクセスし、羽合町長瀬でインターチェンジによって北条道路一般部とアクセスしますが、途中東郷湖が見渡せる位置にサービスエリアが予定されている延長6kmの県中部地方ではじめての高規格道路で、昭和61年度に国道9号のバイパス事業として事業に着手しましたが、63年度に高規格な機能を持たすよう構造変更を行い、同年用地買収に着手しました。平成2年度からは、羽合高架橋下部工事に着手し、今年度は下部工を完了し、上部工に着手しました。

このルートには、全部で10か所の古墳・散布地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い記録保存を行うこととなりました。

このうち羽合町地区内では、工事の予定工程等を考慮し調整した結果、今年度は「大山所在遺跡群(口)」(報告書南谷大山遺跡、南谷28号墳)、「南谷古墳群」(報告書南谷22号墳)南谷所在遺跡群」(報告書南谷ヒジリ遺跡、南谷27号墳)の3か所について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもとに発掘調査が行われました。残りの箇所についても4年度に引続き発掘発掘委託契約を締結し、発掘調査を進めていただく予定です。

本書は、この調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持っていることに御理解いただければ幸に存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ現地での調査から報告書の編集に至るまでご協力をいただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位のご尽力に対し感謝いたします。

平成5年3月

建設省 倉吉工事事務所長

岡 田 清 彦

例 言

1. 本報告書は、1992年度一般国道9号（羽合道路）改築工事に伴う羽合町大字南谷字大山地区（南谷大山遺跡）、羽合町大字南谷字ヒジリ地区（南谷ヒジリ遺跡）、羽合町大字南谷字夫婦塚地区（南谷22号墳）の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 本報告書に記載した南谷ヒジリ遺跡、南谷22号墳（1990年度一部調査）は周知の名称であるが、南谷大山遺跡は新発見の遺跡の為、大字と小字名を並べて命名したものである。
3. 本報告書に記載した遺跡の所在地は、南谷ヒジリ遺跡が羽合町大字南谷字ヒジリ327、他2筆、南谷22号墳が羽合町大字南谷字夫婦塚179-4、南谷大山遺跡が羽合町大字南谷字大山114・大山113、南谷字助七峰132-1、南谷字峰140、他9筆である。
4. 本報告書で示す標高は建設省の道路センター杭を使用し、南谷ヒジリ遺跡はNo92（X：-55992.801 Y：-40724.449）の21.761m、南谷22号墳はNo88+20（X：-56068.809 Y：-40352.764）の68.780m、南谷大山遺跡はNo85（X：-56153.399 Y：-40044.199）の92.228mを起点とする標高値で方位は磁北である。X：、Y：は国土地理院第5系である。
5. 本報告書に記載の地形図は国土地理院発行の1/50000地形図「青谷・倉吉」、調査区位置図は羽合町の1/2500地形図「都市計画計画図5」を使用した。
6. 本報告書の作成は調査員の討議に基づくものである。
報告書本文については調査員が分担して執筆し、執筆担当者名は目次に記載した。
挿図のうち、遺構実測は調査員、補助員、及び業者委託して行なった。
遺構の浄写は中部埋蔵文化財調査事務所、遺物の実測・浄写は、鳥取県埋蔵文化財センターで行なった。
遺構写真は発掘担当調査員が、遺物写真は岸本・牧本が撮影した。
本書の編集は米田が行なった。
7. 出土遺物、図面、スライド等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。ただし、出土遺物は将来的に羽合町教育委員会に移管する予定である。
8. 国立奈良文化財研究所の浅川滋男主任研究官から、南谷大山遺跡で確認した竪穴住居跡の構造についてとこれからの住居跡の調査の方法についての指導助言を頂き、さらに、2棟の焼失住居跡の復元方法に関する指導をして頂いた。
9. 鳥取大学文学部歴史学研究室の中田義昭教授から、南谷大山遺跡の集落の在り方についての指導助言を頂いた。
10. 米子工業高等専門学校建築学科の和田嘉有助教から、南谷大山遺跡の焼失住居の構造について指導助言を頂いた。
11. 京都産業大学理学部年代測定室の山田治教授に、南谷大山遺跡の焼失住居内出土の炭化物についてのC¹⁴年代測定をお願いした。
12. 鳥取大学農学部農林総合科学科の古川郁夫助教に、南谷大山遺跡の焼失住居内より出土した炭化物の樹種鑑定をお願いした。
13. 鳥取大学教育学部の赤木三郎教授に、調査地区出土の石器、玉類の石材鑑定をして頂いた。
14. 古環境研究所に、土坑埋土中の花粉とプラントオパール分析、遺構出土の種子同定を依頼した。
15. 関西大学文学部考古学研究室の網干善教教授に南谷大山遺跡BS I 13の鉄を鑑定して頂いた。
16. 鳥取大学医学部法医学研究室の井上晃孝助教に主体部出土の歯の鑑定をして頂いた。
17. 鳥取県立博物館自然係の星見清晴係長、鳥取県警察本部の竹林慶彦氏にBS K04出土の貝類の鑑定をして頂いた。
18. 現地調査及び報告書作成にあたって、下記の方々に指導助言・協力して頂いた。

赤沢秀則、久保穰二郎、小原食樹、真田廣幸、清水真一、瀧川友子、中野知照、名越 勉、西尾克己、根鈴舞男、根鈴智津子、広江耕治、宮本正保、森下哲哉、

（五十音順、敬称略）

凡 例

1. 発掘調査時における遺構番号と報告書の番号は、基本的に一致する。しかし、南谷ヒジリ遺跡については、1992年調査時にS K01~03・S S01としたものを、1990年調査のものに続けるためにS K05~07・S S02に変更した。

2. 本報告書における遺構記号は次のように表す。なお、掘立柱建物跡の柱穴のピット番号は、建物毎の番号とピット群の番号の両方がある。

S I : 竪穴住居跡 S B : 掘立柱建物跡 S K : 土抗・土壇 S D : 溝状遺構 S S : 段状遺構
P : 柱穴・ピット

3. 本報告書における実測図は基本的に下記の縮尺で掲載した。

- (1) 遺構図—竪穴住居跡：1/60、掘立柱建物跡：1/60、土抗・土壇1/30、
溝状遺構：1/60・1/100・1/800、段状遺構：1/60・1/100、ピット群：1/60・1/100
土壇：1/60・1/200、主体部：1/20・1/30・1/40
石列遺構：1/80

- (2) 遺物実測図—土器：1/3・1/6・1/8、土玉：1/2、鉄製品：1/2、1/1・1/2、
石器：1/1・1/3・1/4、青銅製品：1/1・1/2、木製品：1/1

4. ピットの規模は(長さ×短径×深さ)cmで表した。竪穴住居跡の規模は、壁溝を除いた床面の規模である。墳丘の規模は、墳端(裾部)までの計測値である。





5. 遺構図における表示は以下の通りである。

 : 焼土面、 : 貼床、 : 焼土、 : 炭化物、 : 炭・灰、
 : 貝層、 : 砂、 : 砂利、 : 旧表、 : 赤色塗彩、
● : 土製品、 △ : 鉄器、 □ : 石器、 ▲ : 木製品、 ☆ : 玉製品、
★ : 青銅製品

6. 本報告書における遺物記号は次のように表す。

Po : 土器・土製品 S : 石器 J : 玉製品 F : 鉄製品 B : 青銅製品 W : 木製品

7. 土器実測図のうち、弥生土器・土師器は断面白抜き、須恵器は断面黒塗りで表現した。遺物実測図中における記号は以下の通りにする。

→ : ケズリの方向(砂粒の動きで判断した)、 : 赤色塗彩、 : 擦り範囲、
— : 敲打範囲、 : 敲打面、 : 擦り面、●Po : 床面出土土器、●S : 床面出土石器、
●J : 床面出土玉製品、●F : 床面出土鉄製品、●B : 床面出土青銅製品

8. 遺物には、遺跡名、地区名、遺構名もしくはグリッド名、取り上げ番号、取り上げ年月日を基本的に記載した。遺跡名は次の略号を用いた。南谷大山遺跡=MO、南谷ヒジリ遺跡=MH。実測した遺物については、実測者の頭文字を使った実測者番号(KR-1、NA-1等)を2×5mm程度のシールに記し、それを個体ごとに貼り付け、実測原図にもその番号を記した。

目 次

序		
序 文		
例 言		
凡 例		
目 次		
第 1 章 調査の経緯		
第 1 節 調査に至る経緯	(米田)	1
第 2 節 調査の経過と方法	(米田)	1
第 3 節 調査体制	(米田)	4
第 2 章 位置と環境		
第 1 節 地理的環境	(岸本)	5
第 2 節 歴史的環境	(牧本)	6
第 3 章 南谷大山遺跡の調査 (1991年度調査)		
第 1 節 南谷大山遺跡 A 区の概要	(米田)	10
第 2 節 南谷大山遺跡 A 区の調査結果	(米田・岸本)	10
第 3 節 南谷大山遺跡 B 区の概要 (1991年度調査)	(牧本)	34
第 4 節 南谷大山遺跡 B 区の調査結果	(牧本)	35
第 4 章 南谷大山遺跡の調査 (1992年度調査)		
第 1 節 南谷大山遺跡 B 区の概要	(牧本)	85
第 2 節 南谷大山遺跡 B 区の調査結果	(米田・牧本・岸本)	86
第 5 章 南谷古墳群の調査		
第 1 節 南谷 22・24～26・28号墳の概要	(牧本)	238
第 2 節 南谷 22・24～26・28号墳の調査結果	(米田・岸本)	239
第 3 節 南谷大山遺跡石列遺構の調査結果	(岸本)	257
第 6 章 南谷ヒジリ遺跡・南谷 27号墳の調査		
第 1 節 南谷ヒジリ遺跡・南谷 27号墳の概要	(米田)	258
第 2 節 南谷 27号墳の調査結果	(米田)	258
第 3 節 南谷ヒジリ遺跡の調査結果	(米田)	261
まとめ	(牧本)	266
註. 参考文献		268
特論 1 南谷大山遺跡住居跡出土木材炭化物の樹種構成		269
特論 2 ¹⁴ C年代測定値についての国際的約束		275
特論 3 南谷大山遺跡の自然科学分析		277

挿 図 目 次

挿図1	南谷大山遺跡・南谷ヒジリ遺跡と道路建設ルート	3
挿図2	羽倉町の位置	5
挿図3	周辺遺跡分布図	7
挿図4	南谷大山遺跡A区S101遺構図	12・13・14
挿図5	南谷大山遺跡A区S101出土遺物実測図	15
挿図6	南谷大山遺跡A区S102遺構図	16
挿図7	南谷大山遺跡A区S102出土遺物実測図	17
挿図8	南谷大山遺跡A区S103遺構図	18
挿図9	南谷大山遺跡A区S103出土遺物実測図	20
挿図10	南谷大山遺跡A区S104出土遺物実測図	20
挿図11	南谷大山遺跡A区S104遺構図	21
挿図12	南谷大山遺跡A区SK01遺構図	22
挿図13	南谷大山遺跡A区SK01出土遺物実測図	22
挿図14	南谷大山遺跡A区SK02遺構図	23
挿図15	南谷大山遺跡A区SK03出土遺物実測図	24
挿図16	南谷大山遺跡A区SK03遺構図	25
挿図17	南谷大山遺跡A区SK04遺構図	25
挿図18	南谷大山遺跡A区SD01出土遺物実測図	26
挿図19	南谷大山遺跡A区SD02出土遺物実測図	26
挿図20	南谷大山遺跡A区ビット群02出土遺物実測図	26
挿図21	南谷大山遺跡A区ピット群01(右上)・02(右下)遺構図	27・28
挿図22	南谷大山遺跡A区SD01遺構図	28
挿図23	南谷大山遺跡A区SD02遺構図	29
挿図24	南谷大山遺跡A区遺構外出土遺物実測図(1)	30
挿図25	南谷大山遺跡A区遺構外出土遺物実測図(2)	31
挿図26	南谷大山遺跡A区遺構外出土遺物実測図(3)	32
挿図27	南谷大山遺跡B区S101炭化物出土状況図	35
挿図28	南谷大山遺跡B区S101出土遺物実測図(4)	36
挿図29	南谷大山遺跡B区S101遺構図	37・38
挿図30	南谷大山遺跡B区S101出土遺物実測図(1)	39
挿図31	南谷大山遺跡B区S101出土遺物実測図(2)	40
挿図32	南谷大山遺跡B区S101出土遺物実測図(3)	41
挿図33	南谷大山遺跡B区S102遺構図	43
挿図34	南谷大山遺跡B区S102出土遺物実測図	44
挿図35	南谷大山遺跡B区S103遺構図	45
挿図36	南谷大山遺跡B区S103出土遺物実測図	46
挿図37	南谷大山遺跡B区S104遺構図	47
挿図38	南谷大山遺跡B区S104出土遺物実測図	47
挿図39	南谷大山遺跡B区S105遺構図	49・50
挿図40	南谷大山遺跡B区S105出土遺物実測図(1)	51
挿図41	南谷大山遺跡B区S105出土遺物実測図(2)	52
挿図42	南谷大山遺跡B区S106遺構図	53
挿図43	南谷大山遺跡B区S106出土遺物実測図(1)	54
挿図44	南谷大山遺跡B区S106出土遺物実測図(2)	55
挿図45	南谷大山遺跡B区S107遺構図	55

挿図46	南谷大山遺跡B区S107出土遺物実測図	55
挿図47	南谷大山遺跡B区S108出土遺物実測図	56
挿図48	南谷大山遺跡B区S108遺構図	57
挿図49	南谷大山遺跡B区SK01遺構図	58
挿図50	南谷大山遺跡B区SK02遺構図	59
挿図51	南谷大山遺跡B区SK02出土遺物実測図	60
挿図52	南谷大山遺跡B区SK03遺構図	60
挿図53	南谷大山遺跡B区SK03出土遺物実測図	61
挿図54	南谷大山遺跡B区SK04遺構図	61
挿図55	南谷大山遺跡B区SK04出土遺物実測図(1)	62
挿図56	南谷大山遺跡B区SK04出土遺物実測図(2)	63
挿図57	南谷大山遺跡B区SK04出土遺物実測図(3)	64
挿図58	南谷大山遺跡B区SK05遺構図	65
挿図59	南谷大山遺跡B区SK05出土遺物実測図	65
挿図60	南谷大山遺跡B区SK06遺構図	66
挿図61	南谷大山遺跡B区SK06出土遺物実測図(1)	67
挿図62	南谷大山遺跡B区SK06出土遺物実測図(2)	68
挿図63	南谷大山遺跡B区SK07遺構図	68
挿図64	南谷大山遺跡B区SK08遺構図	69
挿図65	南谷大山遺跡B区SK07出土遺物実測図	70
挿図66	南谷大山遺跡B区SK09遺構図	71
挿図67	南谷大山遺跡B区SK09出土遺物実測図	71
挿図68	南谷大山遺跡B区SD01出土遺物実測図	72
挿図69	南谷大山遺跡B区SD01遺構図	73・74
挿図70	南谷大山遺跡B区SD02遺構図	75・76
挿図71	南谷大山遺跡B区ビット群01出土遺物実測図	77
挿図72	南谷大山遺跡B区ピット群01遺構図	78
挿図73	南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(1)	79
挿図74	南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(2)	80
挿図75	南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(3)	81
挿図76	南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(4)	82
挿図77	南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(5)	83
挿図78	南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(6)	84
挿図79	南谷大山遺跡B区S108炭化物出土状況図	86
挿図80	南谷大山遺跡B区S109遺構図	87
挿図81	南谷大山遺跡B区S109土器層ノリ出土状況図	88
挿図82	南谷大山遺跡B区S109出土遺物実測図(1)	89
挿図83	南谷大山遺跡B区S109出土遺物実測図(2)	90
挿図84	南谷大山遺跡B区S109出土遺物実測図(3)	91
挿図85	南谷大山遺跡B区S109出土遺物実測図(4)	92
挿図86	南谷大山遺跡B区S109出土遺物実測図(5)	93
挿図87	南谷大山遺跡B区S109出土遺物実測図(6)	94
挿図88	南谷大山遺跡B区S110遺構図	95・96
挿図89	南谷大山遺跡B区S110出土遺物実測図(1)	98
挿図90	南谷大山遺跡B区S110出土遺物実測図(2)	99

探因91	南谷大山遺跡B区S 10出土遺物実測図(3) ……100	探因139	南谷大山遺跡B区S 22出土遺物実測図(2) ……147
探因92	南谷大山遺跡B区S 10出土遺物実測図(4) ……101	探因140	南谷大山遺跡B区S 22遺構図 ……148
探因93	南谷大山遺跡B区S 10出土遺物実測図(5) ……102	探因141	南谷大山遺跡B区S 22出土遺物実測図(1) ……149
探因94	南谷大山遺跡B区S 11住居実測図 ……104	探因142	南谷大山遺跡B区S 23出土遺物実測図(2) ……150
探因95	南谷大山遺跡B区S 11遺構図 ……105-106	探因143	南谷大山遺跡B区S 23遺構図 ……151
探因96	南谷大山遺跡B区S 11出土遺物実測図(1) ……107	探因144	南谷大山遺跡B区S 23出土遺物実測図(1) ……152
探因97	南谷大山遺跡B区S 11出土遺物実測図(2) ……108	探因145	南谷大山遺跡B区S 24遺構図 ……153
探因98	南谷大山遺跡B区S 11出土遺物実測図(3) ……109	探因146	南谷大山遺跡B区S 24出土遺物実測図 ……154
探因99	南谷大山遺跡B区S 12遺構図 ……110	探因147	南谷大山遺跡B区S 25遺構図 ……155
探因100	南谷大山遺跡B区S 12出土遺物実測図 ……110	探因148	南谷大山遺跡B区S 25出土遺物実測図(1) ……156
探因101	南谷大山遺跡B区S 13出土遺物実測図(6) ……112	探因149	南谷大山遺跡B区S 25出土遺物実測図(2) ……156
探因102	南谷大山遺跡B区S 13遺構図 ……113-114	探因150	南谷大山遺跡B区S 27遺構図 ……158
探因103	南谷大山遺跡B区S 13出土遺物実測図(1) ……115	探因151	南谷大山遺跡B区S 27出土遺物実測図(1) ……159
探因104	南谷大山遺跡B区S 13出土遺物実測図(2) ……116	探因152	南谷大山遺跡B区S 27出土遺物実測図(2) ……160
探因105	南谷大山遺跡B区S 13出土遺物実測図(3) ……117	探因153	南谷大山遺跡B区S 28遺構図 ……161-162
探因106	南谷大山遺跡B区S 13出土遺物実測図(4) ……118	探因154	南谷大山遺跡B区S 28出土遺物実測図 ……163
探因107	南谷大山遺跡B区S 13出土遺物実測図(5) ……119	探因155	南谷大山遺跡B区S 29遺構図 ……165
探因108	南谷大山遺跡B区S 13出土遺物実測図(7) ……119	探因156	南谷大山遺跡B区S 29出土遺物実測図 ……166
探因109	南谷大山遺跡B区S 14・26遺構図…121-122	探因157	南谷大山遺跡B区S 30遺構図 ……167-168
探因110	南谷大山遺跡B区S 26出土遺物実測図 ……124	探因158	南谷大山遺跡B区S 30出土遺物実測図(1) ……170
探因111	南谷大山遺跡B区S 14出土遺物実測図(1) ……125	探因159	南谷大山遺跡B区S 30出土遺物実測図(2) ……171
探因112	南谷大山遺跡B区S 14出土遺物実測図(2) ……126	探因160	南谷大山遺跡B区S 30出土遺物実測図(3) ……172
探因113	南谷大山遺跡B区S 14出土遺物実測図(3) ……127	探因161	南谷大山遺跡B区S 31-35遺構図…173
探因114	南谷大山遺跡B区S 14出土遺物実測図(4) ……127	探因162	南谷大山遺跡B区S 31出土遺物実測図 ……173
探因115	南谷大山遺跡B区S 15遺構図 ……128	探因163	南谷大山遺跡B区S 35出土遺物実測図 ……173
探因116	南谷大山遺跡B区S 15出土遺物実測図 ……129	探因164	南谷大山遺跡B区S 32遺構図 ……175
探因117	南谷大山遺跡B区S 16遺構図 ……129	探因165	南谷大山遺跡B区S 32出土遺物実測図(1) ……176
探因118	南谷大山遺跡B区S 16出土遺物実測図 ……130	探因166	南谷大山遺跡B区S 32出土遺物実測図(2) ……177
探因119	南谷大山遺跡B区S 17遺構図 ……131	探因167	南谷大山遺跡B区S 33遺構図 ……178
探因120	南谷大山遺跡B区S 17出土遺物実測図(1) ……131	探因168	南谷大山遺跡B区S 33出土遺物実測図(1) ……178
探因121	南谷大山遺跡B区S 17出土遺物実測図(2) ……131	探因169	南谷大山遺跡B区S 33出土遺物実測図(2) ……178
探因122	南谷大山遺跡B区S 18遺構図 ……132	探因170	南谷大山遺跡B区S 34遺構図 ……179
探因123	南谷大山遺跡B区S 18出土遺物実測図(1) ……133	探因171	南谷大山遺跡B区S 36出土遺物実測図 ……180
探因124	南谷大山遺跡B区S 18出土遺物実測図(2) ……133	探因172	南谷大山遺跡B区S 36遺構図 ……180
探因125	南谷大山遺跡B区S 19遺構図 ……134	探因173	南谷大山遺跡B区S 37出土遺物実測図 ……181
探因126	南谷大山遺跡B区S 19出土遺物実測図 134	探因174	南谷大山遺跡B区S 37-38遺構図…183-184
探因127	南谷大山遺跡B区S 20出土遺物実測図(3) ……136	探因175	南谷大山遺跡B区S 38出土遺物実測図(1) ……185
探因128	南谷大山遺跡B区S 20遺構図 ……137-138	探因176	南谷大山遺跡B区S 38出土遺物実測図(2) ……186
探因129	南谷大山遺跡B区S 20炭化物出土状況 ……139-140	探因177	南谷大山遺跡B区S 39遺構図 ……187
探因130	南谷大山遺跡B区S 20出土遺物実測図(1) ……141	探因178	南谷大山遺跡B区S 39出土遺物実測図 ……187
探因131	南谷大山遺跡B区S 20出土遺物実測図(2) ……142	探因179	南谷大山遺跡B区S 40遺構図 ……188
探因132	南谷大山遺跡B区S 21遺構図 ……143-144	探因180	南谷大山遺跡B区S 40出土遺物実測図 ……188
探因133	南谷大山遺跡B区S 21出土遺物実測図 ……145	探因181	南谷大山遺跡B区S 41遺構図 ……190
探因134	南谷大山遺跡B区S 22内S K 01遺構図 ……146	探因182	南谷大山遺跡B区S 41出土遺物実測図 ……190
探因135	南谷大山遺跡B区S 22内S K 02遺構図 ……146	探因183	南谷大山遺跡B区S 42遺構図 ……191
探因136	南谷大山遺跡B区S 22内S K 03遺構図 ……146	探因184	南谷大山遺跡B区S 42出土遺物実測図 ……191
探因137	南谷大山遺跡B区S 22内S K 04遺構図 ……146	探因185	南谷大山遺跡B区S 43遺構図 ……193
探因138	南谷大山遺跡B区S 22内S K 05遺構図 ……146	探因186	南谷大山遺跡B区S 43出土遺物実測図(2) ……194

挿図187	南谷大山遺跡B区S 43出土遺物実測図(1)	…195
挿図188	南谷大山遺跡B区S 44出土遺物実測図	…196
挿図189	南谷大山遺跡B区S 44遺構図	…197
挿図190	南谷大山遺跡B区S 45出土遺物実測図	…197
挿図191	南谷大山遺跡B区S 45遺構図	…198
挿図192	南谷大山遺跡B区S B01遺構図	…200
挿図193	南谷大山遺跡B区S B02遺構図	…201
挿図194	南谷大山遺跡B区S B03遺構図	…202
挿図195	南谷大山遺跡B区S B03出土遺物実測図	…202
挿図196	南谷大山遺跡B区S K10遺構図	…203
挿図197	南谷大山遺跡B区S K10出土遺物実測図	…203
挿図198	南谷大山遺跡B区S K11遺構図	…203
挿図199	南谷大山遺跡B区S K12遺構図	…204
挿図200	南谷大山遺跡B区S K12出土遺物実測図	…204
挿図201	南谷大山遺跡B区S K13遺構図	…204
挿図202	南谷大山遺跡B区S K14遺構図	…205
挿図203	南谷大山遺跡B区S K14出土遺物実測図	…205
挿図204	南谷大山遺跡B区S K15出土遺物実測図	…205
挿図205	南谷大山遺跡B区S K15遺構図	…206
挿図206	南谷大山遺跡B区S K16遺構図	…206
挿図207	南谷大山遺跡B区S K16出土遺物実測図	…207
挿図208	南谷大山遺跡B区S K17遺構図	…207
挿図209	南谷大山遺跡B区S K17出土遺物実測図	…207
挿図210	南谷大山遺跡B区S K18出土遺物実測図	…207
挿図211	南谷大山遺跡B区S K18遺構図	…208
挿図212	南谷大山遺跡B区S K19遺構図	…208
挿図213	南谷大山遺跡B区S K19出土遺物実測図	…210
挿図214	南谷大山遺跡B区S K20出土遺物実測図	…210
挿図215	南谷大山遺跡B区S K20遺構図	…211
挿図216	南谷大山遺跡B区S K21遺構図	…211
挿図217	南谷大山遺跡B区S K22出土遺物実測図	…211
挿図218	南谷大山遺跡B区S K22遺構図	…212
挿図219	南谷大山遺跡B区S K23遺構図	…212
挿図220	南谷大山遺跡B区S K23出土遺物実測図	…212
挿図221	南谷大山遺跡B区S K24遺構図	…213
挿図222	南谷大山遺跡B区S K24出土遺物実測図	…213
挿図223	南谷大山遺跡B区S K25遺構図	…214
挿図224	南谷大山遺跡B区S S01出土遺物実測図(2)	…214
挿図225	南谷大山遺跡B区S S01遺構図	…215
挿図226	南谷大山遺跡B区S S01出土遺物実測図(1)	…216
挿図227	南谷大山遺跡B区S S02遺構図	…217
挿図228	南谷大山遺跡B区S S02出土遺物実測図	…218
挿図229	南谷大山遺跡B区S S03出土遺物実測図	…218
挿図230	南谷大山遺跡B区S S03遺構図	…219
挿図231	南谷大山遺跡B区S S04遺構図	…220
挿図232	南谷大山遺跡B区S S05遺構図	…221
挿図233	南谷大山遺跡B区S S04出土遺物実測図(1)	…222
挿図234	南谷大山遺跡B区S S04出土遺物実測図(2)	…223

挿図235	南谷大山遺跡B区S S04出土遺物実測図(3)	…224
挿図236	南谷大山遺跡B区S D03遺構図	…226
挿図237	南谷大山遺跡B区S D03土層断面図(1)	…227
挿図238	南谷大山遺跡B区S D03土層断面図(2)	…228
挿図239	南谷大山遺跡B区S D03出土遺物実測図(2)	…228
挿図240	南谷大山遺跡B区S D03出土遺物実測図(1)	…229
挿図241	南谷大山遺跡B区S D04・05遺構図	…230
挿図242	南谷大山遺跡B区S D04出土遺物実測図	…230
挿図243	南谷大山遺跡B区S D04出土遺物実測図	…231
挿図244	南谷大山遺跡B区S D06出土遺物実測図	…232
挿図245	南谷大山遺跡B区S D06遺構図	…232
挿図246	南谷大山遺跡B区ビット群02遺構図	…233
挿図247	南谷大山遺跡B区ビット群02出土遺物実測図	234
挿図248	南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(7)	…235
挿図249	南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(8)	…236
挿図250	南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(9)	…237
挿図251	南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(10)	…237
挿図252	南谷22号墳周溝土層断面図	…239
挿図253	南谷22号墳墳丘図	…239
挿図254	南谷22号墳調査前地形測量図	…240
挿図255	南谷24号墳墳丘図・土層断面図	…241-242
挿図256	南谷24号墳第1主体部遺構図	…243
挿図257	南谷24号墳第2主体部石室と掘り方図	…243
挿図258	南谷24号墳第2主体部遺構図	…244
挿図259	南谷24号墳主体部・周溝内埋土施設出土遺物実測図	…245
挿図260	南谷24号墳周溝内石棺遺構図	…246
挿図261	南谷24号墳周溝内出土遺物実測図	…246
挿図262	南谷24号墳周溝内石棺土層断面図	…247
挿図263	南谷24号墳盛土内出土遺物実測図	…247
挿図264	南谷25号墳周溝内出土遺物実測図	…248
挿図265	南谷25・26号墳土層断面図	…249-250
挿図266	南谷26号墳第1主体部遺構図	…249-250
挿図267	南谷25・26号墳墳丘図	…251
挿図268	南谷26号墳第2主体部遺構図	…252
挿図269	南谷26号墳出土遺物実測図	…253
挿図270	南谷26号墳出土遺物実測図(2)	…254
挿図271	南谷26号墳周溝内土器出土状況図	…255
挿図272	南谷26号墳墳丘図	…255
挿図273	南谷26号墳出土遺物実測図(1)	…256
挿図274	南谷大山遺跡石列遺構図	…257
挿図275	南谷ヒジリ遺跡調査前地形測量図	…259-260
挿図276	南谷ヒジリ遺跡・南谷27号墳遺構全体図	…259-260
挿図277	南谷27号墳土層断面図	…259-260
挿図278	南谷27号墳出土遺物実測図	…261
挿図279	南谷ヒジリ遺跡S K05遺構図	…261
挿図280	南谷ヒジリ遺跡S K05遺構図	…262
挿図281	南谷ヒジリ遺跡S K07遺構図	…263
挿図282	南谷ヒジリ遺跡S S02出土遺物実測図	…263

挿表目次

挿表1 南谷大山遺跡壘穴住居跡一覽表199

図版目次

- 図版1 1991年度調査区遠景(南東上空より)
1991年度南谷大山遺跡調査前(南上空より)
1991年度南谷大山遺跡調査後(西上空より)
南谷大山遺跡 A S 1 01炭化物検出状況(北より)
- 図版2 南谷大山遺跡 A S 1 01発掘状況(北より)
南谷大山遺跡 A S 1 01主柱穴(P1)断面(北東より)
南谷大山遺跡 A S 1 02発掘状況(西より)
南谷大山遺跡 A S 1 03発掘状況(東より)
- 図版3 南谷大山遺跡 A S 1 04発掘状況(東より)
南谷大山遺跡 A S K 01発掘状況(東より)
南谷大山遺跡 A S K 02発掘状況(東より)
南谷大山遺跡 A S K 03発掘状況(東より)
- 図版4 南谷大山遺跡 A S K 04発掘状況(西より)
南谷大山遺跡 A S D 01発掘状況(東より)
南谷大山遺跡 A S D 02発掘状況(北東より)
南谷大山遺跡 A ビット群01発掘状況(西より)
- 図版5 南谷大山遺跡 B S 1 01発掘状況(東より)
南谷大山遺跡 B S 1 01遺物・炭化物出土状況(東より)
南谷大山遺跡 B S 1 01炭化物出土状況西寄り部分(東より)
南谷大山遺跡 B S 1 02発掘状況(東より)
- 図版6 南谷大山遺跡 B S 1 03発掘状況(西より)
南谷大山遺跡 B S 1 04発掘状況(東より)
南谷大山遺跡 B S 1 05発掘状況(東より)
南谷大山遺跡 B S 1 06発掘状況(東より)
- 図版7 南谷大山遺跡 B S 1 07発掘状況(北より)
南谷大山遺跡 B S 1 08発掘状況(北より)
南谷大山遺跡 B S K 01発掘状況(南より)
南谷大山遺跡 B S K 03発掘状況(北より)
- 図版8 南谷大山遺跡 B S K 02発掘状況(北より)
南谷大山遺跡 B S K 02工具痕(北西より)
南谷大山遺跡 B S K 04発掘状況(南より)
南谷大山遺跡 B S K 04遺物出土状況(南より)
- 図版9 南谷大山遺跡 B S K 05発掘状況(南より)
南谷大山遺跡 B S K 06発掘状況(北より)
南谷大山遺跡 B S K 06発掘状況(北より)
南谷大山遺跡 B S K 06遺物出土状況(北より)
- 図版10 南谷大山遺跡 B S K 07発掘状況(南より)
南谷大山遺跡 B S K 07遺物出土状況(西より)
南谷大山遺跡 B S K 07遺物出土状況(西より)
- 南谷大山遺跡 B S K 09発掘状況(南より)
- 図版11 南谷大山遺跡 B S D 01発掘状況(南西より)
南谷大山遺跡 B ビット群01発掘状況(西より)
南谷大山遺跡 B S D 02発掘状況(西より)
- 図版12 1992年度南谷大山遺跡調査区全景(北上空より)
1992年度南谷大山遺跡調査終了後(東より)
1992年度南谷大山遺跡調査前全景(北上空より)
1992年度南谷大山遺跡調査終了後全景(北上空より)
- 図版13 南谷大山遺跡 B S 1 09発掘状況(東より)
南谷大山遺跡 B S 1 09土器出土状況(東より)
南谷大山遺跡 B S 1 09土器掘り検出状況(西より)
南谷大山遺跡 B S 1 09床面跡(F1・F2) 出土状況(東より)
- 図版14 南谷大山遺跡 B S 1 09床面高床(Po26)出土状況(北より)
南谷大山遺跡 B S 1 10床面跡(Po5)出土状況(南より)
南谷大山遺跡 B S 1 10発掘状況(北より)
南谷大山遺跡 B S 1 10内土器SK3発掘状況(西より)
- 図版15 南谷大山遺跡 B S 1 11発掘状況(東より)
南谷大山遺跡 B S 1 11最下貼床面発掘状況(南より)
南谷大山遺跡 B S 1 11P20内土器(Po11)出土状況(南より)
南谷大山遺跡 B S 1 11P12内土器(Po1)出土状況(南より)
- 図版16 南谷大山遺跡 B S 1 12発掘状況(西より)
南谷大山遺跡 B S 1 13石庵丁(S1)出土状況(東より)
南谷大山遺跡 B S 1 13土器(Po10・Po12)出土状況(北より)
南谷大山遺跡 B S 1 13土器(Po1・Po13・Po14)出土状況(北より)
- 図版17 南谷大山遺跡 B S 1 13-1 発掘状況(南より)
南谷大山遺跡 B S 1 13-2 発掘状況(南より)
南谷大山遺跡 B S 1 13-3 発掘状況(南より)
南谷大山遺跡 B S 1 13-4 発掘状況(南より)
- 図版18 南谷大山遺跡 B S 1 14・26発掘状況(北東より)
南谷大山遺跡 B S 1 14壘(Po12・Po13)出土状況(東より)
南谷大山遺跡 B S 1 15発掘状況(北西より)
南谷大山遺跡 B S 1 15床面検出状況(北より)
- 図版19 南谷大山遺跡 B S 1 16発掘状況(北より)
南谷大山遺跡 B S 1 16大型壘(Po1・Po2)出土状況(東より)
南谷大山遺跡 B S 1 17発掘状況(北より)
南谷大山遺跡 B S 1 18発掘状況(北より)
- 図版20 南谷大山遺跡 B S 1 19発掘状況(南より)
南谷大山遺跡 B S 1 20炭化物出土状況(北上空より)
南谷大山遺跡 B S 1 20炭化物出土状況(北より)

南谷大山遺跡B S 120完掘状況(北より)

図版21 南谷大山遺跡B S 120炭化物出土状況(東より)
南谷大山遺跡B S 120北東炭化物出土状況(東より)
南谷大山遺跡B S 120北東炭化物出土状況(南より)
南谷大山遺跡B S 120北東炭化物出土状況(西より)

図版22 南谷大山遺跡B S 120北東炭化物・灰(Po1)出土状況(南東より)
南谷大山遺跡B S 120(南)出土状況(南東より)
南谷大山遺跡B S 120炭化物出土状況(東より)
南谷大山遺跡B S 120作業風景

図版23 南谷大山遺跡B S 121完掘状況(東より)
南谷大山遺跡B S 121完掘状況(南より)
南谷大山遺跡B S 122完掘状況(北より)
南谷大山遺跡B S 122西面開口部(Po18)出土状況(南東より)

図版24 南谷大山遺跡B S 123完掘状況(東より)
南谷大山遺跡B S 124完掘状況(東より)
南谷大山遺跡B S 127完掘状況(北より)
南谷大山遺跡B S 127土器出土状況(北より)

図版25 南谷大山遺跡B S 125完掘状況(西より)
南谷大山遺跡B S 128完掘状況(北より)
南谷大山遺跡B S 128完掘状況(北西より)
南谷大山遺跡B S 129完掘状況(北より)

図版26 南谷大山遺跡B S 130完掘状況(北西より)
南谷大山遺跡B S 130土器出土状況(北より)
南谷大山遺跡B S 130-1P21内土器(Po6)出土状況(南より)
南谷大山遺跡B S 130P21内壺(Po21・Po22・Po23)出土状況(南より)

図版27 南谷大山遺跡B S 130P22内壺(Po29)出土状況(東より)
南谷大山遺跡B S 131・35完掘状況(北西より)
南谷大山遺跡B S 132土器類検出状況(南西より)
南谷大山遺跡B S 132完掘状況(東より)

図版28 南谷大山遺跡B S 133床面検出状況(北より)
南谷大山遺跡B S 138完掘状況(南東より)
南谷大山遺跡B S 137・38完掘状況(北西より)
南谷大山遺跡B S 137完掘状況(北東より)

図版29 南谷大山遺跡B S 138完掘状況(北東より)
南谷大山遺跡B S 141完掘状況(北東より)
南谷大山遺跡B S 139完掘状況(南より)
南谷大山遺跡B S 139土器(Po1・Po2)出土状況(北より)

図版30 南谷大山遺跡B S 140完掘状況(南より)
南谷大山遺跡B S 142完掘状況(北より)
南谷大山遺跡B S 143完掘状況(北西より)
南谷大山遺跡B S 143土器出土状況(東より)

図版31 南谷大山遺跡B S 144完掘状況(北より)
南谷大山遺跡B S 144貼床除去後完掘状況(北より)
南谷大山遺跡B S 145完掘状況(北より)
1992年度南谷大山遺跡調査区全景(南東より)

図版32 南谷大山遺跡B S 1801完掘状況(南東より)
南谷大山遺跡B S 1802完掘状況(東より)
南谷大山遺跡B S 1803完掘状況(北より)

南谷大山遺跡B S S 01完掘状況(北より)

図版33 南谷大山遺跡B S K10完掘状況(東より)
南谷大山遺跡B S K11完掘状況(北より)
南谷大山遺跡B S K12完掘状況(北より)
南谷大山遺跡B S K13完掘状況(北より)

図版34 南谷大山遺跡B S K14完掘状況(西より)
南谷大山遺跡B S K15完掘状況(北より)
南谷大山遺跡B S K16完掘状況(北東より)
南谷大山遺跡B S K17完掘状況(北より)

図版35 南谷大山遺跡B S K18完掘状況(南西より)
南谷大山遺跡B S K19完掘状況(北より)
南谷大山遺跡B S K20完掘状況(北より)
南谷大山遺跡B S K21完掘状況(北より)

図版36 南谷大山遺跡B S K22完掘状況(南東より)
南谷大山遺跡B S K23完掘状況(南より)
南谷大山遺跡B S K24土器・炭化物出土状況(西より)
南谷大山遺跡B S K24完掘状況(南より)

図版37 南谷大山遺跡B S S 01壺(Po9)出土状況(東より)
南谷大山遺跡B S S 02完掘状況(西より)
南谷大山遺跡B S S 03完掘状況(南より)
南谷大山遺跡B S S 05完掘状況(北より)

図版38 南谷大山遺跡B S S 04完掘状況(北西より)
南谷大山遺跡B S S 04・BS137・BS138・BS141完掘状況(北西より)
南谷大山遺跡B S S 04土器(Po8・Po15・Po21・Po23・Po24・Po26)出土状況(北より)
1992年度南谷大山遺跡調査終了後全景(南上空より)

図版39 南谷大山遺跡B S D 03完掘状況(北東より)
南谷大山遺跡B S D 04・05完掘状況(西より)
南谷大山遺跡B S D 08完掘状況(北より)
南谷大山遺跡B ビット壺02完掘状況(北東より)

図版40 1990年度南谷19~23号墳完掘状況(南上空より)
南谷22号墳土層断面(南より)
南谷22号墳完掘状況(北東より)
南谷22号墳完掘状況(南西より)

図版41 南谷24号墳調査前(南東より)
南谷24号墳墳丘検出状況(東より)
南谷24号墳完掘状況(西上空より)
南谷24号墳墳丘Eベルト

図版42 南谷24号墳第1主体部Eベルト
南谷24号墳第1主体部Nベルト
南谷24号墳第1次墳丘(北西より)
南谷24号墳第2主体部蓋石と溝完掘状況(西より)

図版43 南谷24号墳第2主体部蓋石検出状況(北より)
南谷24号墳第2主体部検出状況(北より)
南谷24号墳第2主体部検出状況(南西より)
南谷24号墳墳丘裏面転用枕と鉄線出土状況(南西より)

図版44 南谷24号墳第2主体部掘り方完掘状況(北より)

- 南谷24号墳第1主体部検出状況(南西より)
南谷24号墳周溝内石棺石蓋出土状況(東より)
南谷24号墳周溝内石棺石蓋除去後(東より)
南谷24号墳周溝内石棺検出状況(北東より)
南谷24号墳周溝内石棺掘り方完掘状況(西より)
南谷24号墳周溝内須蓋器蓋杯出土状況(南東より)
南谷25・26号墳墳丘検出状況(上空より)
- 図版46 南谷25号墳西側溝内土器(Po1・Po4・Po5)出土状況(北より)
南谷26号墳第1主体部土器(Po1)出土状況(南東より)
南谷26号墳第1主体部検出状況(北東より)
南谷26号墳第1主体部掘り方完掘状況(北東より)
- 図版47 南谷25号墳墳丘検出状況(西より)
南谷25号墳墳丘完掘状況(西より)
南谷26号墳墳丘検出状況(西より)
南谷26号墳墳丘完掘状況(西より)
- 図版48 南谷26号墳第2主体部検出状況(南東より)
南谷26号墳墳丘完掘状況(北より)
南谷26号墳東側周溝内土器(Po13・Po15・Po16)出土状況(東より)
南谷大山遺跡B区石列遺構検出状況(南東より)
- 図版49 南谷ヒジリ遺跡調査前(東より)
南谷27号墳完掘状況(東より)
南谷27号墳完掘状況(南より)
南谷27号墳北西側周溝内土器(Po4)出土状況(西より)
- 図版50 南谷ヒジリ遺跡SK08完掘状況(南より)
南谷ヒジリ遺跡SK08完掘状況(南より)
南谷ヒジリ遺跡SK07完掘状況(南より)
南谷ヒジリ遺跡S02完掘状況(西より)
- 図版51 MOAS101・AS102・AS104・BS101・BS102出土遺物
- 図版52 MOBS102・BS103・BS105・BS106・BS107・BS109出土遺物
- 図版53 MOBS109出土遺物
- 図版54 MOBS109出土遺物
- 図版55 MOBS109・BS110出土遺物
- 図版56 MOBS110出土遺物
- 図版57 MOBS111・BS112・BS113出土遺物
- 図版58 MOBS113出土遺物
- 図版59 MOBS113出土遺物
- 図版60 MOBS113・BS114出土遺物
- 図版61 MOBS115・BS116・BS117・BS118・BS119出土遺物
- 図版62 MOBS120・BS122出土遺物
- 図版63 MOBS122・BS123・BS124・BS125出土遺物
- 図版64 MOBS125・BS126・BS127・BS128・BS129出土遺物
- 図版65 MOBS130出土遺物
- 図版66 MOBS130・BS131・BS132出土遺物
- 図版67 MOBS132・BS133・BS137出土遺物
- 図版68 MOBS137・BS138・BS139・BS141出土遺物
- 図版69 MOBS141・BS142・BS143・BS145・BSB03・BSK03出土遺物
- 図版70 MOBSK04・BSK06出土遺物
- 図版71 MOBSK06・BSK07出土遺物
- 図版72 MCBK09・BSK10・BSK12・BSK14・BSK15・BSK16・BSK17・BSK18・BSK22・BSK23出土遺物
- 図版73 MOBSK24・BS01出土遺物
- 図版74 MOBS01・BS03・BS04出土遺物
- 図版75 MOBS04・BSD03・BSD04出土遺物
- 図版76 MOBSD04・BSD05・A区遺構外・1992年度B区遺構外出土遺物
- 図版77 南谷24号墳出土遺物
- 図版78 南谷25号墳・南谷26号墳・南谷28号墳出土遺物
- 図版79 南谷27号墳・MHS02・遺構外・Po10内出土遺物
- 図版80 MHPo10内出土遺物
- 図版81 MHPo10内出土遺物

特 論 図 版

- 特論1-1 炭化材の三断面写真(小口面、径目面、板目面)
特論1-2 炭化材の三断面写真(小口面、径目面、板目面)
特論1-3 炭化材の三断面写真(小口面、径目面、板目面)
特論3-1 南谷大山遺跡の顕微鏡写真(土壌試料)
特論3-2 南谷大山遺跡の花粉遺体
特論3-3 南谷大山遺跡の糧実遺体
特論3-4 植物珪酸体の顕微鏡写真
特論3-5 植物珪酸体の顕微鏡写真
特論3-6 植物珪酸体の顕微鏡写真

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

羽合道路 鳥取県中部地域の交通混雑緩和を図るために、1973年より一般国道9号改築工事として北条バイパスの建設が進められ、1990年11月に全面開通した。さらに、この工事の一環として羽合道路が1986年度に自動車専用道路として都市計画決定され、事業に着手し、その後、1988年度に高規格道路として計画変更された。この道路は、現道9号の泊村圃地内のインターチェンジから、羽合町長瀬のインターチェンジを抜けば北条バイパスに結ぶものである。

周辺遺跡 また、計画地内とその周辺は橋津・南谷・宇野（羽合町）、園（泊村）などの古墳群、南谷遺跡・乳母ヶ谷遺跡（羽合町）、宇谷第1遺跡・原第2遺跡（泊村）などの土器の散布地が丘陵上に存在し、文化財の宝庫である。

試掘調査 この状況の中で、このように多くの遺跡が密集している地域でもあり、建設に先立って計画地内の遺構・遺跡の広がりを確認する必要性が生じた。そして、1988～1990年度に亘って羽合町教育委員会が、国庫補助事業として各丘陵の尾根を中心に試掘調査を行なった。その内、今年度調査にかかわる調査結果としては、南谷大山遺跡（南谷大山所在遺跡群）で竪穴住居跡・掘立柱建物跡各1・古墳2・周溝1・土壇2（T3～T7・T9）が確認された。

また、1990年度に中部埋蔵文化財調査事務所が、南谷ヒジリ遺跡と南谷古墳群の発掘調査を行なった。その結果、南谷ヒジリ遺跡では、住居跡5・土坑3・掘立柱建物跡2・溝状遺構1を確認した。特に、溝状遺構は「コ」字状を描き今年度の調査区域へ延びていた。そして、南谷古墳群では、南谷19～23号墳を確認したが、南谷22号墳については未開掘地があり、周溝の調査を一部残した。

調査計画 これを受けて、建設省中国地方建設局倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のため事前調査を委託した。これによって当文化財団が調査計画を作成し、それに基づき、中部埋蔵文化財調査事務所が発掘調査を担当することになった。1991年度は南谷大山遺跡(イ)9932㎡の調査を終了し、1992年度は南谷ヒジリ遺跡318㎡、南谷古墳群75㎡、南谷大山遺跡(ロ)6791㎡、南谷大山遺跡(ハ)3640㎡を調査する予定であったが、調査終了後に南谷ヒジリ遺跡371㎡、南谷古墳群104㎡、南谷大山遺跡(ロ)8632㎡に変更となり、南谷大山遺跡(ハ)の調査は延期となった。期間は1992年4月～1993年3月であった。

調査予定 来年度以降には、南谷大山遺跡（ハ）の調査が予定されている。

2 調査の経過と方法

南谷大山 羽合町教育委員会の行なった南谷大山遺跡の試掘調査で、古墳の周溝、古墳時代の住居跡、掘立柱建物跡、土坑を確認し、丘陵上に遺構が広がることを想定して調査することになった。南谷大山地区は1991年度、1992年度に亘って発掘調査することになった。

1991年度 1991年度調査は業者に委託して調査前の地形測量を行ない、セスナによる航空写真撮影を行なった。次に、地区設定を行なった。地区設定の方法はK5杭（X：56130.000、Y：40040.000）を起点として、国土座標軸と重なるように東西軸、南北軸を設定した。さらに、この2つの軸線を基準に10mごとに杭を打ち、地区全体を10m方眼に区画した。基線は南北

方向を西からA-Oとし、東西方向を北から1~20と設定した。また、この調査区は3つの尾根から構成されていたため、J10杭を中心に3区分した。その区分けは北側の尾根をA区、南西側に延びだす尾根をB区、南側に延びる尾根をC区とした。今年度調査はA区とB区の一部の調査となった。以上で準備作業を終了した。まず、重機による表土剥ぎを始め、6月13日より南谷24号墳付近の人力による表土剥ぎを開始した。

遺構検出作業によって、古墳、竪穴住居跡、土坑、溝状遺構、ピット群が検出され、弥生時代終末から古墳時代の前期初頭の集落、古墳時代中期から後期の古墳が存在したことを確認し、指導を受けながら各遺構の調査を行なった。特に、多数確認した竪穴住居跡について詳細に考察できるように、奈良国立文化財研究所の浅川滋男主任研究官より、7月16日を初めに2度に亘って調査指導を受け、中でも、焼失した竪穴住居跡を中心に住居の上屋構造について詳しく検討した。本遺跡の1991年度調査は12月21日に遺構実測を行なって終了した。

1992年度 1991年度調査に引き続き、南谷大山遺跡のB区の残りの部分とC区を調査する予定となった。昨年度と同じように調査前測量、航空写真撮影、地区設定を行ない準備作業を終了した。地区設定の方法は昨年度の東西軸、南北軸を延ばして基準杭を打った。南北軸はAラインを基準に東に向かってA-D、西に向かってa-iとし、東西軸は北から14~28とした。

まず、調査は5月21日より、重機による表土剥ぎから始まったが、排土する場所が限られており、2台の重機を使用した。6月6日より検出作業を始めたが、やはり排土する場所に制限があり、ベルトコンベアーを10台繋いで、南側の斜面に排土した。表土剥ぎを行なった結果、西側斜面に黒色土の帯が、南側斜面で溝が延びていく様相を呈していたことから、鳥取県教育委員会文化課を通して建設省と協議した結果、調査範囲の拡張が決まり、南谷大山遺跡C区〔大山所在遺跡(ハ)〕は来年度調査となった。

遺構検出作業によって、弥生時代後期後半から古墳時代中期後半の竪穴住居跡、孤立柱建物跡、土坑、段状遺構、溝状遺構、ピット群、古墳時代後期の古墳が確認された。特に竪穴住居跡がたくさん確認され、特徴のある住居跡が検出された。そこで、今年度も指導助言を得て調査を進めることにした。焼失住居を中心とした竪穴住居の上屋構造について、昨年引き続き浅川滋男主任研究官に指導を仰ぎ、さらに、米子工業高等専門学校和田嘉寿助教授にも指導を仰いだ。そして、集落の在り方について、鳥根大学法文学部田中義昭教授の指導を仰いだ。本遺跡の1992年度調査は1993年1月11日に遺構実測を行なって終了した。

南谷 南谷ヒジリ遺跡〔南谷所在遺跡群〕はすでに1990年度に調査を行ない、弥生時代後期後半から古墳時代前期の住居跡、土坑等を確認した。しかし、「コ」字状に調査区外に延びていく溝状遺構が特定できなかった。溝が延びていく部分が崩壊危険区域であったため、調査を継続して行なうことができず、1992年度調査となった。初めに、調査前地形測量を調査員で行ない、セスナによる航空写真撮影を行なった。地区設定するにあたり、建設省に1990年度に調査区の設定に使った建設省道路センター杭No91+60(X: -55992.900, Y: -40684.661)とNo92(X: -55992.801, Y: -40724.449)の復元を依頼し、この2本を基準に東西、南北の基線を復元して地区設定を行なった。No92杭がA2杭になるようにして、南北軸はAを基準に東方向にA-Bとし、西方向にa-b、東西軸を北より0-4として、準備作業を終了した。調査は4月6日にかかり、5月2日に遺構実測を行なって終了した。

南谷 南谷22号墳の調査は調査前地形測量、ラジコンヘリコプターによる調査前の写真撮影、1990年度に設定した調査杭F4、H4、H5をもとに杭を設定した。調査は11月18日に調査にかかり、1月12日に遺構実測を行なって終了した。

調査日誌抄

1991年度

- 6月13日 南谷大山遺跡調査開始
- 9月27日 台風19号来襲
- 9月19日 A S I 01炭化物実測終了
- 10月18日 南谷24号墳で中心主体を検出
- 12月21日 1991年度分最終遺構実測終了

1992年度

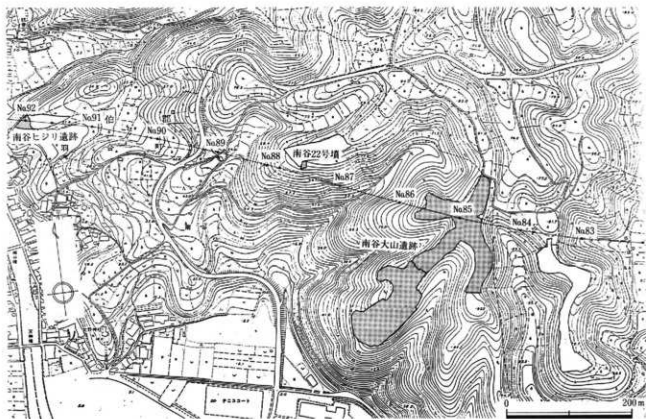
- 4月6日 南谷ヒシリ遺跡調査開始
- 4月16日 南谷27号墳墳丘精査
- 5月2日 南谷ヒシリ遺跡調査終了
- 6月6日 南谷大山遺跡遺構検出作業開始
- 8月5日 B S I 20で甌出土
- 8月27日～9月4日 厳しい残暑
- 9月14日 島根大学法文学部田中義昭教授調査を指導
- 9月26日 国立米子工業高等専門学校和田嘉宥助教授、遺跡を視察
- 9月30日 奈良国立文化財研究所浅川滋男主任研究官、調査を指導
- 10月14日 鳥取県中部に豪雨、遺構も水没
- 11月18日 B S I 20の甕、取り上げ
- 1月12日 本年度調査終了



写真1 遺構実測作業風景



写真2 発掘作業風景



挿図1 南谷大山遺跡・南谷ヒシリ遺跡と道路建設ルート

第3節 調査体制

調査は鳥取県教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもとに下記の体制で実施された。

- 調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団
- | | |
|-----------|--------------|
| 理事長 | 西尾邑次 (鳥取県知事) |
| 副理事長兼常務理事 | 坂田昭三 |
| 事務局長 | 若松良雄 |
- 財団法人鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター
- | | |
|--------|-------------------------|
| 所長 | 土井田憲治 (鳥取県教育委員会文化課長) |
| 次長 | 山根豊己 |
| 調査指導係長 | 田中弘道 (鳥取県埋蔵文化財センター次長) |
| 庶務係長 | 山根夏男 (鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長) |
- 調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 中部埋蔵文化財調査事務所
- | | |
|-------|-----------|
| 所長 | 入江輝三 |
| 主任調査員 | 米田規人 |
| 調査員 | 牧本哲雄・岸本浩忠 |
| 調査補助員 | 山根雅美・岩本尚子 |
- 調査協力
- 下記の方々に発掘調査作業員、整理作業員として協力していただいた。
- | | | | | | | |
|-------|--------|--------|------------|--------|--------|--------|
| 青木輝明、 | 朝倉郁雄、 | 池原美代子、 | 市橋貴志子、 | 伊藤恵美子、 | 福垣美智恵、 | 伊藤義輝、 |
| 入江淑恵、 | 岩室紀男、 | 植原昭典、 | 浦木伊都子、 | 大嶋貞夫、 | 大嶋由起枝、 | 奥田和美、 |
| 表明美、 | 勝田美登里、 | 上本明子、 | 河口智津子、 | 吉川久子、 | 木戸孝行、 | 倉益和美、 |
| 蔵本重信、 | 桜井きみ子、 | 佐藤 亮、 | 嶋崎久子、 | 清水房子、 | 杉原光雄、 | 杉村秀吉、 |
| 陶山勝利、 | 高浜新策、 | 竹田 肇、 | 竹本富美代、 | 谷本美智恵、 | 高浜とし子、 | 津嶋時三、 |
| 田中和子、 | 角田磨智子、 | 中田 都、 | 中原千恵、 | 中村品宏、 | 中村勝恵、 | 中村博子、 |
| 西垣吟枝、 | 西本てる子、 | 野崎悦子、 | 浜口みち子、 | 林 博、 | 福田延子、 | 福田弥千代、 |
| 藤田広子、 | 藤田恭人、 | 藤原秀子、 | 前 宮子、 | 前田二三枝、 | 真壁 均、 | |
| 松井久雄、 | 松田悦雄、 | 松岡朋子、 | 松田澄子、 | 松田 昇、 | 松本美重、 | 松本美佐子、 |
| 光井芳子、 | 村口いつ子、 | 森脇幸子、 | 安田成行、 | 山崎定雄、 | 山田輝美、 | 山本久美恵、 |
| 山本清子、 | 吉村綾子、 | 若杉道子、 | (五十音順、敬称略) | | | |



写真3 発掘調査参加者一同

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

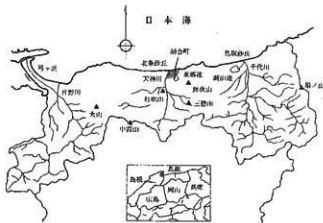
鳥取県 鳥取県は本州の西部、中国地方の北東部に位置する。北は日本海、東は兵庫県、南は标高1200mを越える中国山地を県境として岡山県・広島県、西は島根県と接する。鳥取県の県域は東西126km、南北61.85km、面積349.269km²で、日本全体の約1%を占める。鳥取県の県域は鳥取市を中心とする東部、倉吉市を中心とする中部、そして米子市・境港市などからなる西部の三地域に分けられる。各地域とも地勢は山がちで、山地が県総面積の86.3%を占める。それぞれの地域には千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）の県下を代表する河川が流れ、その下流域に東部の鳥取平野、中部の倉吉・北条・羽合平野、西部の米子平野が発達している。また各平野の海岸線には鳥取平野の鳥取砂丘、北条・羽合平野の北条・長瀬砂丘、米子平野の弓が浜半島などの砂丘、砂州が発達している。その中でも代表的なものは鳥取砂丘で、東西長15km、南北幅最大2kmの規模を持つ。

羽合町 羽合町は、鳥取県の中央部に位置し、東には泊村、東郷池をはさんで東郷町、西には天神川を境に北条町、南は倉吉市と接している。北には日本海が、その波頭を光らせている。人口約7000人、面積12.4km²の田園風景の広がる町である。地形は、馬ノ山の低い丘陵と天神川の河口部に発達した長瀬砂丘、天神川から東郷池に向かって広がる羽合平野、東郷池とかなる。

東郷池 東郷池は、約420haの汽水湖で、かつては日本海の内湾だった。縄文海進の後、河川の土砂の運搬などにより、北条・長瀬砂丘が発達した。その結果、湾口が塞ぎ止められてできた潟湖である。最深部は4.6mで、湖底より温泉が湧き出る。

現在、東郷池には合人川・東郷川・羽衣石川・埴見川が流れ込み、その水は橋津川を通過して日本海へ至る。古代においては天神川も、流路の変動はあったものの同池に注いでいた。池には淡水魚だけでなく、橋津川を逆流して流入する海水によって海産の魚介類が入る。

調査地域 前述の東郷池の北東にある丘陵から、東郷池に向かって伸びる尾根上に存在するのが、南谷ヒジリ遺跡、南谷古墳群、南谷大山遺跡である。特に南谷大山遺跡が所在する尾根上からは、東郷池・羽合平野・日本海はもとより、遠く島根半島まで視野に入れることができる。



挿図2 羽合町の位置

第2節 歴史的環境

- 旧石器** 東郷池周辺に限らず鳥取県において遺構を伴う旧石器遺跡は確認されていないが、大山山麓の丘陵上でいくつかの旧石器が見つっている。中部地区では、関金町野津三の黒曜石製ナイフ型石器、倉吉市和山の石刃、倉吉市上神・轟の細石刃石核、倉吉市国府の掻器、倉吉市中尾遺跡の国府型のナイフ型石器などである。このうち、野津三のナイフ型石器・中尾遺跡のナイフ型石器は県下では唯一のローム層中の発見であり、大変貴重なものである。
- 縄文時代** 縄文時代早創期に盛行するとされる陸線土器群は県内では発見されていないが、石器類は二十数カ所で確認されている。中部地区では、有茎尖頭器が大栄町穂波・東伯町視下・関金町笹ヶ平などで見つっている。やはり大山山麓の丘陵上での発見である。早期でも丘陵・台地上に遺跡が確認されている。倉吉市取木遺跡では竪穴住居跡・炉跡、押型文の深鉢などが見つっている。東郷池周辺においても、南谷19号墳(1)の旧表下より安山岩製のスクレイパーが見つっており、縄文時代人が海岸部の丘陵上にも足跡を残していたことが窺える。
- 前期** 前期になると気候が温暖になり海進が進み、この地域では広いラグーンが形成され、この周辺で遺跡が確認されるようになる。北条町島遺跡は、前期から晩期の貝塚を伴う遺跡で、土器のほか石器、丸木舟、貝、人骨、動物骨が検出されている。丸木舟は県内でも数例知られるに過ぎず、貴重なものである。また、花粉分析の結果や貝の種類から古環境の変化の様子を復元することができるようになった。中期の遺跡は、倉吉市平林遺跡、北条町船渡遺跡、羽合町南谷ヒジリ遺跡(B)などが知られるにすぎず、遺跡の密度も少ない。後期になると遺跡の数は増加し、倉吉市津田峰遺跡・東伯町森藤第2遺跡・関金町峰遺跡ではこの時期の住居跡が見つっている。これらの住居の中央には、石組の炉が作られている。この周辺では、倉吉市天神川下流遺跡、東郷町北福第3遺跡(56)で磨削縄文土器などが表採されている。
- 晩期** 晩期では、倉吉市松ヶ坪遺跡で配石墓、土器陪墓、土壙が見つっている。なかでも、土器陪墓は県内においても岸本町林ヶ原遺跡とここにしか見つかっておらず、この時期の葬制を知る貴重な資料である。長瀬高浜遺跡では刻目突帯文土器、北条町北尾遺跡でもこの時期の土器を出土している。時期ははっきりしないが、東郷町別所第2(41)・第6遺跡(42)、福水第3遺跡(59)、野花第2遺跡(35)、白石第1遺跡(50)でも縄文土器が表採されている。泊村宮の山遺跡(70)では、漁撈具としての石鉾が見つっており、縄文人が海や湖で盛んに魚を獲っていたことが想像される。
- 弥生時代** 大陸から伝播した稲作は、日本列島をかなりの速さで北上したと考えられ、鳥取県でも前期には米子市日久美遺跡で水田跡が確認されている。東郷池周辺では水田跡は確認されていないが、稲作に伴う遺物が各所で見つっており、弥生時代水田の調査が行われるのも近いものと思われる。この時期には、天神川の沖積作用と日本海からの風によって形成された砂丘上に、長瀬高浜遺跡(14)が現われる。この遺跡は弥生時代前期から中世までの複合遺跡であるが、この時期の遺構には4棟の玉作工房跡のほか、土壙墓などがある。玉作工房跡は日本でも最も古いものの一つである。
- 中期** 長瀬高浜遺跡では中期の土壙墓がわずかに見られるが、後期の遺構は全く見られず、古墳時代に入ってからが最も栄える。東郷池周辺では、この時期の遺跡は長瀬高浜の土壙墓を除いては確認されておらず、遺跡の密度が少なくなっている。かわりに、丘陵上での遺跡の密度が増すと推定される。
- 後期** 後期においても同様の現象が見られ、焼失住居が見つかった倉吉市福庭遺跡(20)、炭化米・



挿図3 周辺遺跡分布図

A南谷大山遺跡 B南谷ヒシリ遺跡 C南谷22号墳・南谷古墳群 D岡7号墳・園西川遺跡 E原第2遺跡
 1南谷19号墳・南谷夫婦塚遺跡 2南谷大ナル遺跡 3乳母ヶ谷第2遺跡 4平古墳 5宇野第1遺跡
 6宇野第4遺跡 7宇野第5遺跡 8橋津(馬ノ山)4号墳 9乳母ヶ谷遺跡 10南谷遺跡 11南谷貝塚
 12和助北遺跡 13橋津台場 14長瀬高浜遺跡 15天神川下流遺跡 16大平山古墳群 17福庭古墳
 18小田銅鐸出土地 19向山古墳群 20福庭遺跡 21山根古墳群 22藤和墳丘墓 23伊木古墳群 24隈ヶ坪遺跡
 25門田遺跡 26津浪遺跡 27片平4号墳 28佐美遺跡 29佐美古墳群 30壺見中ノ谷古墳群
 31壺見古墳群 32長和田古墳群 33野花北山1号墳 34引地古墳群 35野花第2遺跡 36羽衣石第1
 生産遺跡 37羽衣石第2生産遺跡 38羽衣石城跡 39小鹿古墳群 40別所古墳群 41別所第2遺跡
 42別所第6遺跡 43高辻第1遺跡 44高辻第3遺跡 45高辻古墳群 46川上古墳群 47川上生産遺跡
 48久見古瓦出土地 49久見古墳群 50白石第1遺跡 51中興寺古墳群 52野方第3遺跡 53野方・弥陀ヶ
 平庵寺 54野方古墳群 55北福第1遺跡 56北福第3遺跡 57北福古墳群 58漆原古墳群 59福永
 第3遺跡 60藤津古墳群 61大鼻遺跡 62船隠遺跡 63宮内狐塚古墳 64伯耆一宮経塚 65宇谷第1遺跡
 66宇谷古墳群 67園古墳群 68河口城跡 69石脇2号墳(尾尻古墳) 70宮の山遺跡 71堀勾玉出土地
 72池ノ谷銅鐸出土地

貝殻などを包蔵する4基の貯蔵穴が見つかった大鼻遺跡(61)、竪穴住居が調査された南谷ヒジリ遺跡(B)・南谷大ナル遺跡(2)・南谷大綿塚遺跡(1)・乳母ヶ谷遺跡(9)・乳母ヶ谷第2遺跡(3)・南谷大山遺跡(A)・宇谷第1遺跡(65)など、丘陵上の遺跡の密度が増加する。低地においては、和助北遺跡(12)で祭祀関係の土器と思われる、赤色塗彩された脚付注口土器が見られるのみである。この地域は銅鐸の出土例が多く、倉吉市小田(18)で2口(外縁付鈕1式・扁平鈕式)、北福第1遺跡(55)・長瀬高浜遺跡で小銅鐸がそれぞれ1口、泊村池ノ谷(71)で2本の舌とともに1口(外縁付鈕1式)、北条町米里で1口(外縁付鈕式)、やや離れて東伯町八橋で1口(扁平鈕式)が見つっている。そのほかにも、伝伯耆国とされるもの1口(外縁付鈕1式)がある。東伯耆においては、弥生時代における集団墓から卓越した倉吉市岡弥大寺1~3号墓、藤和墳丘墓(22)などの四隅突出型弥生墳墓が計4基存在する。

- 古墳時代** 主な前期古墳には、三角縁神獣鏡を含む多数の副葬品をもつ、復元全長100mを測る前方後円墳である橋津(馬ノ山)4号墳(8)がある。橋津4号墳を含む24基からなる橋津古墳群のうち22基は、国の史跡に指定されている。さらにこの古墳群には橋津2号墳などの大型前方後円墳が築造され、東郷池周辺だけではなく広く東伯耆一帯を支配した集団の存在が想定できる。また、泊村には小規模な前方後円墳ではあるが仿製斜縁帯鏡をもつ石跡2号墳(尾尻古墳)(69)がある。北条町には上下古墳群・曲古墳群など前期から後期にかけての古式群集墳がある。橋津古墳群を仰ぎ見る砂丘に立地する長瀬高浜遺跡において、160数棟の竪穴住居、40棟の孤立柱建物をもつ大集落が再び現われる。この集落は前期から中期にかけて営造されているが、中期の中頃にはその規模も縮小している。集落が廃絶されると古墳が築造されるようになる。また、性格は不明であるがおびただしい数の器財型埴輪群が見つっている。他に、刀状木製品・火きり臼・彩色礫・手捏ね土器など祭祀に伴う遺物が出土している津浪遺跡(26)が知られている。この時期の住居跡は、佐美古墳群において4号墳に切られるかたちで検出されたもの(29)など、丘陵上でも確認されている。
- 中期** 橋津4号墳以後もこの地域では、東郷池の東岸には全長90mを測る前方後円墳である宮内狐塚古墳(63)、南岸には山陰最大級の規模を誇る全長110mを測る前方後円墳である野花北山1号墳(33)と大型前方後円墳が累々と築造される。このように、墳丘規模及び内容で他の古墳をはるかに凌駕する古墳が存在する東郷池周辺は、古墳時代前期から中期にかけて東伯耆の中心的地域であると考えられる。中期後半の集落は、南谷大山遺跡(A)のように丘陵上に営まれていると考えられる。この地域は子持勾玉の出土が多く、東郷町高辻第1遺跡(43)1例、泊村堀(71)1例、倉吉市でも2例が知られている。
- 後期** 後期になると大型の前方後円墳は見られなくなるが、中小規模の前方後円墳が各古墳群においても見られるようになる。また、従来の竪穴系の埋葬施設に代わって、横穴式石室が採用される。片平4号墳(27)は基底部を箱式石棺状に組み、板石を持ち送りながら小口積みにするもので、東伯耆では倉吉市大宮古墳とならび導入期の横穴式石室である。その後、この地域で比較的容易に手に入れることができる板状捩理の安山岩を使用する横穴式石室が取り入れられ、爆発的に増加する。片平1・5号墳、長和田20号墳(32)、中興寺1号墳(51)、久見17号墳(49)、北福23号墳(57)、宮内31号墳、橋津9号墳、福庭古墳(17)、園古墳群(67)、宇谷古墳群(66)などで知られている。このうち中興寺1号墳などのように各壁が一枚石で構成されている石室や、福庭古墳に見られるような切石石室は終末の様相を示す。古墳以外では、埴見中ノ谷竈跡(30)がある。6世紀前葉の竈跡で、この地域の須恵器を生産した数少ない遺跡の一つである。また、各所で土師器・須恵器が表採されており、各古墳群

を造った集団の集落の存在が確かめられる日も近いであろう。

歴史時代 この地域は古代寺院跡がたくさん見つっている。白鳳期には、大御堂廃寺、野方・弥陀ヶ平廃寺(53)、大原廃寺が造営される。大御堂廃寺は法起寺式の伽藍配置であったと考えられている。礎石の中央には柱を据えた穴が穿たれており、炭化した柱の一部が残っていたという。この寺院は、発掘された黒書土器より8世紀後半頃には久米寺と呼ばれていたようである。野方・弥陀ヶ平廃寺からは川原寺式の瓦の他に、塔心中央に柱穴をもつ塔心礎・礎石が見つっている。大原廃寺からは、柱穴をもつ塔心礎、川原寺式の瓦が見つっている。また、発掘調査により塔の基壇の一部が明らかになり、法起寺式の伽藍配置であったことが確認された。久見(48)でも7世紀後半頃と8世紀後半頃の瓦が見つっており、寺院跡が官衙跡の存在が考えられる。奈良時代には現在の倉吉市国府に伯耆国衙が造られ、また伯耆国分寺、国分尼寺も建立されるなど、東伯耆は奈良・平安時代の政治の中心地であった。この地域は律令体制下にあつては伯耆国河村郡にあたり、河村郡は笏賀、舍人、多駄、達見、日下、河村、竹田、三朝の八郷から成る。郡衙の所在地は不明であるが、河村郷、舍人郷、多駄郷の三か所が候補地として考えられている。この地域には古代律令体制の名残りとしての条里遺構が残っている。大保地統全園などには整然と並んだ方格地割りがあり、当時の名残りを留めていると考えられている。

平安時代 平安時代に入り自領地系荘園が現われ律令体制が崩壊し、次第に封建制社会が形成されるようになる。このようななか、力を得てきたのが国司・郡司・寺社であった。東郷池周辺では、伯耆一宮、東郷氏である。東郷氏は、中央の貴族や寺社に所領を寄進して、地方豪族としての地位を高めていった。伯耆一宮である倭文神社(64)は「伯耆六社」の一つで、承和4(837)年に従五位下の神階が与えられていたが、広大な社領を経済基盤として在地領主層の信仰を集めながら伯耆一宮の地位を獲得したものと考えられている。平安時代末期になると、木法思想が広まる。伯耆一宮の境内に隣接した山林で経塚が発見された。経塚のなかには石室があり、そのなかに金銅製経筒、金銅製観音菩薩立像、銅製下手観音立像、銅板線刻弥勒立像などが安置されていた。経筒には「(中略) 康和五年癸未 (中略)」銘が刻まれている。これら出土品は国宝に指定されている。

中世鎌倉時代 地頭勢力は鎌倉幕府権力の伸長を背景に次第に強大になった。大阪府柳沢真次郎氏所蔵の正嘉2(1258)年銘の「伯耆国河村郡東郷荘下地中分絵図」によって地頭の荘園侵略の様子が窺われる。長瀬高浜遺跡では約80基の火葬墓や土壌墓が調査され、この時期の葬制が明らかとなった。

室町時代 中世城郭も数多く知られており、南条貞宗によって築城された羽衣石城(38)、山名氏によって築城された河内城(68)などがある。応仁の乱後は各地で騒擾戦乱が絶えず、この地においても大永4(1524)年尼子経久によって羽衣石城が落城し、また馬ノ山で尼子氏と山名氏が合戦をするなど争いの跡をとどめている。天正9(1581)年には羽柴秀吉と吉川元春が対陣した。秀吉は御冠山に、元春は馬ノ山に陣を設けたが、馬ノ山にはこの時に築かれた土塁状遺構が残っている。また、乳母ヶ谷第2遺跡で調査された土塁状遺構も、この対陣の際に築かれたと思われる。山間地にはこの時期と思われるタタラ跡が数カ所確認されている。また、橋津川改修にともない、中世の貝塚が検出された。南谷貝塚(11)は、ヤマトシジミなどの貝類のほか、漆器などの木製品が出土している。

近世近代 文久3(1863)年には外国に対する海岸防備のために砲台が設置された。鳥取県には由良、橋津、赤崎、淀江、境などに台場が建設され、海岸防備に当たった。橋津の台場(13)建設に当たって馬ノ山4号墳の前方部が削られたといわれている。

第3章 南谷大山遺跡の調査 (1991年度調査)

第1節 南谷大山遺跡A区の概要

位置 南谷大山遺跡は羽合町南谷地内にあり、東郷池のやや北東、西側には長瀬高浜遺跡のある羽合平野、日本海と北条砂丘の海岸線、さらに南西側に遠く大山が眺望できる標高60~90m付近の丘陵状に位置する。この丘陵は、3つの尾根に分岐している。本節で述べるA区は本遺跡の北側にあたり、東西方向に「Y」の字状を成して延びだす標高84~93m付近の尾根にあたる。本遺跡で最も高い所に位置する。

遺構 A区は古墳時代中期~後期にかけての古墳と弥生時代後期後半~終末の遺構をもつ調査区である。古墳は3基確認しているが、南谷古墳群の章で記述を行なうこととする。弥生時代終末の遺構としては、竪穴住居跡4、土坑4、溝状遺構2、ピット群2を確認した。

竪穴住居跡は焼失したもの(ASI01)があり、構造材の炭化物が多量に出上し、C¹⁴分析による時代測定、樹種の鑑定、上屋構造の復元指導などの好資料となった。また、同じ弥生時代でも後期後半と終末という時期差のある竪穴住居跡が存在した。土坑は4基のうち3基が貯蔵穴であり、屋内貯蔵穴と屋外貯蔵穴が存在した。

第2節 南谷大山遺跡A区の調査結果

1. 竪穴住居跡

ASI01 (挿図4・5、図版1・2・51)

位置 調査区の最西端C7・D7グリッドにあり、標高約85~86mのやや緩やかに傾斜する斜面に位置している。すぐ東側にはSD02がある。

形態 S101は調査前の現地形でさえ、斜面途中の平坦面として確認できるほど自然地形を変えて作られていて、遺存状態はとても良好であった。平面は隅丸方形を呈す。

規模は東西6.5m、南北5.8mを測り、床面積37.7m²である。東側には、最大幅0.85mのテラスが住居のプランに添って作られている。残存壁高は、最も遺存状態の良い東壁で、最大1.19m(上縁~テラス0.53m、テラス~床0.66m)である。

壁溝は南壁の東寄りに、全長80cm、幅15cm、深さ8cmを測るものを検出した。

柱穴は床面上で12個検出され、その内、主柱穴はP1~P4、補助柱穴はP5~P8と考えられる。主柱穴の規模はP1~P4の順に(49×41~67)cm、(51×40~64)cm、(44×40~63)cm、(54×46~80)cmである。補助柱穴の規模は直径が20~30cm程、深さが22~25cm程であった。その外、P13~P15のように遺構周辺にあるピットや床面にある直径が10cm前後、深さが5~10cmの小ピットを29個検出した。

主柱穴間距離はP1~P2間から順に、2.5m、3.1m、2.6m、3.1mである。

中央ピット 中央ピットはP9で、平面は隅丸方形を呈し、2段に掘り込まれている。規模は1段目が(66×60~7)cm、2段目が(36×33~26)cmで、上縁部から底面までの深さは33cmである。また、1段目と2段目の間にテラスがあり、最大幅が北西側で24cm、最小幅が南東側で8cmを測り、2段目のプランが南東側にかたよって確認された。

炭化物 S I 01は焼失住居であり、内側が焼けただけで鎮火したためか、構造材の大半が炭化した状態で検出された。炭化物は北側で残りが良く、南側で残りが悪い。北側の壁際には、板材や垂木が壁に直交して、コーナーでは放射線状に残っていた。板材は北壁の中央に集中し、板材の検出状況の断面は上縁から湾曲して床面付近に達することがわかった。板材の大きさは幅が最大で30cm、最小で20cm、厚さが1～2cm程度であった。また、北壁から約1.5m内側で、壁に平行する材(No717、No647)が2列確認でき、これら2つ材は垂木や板材、柱との位置関係から、北側のもの(No717)が桁(又は梁)、南側のもの(No647)が棟木と考えられる。柱はP1とP4で確認でき、共に直径が20cm程度であった。炭化物の材質は広葉樹と針葉樹が混在していた。

焼土 床面の中央部は炭化物の出土がなく、代わりに焼土と砂礫を含む土が検出された。焼土は砂礫を含み、中央ピットを覆い隠すように、長径1.23m、短径1.2mの卵形状に堆積し、厚さは最大で12cm程度であった。砂礫を含む層はさらに西側に0.63m程広がり、焼土をわずかに含んでいた。この焼土は縮まりがなく、範囲も限られており、焼け落ちの焼土と考えられ、上屋構造に関係する土と考えられる。この焼土に対して、床面東寄りに2ヶ所の良く締まった焼土があり、継続的に使われたものと考えられる。規模は西側のもので直径38cm程の円形で、東側のものは長径80cm、短径60cmであった。

樹種 P4の柱根No727はスギ、P1の柱根No733はスグジイで異なった樹種が使われている。補助柱穴の上から出土した桁(又は補助柱)No612はスギ、桁(又は梁)No717、No640はそれぞれヒノキ、スグジイで、ここでも異なった樹種が使われている。棟木No647、No709はそれぞれスギ、スグジイと鑑定されたことから、No709は棟木ではなく垂木の可能性がある。垂木(又は椽首)No665、No707、垂木No683、No653はNo653だけがスギで、他はスグジイである。板材(又は垂木)No676はスグジイである。常緑広葉樹と常緑針葉樹を使用して建てられていたことがわかった。

C¹⁴分析 1991年度に行なったC¹⁴の分析の結果はK S U2144が1700+20、K S U2145が1720、K S U2146が1510+30であった。

埋土 埋土は6層に分層できた。埋土上層では層の乱れが少なく自然堆積と考えられるが、床面付近で、焼土や炭化物を含む層がかなり乱れており、火災時の崩れの層と思われる。

貼床 ㊸㊹の3種類があるが、㊸層は粘性はあるが比較的に柔らかい層であり、㊹層は基盤層の粘土を含み、良く締まっていた。

貼床除去 貼床を除去してさらに掘り下げると、西壁から約35cm内側で、西壁に平行する線までDKPが取り除かれ、粘土層の下がりやを追うように掘られていた。特に、P4の柱根を残したままの状態ですり取ってみると、DKPを除去した後で柱穴を掘り、柱をピットの壁側の縁にくっつけ真すぐに立て、基盤層のブロックを含む㊸～㊹層を詰め込み、さらに、床を整えるための㊹層を詰めて、最後に㊸層を貼る手順が観察できた。その時の柱穴の大きさは、柱根の幅が20cmに対して、39cmの幅であった。一方、すでに粘土層が水平に整形された部分に立てられていたP1でも同じ方法で調査をした。その結果、床面付近では掘り鉢状に20cm程掘り下げているが、柱を埋め込む部分では柱の径とはほぼ同じ22cm程の幅であったが、最後に、㊸層を詰め込んでいる。P2・P3には柱根が残っていなかったが、土層を良く観察すると、炭化物と焼土を含む腐植土で、直立する柱の土層がみられ、P4の方法で柱が立てられたことが推察できる。

遺物 出土遺物には複合口縁をもつ甕Po1～7、外傾する口縁をもつ甕Po8、壺の口縁Po9、高杯の裾部Po10、土玉Po11～13、勾玉J1がある。

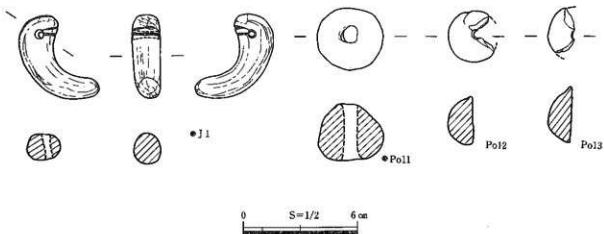
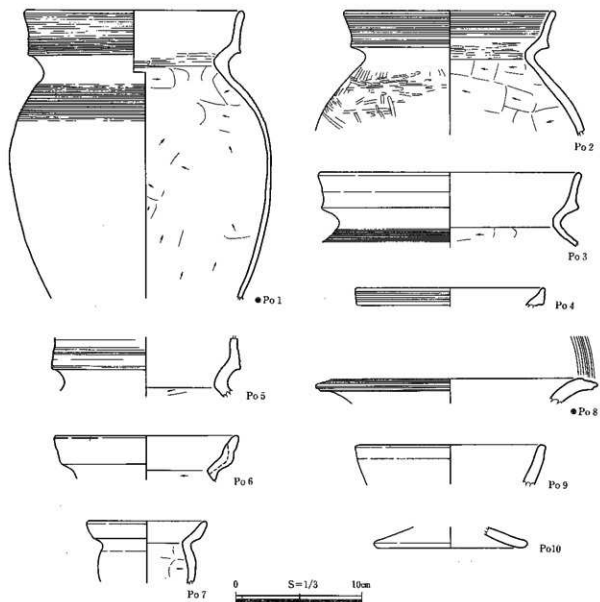
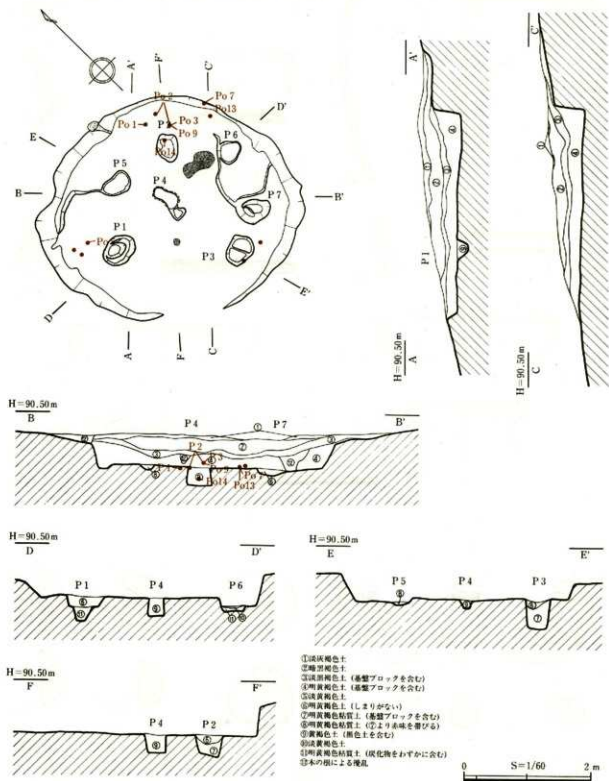


插图 5 南谷大山遺跡A区S101出土物実測図

このうち床面からは、床面北東隅の壁際では、口縁部施文の後にナデ消し、頸部内面が磨かれたPo 1が崩れ落ちた垂木材に潰されたように出土し、口縁が外傾し、4条の擬凹線が施されたPo 8が出土している。さらに、流紋岩質凝灰岩製の勾玉 J1、球状の土玉Po11も床面から出土している。その他のものは埋土から出土している。

時 期 S I 01の時期はPo 1から弥生時代後期後半と考えられる。



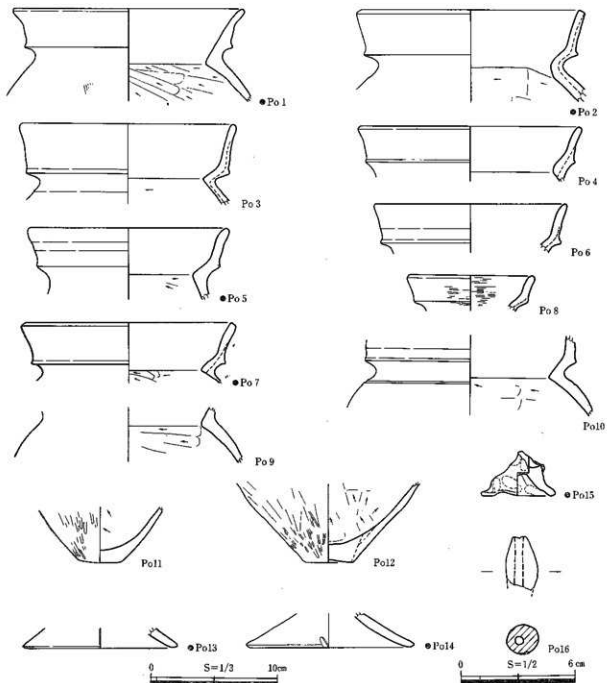
挿図6 南谷大山遺跡A区SI02遺構図

ASI02 (挿図6・7、図版2・51)

位置 ASI02は調査区北部H7グリッドに位置する。遺構周辺は標高89.5m~90.2mで、南向きの緩斜面になっている。東側約6mには南谷26号墳が、北西約10.5mにはASI03が、北約2mにはビット群が、それぞれ位置する。

形態 当住居跡は平面が楕円形を呈する。規模は東西4.2m、南北3.6mを測る。残存壁高は最も遺存状態の良い北壁で0.41mである。床面積は約11.3m²である。ASI02は、当遺跡の中でも、規模の小さい住居のうちの一つである。

ビット 床面には、中央ビットP4のまわりに、6個のビットが存在する。これらのうちP1~P3が主柱穴である。規模はそれぞれP1(56×43-41)cm、P2(48×33-36)cm、P3(52×



挿図7 南谷大山遺跡A区SI02出土遺物実測図

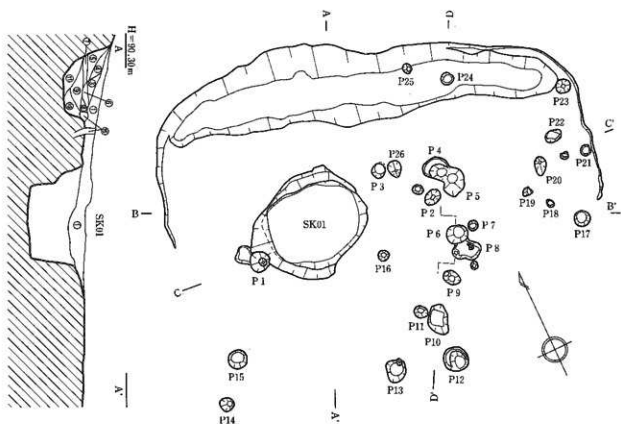
37-63)cmとなっている。主柱穴間距離はP1~P2間から順に1.9m、2.0m、2.0mである。

- 中央** 中央ピットは、P4である。平面は不整形、断面は方形を呈する。規模は(42×18-30)cmを測る。⑨層黄褐色土(黒色土を含む)を埋土とする。
当遺構には壁溝・貼床はみられなかった。
- 焼土** 中央部東と中央部南には、継統的に使われたと考えられる堅い焼土面がみられる。前者は不整形で規模は55×30cm、後者はほぼ円形で12×11cmである。
- 埋土** 遺構の埋土は4層である。特に③・④層には基盤ブロックを含むなど、住居の壁から中央に向かって流れ込む、自然堆積の状態になっている。
- 遺物** 出土遺物は複合口縁をもつ甕Po1~Po9、甕の頸部Po10、甕又は壺の底部Po11・Po12、高杯裾部Po13・Po14、手捏ね土器Po15、土鍾Po16である。
床面より出土した土器としては、口縁部ナデ仕上げがなされ、頸部以下内面に削りが施されている甕Po1~Po3・Po5・Po9、高杯裾部Po13・Po14、歪な蓋状の手捏ね土器Po5が挙げられる。出土位置はPo1・Po12・Po13が北壁際付近から、Po2・Po3・Po9がP2の縁に固まって、Po5が東壁際から、Po14がP2内からそれぞれ出土している。
- 時期** 床面出土の甕口縁Po1~Po3・Po5・Po9より、AS I 02の時期は弥生時代終末のものと考えられる。
出土した甕口縁の9つとも、口縁部にナデ仕上げがなされていることから、AS I 02はA区の他の住居より若干時期が下るものとする。

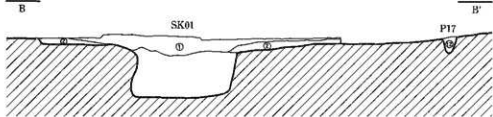
AS I 03 (神岡8・9、図版2)

- 位置** A区の中央南側、G6杭付近にあり、緩やかに傾斜が始まる標高約90~90.5mの付近に位置する。AS I 03の中にASK01が納まっている。
- 形態** 南側はすでに削平を受けており、遺存状態は良くない。平面は隅丸方形を呈する。
規模は東西約6.82mであり、南北はピットを検出した範囲で復元して考えると約6.0m以上を測り、床面積は40.9㎡以上である。残存壁高は約0.44mである。
壁溝は北壁側にあり、北西と北東の隅で終結している。規模は全長6.0m、最大幅1.1mであり、深さは床面から最大28.5cmである。幅、深さ共に住居跡に伴う溝としては規模が大きい。また、深さは東から西に行くに従ってだんだん深くなっている。
柱穴は床面上で27個検出されたが、主柱穴として考えられるものが特定できなかった。比較的しっかりしたピットとして、P1~P6・P17で、規模は順に(32×28-47)cm、(28×21-31)cm、(26×24-31)cm、(38×34-58)cm、(42×34-50)cm、(34×28-33)cm、(28×26-30)cmである。その他のピットは10cm前後の浅いものであり、径は12~40cmである。
- 埋土** 埋土は14層に分層できた。①②層は床面までの埋土で、③~⑨層は壁溝内の埋土で、⑩~⑭層はピット内の埋土である。
- 遺物** 出土遺物には、複合口縁をもつ甕Po1・Po2、壺か甕の平底を呈す底部Po3、蛇紋岩製の磨製石斧S1がある。
- 出土状況** 磨製石斧S1がある。

このうち床面からは、P2の中から、口縁部施文の後にナデ消し、内面が横方向に磨かれているPo2が出土し、これはASK01の埋土から出土した甕口縁と接合した。もう1つは、壁溝内の東寄りの底面付近より、流紋岩質の磨製石斧の基部片S1が出土し、これもASK01の埋土から出土したものと接合した。従って、ASK01はこの住居に伴う屋内貯蔵穴と考えられる。また、溝の規模やピットの配置等を考え合わせると住まいというより小屋的な使われ方をしていたと思われる。その他は埋土中から出土していて、①層から口縁部がヨコナ

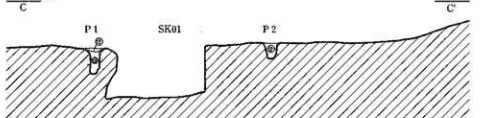


H=90.30m

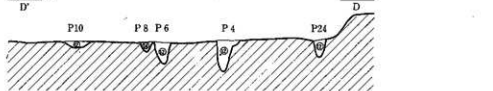


- ①暗黒褐色土
- ②暗灰褐色土
- ③暗褐色土
- ④暗黒褐色土粒を含む
- ⑤暗赤褐色土 (DKPを含む)
- ⑥暗赤褐色土 (DKPを含む)
- ⑦暗褐色土
- ⑧暗褐色土 (DKPを多量に含む)
- ⑨暗黄褐色土 (DKPが均一に入る)
- ⑩暗黄褐色土 (DKP粒を含む)
- ⑪暗黄褐色土 (DKPアロクを含む)
- ⑫暗赤褐色土 (粘質あり)
- ⑬暗褐色土
- ⑭暗褐色土 (DKPを含む)
- ⑮暗黄褐色土
- ⑯木の根による攪乱

H=90.30m

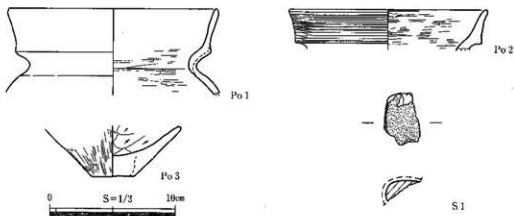


H=90.30m



0 S=1/60 2m

挿図8 南谷大山遺跡A区S03遺構図



挿図9 南谷大山遺跡A区S103出土遺物実測図

デで仕上げられ、頸部の内面が横方向に磨かれているPo1と内面が上方向に削られた平底を呈するPo3が出土した。

時期 床面出土の土器Po2から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。

AS I 04 (挿図10・11、図版3・51)

位置 A区の北西側、F5グリッドの西側にあり、緩やかに傾斜が始まる標高約88.5~89mの付近に位置する。AS I 04は南谷24号墳の墳丘下から検出された。また、東側にはAS D01がある。

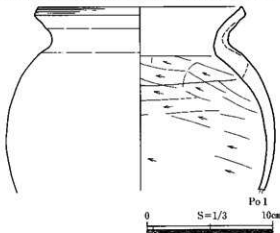
形態 南東側以外はすでに南谷24号墳を築造するために削平を受けており、遺存状態は非常に悪い。平面は不明である。

規模は南側の壁とピットを検出した範囲で復元して考えてみると、東西約5.5m以上、南北約6.6m以上を測り、床面積は36.3㎡以上である。残存壁高は南東側で約0.46mである。壁溝は検出されなかった。

ピットは付近で21個検出されたが、主柱穴として考えられるものがP1・P2で、規模は順に(65×55-90)cm、(62×50-88)cmである。P1とP2しかし、2つのピットと対になるものが特定できなかった。比較的しっかりしたピットはP3~P10・P13~P15で、規模は順に(64×56-28)cm、(36×30-28)cm、(42×37-33)cm、(35×30-35)cm、(50×35-35)cm、(30×30-31)cm、(60×57-28)cm、(30×28-32)cm、(50×38-26)cm、(35×30-33)cm、(54×48-27)cmである。その他のピットは20cm前後の浅いものであり、径は24~36cmである。

埋土 埋土は4層に分層できた。明黄褐色土で炭化物を含む層、暗黄褐色土で粘性がある層、暗黒褐色土の層、暗黄褐色で炭化物の混じる層が遺構埋土であった。

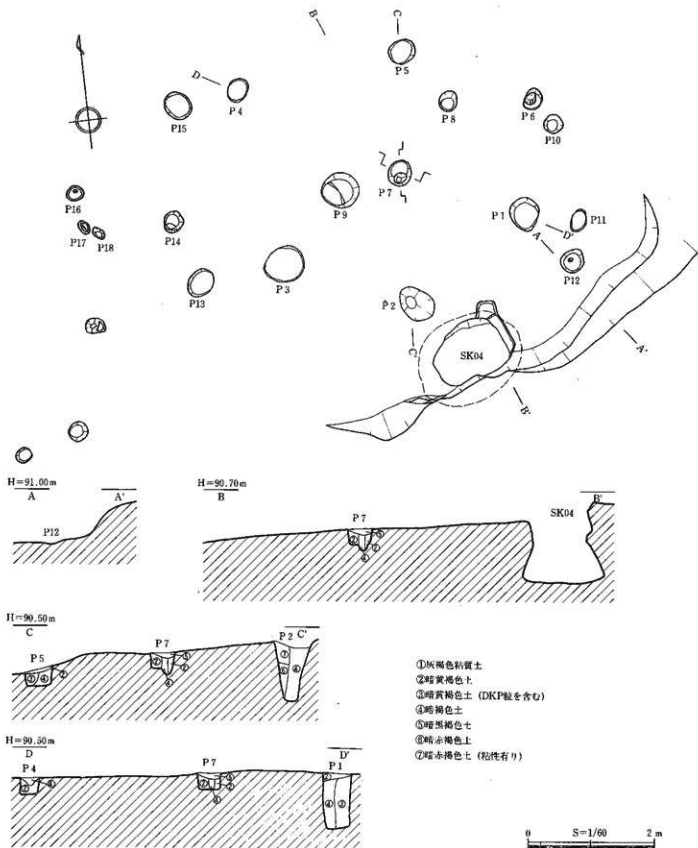
遺物 出土遺物には、暗黒褐色土中から、「く」字状口縁をもつ甕Po1があるが、これはASK04に伴うものと考えられ、AS I 04の遺物として、南谷24号墳盛土下出土遺物が伴うものとするのが妥当であ



挿図10 南谷大山遺跡A区S104出土遺物実測図

ろう。その中でも、盛上下出土遺物の複合口縁で口縁部平行沈線を施した後ナデ消し、底部は平底を呈する甕Po11は縮まった盛土とは異なり、暗黄褐色の柔かい層から一ヶ所に固まって出土している。

時 期 南谷24号墳盛土下出土の甕Po11から推察して、弥生時代後期後半頃と思われる。



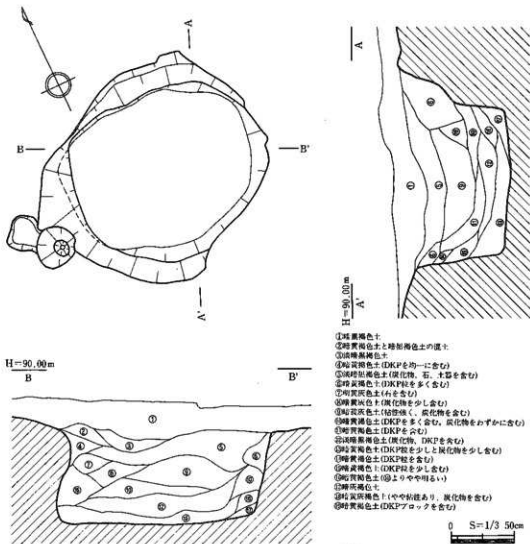
挿図11 南谷大山遺跡A区SI04遺構図

2 土坑・土壇

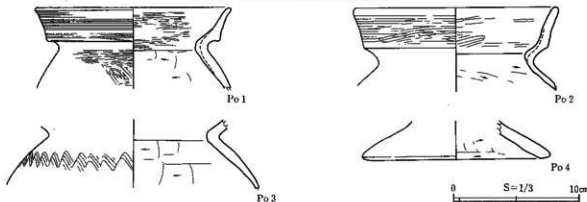
ASK01 (挿図12・13、図版3)

位置 A区の中央南側、G6杭付付近で南側に向かって緩やかに斜面が始まる標高90m辺りに位置する。ASK01はAS103のプランの中に収まる。

形態 遺存状態が良い。平面は上縁部ではほぼ円形、底面が楕円形を呈し、断面は西側で上縁部から最大20cm壁面が内湾する袋状であった。規模は上縁部で長径1.58m、短径1.49mあり、底



挿図12 南谷大山遺跡A区SK01遺構図

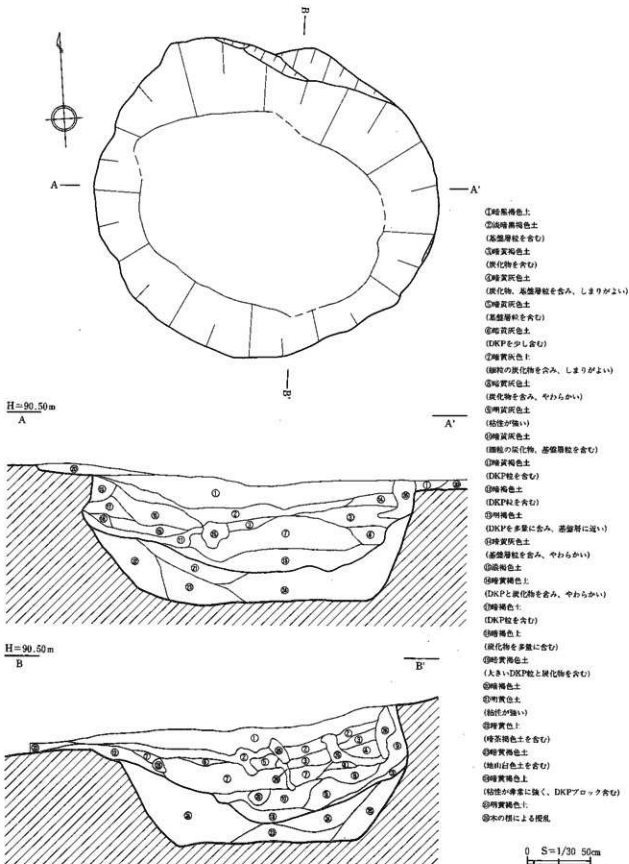


挿図13 南谷大山遺跡A区SK01出土遺物実測図

面で長径1.53m、短径1.16mであった。残存する部分の最大の深さは0.79mであった。

埋土 埋土は19層に分層できた。⑤層は細かい炭化物や土器、石が含まれていた。また、炭化物を含む層として、⑧-⑩⑫⑬層があった。

遺物 出土遺物には複合口縁をもつ甕口縁Po1・Po2、甕の胴部Po3、蓋Po4がある。



挿図14 南谷大山遺跡A区SK02遺構図

出土状況 これらはすべて埋土中から出土している。⑤層中から出土した口縁部平行沈線を施した後
にナデ消しするPo1はAS I 03のP2から出土した甕口縁と接合した。さらに、壺又は甕の
平底を呈する底部がAS I 03の埋土中から出土したものと、流紋岩質の磨製石斧の基部片が
AS I 03壁溝内から出土したものとそれぞれ接合した。2点共にAS I 03の遺物として図化
し、前者は甕口縁Po1、後者は底部Po3となった。

時期 SK01は出土土器から推察すると弥生時代後期後半と考えられる。

性格 SK04は埋土中に炭化物が含まれていること、断面が袋状であることより推貯蔵穴と考
える。また、接合した土器の関係でみる、ASK01とAS I 03がほぼ同時期に存在したこと
になり、屋内貯蔵穴であった可能性が高い。

ASK02 (押図14、図版3)

位置 A区の中央北側、G6グリッドの北東隅にあり、北側に向かって緩やかに斜面が始まる標
高90m辺りに位置する。すぐ北側にASK03がある。

形態 遺存状態が良い。上縁部、底面共に平面は円形を呈し、断面は皿状である。
規模は上縁部で長径2.72m、短径2.57mあり、底面で長径1.83m、短径1.6mであった。残
存する部分の最大の深さは南側で1.0mであった。

埋土 埋土は25層に分層できた。①～⑩層は細かい炭化物、DKP粒を含んでいるのに対して、
⑪～⑮層はDKPが濁っているだけで良く締まっており、基盤層の一部と思われる。従って、
本来の上坑埋土は⑮層まで、最下層としては⑬層であったと考えられる。

遺物 出土遺物は埋土上層で土器の小片が数点出土しただけで図化できなかった。

時期性格 時期、性格共に不明である。

ASK03 (押図15・16、図版3)

位置 A区のほぼ中央、H5杭の北西付近で尾根の頂部が広がった北端辺りで、標高90.50m付
近に位置する。SK02のすぐ北側にある。

形態 遺存状態が良い。平面は上縁部で楕円形、底面で円形呈し、断面は南側で上縁部から最大
31cm壁面が内湾する袋状であった。規模は上縁部で長径1.76m、短径1.31mあり、底面で
長径1.77m、短径1.56mであった。残存する部分の最大の深さは1.14mであった。

埋土 層は20層に堆積していた。細かい炭化物を含む層が多い中で、最下の⑮層中には多量に含
まれ、⑮層中には炭化物と共に石が含まれていた。

遺物 埋土の掘り下げ中に、ヨコナデされた甕口縁片Po1が出土した。

時期 出土土器Po1から推察すると弥生時代後期後半と考えられる。

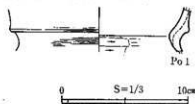
性格 埋土中に炭化物が含まれていること、断面が袋状であることより貯蔵穴と考
える。

ASK04 (押図17、図版4)

位置 A区の西側、F5グリッドの南西側にあり、北西側に向かって緩やかに斜面が始まる標高89m付
近に位置する。24号墳下にあるS I 04のプランの中に収まる。

形態 遺存状態が良い。上縁部、底面共に平面はほぼ楕円形を呈し、断
面は東側で上縁部から最大41cm壁面が内湾する袋状であった。規模
は上縁部で長径1.31m、短径0.84mあり、底面で長径1.8m、短
径1.37mであった。残存する部分の最大の深さは1.25mであった。

埋土 層は6層に堆積していた。①層は粘性のある土質であるが、均



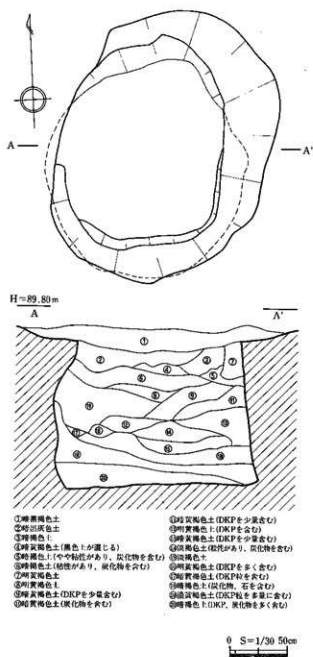
押図15 南谷大山遺跡A区
SK03出土遺物実測図

一な埋土であり自然堆積と考えられる。③層は細かい炭化物が含まれていた。

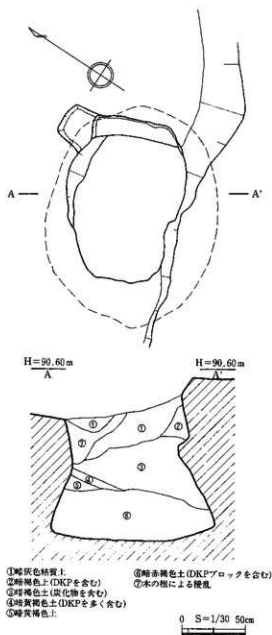
遺物 ⑥層中から出土した「く」字状の甕口縁Po1はS I 04の埋土上層から出土した甕口縁Po1と接合した。後者は土坑の検出面より、北側に50cm離れ、15cm浮いた状態で出土した。

時期 S K04はPo1から推察すると弥生時代後期後半と考えられる。

性格 S K04は埋土中に炭化物が含まれていること、断面が袋状であることより推察すると貯蔵穴と考える。また、接合した土器の位置関係でみる、Po1はS K04に伴う土器であると考えられ、S I 04が放棄された後に掘り込まれた可能性が強く、屋外の貯蔵穴であったと考えられる。



挿図16 南谷大山遺跡A区SK03遺構図



挿図17 南谷大山遺跡A区SK04遺構図

3. 溝状遺構

A S D 01 (挿図18・22、図版4)

位置 A区の東西に延びる尾根のほぼ中央、G5 枕付近で尾根の頂部が広くなった北端辺りで、標高90m付近に位置する。すぐ東側にSK02・03がある。

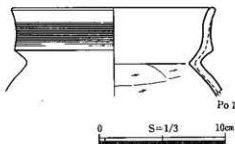
形態 遺存状態が悪い。規模は全長4.5m以上、幅0.7~1.2m以上、深さは5cm程である。断面は緩やかなU字形を呈す箇所があるが特定できない。この溝は東西方向に延びている。

埋土 埋土は2層に分層できた。

遺物 ①層から、平行沈線を施した後にナデ消しをする襷口縁Po1が出土している。

時期 時期はPo1から弥生時代後期後半と考えられる。

性格 性格は特定できないが、S I 03の西側でも、標高90m付近で東西方向に延びる暗黒褐色土の浅い帯状の範囲がみられた。



挿図18 南谷大山遺跡A区SD01出土遺物実測図

A S D 02 (挿図19・23、図版4)

位置 A区の東西に延びる尾根の南西側の斜面を少し下ったE6 枕近くで、標高88m付近に位置する。A S I 01とA S I 03とのほぼ中間にある。

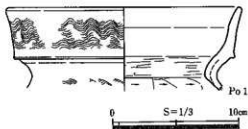
形態 遺存状態が悪い。規模は全長9.8m以上、幅0.52~1.2m以上、深さは5cm程である。断面は緩やかなU字形を呈す箇所があるが特定できない。この溝はほぼ東西方向に延びている。

埋土 埋土は3層に分層できた。

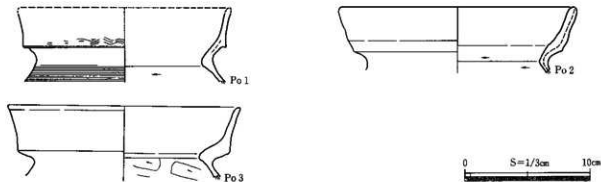
遺物 ①層から、波状文を施した後に一部ナデ消しをする襷口縁Po1が出土している。

時期 時期はPo1から弥生時代後期後半と考えられる。

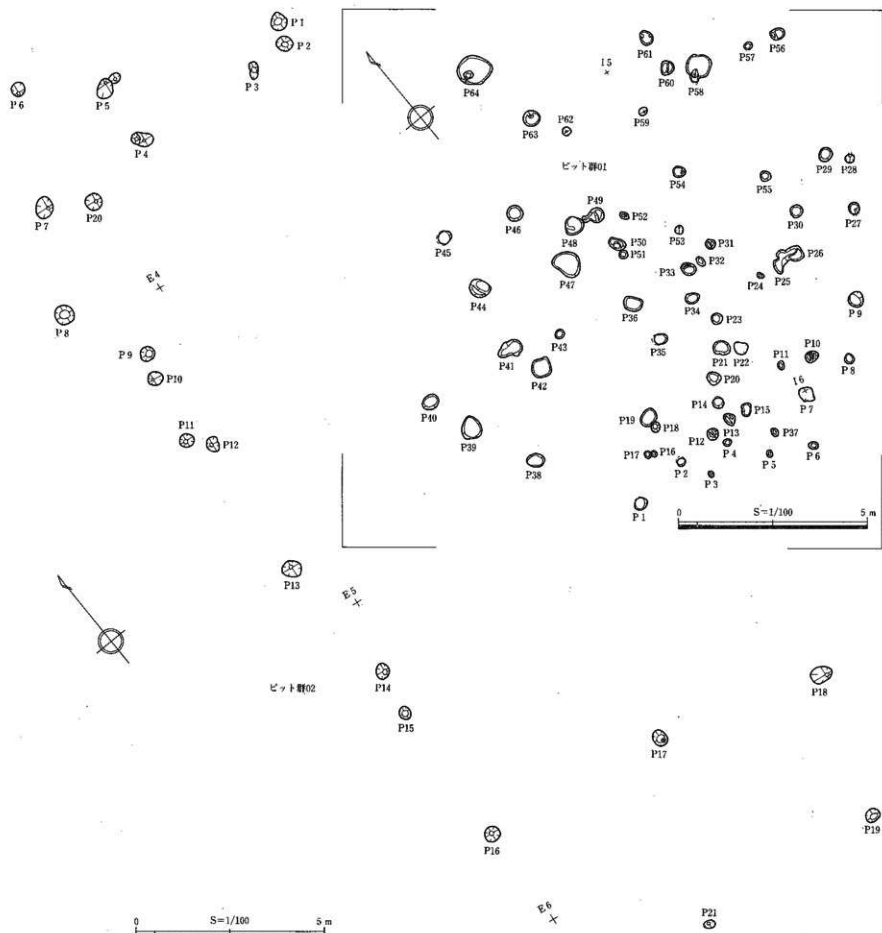
性格 性格は特定できないが、段状遺構になる可能性がある。



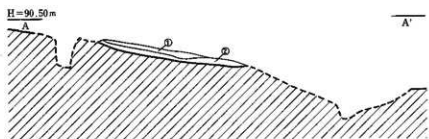
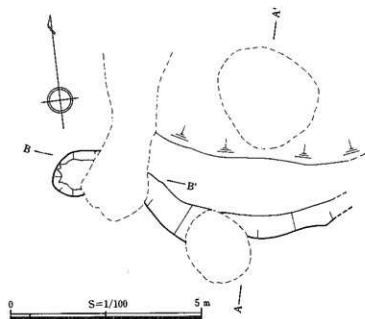
挿図19 南谷大山遺跡A区SD02出土遺物実測図



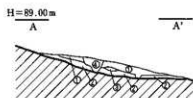
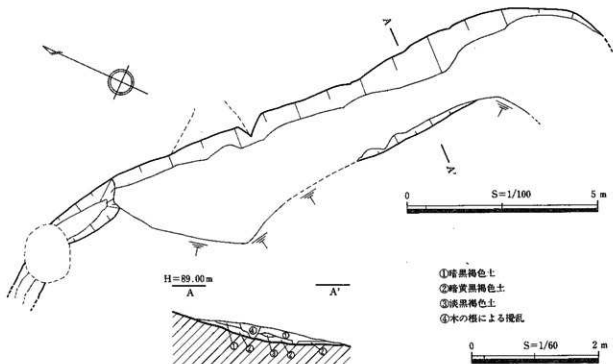
挿図20 南谷大山遺跡A区ピット群02出土遺物実測図



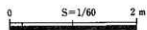
挿図21 南谷大山遺跡A区ピット群01(右上)・02(左下)遺構図



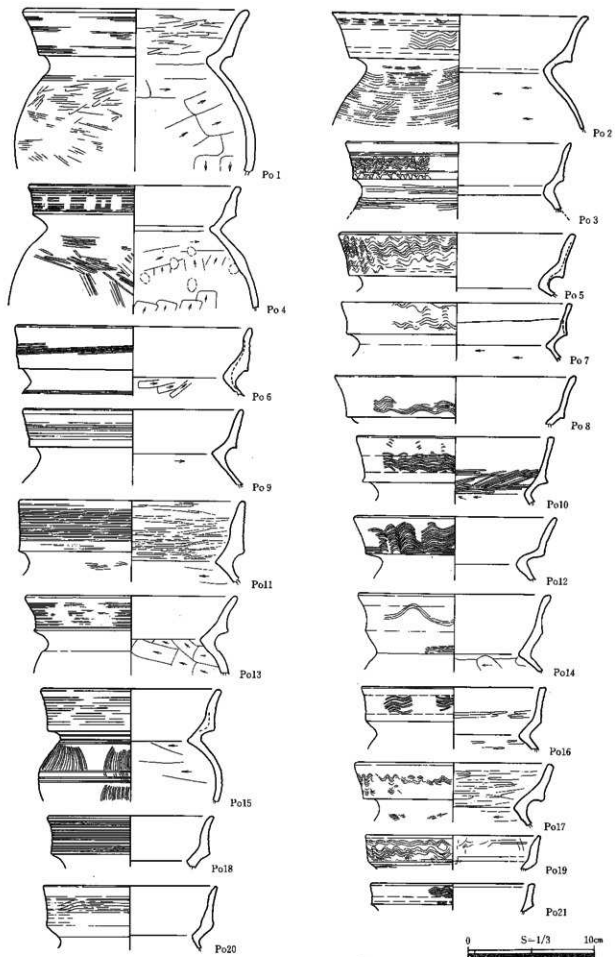
挿図22 南谷大山遺跡A区SD01遺構図



- ①暗黒褐色土
②暗黄黒褐色土
③淡黒褐色土
④木の根による擾乱



挿図23 南谷大山遺跡A区SD02遺構図



挿図24 南谷大山遺跡A区遺構外出土物実測図(1)

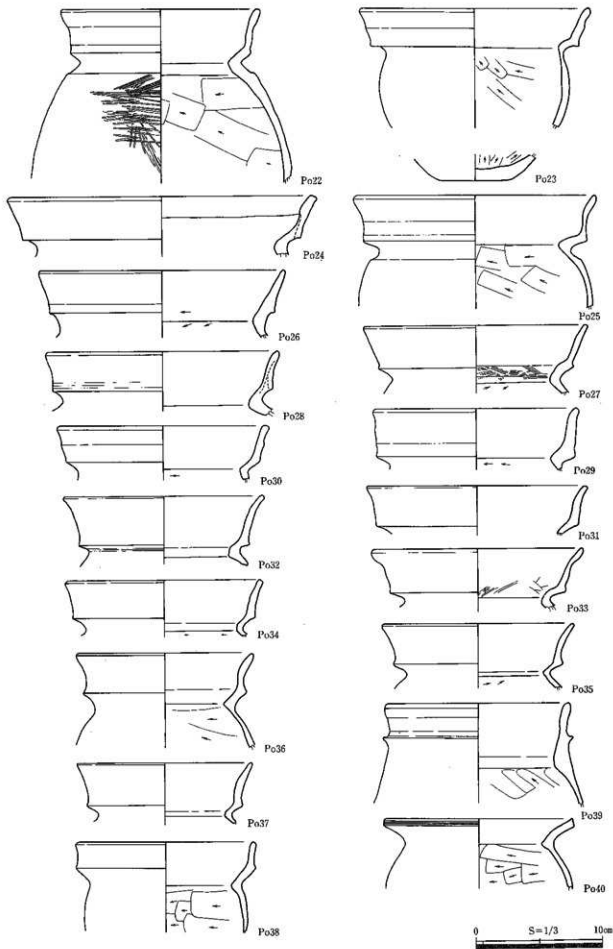


插图25 南谷大山遺跡A区遺構外出土遺物実測図(2)

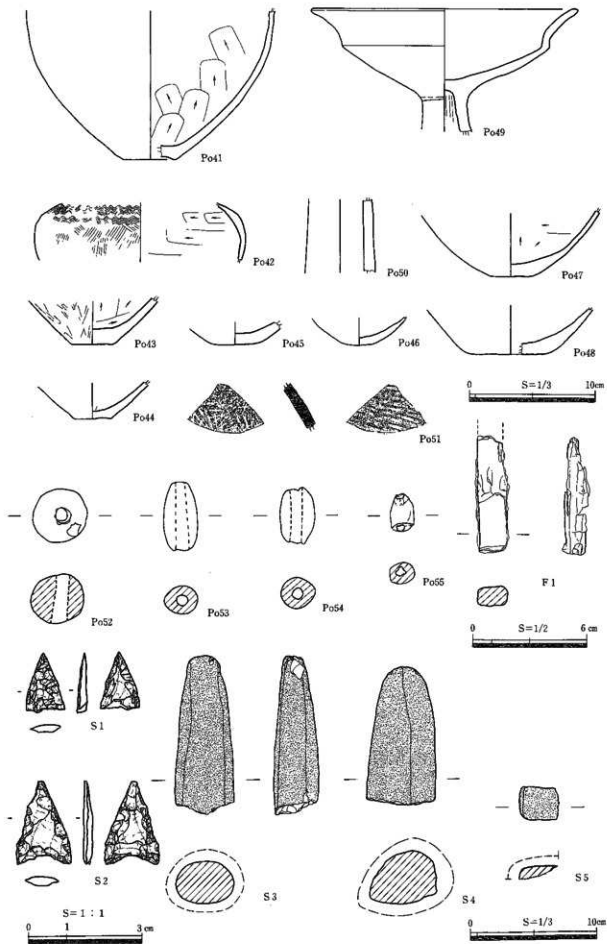


插图26 南谷大山遗址A区遗物出土器物实测图(3)

4. ビット群

Aビット群01 (挿図21、図版4)

位置	A区の中央、H5・H6・I5・I6グリッド付近、尾根が広く、平坦面を成している標高92m付近に位置する。Aビット群01は南谷26号墳の西側で、ASI02の北側に広がる。
ビット数	検出されたビットの数は、全部で64個であったが、規則性は、見出せなかった。深さは深いものでも20cm程で、しっかりした柱穴は残っていなかった。
埋土	ビットの埋土は暗褐色土、明黄褐色土であった。
遺物	小片の土器がP8より出土しているが図化できなかった。
時期	時期は不明である。

Aビット群02 (挿図20・21)

位置	A区の北西、D3～6・E4・E6・E7グリッド付近、下っていく斜面の途中で標高86.5～88m付近に位置する。南谷24号墳を囲むように存在する。
ビット数	北側から西側斜面に掛けて検出され、さらに南側の緩やかな斜面部分でも検出された。検出されたビットの数は21個であった。P1～P10・P16はしっかりしたビットで、P1・P2・P4・P5には土器が含まれていた。
規模	P1～P10・P16の規模は、順に(50×40-41)cm、(40×40-58)cm、(30×20-68)cm、(60×33-52)cm、(28×24-61)cm、(52×50-41)cm、(54×54-41)cm、(38×38-78)cm、(40×44-38)cm、(40×40-76)cmである。
埋土	ビット埋土は暗黒褐色土と暗黄褐色土である。
遺物	ビット内から、複合口縁をもつ甕Po1～3である。
時期	ビット内出土土器から、弥生時代終末と考えられる。

5. 遺構外遺物について (挿図24～26・図版76)

遺構外から多量の遺物が出土している。

主に北側斜面から出土したものである。図化できたものに複合口縁をもつ甕Po1～Po39、「く」字状口縁をもつ甕Po40、胴部～底部Po41、扁球形を呈す胴部Po42、底部Po43～Po48、高杯杯部Po49、高杯筒部Po50、須恵器甕胴部片Po52、土玉Po52、土鍾Po53～Po55、斑晶質安山岩製石鏃S1・S2、結晶片岩性閃緑岩製磨製石斧S3、輝石安山岩製磨製石斧S4、閃緑岩製磨製石斧S5、不明鉄器F1がある。

甕は、口縁部施文の後ナデ消すPo1～Po21、ナデ仕上げのPo22～Po39、端部に沈線が施される「く」字状口縁をもつPo40がある。

高杯は、湾曲する底部に外反する口縁部をもつPo49である。

また、底部は、不明瞭な平底を呈すものである。

これらは、弥生時代後期後半から終末にかけてのものが多く、A区から検出された遺構の時期と重なるものである。

第3節 南谷大山遺跡B区の概要（1991年度調査）

位置 南谷大山遺跡B区は、J-10杭を起点とし、南西側に低く延び出す標高75～90mの丘陵上に位置する。B区平坦面とA区の最高地点に位置する南谷26号墳の比高差は約13mで、水田面からの比高差は約77mである。

1991年度にB区で遺構を検出した調査区は、C13・14・15・16、D13・14・15・16、E13・14・15、F12・13・14、G11・12・13・14グリッドである。

遺構 調査区は、後世の開墾等による攪乱が及んでおり、必ずしも遺構の遺存状態はよくない。

1991年度に調査できた遺構は、竪穴住居跡8棟、貯蔵穴と考えられる土坑8基、不明土坑1基、溝状遺構2条、ピット群である。

竪穴住居跡 竪穴住居跡は、弥生時代終末頃の築造と思われるものが7棟（BS I01～BS I04、BS I06～BS I08）、古墳時代前期初頭の築造と考えられるものが1棟（BS I05）である。弥生時代のものには、平面が隅丸方形のものが4棟（BS I01・BS I03・BS I06・BS I08）、方形のものが3棟（BS I02・BS I04・BS I07）ある。このうちBS I01からは、構造物と考えられる炭化物が多量に検出されたが床面からの土器は少なく、不慮の火災に遭ったものではないと考えられる。BS I02は建て替えの状況が窺われた。BS I07は、柱穴が無く平地式の住居と思われる。また、BS I08は、他のものと異なり南側斜面に作られている。古墳時代の築造と考えられるBS I05からは、出入口と考えられる施設が作られている。

土坑 土坑はいずれも弥生時代終末に作られたものと考えられ、形態としては平面が円形を呈し断面袋状になるものが5基（BS K02・BS K04・BS K05・BS K06・BS K08）、方形を呈し断面台形になるもの1基（BS K03）、平面が隅丸方形を呈し断面袋状になるもの1基（BS K07）、平面が不整形になるものが1基（BS K09）である。BS K02の壁には、工具痕が明瞭に残っていた。BS K04からは、多量の土器と共にヤマトシジミ、マガキなどを含んでいた。BS K06・07からは、良好な土器資料が得られた。また、BS K02・BS K08・BS K06・BS K05はほぼ等間隔で半円形に配置されており、共同管理されたものと考えられる。不明土坑BS K01は断面が皿状を呈す。

溝状遺構 溝状遺構は、北側斜面の中腹に直線状に延びるBSD01が弥生時代終末頃のものと考えられる。BSD01は、単なる溝状遺構ではなく、通路として機能したとも考えられる。BSD02は丘陵を横断するように延び、北側では階段状に掘り込まれ、通路として機能したと考えられる。時期は不明であるが、BS I02の埋土を切り込んで作られていることから、弥生時代終末以降に作られたものであろう。

ピット群 Bピット群1は21個の柱穴からなる。いずれも不規則な配置で掘立柱建物跡等のものとは考えられないものである。



写真4 南谷大山遺跡調査後

第4節 南谷大山遺跡B区の調査結果（1991年度調査）

1. 竪穴住居跡

BS101（挿図27～32、図版5・51）

位置 調査区の東側E14・F14グリッドにあり、標高79.0m～79.4mのほぼ平坦面に位置している。北側約3mには、BS103がある。

形態 平坦面に位置するため比較的四壁の遺存状態はよく、平面は隅丸方形を呈す。

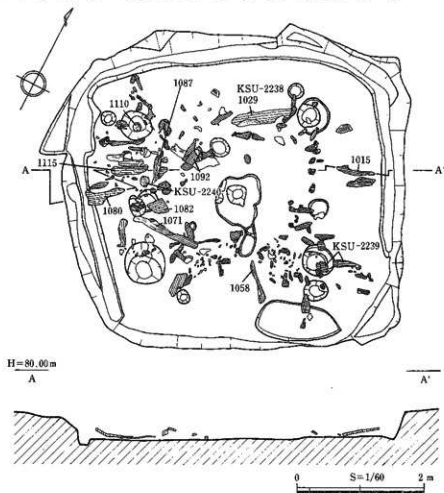
規模は、東西4.65m、南北4.50mを測り、床面積は約20.9㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.47mである。

壁溝は南壁際を除いて三壁際に巡る。幅は13～26cm、深さ2.4～9cmを測り、断面逆台形状を呈す。

主柱穴はP1～P4の4個で、それぞれの規模はP1（50×45～54）cm、P2（58×50～50）cm、P3（50×50～69）cm、P4（65×64～62）cmを測る。主柱穴間距離はP1～P2間から順に2.8m、2.4m、2.8m、2.4mである。P1～P4間、P2～P3間には、補助柱穴と思われるP5・P6がある。それぞれの規模は、P5（35×35～11）cm、P6（30×30～5）cmを測る。

その他にも用途は不明であるがP7～P12のビットが検出された。そのうちP9～P12は貼床下から検出されたものである。それぞれの規模はP7（31×30～5）cm、P8（23×20～6）cm、P9（38×34～15）cm、P10（40×37～10）cm、P11（24×24～14）cm、P12（24×24～9）cmである。

中央ビット 中央ビットはP13で、平面は上縁部不整形を呈し二段掘りになるものである。規模は上縁部で（75×73～4）cmを測る。二段目は楕円形を呈し、（31×31～



挿図27 南谷大山遺跡B区S101炭化物出土状況図

14) cmに掘り込む。埋土は5層に分層でき、上縁部には炭化物・焼土粒を含む層が、二段目には粘質土を含む層が入り込んでいた。上縁部の埋土最上層には極薄い暗黒褐色土層があり、板状のもので蓋をしていた可能性がある。中央ビットから南側には、長さ45cm、幅15cm、深さ2～4cmを測る溝が延びている。

焼土面 住居の北側床面には、P7・P10周辺、P6付近に不整形に広がる3か所の焼土面が検出された。

炭化物 床面直上には、中央部を除いてほぼ全域に構造物と考えられる炭化物が多量に検出された。このことから、BSI01は焼失したものと考えられる。これらのうち、周壁際から中央部に向かっているものは垂木の可能性が、周壁に平行しているものは梁または桁材の可能性がある。西側では、垂木材と考えられる炭化物が、梁・桁材と考えられる炭化物の上に重なる状況が見られた。

また、P1内には径約18cmの柱材の炭化物が立ったままの状態で見つかった。

これらの炭化物は、鑑定を依頼したものは全て常緑広葉樹で、スダジイが多く使用されたことがわかった。

貼床 床面には、南側1/3を除いてほぼ全面に、厚さ2～6cmの暗褐色粘質土による貼床がなされている。

埋土 埋土は11層に分層できる。①～⑤層は自然堆積の状況が窺えるが、⑥～⑪層は炭化物を多く含む。このうち炭化物に被る⑧層は炭化物の他に砂礫を含んでおり、住居の屋根には茅などの屋根材とともに、土・砂礫などが一緒に葺かれていたものと推定される。

遺物出土状況 出土遺物には、複合口縁をもつ甕Po1～Po26、「く」字状口縁をもつ甕Po27、小型の胴部Po28、壺又は甕の底部Po29～Po32、糸切り底をもつ杯Po33、高杯Po34・Po35、Po36、蓋型土器Po36、手捏ね土器Po37、土玉Po38～Po64、鉄鎌基部F1～F2、砥石S1・S3、穿孔のある軽石S2がある。

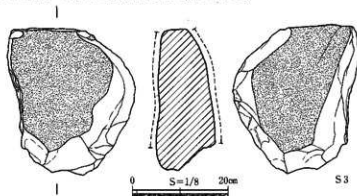
このうち床面からは、住居中央部で土玉Po58、南西コーナーで口縁部施文の後にナデ消しするPo1・土玉Po39・Po45・Po46・Po51～Po53、南東コーナーで土玉Po38・Po55、西側壁際で土玉Po47が出土している。

また、住居中央部の貼床中からは口縁部施文の後にナデ消しするPo2、鉄鎌F2、砥石S1が出土している。

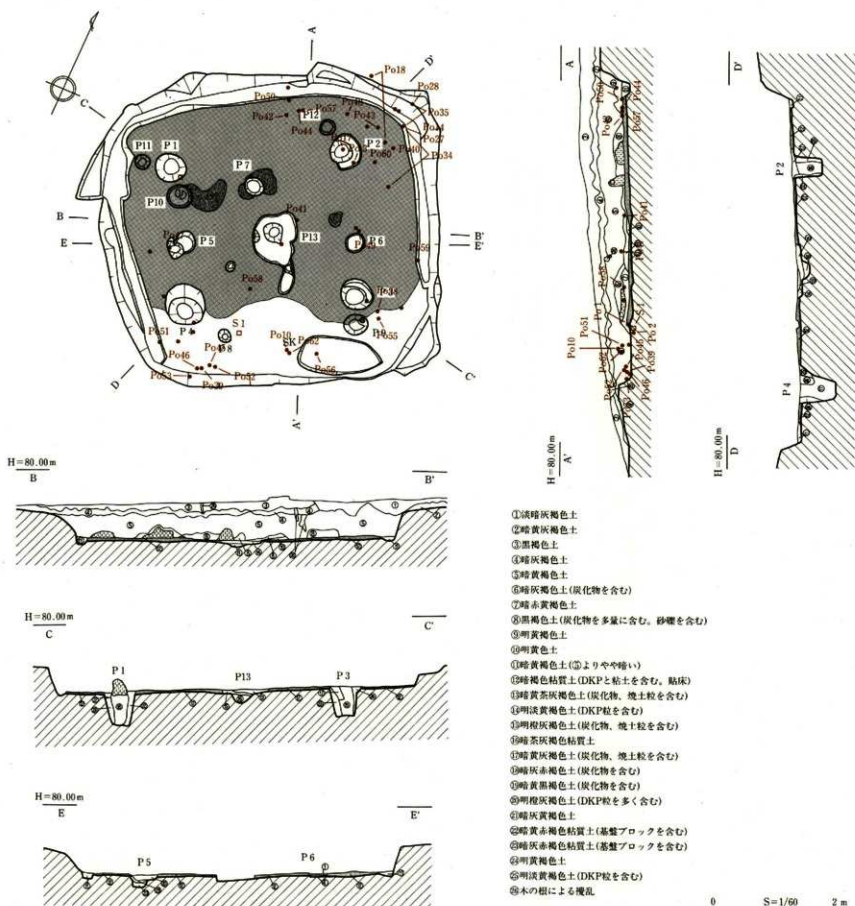
壁溝内・ビット内からも土器片が出土しているが図化できなかつた。そのほかは埋土中からの出土である。

床面から出土している土器の量が比較的に少ないことから、この住居は不慮の火災にあったのではなく故意に焼かれた可能性がある。

時期 BSI01の時期は、床面上の土器から弥生時代終末頃と考えられる。



挿図20 南谷大山遺跡B区S101出土遺物実測図(4)



挿図29 南谷大山遺跡B区S10遺構図

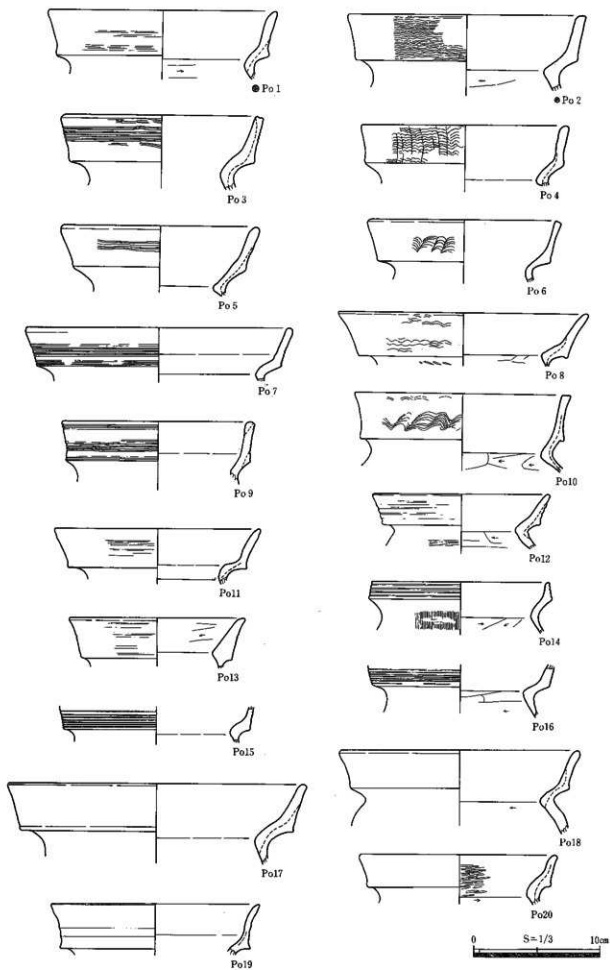


插图30 南谷大山遺跡B区S101出土遺物実測図(1)

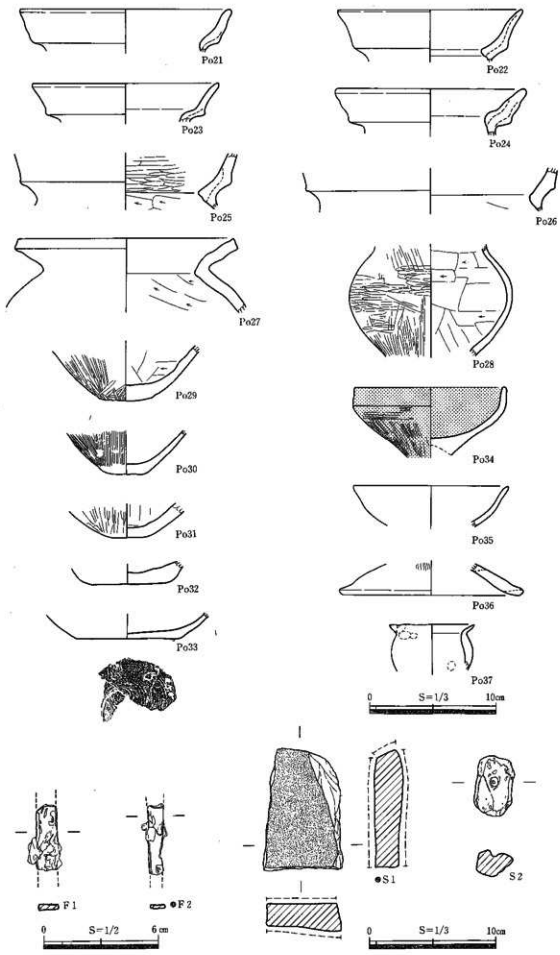


插图31 南谷大山遺跡B区S101出土遺物実測図(2)

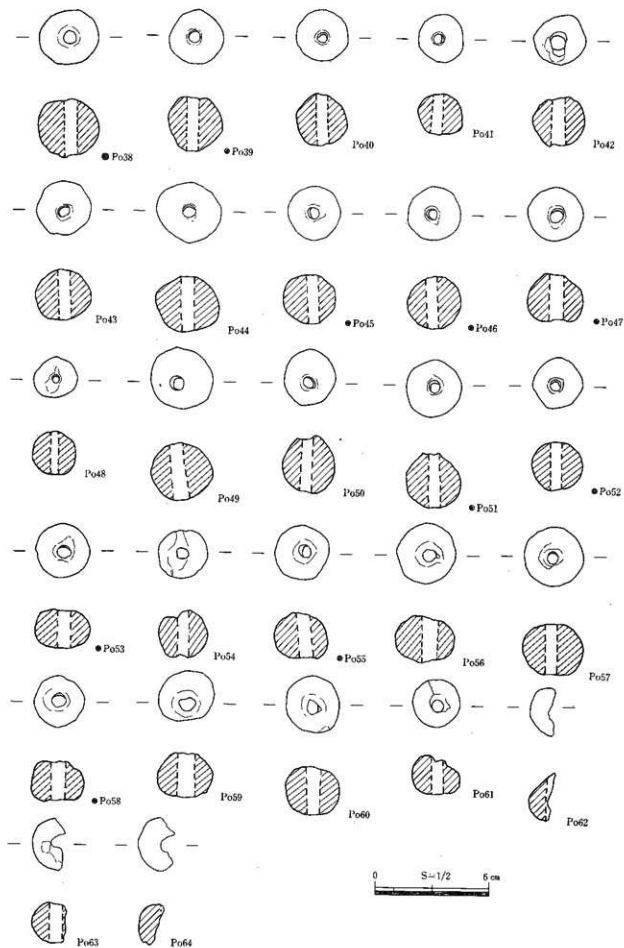
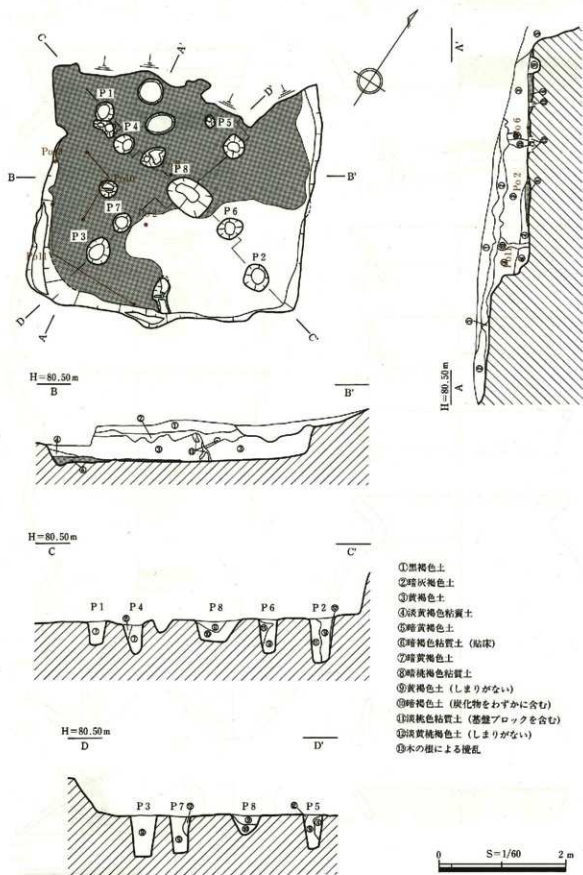


插图32 南谷大山道跡B区S101出土遺物実測図(3)

- 位置** 調査区の北東側F13グリッドにあり、標高79.4m～79.8mの緩やかに傾斜する斜面に位置している。西側約4.5mにはBS103があり、また、住居の東側の黒褐色埋土中にはBS102が掘り込まれている。
- 形態** 北壁が後世の擾乱溝によって削り取られており原形は留めていなかったが、平面は方形を呈すものと考えられる。
規模は、東西4.08m、南北4.82m以上を測り、床面積は19.6㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い南壁で最大0.62mである。
壁溝は検出されなかった。
主柱穴は4個と思われるが、北側の主柱穴の一つは後世の擾乱溝によって削り取られている。主柱穴のそれぞれの規模は、P1(32×30-56)cm、P2(42×40-79)cm、P3(45×37-70)cmを測る。主柱穴間距離はP2-P3から順に2.7m、2.3mである。
主柱穴の内側20cm～50cmにはP4～P7がある。それぞれの規模は、P4(32×30-55)cm、P5(40×30-56)cm、P6(42×33-53)cm、P7(33×27-62)cmを測る。これらは、深さもかなりあり主柱穴であると考えられる。これらのことからS102は建替えがあったと考えられる。建て替えの順序は不明であるが、おそらくP4～P7を主柱穴とするものを拡張したものと思われる。拡張前の主柱穴間距離はP4-P5から順に1.7m、1.3m、1.7m、1.2mである。
- 中央ピット** 中央ピットはP8で、平面は長楕円形を呈す。規模は(72×50-35)cmを測る。埋土は2層に分層でき、上層は黄褐色土、下層は炭化物を含む暗褐色土が入り込んでいる。
- 焼土面** 中央ピット周辺に20×12cm、14×8cmに広がる焼土面を2カ所検出した。
- 貼床** 床面には、南東側1/4を除いてほぼ全面に、厚さ3～10cmの暗褐色粘質土による貼床がなされている。
- 埋土** 埋土は4層に分層できた。①～③層は木の根による擾乱を受けてはいるものの自然堆積した状況が窺われる。しかし、淡黄褐色粘質土である④層は壁際にもみ見られ、壁際に立てられた板状のものが腐朽したものと考えられる。
- 遺物出土状況** 出土遺物には、複合口縁をもつ甕Po1～Po10、「く」字状口縁をもつ甕Po11、壺又は甕の胴部Po12・Po13、壺又は甕の底部Po14・Po15、高杯Po16、鼓形器台Po17、蓋型土器Po18がある。
このうち床面からは、住居中央やや南寄りでは、口縁部施文の後にナデ消しするPo2が出土している。中央ピット付近では、口縁部をナデのみで仕上げるPo6が出土している。西側壁寄りでは、口縁部をナデのみで仕上げるPo10が、また、南側壁際・西側壁際では、「く」字状口縁をもつPo11が口縁部を下にして二箇所に分かれて出土している。中央ピット内では、口縁部をナデのみで仕上げるPo8が出土している。
また、P5・P6内からも土器片が出土しているが図化できなかった。その他は埋土上層から出土している。
- 時期** BS102の時期は、床面出土の土器から弥生時代終末頃と考えられる。



挿図33 南谷大山遺跡B区SI02遺構図

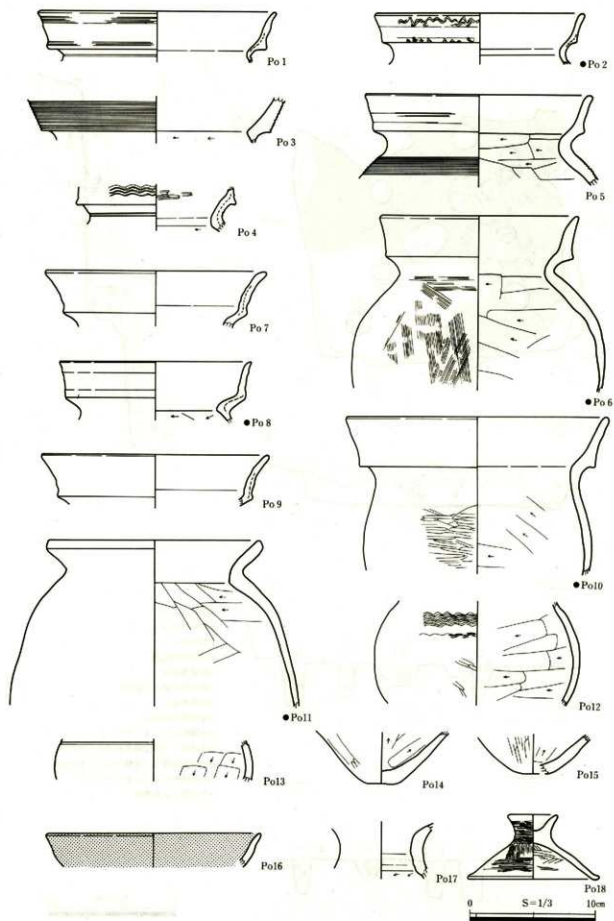
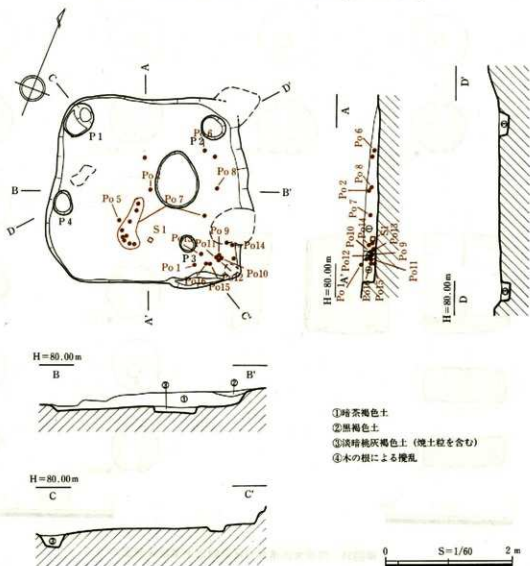


插图34 南谷大山遺跡B区S102出土遺物実測図

BSI03 (挿図35・36、図版6・52)

- 位置** 調査区の北東側E13グリッドにあり、標高79.3m～79.5mのほぼ平坦面に位置している。南側約3mにはBSI01、東側約4.5mにはBSI02がある。
- 形態** 周辺一帯は、黒褐色土が堆積しておりこの土を除去することでプランを確認することができた。平面は方形を呈すものである。
規模は、東西2.88m、南北2.90mを測り、床面積は約8.4㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い南壁で最大0.26mである。
支柱穴は4個と思われ、それぞれの規模は、P1(55×42-25)cm、P2(40×39-17)cm、P3(28×25-8)cm、P4(38×29-15)cmを測る。支柱穴間距離はP1-P2から順に2.0m、1.9m、2.1m、1.5mである。これらは深さがさほどなく、支柱穴の間隔も不整であることから、簡単な上屋構造であったと思われる。
- 中央** 住居中央よりやや東側には中央ビットと考えられるP4がある。平面は楕円形を呈す。ビットは(92×68-8)cmを測る。埋土は焼土粒を含む淡暗桃灰褐色土のみである。
- 埋土** 埋土は暗茶褐色土のみである。
- 遺物** 出土遺物には図化できたものが、複合口縁をもつ甕Po1～Po4、甕又は甕の胴部Po5・Po6、高杯脚部Po7、蓋形土器Po8、土玉Po9～Po16、砥石S1がある。
- 出土状況** 6、高杯脚部Po7、蓋形土器Po8、土玉Po9～Po16、砥石S1がある。



挿図35 南谷大山遺跡B区BSI03遺構図

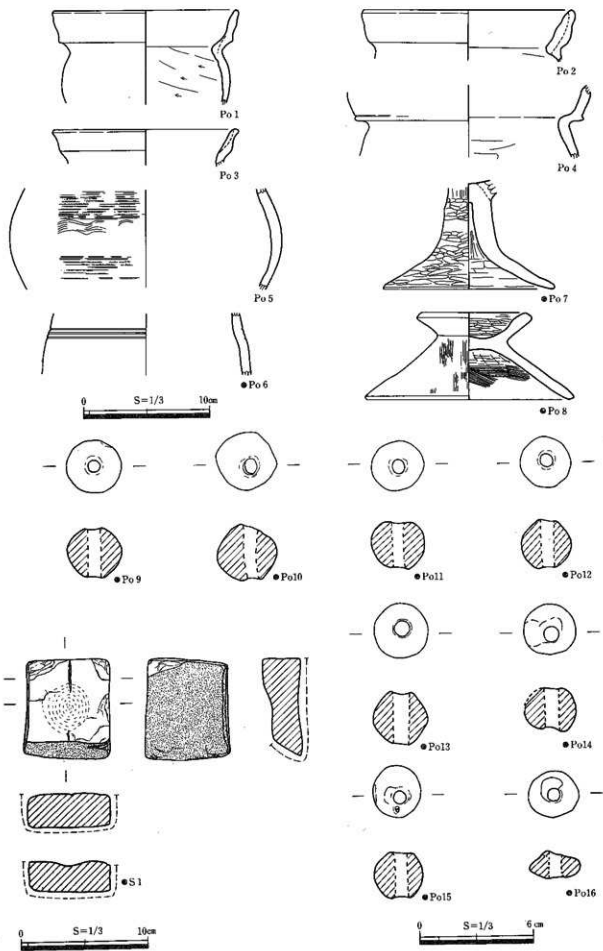


插图36 南谷大山遺跡B区S103出土遺物実測図

このうち床面からは、住居中央や北寄りでPo6が出土している。住居中央や南寄りでは、口縁部ナデのみで仕上げるPo2・Po7・Po5・S1が出土している。中央ピット付近で蓋形土器Po8が、南東コーナーで土玉Po9～Po16がそれぞれ出土している。その他は埋土中からの出土である。

時期 B S I 03の時期は、床面からの土器より弥生時代終末頃のものと思われる。

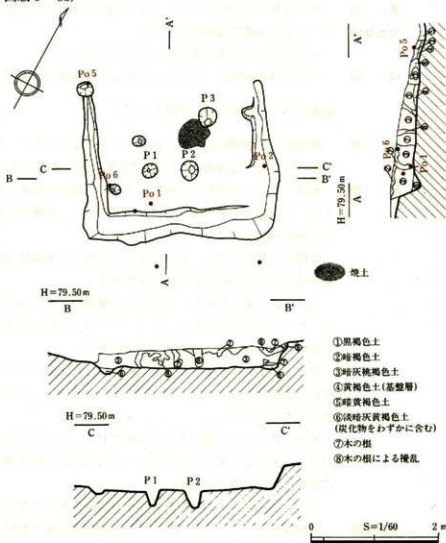
B S I 04 (挿図37・38、図版6・53)

位置 調査区の北東側D14グリッドにあり、標高78.6m～78.8mのほぼ平坦面に位置している。南西側約4mにはB S I 05、西側にはB S K 05が近接している。

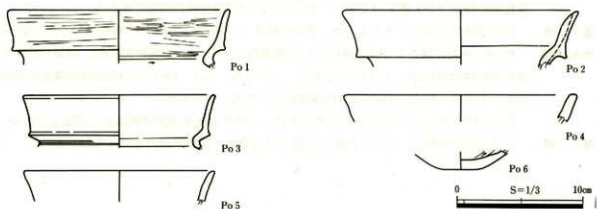
形態 周辺一帯は、黒褐色土が堆積しておりこの土を除去することでプランを確認することができた。北側が流失しているものの、平面は方形を呈すものと確認された。

規模は、東西2.48m南北2.1m以上を測り、床面積は約5.2㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い南壁で最大0.29mである。

壁溝は、北側を除いて検出され、幅10～37cm、深さ3～6cmを測り、断面U字形を呈



挿図37 南谷大山遺跡B区S104遺構図



挿図38 南谷大山遺跡B区S104出土遺物実測図

す。主柱穴は2個と思われ、それぞれの規模は、P 1 (25×22-26) cm、P 2 (31×26-28) cmを測る。主柱穴間距離は0.7mである。これらは深さがさほどなく、主柱穴の間隔も狭いことから、簡単な上屋構造であったと思われる。

その他にもビットが検出されたが、用途は不明である。中央ビットは検出されなかった。

- 埋 土** 埋土は6層に分層できた。③層中からは焼土粒、壁溝内⑥層中からは炭化物が検出され、断定はできないがBS I 03は焼失住居の可能性ある。
- 遺 物** 出土遺物には凶化できたものが、複合口縁をもつ甕Po 1～Po 3、口縁部端部Po 4・Po
- 出土状況** 5、壺または甕の底部Po 6がある。
- いずれも埋土中及び周辺からの出土である。
- 時 期** BS I 04の時期は、出土した土器より弥生時代終末のものと思われる。

BS I 05 (押図39-41、図版6・52)

- 位 置** 調査区の北東側C14・15、D14・15グリッドにあり、標高78.6m～79.0mのほぼ平坦面に位置している。北西側約1.5mにはBS I 06、東隅にはBS K06が近接している。
- 形 態** 周辺一帯は、黒褐色土が堆積しておりこの土を除去することでプランを確認することができた。このため周壁の遺存状態は非常に悪く、正確な平面形を確認することはできなかったが、隅丸方形を呈すものと考えられる。

規模は、東西5.48m、南北5m以上を測り、床面積は約27.4㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い南壁で最大0.16mである。

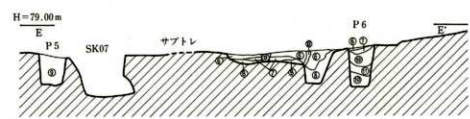
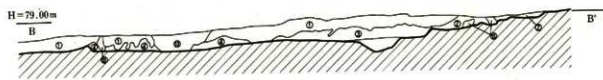
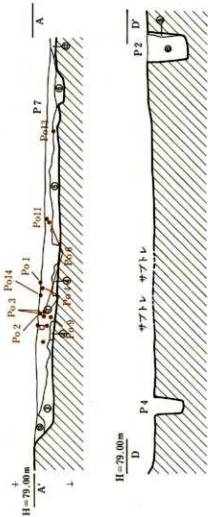
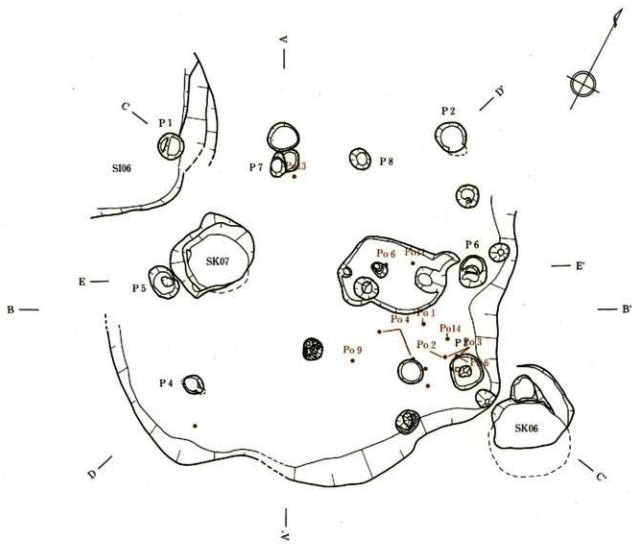
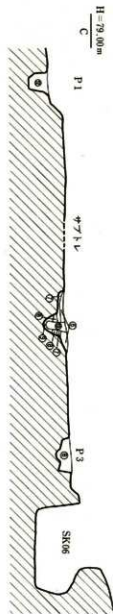
主柱穴は4個と思われ、それぞれの規模は、P 1 (41×40-31) cm、P 2 (50×48-65) cm、P 3 (55×52-24) cm、P 4 (35×31-50) cmを測る。主柱穴間距離はP 1-P 2間から順に4.6m、3.8m、4.5m、3.9mである。

P 1～P 2間、P 2～P 3間(桁)には柱穴間ラインより外側にP 5・P 6がある。それぞれの規模は、P 5 (55×40-54) cm、P 6 (53×43-68) cmを測る。これらは、棟持柱の柱穴と考えられる。

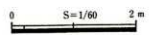
また、P 1-P 2間ラインの内側でP 7・P 8と2つ並んだビットが検出された。規模は、P 7が(32×22-56) cm、P 8が(36×31-62) cmを測る。これらは、住居の出入口の施設に関わる柱穴と考えられる。

その他にもビットが検出されたが、用途は不明である。中央ビットは検出されなかった。

- 不明土坑** 住居東壁寄り(163×110-21) cmを測る平面不整形の土坑状の落ち込みを検出した。性格は不明である。
- 埋 土** 埋土は5層に分層できた。木の根による攪乱を受けてはいるものの③層中からは焼土粒、炭化物が検出され、断定はできないがBS I 05は焼失住居の可能性ある。
- 遺 物** 出土遺物には凶化できたものが、複合口縁をもつ壺Po 1・Po 2、複合口縁をもつ甕Po 3
- 出土状況** ～Po 18、複合口縁をもつ直口壺Po 19、口縁部Po 20～Po 23、高杯杯部Po 23、端部が肥厚する鼓形器台脚台部Po 24、土玉Po 25である。このうち、Po 1・Po 4～Po 12は口縁端部が平坦面をもつもので、Po 13～Po 16は口縁端部が丸くなるものである。
- Po 24はP 2内からの出土で、そのほかは、いずれも埋土中及び周辺からの出土である。
- 時 期** BS I 05の時期は、ビット内出土土器より古墳時代前期初頭のものと思われる。



- ①黒褐色土
- ②暗褐色土
- ③暗黄茶褐色土
- ④⑤よりやや黄色が強い
- ⑥暗黄灰褐色土
- ⑦暗褐色土
- ⑧暗赤褐色土粘質土
- ⑨灰黄褐色土(DKPを含む)
- ⑩暗褐色土
- ⑪暗黄黒褐色土
- ⑫赤黄褐色土(DKPを含む)
- ⑬暗黄褐色土
- ⑭黄の根による擾乱



挿図39 南谷大山遺跡B区SI05透視図

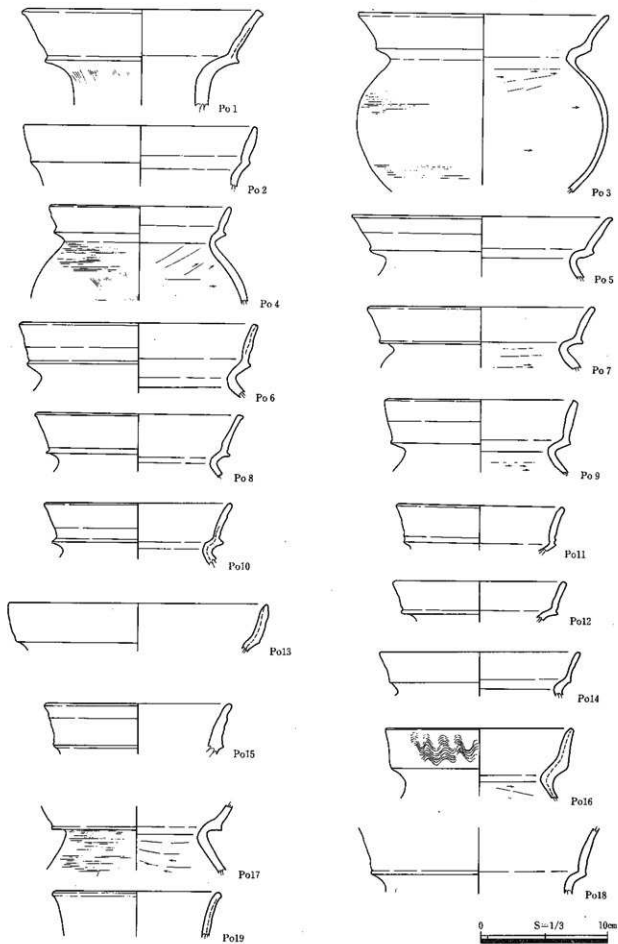
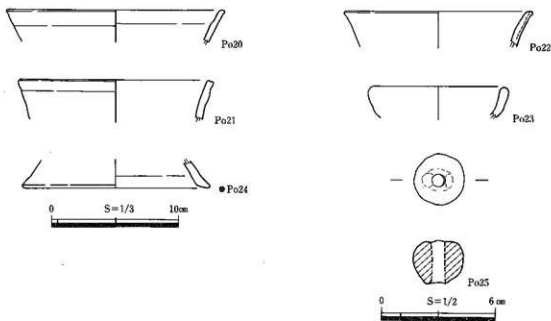


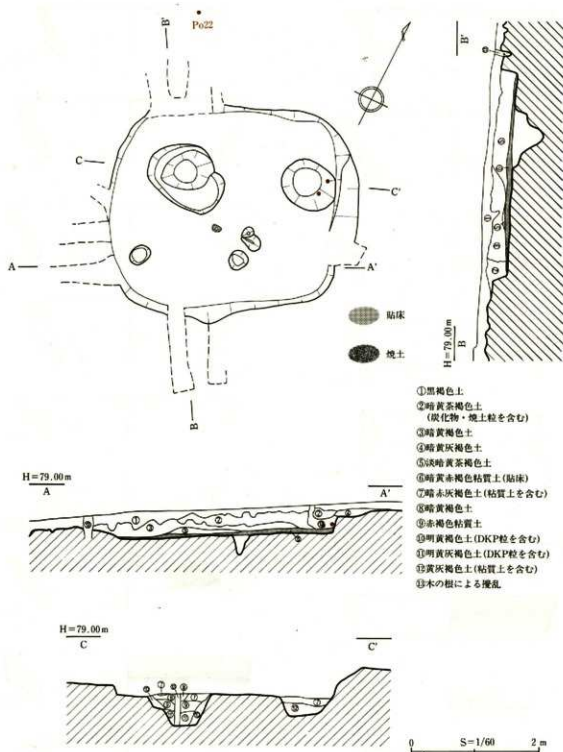
插图40 南谷大山遺跡B区S105出土遺物実測図(1)



押図41 南谷大山遺跡B区SI05出土遺物実測図(2)

BSI06 (押図42~44、図版6・52)

- 位置** 調査区の北東側C14・15グリッドにあり、標高78.3m~78.6mのほぼ平坦面に位置している。南東側約1.5mにはBSI05、南東側にはBSK07が近接している。
- 形態** 周辺一帯は黒褐色土が堆積しており、この土を除去することでプランを確認することができた。周壁の遺存状態は比較的良好、平面は隅丸長方形を呈す。
規模は、東西3.55m、南北3.05mを測り、床面積は約10.8㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い東壁で最大0.4mである。
壁溝は検出されなかった。
支柱穴は2個と思われ、それぞれの規模はP1 (105×63-67) cm、P2 (90×74-38) cmを測る。支柱穴間距離は2.0mである。
その他にもビットが検出されたが、用途は不明である。中央ビットは検出されなかった。
- 焼土面** 住居のほぼ中央で、15×10cmの楕円に広がる焼土面を検出した。
- 埋土** 埋土は6層に分層できた。木の根による擾乱等を受けてはいるものの②層中からは焼土粒、炭化物が検出され、断定はできないがBSI06は焼失住居の可能性がある。
- 遺物出土状況** 出土遺物には図化できたものが、複合口縁をもつ甕Po1~Po17、「く」字状口縁をもつ甕Po18、高杯杯部Po19、鼓形器台上上部Po20、鼓形器台脚部Po21、土玉Po22・23である。このうちPo1・Po2は口縁端部が平坦面をもつもので、また、Po3~Po10・Po13は口縁端部が丸くなるものである。
そのうち床面からは、口縁部ナデのみのPo4、厚手の口縁部をもつPo9、土玉Po23が出土している。その他はいずれも埋土中及び周辺からの出土である。
- 時期** BSI06の時期は、床面出土土器から弥生時代終末のものと思われる。



挿図42 南谷大山遺跡B区SI06遺構図

B S I 07 (挿図45・46、図版7・52)

位 置 調査区の北東側D15グリッドにあり、標高78.0m～78.3mのほぼ平坦面に位置している。南西側約3mにはB S K 09がある。

形 態 周壁を約15cmにわずかに掘り込むもので、南側が流失しているものの平面は長方形を呈すと思われる。

規模は、東西3.2m、南北1.7m以上を測り、床面積は5.4㎡以上である。

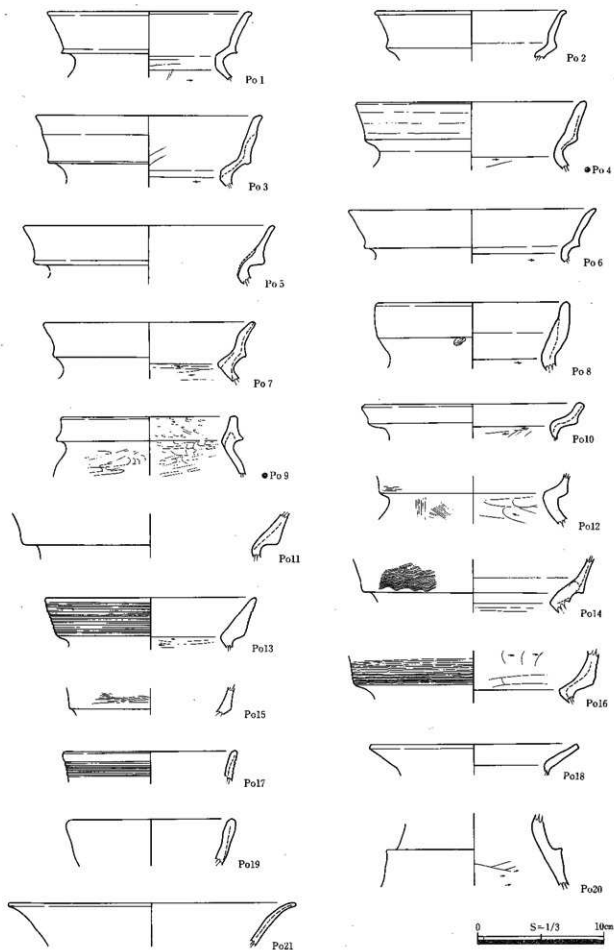


插图43 南谷大山遺跡B区S106出土遺物実測図(1)

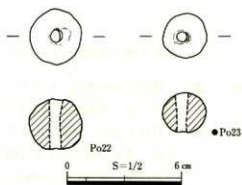
壁溝・支柱穴は検出されなかった。
掘り込みが大変浅く、柱穴もないことから、
BS I 07は平地式の住居と考えられる。

埋土 埋土は焼土粒を含む暗茶褐色土のみである。
断定はできないがBS I 07は焼失住居の可能性
がある。

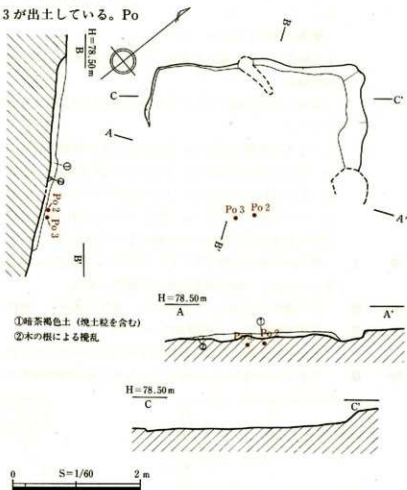
遺物 出土遺物には図化できたものが、複合口縁を
出土状況 もつ要Po1～Po3、蓋Po4である。

そのうち、埋土中から口縁部を平行線文・波
状文後ナデ消すPo2・3が出土している。Po
1・Po4は、周辺

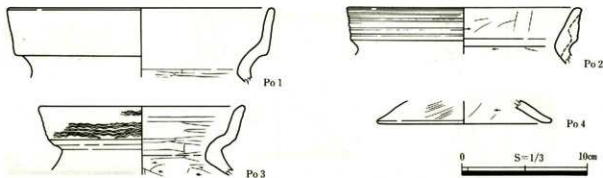
時期 BS I 07の時期
は、埋土中出土土
器から弥生時代終
末のものと思われ
る。



挿図44 南谷大山遺跡B区SI06出土遺物実測図(2)



挿図45 南谷大山遺跡B区SI07遺構図



挿図46 南谷大山遺跡B区SI07出土遺物実測図

BS108 (挿図47・48、図版7)

位置 調査区の北東側、E15グリッドにあり、標高76.3m～77.2mの南側に傾斜する斜面に位置している。西側約7mにはBSK04がある。

形態 BS108は、斜面にあることから南側が半分以上流失しており、確かな平面形は不明であるが、遺存部分からすると隅丸方形を呈すものと思われる。

規模は、東西5.6m、南北2.3m以上を測り、床面積は12.9㎡以上である。北側には不明瞭であるが幅0.25m～0.6m、高さ12cmを測るテラスがプランに沿って作られている。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.83m（上縁～テラス0.13m、テラス～床面0.5m）である。

壁溝は検出されなかった。

主柱穴は4個と思われるが、1個だけ検出することができた。規模は、P1(32×26-26)cmを測る。

床面にはその他にもピットが検出されたが、用途は不明である。中央ピットは検出されなかった。

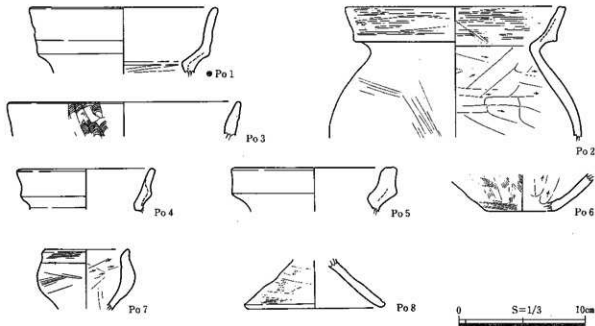
テラスの外側にはP2～P13のピットが検出された。それぞれの規模は、P2(46×45-54)cm、P3(30×28-22)cm、P4(27×27-41)cm、P5(40×36-22)cm、P6(34×32-42)cm、P7(44×42-28)cm、P8(40×37-30)cm、P9(33×32-23)cm、P10(35×28-21)cm、P11(30×22-35)cm、P12(49×44-55)cm、P13(45×42-41)cmを測る。これらは、住居の外側に立て並べた杭列跡と考えられる。

埋土 埋土は7層に分層できたが、住居内には炭化物・焼土粒を含む⑥層のみである。断定はできないがBS108は焼失住居の可能性がある。

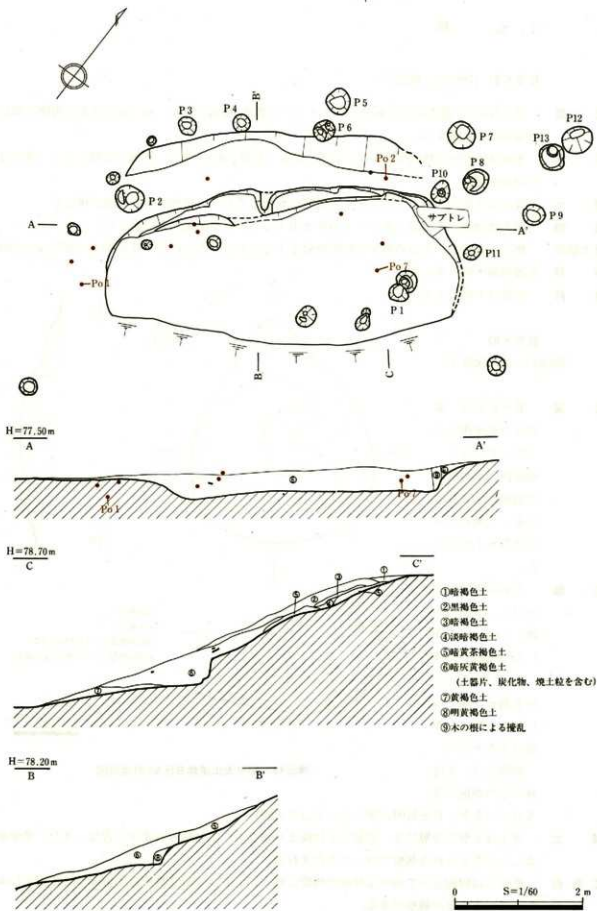
遺物 出土遺物には図化できたものが、複合口縁をもつ甕Po1～Po5、壺または甕の底部Po6、
出土状況 小型無頸壺Po7、高杯脚部Po8である。

そのうち床面からは、口縁部を平行沈線後ナテ消すPo1が出土している。

時期 BS108の時期は、床面出土土器から弥生時代終末のものと思われる。



挿図47 南谷大山遺跡B区S108出土遺物実測図



挿図48 南谷大山遺跡B区S106遺構図

2. 土 坑

BSK01 (挿図49、図版7)

- 位 置** BSK01は、調査区の北東側F13グリッドにあり、標高79.8m～80.2mのゆるく南側に傾斜する斜面に位置する。
- 形 態** 平面は不整形な楕円形を呈し、長径3.56m×短径2.8mを測る。断面は皿状になり、深さは0.38mを測る。
- 埋 土** 埋土は3層に分層できた。埋土は皿状に堆積しており、自然堆積の状況が窺える。
- 遺 物** 出土遺物は、黒褐色土中から土器片が出土しているが図化できなかった。
- 出土状況** 出土土器は小片のため確かな時期を同定することはできないが、BSK01の時期は弥生時代後期後半頃と考える。
- 性 格** 性格は不明である。

BSK02

(挿図50・51、図版8)

- 位 置** BSK02は、調査区の北東側C15グリッドにあり、標高78.3mのほぼ平坦面に位置している。北東約5mにはBSI06がある。

- 形 態** 平面はほぼ円形を呈し、上縁部長径1.35m×短径1.3m、底部長径1.3m×短径1.27mを測る。深さは1.68mを測り、断面は袋状を呈す。

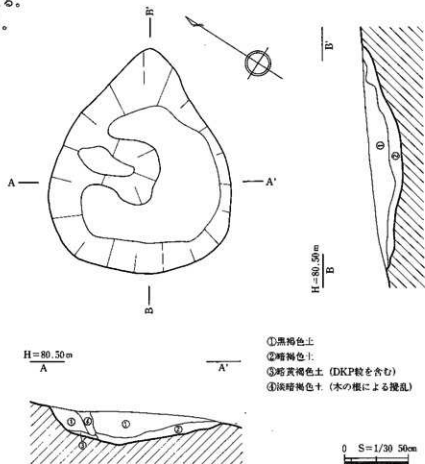
西側には、土坑状のものが掘り込

まれているが、BSK02に伴うものとは考え難い。

- 埋 土** 埋土は6層に分層でき、⑤層以下は締まりがなく、炭化物をわずかに含む。また、壁が崩落したと考えられる基盤ブロックが含まれる。

- 工 具 痕** 壁面には幅約3～7cmの工具痕が明瞭に残っている。この工具痕は上方向から下方向に向かっていていることが観察できる。

- 遺 物** ⑤層以上の埋土中から土器片が出土している。図化できたものは、頸口縁部Po1～Po4で出土状況ある。Po1・Po2はやや厚手で端部は丸く、外面ナテ仕上げである。Po3は、薄手でシャー



挿図49 南谷大山遺跡B区SK01遺構図

ブなつくりである。Po4は、立ち上がりが低く端部は丸いもので、外面は平行線文をナデ消している。

- 時期** はっきりとした時期は不明であるが、Po1・Po2は弥生時代終末の様相を残し、また、周辺の土坑も同時期のものに限られることから、BSK02は弥生時代終末に作られたものとする。
- 性格** BSK02は、形態の特徴から貯蔵穴として利用されたものと考えられる。

BSK03 (挿図52・53、図版7・69)

- 位置** BSK03は、調査区の北東側D14グリッドにあり、標高79.0mのほぼ平坦面に位置している。北約2mにはBSI04がある。

- 形態** 平面は長方形を呈し、上縁部長軸1.76m×短軸1.1m、底部長軸1.45m×短軸0.81mを測る。深さは0.81mを測り、断面は台形状を呈す。

底面北側にはわずかに溝が掘り込まれている。また、北側中央には、長軸0.36m×短軸0.25m、深さ3cmのビットがある。

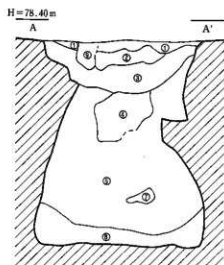
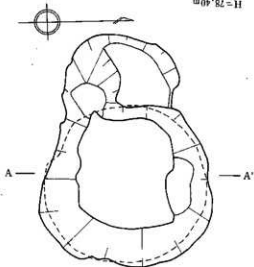
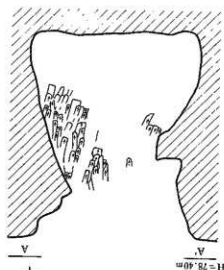
- 埋土** 埋土は6層に分層でき、③・⑤層は、炭化物をわずかに含む。

- 遺物** 埋土中及び底面から土器片が出土している。

- 出土状況** 円化できたものは、甕口縁部Po1、甕・壺胴部Po2、高杯杯部と思われるPo3である。底面南側中央部からは、やや上げ底気味の底部をもつPo2が出土している。埋土中からは、端部は丸く口縁部ナデ仕上げのPo1・高杯杯部Po3が出土している。

- 時期** BSK03は、底面出土のPo2から弥生時代終末に作られたものとする。

- 性格** BSK03は、他の貯蔵穴とは異なり平面が長方形を呈すが、上種第5遺跡⁽¹⁰⁷⁾などにも長方形の貯蔵穴があることから、貯蔵穴として利用されたものと考えられる。



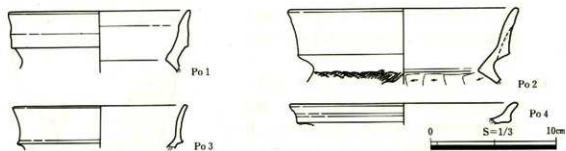
- ①堆積色土
- ②暗灰黄褐色土
- ③暗灰褐色土
- ④遺物の層を含む
- ⑤暗褐色土
- ⑥暗褐色土
- ⑦暗灰褐色土(土量が多い)
- ⑧暗灰褐色土(土量が多い)
- ⑨木の柱による陥没

- ⑩暗褐色土
- ⑪暗褐色土
- ⑫暗褐色土

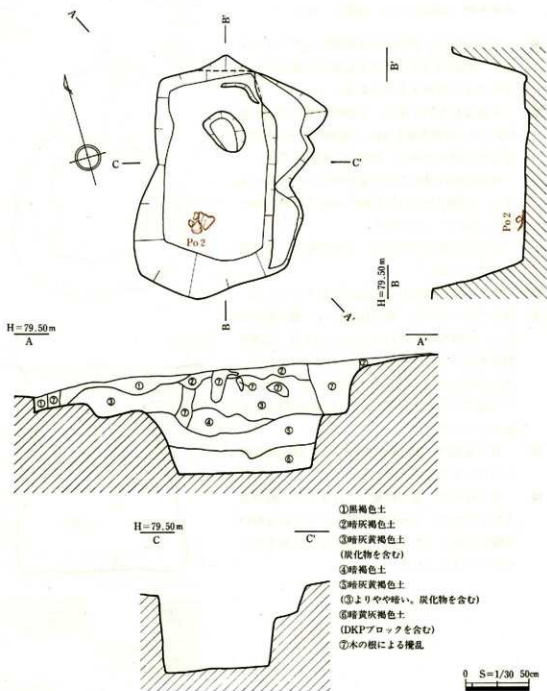
- (L) 木の柱の跡

0 1/30 50cm

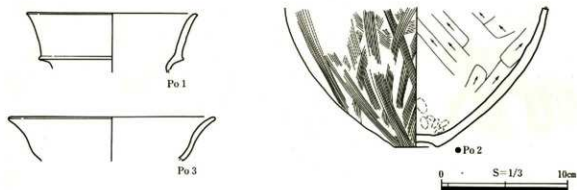
挿図50 南谷大山遺跡B区SK02遺構図



挿図51 南谷大山遺跡B区SK02出土遺物実測図



挿図52 南谷大山遺跡B区SK03遺構図

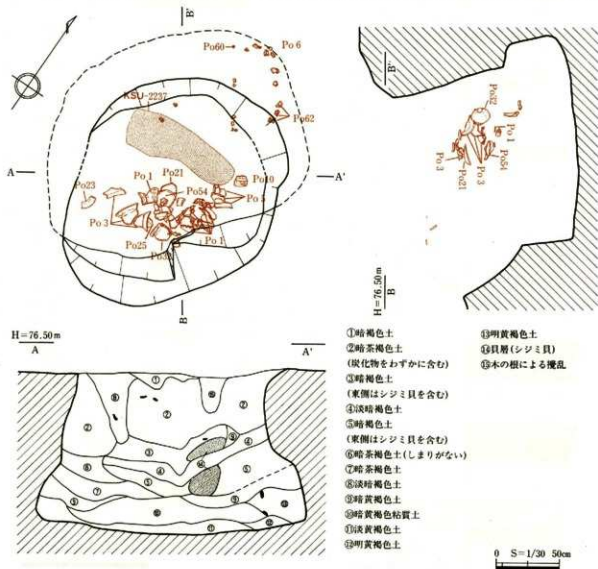


挿図53 南谷大山遺跡B区SK03出土遺物実測図

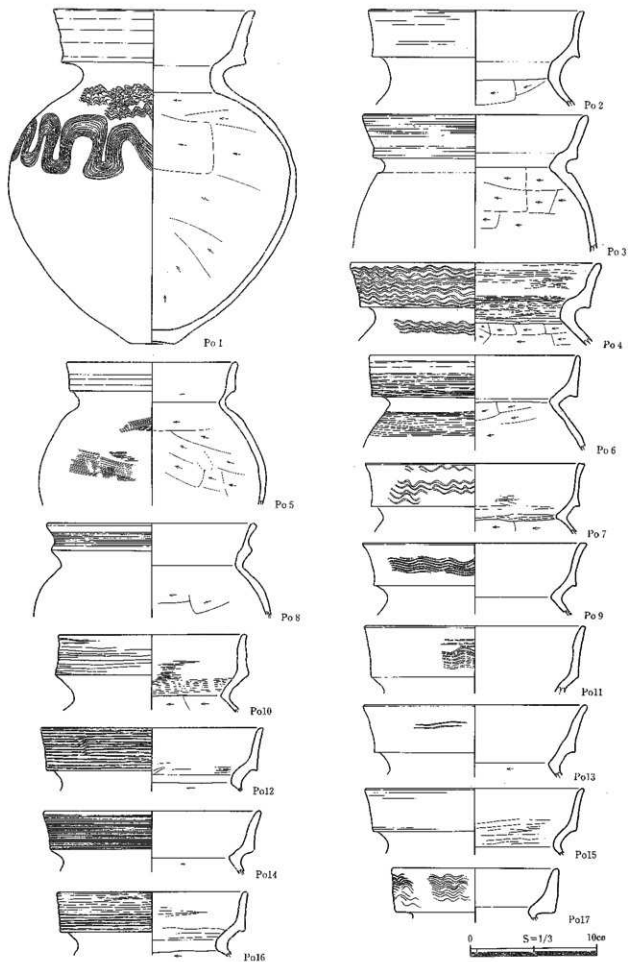
B S K 04 (挿図54~57、図版8・70)

位 置 B S K 04は、調査区の北東側D16グリッドにあり、標高76.0m~76.5mの南側に傾斜する斜面に位置している。北西約1.5m上方にはB S K 09がある。

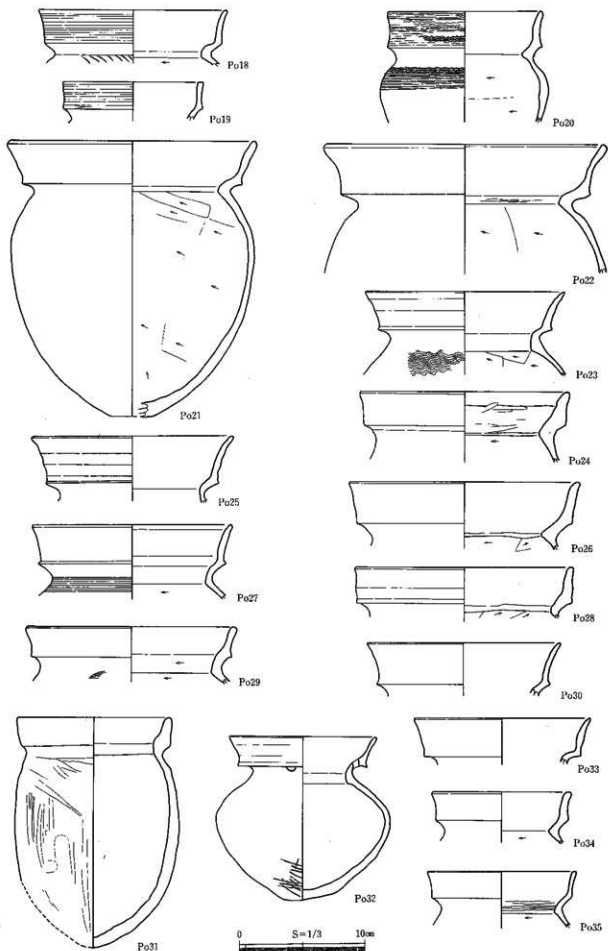
形 態 平面は斜面に位置することから不整形な楕円形を呈し、上縁部長径1.99m×短径1.6m、底



挿図54 南谷大山遺跡B区SK04遺構図



押图55 南谷大山遺跡B区SK04出土遺物実測图(1)



挿図56 南谷大山遺跡B区SK04出土遺物実測図(2)

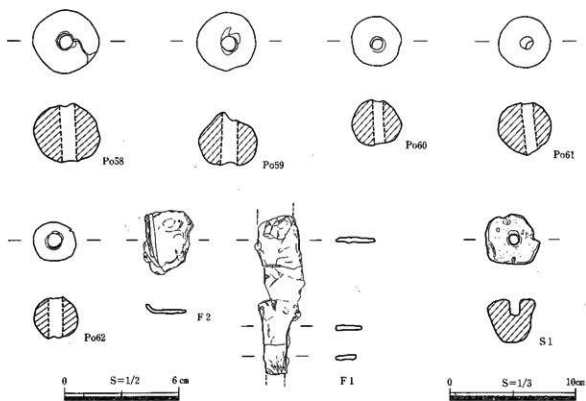
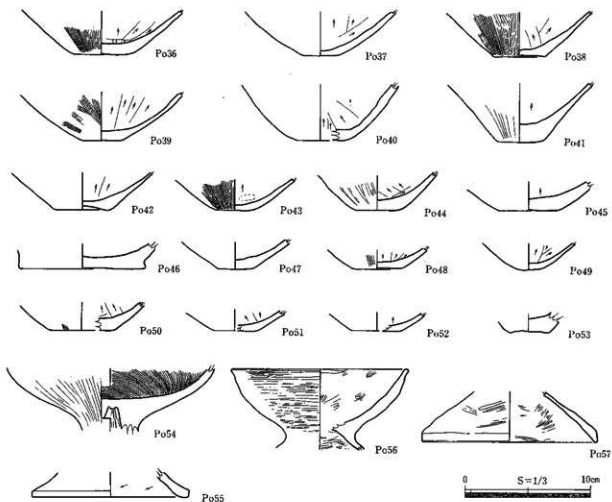


插图57 南谷大山遺跡B区SK04出土遺物実測圖(3)

部長径2.05m×短径1.6mを測る。深さは1.43mを測り、断面は斜めに掘り込む袋状を呈す。

埋土 埋土は12層に分層できた。このうち③・⑤層中には、ヤマトシジミ・マガキ・イシマキガイを含む総量約13kgの貝層が二段にわたって含まれていた。貝層は中央やや北側に分布している。

遺物 埋土中からは、多量の土器片が出土している。図化できたものは、壺Po1・Po2、甕口縁出土状況部Po3～Po35、甕・変胴部Po36～Po53、高杯杯部Po54、低脚杯Po55、脚部Po56・Po57、土玉Po58～Po62、鉄製刀子F1、不明鉄器F2、穿孔をもつ靱石S1である。壺・甕には、口縁部に施文を施した後にナデ消しをするものPo2～Po20、口縁部をナデのみで仕上げるものPo1・Po21～Po35がある。底部はいずれも不明瞭な平底を呈すものである。

これらの遺物はいずれも底面から浮いた状態で出土していることから、貝と共に投げ捨てられたものと考えられる。

時期 BSK04は、出土土器から弥生時代終末に作られたものと考えられる。

性格 BSK04は、形態上の特徴から貯蔵穴として作られたものと考えられるが、その後ゴミ捨て穴として再利用されたものと考えられる。

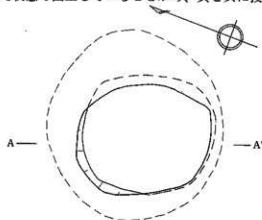
BSK05 (挿図58・59、図版9)

位置 BSK05は、調査区の北東側D14グリッドにあり、標高78.4m～78.5mの平坦面に位置している。東側約1mにはBSI04がある。

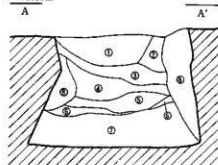
形態 平面は楕円形を呈し、上縁部長径1.06m×短径0.87m、底部はほぼ円形を呈し長径1.54m×短径1.41mを測る。深さは0.99mを測り、断面は袋状を呈す。

埋土 埋土は8層に分層できた。このうち①・③・⑤・⑦層中には、焼土粒・炭化物をわずかに含むことから、土坑上を覆う施設が燃え落ちた可能性がある。

遺物 遺物はほとんどなく、わずかに埋土出土状況中から土器片が出土している。図化で

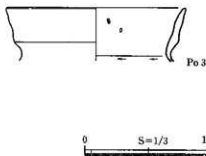
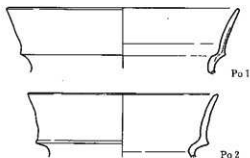


H=78.80m



- ①灰味焼灰褐色土 (炭化物をわずかに含む、土器を含む)
- ②暗黄褐色土 (炭化物をわずかに含む)
- ③暗褐色土 (炭化物、焼土粒を含む)
- ④暗黄褐色土
- ⑤暗黄褐色土 (炭化物をわずかに含む)
- ⑥暗黄褐色土
- ⑦暗黄褐色土 (炭化物をわずかに含む)

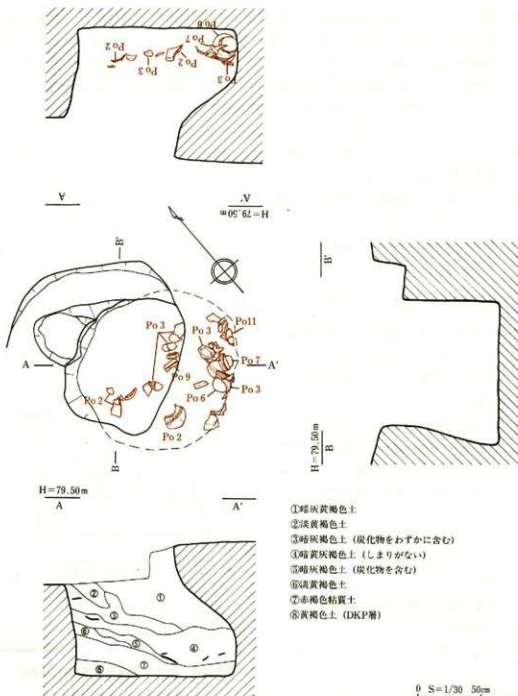
挿図50 南谷大山遺跡B区SK05遺構図



挿図59 南谷大山遺跡B区SK05出土遺物実測図

きたものは、壺口縁部Po1～Po3である。いずれも端部は薄引き出し、外面をナデのみで仕上げるものである。

- 時期** BSK05は、出土土器から弥生時代終末に作られたものとする。
性格 BSK05は、形態上の特徴から貯蔵穴として作られたものと考えられる。



挿図60 南谷大山遺跡B区SK06遺構図

BSK06 (挿図60～62、図版9・70・71)

- 位置** BSK06は、調査区の北東側D15グリッドにあり、標高78.9m～79.1mの平坦面に位置している。北西側はBS105によって削り取られている。
形態 平面は楕円形を呈し上縁部長径1.1m×短径0.83m、底部はほぼ円形を呈し長径1.31m×短径1.2mを測る。深さは1.07mを測り、断面は南側に斜めに掘り込む袋状を呈す。

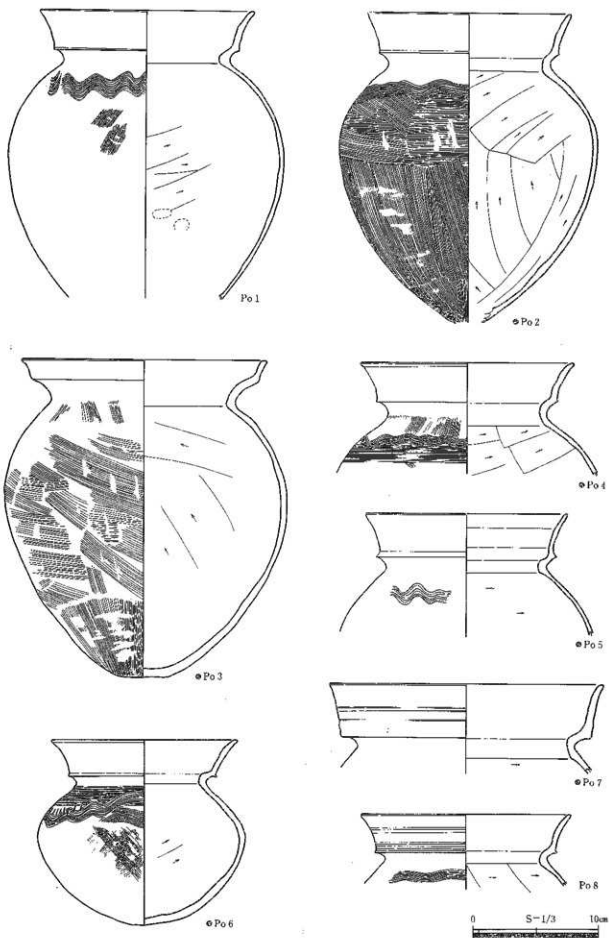
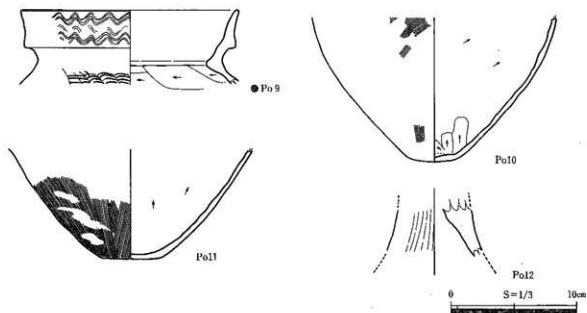


插图01 南谷大山遺跡B区SK06出土遺物実測図(1)

- 埋 土** 埋土は8層に分層できた。このうち③・⑤層中には炭化物を含むことから、土坑上を覆う施設が燃え落ちた可能性がある。
- 遺 物** 埋土中及び底面から土器片が多数出土している。凶化できたものは、甕Po1～Po9、壺・甕胴部Po10・Po11、高杯脚部Po12である。底面南壁際ではPo2～Po4・Po6・Po7・Po9・Po11がかたまって出土している。その他は底面からやや浮いた状態で出土している。甕口縁部の内Po7～Po9は口縁部に施文を施した後にナデ消すものであるが、その他はナデのみで仕上げるものである。底部はいずれも不明瞭な平底を呈す。
- なお、Po6内に、イガイの一種と考えられる二枚貝の貝殻1個分が入っていた。
- 時 期** BSK06は、出土土器から弥生時代終末に作られたものとする。
- 性 格** BSK06は、形態上の特徴から貯蔵穴として作られたものと考えられる。



挿図62 南谷大山遺跡B区SK06出土遺物実測図(2)

BSK07 (挿図63・65、図版10・71)

- 位 置** BSK07は、調査区の北東側C15グリッドにあり、BSI05の床面上の標高78.4m～78.5mの平坦面に位置している。西側約0.5mにはBSI06がある。
- 形 態** 平面は不整な隅丸長方形を呈し上縁部長軸1.59m×短軸1.06m、底部は楕円形を呈し長径1.01m×短径0.92mを測る。深さは0.73mを測り、断面は袋状を呈す。
- 埋 土** 埋土は5層に分層できた。このうち②～④層は炭化物をわずかに含む。また、最下層には

遺物出土状況 埋土中及び底面から土器片が多数出土している。図化できたものは、甕Po1～Po4、無茎石鏡S1である。このうち、底面中央ではPo1～Po3が押しつぶされたような状態で出土している。Po4・S1は埋土中からの出土である。

Po1は、端部は丸く口縁部に施文を施した後にナデ消すもので、胴部はあまり張らず肩部に波状文が施される。ややしっかりとした底部をもつ。

Po2は、端部は引き出され口縁部はナデのみで仕上げるもので、肩部が大きく張り出す。底部は不明瞭な平底を呈す。

Po3・Po4はPo2と同様にナデのみで仕上げるものである。

時期 BSK07は、Po1がやや古い様相を示しているが、同伴しているPo2～Po4から弥生時代終末に作られたものと考える。

性格 BSK07は、形態上の特徴から貯蔵穴として作られたものと考えられ、位置的にBSI05の床面上にあるがこの住居に伴うものではない。

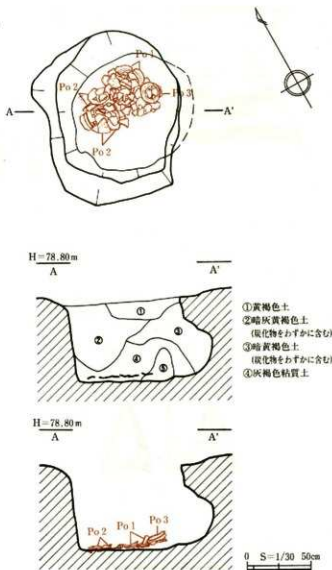
BSK08 (挿図64、図版9)

位置 BSK08は、調査区の北東側C15グリッドにあり、標高78.6m～78.7mの平坦面に位置している。北側約2mにはBSI05がある。

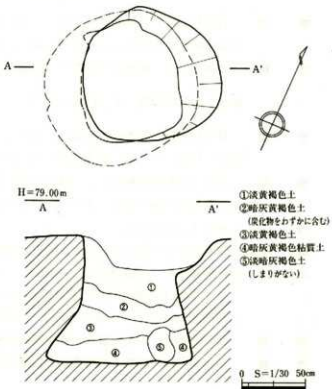
形態 平面は不整形円形を呈し上縁部長径1.1m×短軸1.08m、底部はほぼ円形を呈し径1.2mを測る。深さは0.9mを測り、断面は袋状を呈す。

埋土 埋土は5層に分層できた。このうち②層は炭化物をわずかに含む。

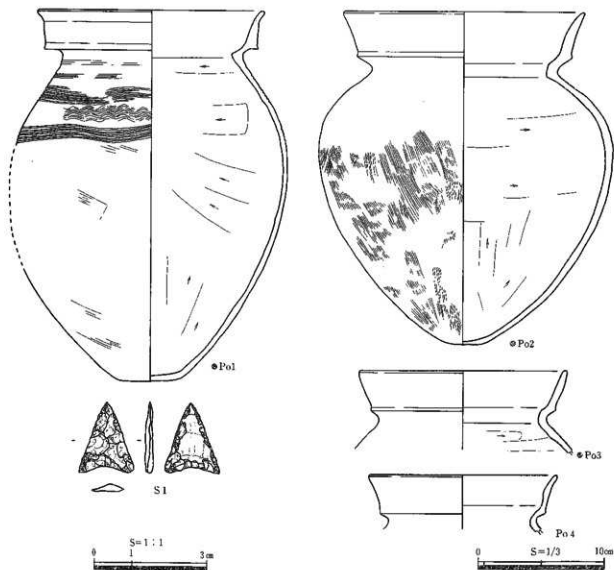
遺物 遺物はまったく検出されなかった。



挿図63 南谷大山遺跡B区SK07遺構図



挿図64 南谷大山遺跡B区SK08遺構図



挿図65 兩谷大山遺跡B区SK07出土遺物実測図

- 時期** BSK08は、遺物が見られなかったために確実な時期は不明であるが、他のすべての土坑は弥生時代終末に作られたものと考えられ、BSK08も同様な時期に作られたと考えられる。
- 性格** BSK08は、形態上の特徴から貯蔵穴として作られたものと考えられる。

BSK09 (挿図66・67、図版10・72)

- 位置** BSK09は、調査区の北東側D16グリッドにあり、標高76.6m~77.1mの南側に傾斜する斜面に位置している。南東側約1.5m下方にはBSK04がある。
- 形態** 平面は不整楕円形を呈し上縁部長径1.3m×短軸1.04m、底部も不整楕円形を呈し長径1.28m×短径0.89mを測る。深さは0.17mを測り、断面は台形状を呈す。
- 埋土** 埋土は1層である。
- 遺物** 埋土中から土器片が出土している。図化できたものは、甕口縁部Po1~Po6、底部Po7、出土状況 高杯杯部Po8、無頸壺Po9、蓋Po11である。
- このうちPo1は波状文後ナデ消すもので、Po2・Po3は平行沈線が施されるものである。Po4~Po6はナデのみである。Po7はわずかに平底を呈す。
- 時期** BSK09は、出土土器から弥生時代終末に作られたものと考えられる。
- 性格** BSK09は、形態上の特徴から貯蔵穴として作られたものと考えられる。

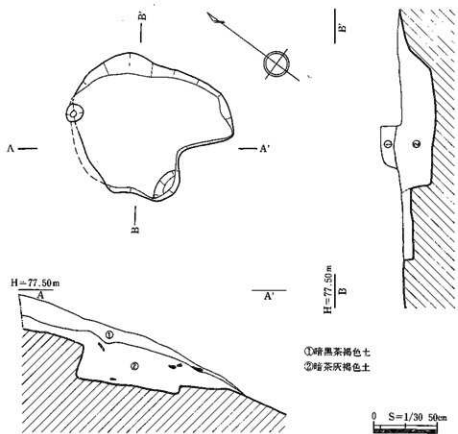


插图66 南谷大山道跡B区SK09遺構図

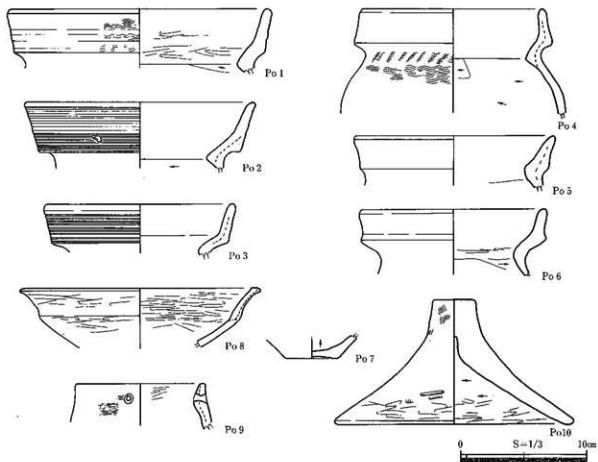
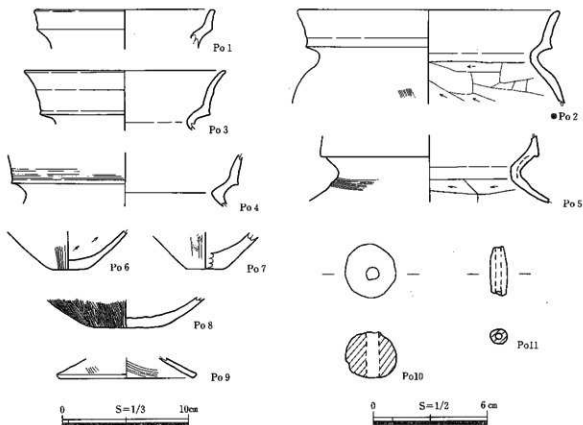


插图67 南谷大山道跡B区SK09出土遺物実測図

3. 溝状遺構

BSD01 (挿図68・69、図版11)

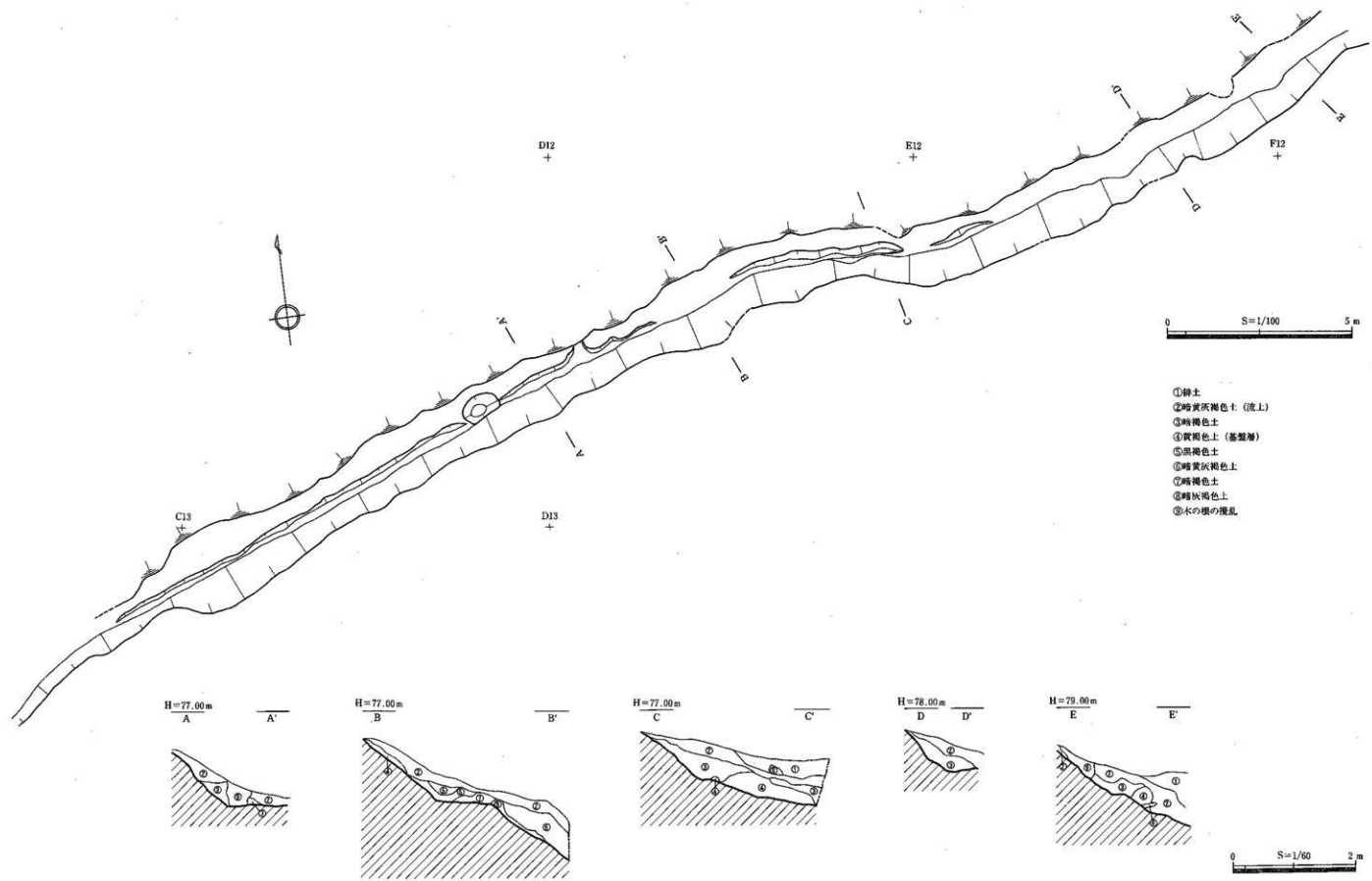
- 位置** BSD01は、調査区の北東側B14・C13・14・D13・E13グリッドにあり、標高74.8m～75.6mの北側に傾斜する斜面の中腹に、丘陵に沿って作られている。
- 形態** 東端・西端は流失しており全形を留めてはいないが、長さ約41m、幅約1m～2mを測り、斜面を0.24～0.98m削り取り、底面は一部「U」字状を呈すところがあるが、ほぼ平坦面になる。西側では丘陵斜面際に幅25cm～30cm、深さ4cm程度の浅い溝が掘り込まれている。
- 埋土** 埋土は8層に分層できるが、いずれも自然堆積の状況が窺われる。
- 遺物** 図化できたものには、甕口縁部Po1～Po5、底部Po6～Po8、高杯脚部Po9、土玉Po10・出土状況 Po11がある。
- このうち、底面から口縁部をナデのみで仕上げるPo2が出土している。その他はいずれも埋土中からの出土である。
- 時期** 底面出土の土器から、BSD01の時期は弥生時代終末頃と考えられる。
- 性格** 底面が一部「U」字状になるが、ほぼ平坦面をなすことから、単なる溝状遺構ではなく、道路として機能したとも考えられる。



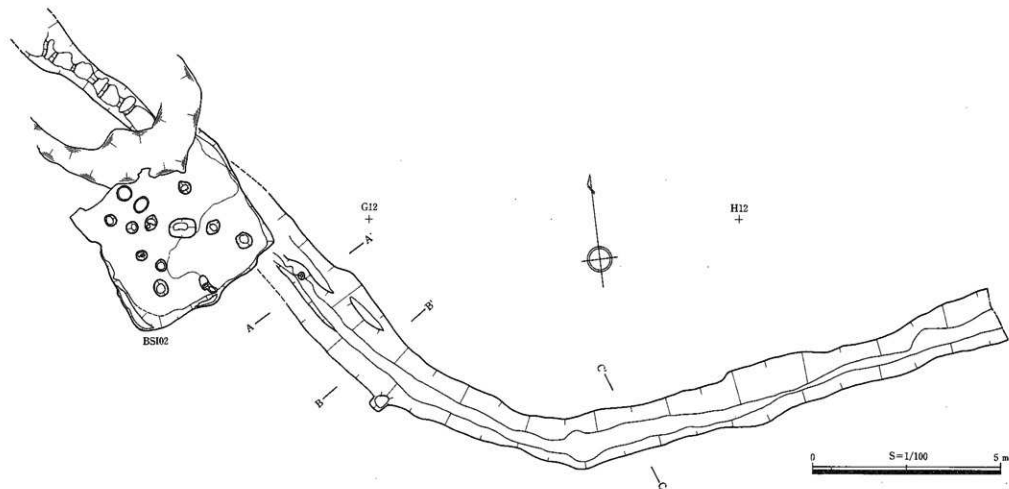
挿図68 南谷大山遺跡B区SD01出土遺物実測図

BSD02 (挿図70、図版11)

- 位置** BSD02は、調査区の東側F12・13・G13・H13グリッドにあり、標高77.6m～81.1mの西側に傾斜する斜面から平坦面に変換する場所に作られている。北側はBSI02の埋土を切



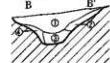
挿図09 南谷大山遺跡B区SD01遺構図



H=81.00m
A



H=81.00m
B



H=81.00m
C



- ①淡褐色土
- ②赤褐色土
- ③暗褐色土
- ④暗黄赤褐色土
- ⑤黒褐色土
- ⑥暗赤褐色土
- ⑦暗赤褐色土質土 (基盤アロックを含む、蒸盤層)
- ⑧木の根による種孔

0 S=1/60 2 m

挿図70 南谷大山遺跡B区SD02透視図

- り込んでいる。
- 形態** 北側・東側は調査区外へ延びており全形を知ることはできないが、東側は丘陵に沿って折れ曲がり、北側は丘陵を直交するように下っている。現状では長さ30m以上、幅約0.8m～1.8m、深さ8～68cmを測る。断面は「U」字状を呈す。北側は階段状に掘り込まれている状況が見られた。
- 埋土** 埋土は7層に分層できるが、いずれも自然堆積の状況が窺われる。
- 時期** 遺物はまったく検出することができなかったために、時期は不明であるが、BSI02を切り込んで作られていることから、弥生時代終末以降に作られたものと考えられる。
- 性格** 北側が階段状に掘り込まれていることから、BSD02は、道路として使用されたものと考えられる。

4. ビット群

Bビット群01 (挿図71・72、図版11)

位置 Bビット群1は、調査区の東側D15・E15グリッドにあり、標高78.6m～79.1mの緩く南側に傾斜する斜面に位置している。南側約2mにはBSI07がある。

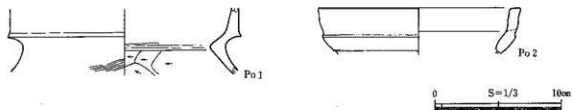
形態 周辺は木の根による攪乱が著しかったが、P1～P21の総数21個のビットを検出することができた。

それぞれの規模は、P1 (162×125-65) cm、P2 (55×40-38) cm、P3 (40×30-20) cm、P4 (97×64-51) cm、P5 (164×112-62) cm、P6 (56×48-29) cm、P7 (96×75-36) cm、P8 (55×51-32) cm、P9 (40×33-22) cm、P10 (75×35-21) cm、P11 (40×33-25) cm、P12 (55×35-47) cm、P13 (70×52-17) cm、P14 (25×20-10) cm、P15 (48×45-23) cm、P16 (68×46-26) cm、P17 (38×35-18) cm、P18 (30×27-18) cm、P19 (35×25-30) cm、P20 (74×50-24) cm、P21 (35×35-17) cmを測る。

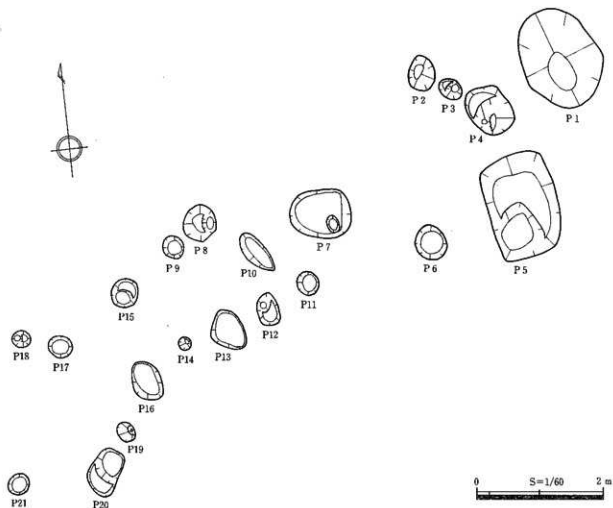
いずれも不規則に並んでおり、規模もそろっていないため独立柱建物跡等の柱穴とは考え難い。

遺物 P7付近で壺口縁部Po1、P12付近で壺口縁部Po2が出土している。

出土状況 いずれも時期を特定するものではなく、Bビット群01の時期及び性格は不明である。



挿図71 南谷大山遺跡B区ビット群01出土遺物実測図



挿図72 南谷大山遺跡B区ピット群01遺構図

5. 遺構外遺物について (挿図73~78、図版76)

遺構外から多量の遺物が出土している。

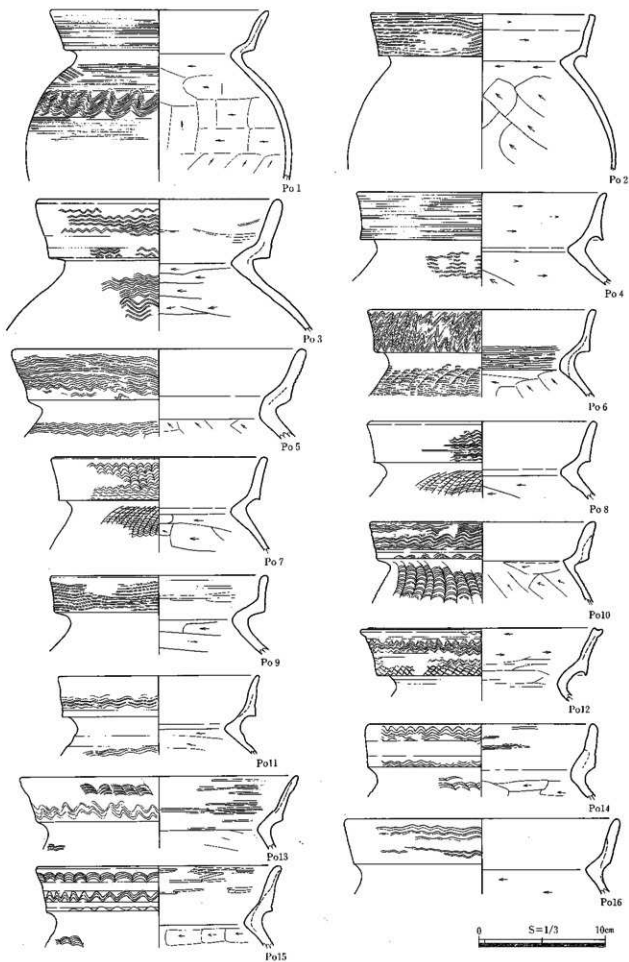
北東側斜面からは、複合口縁をもつ甕Po1~Po70、小型鉢Po71、平底を呈す胴部~底部Po72~Po85、須恵器杯Po86、鼓形器台Po87~Po91、蓋Po92~Po94、脚部Po96・Po97、把手付鉢Po99、細粒花崗岩製扁平蛤歯石斧S1が出土している。

南東側斜面からは、複合口縁をもつ甕Po100~Po105、壺Po106が出土している。

平坦面からは、複合口縁をもつ甕Po107~Po112、不明瞭な平底をもつ底部Po113、脚付壺又は甕Po114、低脚杯Po115・Po116、高杯脚部Po117・Po118、土玉Po119、アブライト質石斧S2がある。

甕は、口縁部施文を施すもの、口縁部施文の後一部ナデ消すもの、ナデ仕上げのものがあ
る。底部は、不明瞭ではあるが平底を呈すものである。

これらは、ほとんどのものが弥生時代後期後半~終末にかけてのもので、この地区での遺
構内出土の土器より若干古い様相をもつものがある。



挿図73 南谷大山遺跡B区遺構外出土物実測図(1)

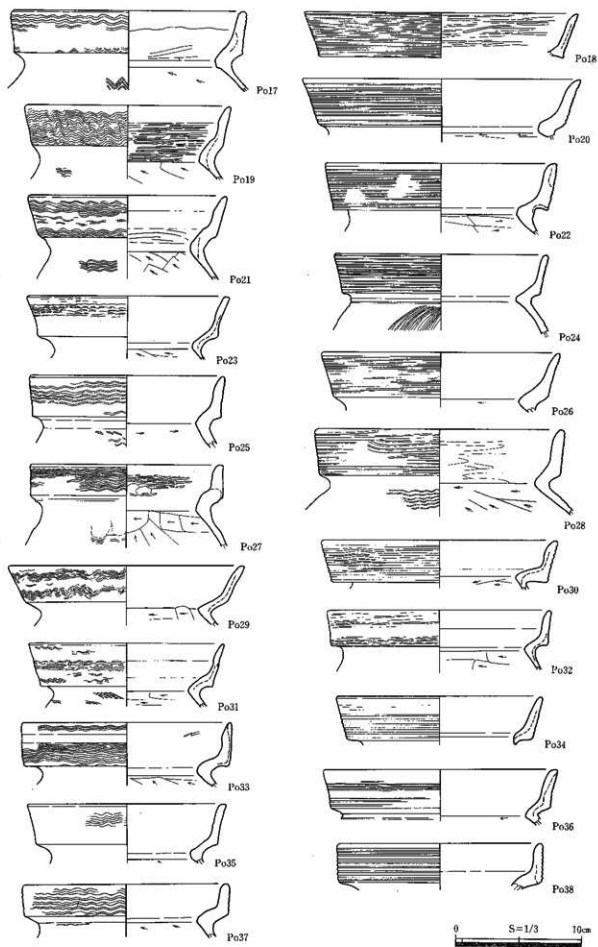
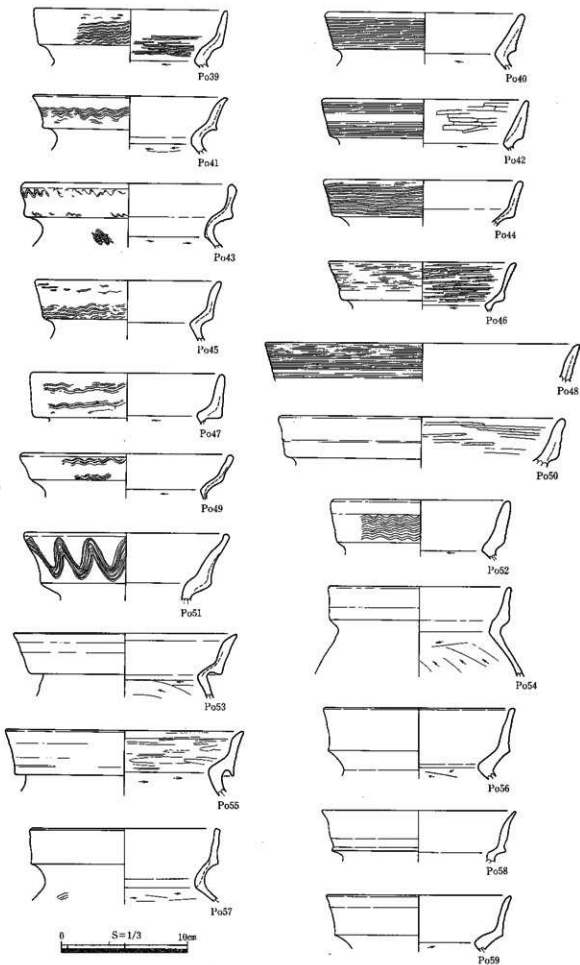


插图74 南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(2)



挿図75 南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(3)

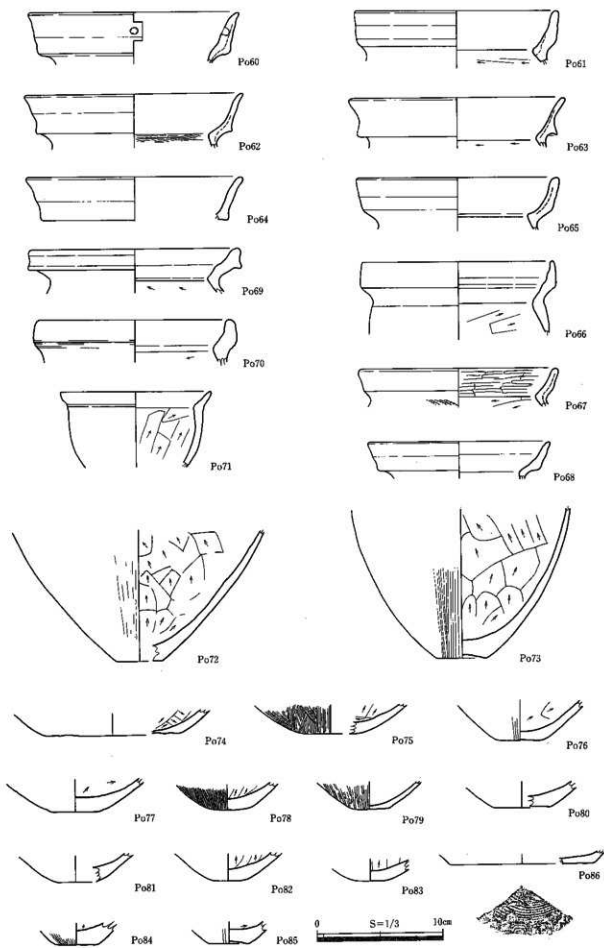


插图76 南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(4)

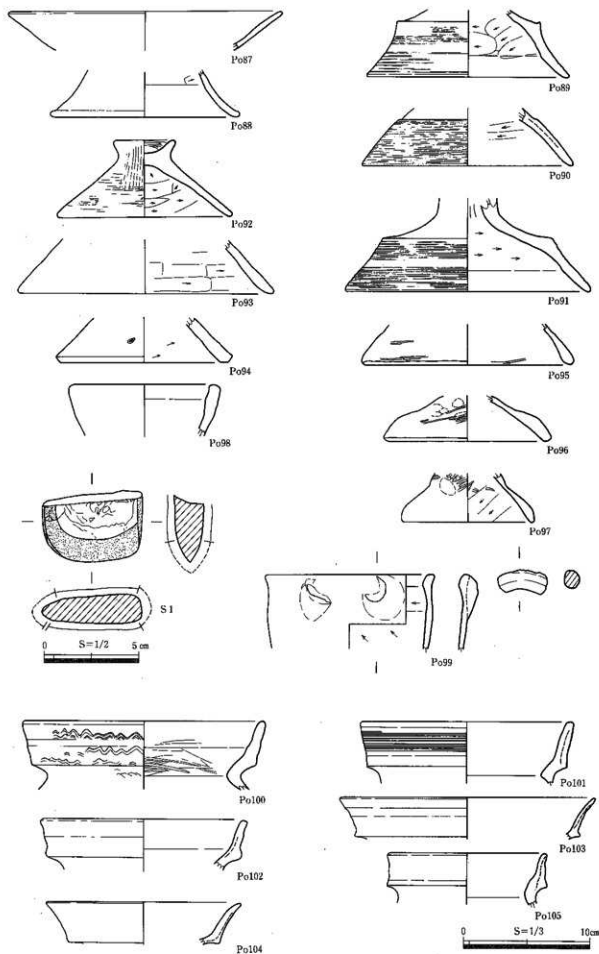
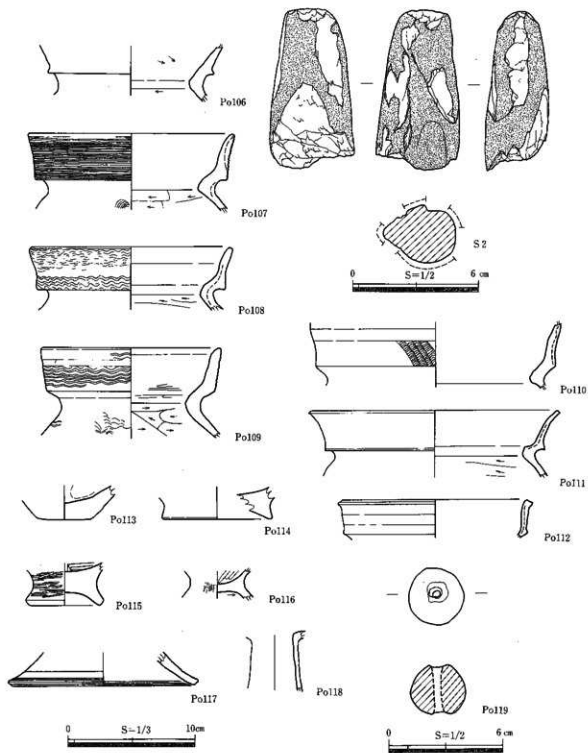


插图77 南谷大山遗址B区遗物外出土文物实测图(5)



挿図78 南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(6)

第4章 南谷大山遺跡の調査(1992年度調査)

第1節 南谷大山遺跡B区の概要

- 位 置** 1991年度に引き続き、南西側に延び出すB区の先端部を調査した。1992年度の調査区は、標高57.5m～78.2mの、緩やかに鉤状に曲がる丘陵上に位置する。遺構が密集する平坦面は2つあり、上方のものと下方のものとの比高差は約10mである。
- 遺 構** 1992年度に検出した遺構は、竪穴住居跡37棟、掘立柱建物跡3棟、貯蔵穴と考えられる土坑12基、不明土坑4基、段状遺構5基、溝状遺構4条、ピット群である。
- このうち、竪穴住居跡は重複しているものがあり、実数としては37棟以上である。
- 竪穴住居跡** 竪穴住居跡は、弥生時代後期後半のもの5棟(BS I 23・27・33・36・37)、弥生時代終末のもの8棟(BS I 17・21・25・26・31・34・35・42)、古墳時代前期前半のもの9棟(BS I 12・14・15・18・20・30・5・32・38・40)、古墳時代中期後半のもの17棟(BS I 09・10・11・13・16・19・22・24・28・29・30-1～4・39・41・43・44・45)である。
- 平面形は時期ごとで異なる様相があり、弥生時代後期後半のものには隅丸方形のもの3棟、方形のもの2棟、弥生時代終末のものには隅丸方形のもの1棟、方形のもの3棟、多角形のもの2棟、不明のもの1棟ある。
- 古墳時代になると、前期では隅丸方形のもの1棟、方形のもの7棟、不明のもの1棟である。古墳時代中期では17棟中13棟が方形に変化している。
- また、特徴的なものとしては、BS I 20から大量の炭化物が良好な状態で出土しており、当時の住居構造を知る上で大変貴重な資料を提供することができた。また、この住居では、甕が倒立したままの状態出土している。
- BS I 32では、北西隅にベッド状遺構が付設されている。
- 古墳時代中期には同じ位置で重複しているものがあり、BS I 10の2回、BS I 11の7回、BS I 13の4回、BS I 28の3回、BS I 29の3回、BS I 30の4回が確認されている。
- 古墳時代中期のものには、壁際に寄るいわゆる特殊ピットをもつものがあり、ピット内から高杯が出土しているものがBS I 09、BS I 10-1、BS I 30-3で、BS I 11-6内では甕が潰れた状態で出土している。また、BS I 13-3では多量の礫が入っていた。
- 掘立柱建物跡** 掘立柱建物跡は、わずかに3棟確認できた。BS B01は2間・1間、BS B02は2間・2間、BS B03は2間・1間の形態で近接棟持柱をもつ。そのうちBS B03からは古墳時代前期前半の土器が出土している。
- 土 坑** 貯蔵穴と考えられる土坑(BSK10・13・14・15・16・17・18・19・21・22・24・25)は、すべて弥生時代後期後半～終末にかけてのものである。
- 形態としては、平面円形を呈し断面袋状になるもの11基、平面長楕円形を呈し断面袋状になるもの1基がある。
- また、屋内貯蔵穴も確認されており、BS I 14内のSK01がある。
- 溝状遺構** 溝状遺構は、BSD03～BSD06の4条検出された。
- このうちBSD03は、斜面の途中に作られたもので、古墳時代中期のものと考えられる。規模は小さいため防衛的な施設とは考えられず、集落を区画するためのものと推察され、部分的に杭列が巡るものと考えられる。
- ピット群** Bピット群02は、調査区上方の平坦面にあり、78個のピットからなる。いずれも不規則な配置ではあるが、北側のものにはかなり規模の大きなピットが並んだ状況が窺われた。

第2節 南谷大山遺跡B区の調査結果 (1992年度)

1. 竪穴住居跡

BS 109 (挿図79～87、図版13・14・52～55)

位置 調査区のはば中央 a 20・21、b 20・21グリッドにあり、標高79.0m～79.4mのはば平坦面に位置している。北東側にあるBS I 23を切っている。

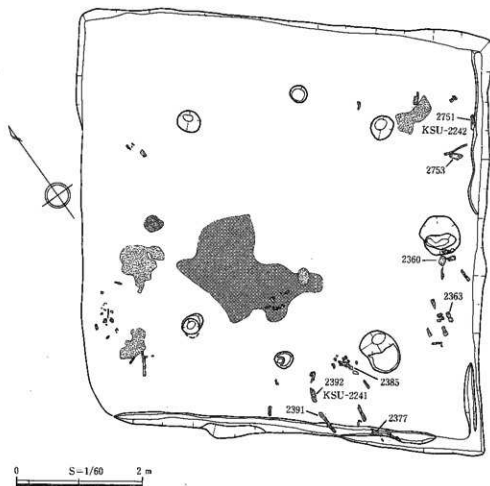
形態 基底部は比較的良好に遺存しており、平面はいびつな方形を呈す。

規模は、東西6.32m、南北6.38mを測り、床面積は約40.3㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い東壁で最大0.72mである。

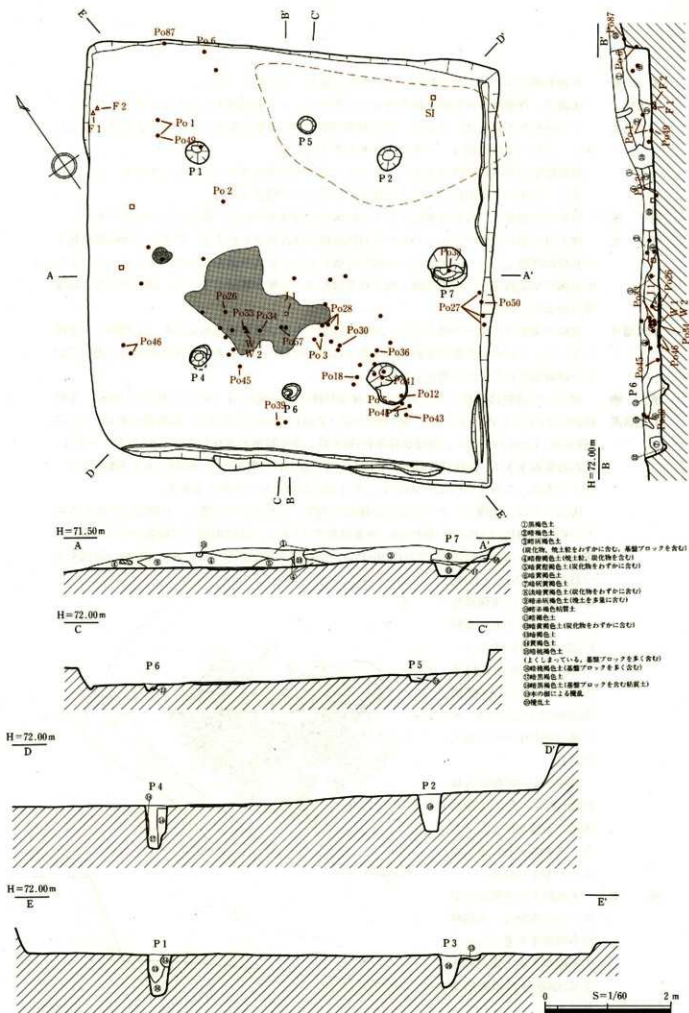
壁溝は西、南壁際に遺存し、幅は8～16cm、深さ3～5cmを測り、断面逆台形状を呈す。

主柱穴はP 1～P 4の4個で、それぞれの規模はP 1 (38×34～69) cm、P 2 (40×35～61) cm、P 3 (70×50～55) cm、P 4 (38×26～70) cm を測る。主柱穴間距離はP 1～P 2から順に2.8m、2.4m、2.8m、2.4mである。P 1～P 2間、P 3～P 4間にはライン上より外に、棟持柱の柱穴と思われるP 5・P 6がある。それぞれの規模は、P 5 (28×28～12) cm、P 6 (30×27～11) cmを測る。

特殊ビット 南側壁際にあるP 7はいわゆる特殊ビットと呼ばれるもので、(62×57～29) cmを測る。埋土中から高杯Po38が出土している。埋土は暗褐色土が単層ではいる。



挿図79 南谷大山遺跡B区BS109炭化物出土状況図



挿図80 南谷大山遺跡B区S106遺構図

焼土面 床面北側で30×24cmに不整形に広がる焼土面が一方所検出された。

炭化物・ 床面で、各壁際で炭化物が検出されたことから、S I 09は焼失したものと考えられる。

焼土 いずれも丸木状を呈しており、特に南側の炭化物は周壁に被さるように出土していることから、これらの炭化物は、いずれも垂木と考えられる。

樹種鑑定の結果、樹種はスギ・スタジイ・ケヤキが使用されていることがわかった。

また、住居の北西側には、焼土が盛り上がるように検出された。

貼床 中央やや南側で、暗灰褐色土による貼床が一部検出された。厚さは2cm程度である。

埋土 埋土は11層に分層できる。おおむね自然堆積の状況が窺われるが、壁寄りでは暗黄褐色土の⑥層が堆積しており、周境など住居外に盛られた土が入り込んだものと考えられる。また、中央部やや北西寄りでは炭化物・焼土粒を含む④・⑤層が堆積している。埋土中には、砂礫等は含まれていない。

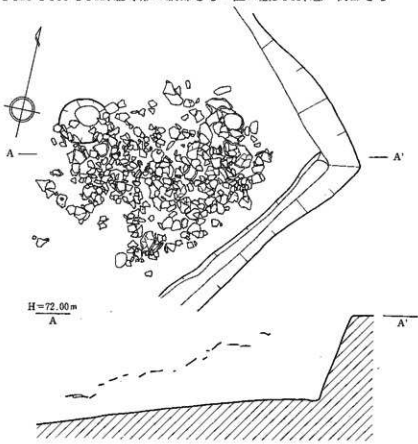
土器溜り 住居の東側コーナーの埋土上に、73個体以上の土器が住居中央部に向かって傾斜して堆積していた。これらの土器は床面上の土器とは同時期のものであり、住居が火災に遭ってから一括廃棄されたものと考えられる。

遺物 出土した遺物は図化できたものが、複合口縁をもつ甕Po 1～Po 25・Po 52～Po 86、高杯Po 26～Po 41・Po 87～Po 121、直口壺Po 43・Po 44・Po 121・Po 122、鼓形器台Po 45～Po 47、椀Po 48・Po 49・Po 123、須恵器杯蓋Po 50・51、須恵器無蓋高杯Po 124、鉄線F 1～F 4、蛇紋岩製勾玉J 1、流紋岩質凝灰岩製砥石S 1、安山岩製磨石S 2、陰刻のある木製品W 1・W 2である。このうちPo 52～Po 124、F 4は土器溜りからの出土である。

床面からは、北側コーナー付近で口縁部が肉厚で立ち上がりが高く、口縁部下端が丸みをもつ程度の甕Po 1・Po 2、椀Po 49、無茎鉄線F 1・F 2、住居南側で口縁部が厚手のPo 3、椀状杯部をもつ高杯Po 26・Po 28・Po 36・Po 41、扁球形の胴部をもつ直口壺Po 43、短い筒部をもつ鼓形器台Po 45・Po 46、扁平な勾玉J 1、東側壁際で椀状の杯部をもつ高杯Po 27、天井部が低くシャープな作りの須恵器杯蓋Po 50、P7内で高杯脚部Po 38が出土している。その他は埋土中からの出土である。

BSI09は、床面から炭化物・焼土と共に比較的少量の土器が出土しており、不慮の火災に遭ったものと考えられる。

時期 床面出土の土器からBSI 09の時期は、古墳時代中期後半と考えられ、山本編年I期・陶邑編年TK 208並行の須恵器が伴件する。



挿図01 南谷大山遺跡B区SI09土器溜り検出状況図

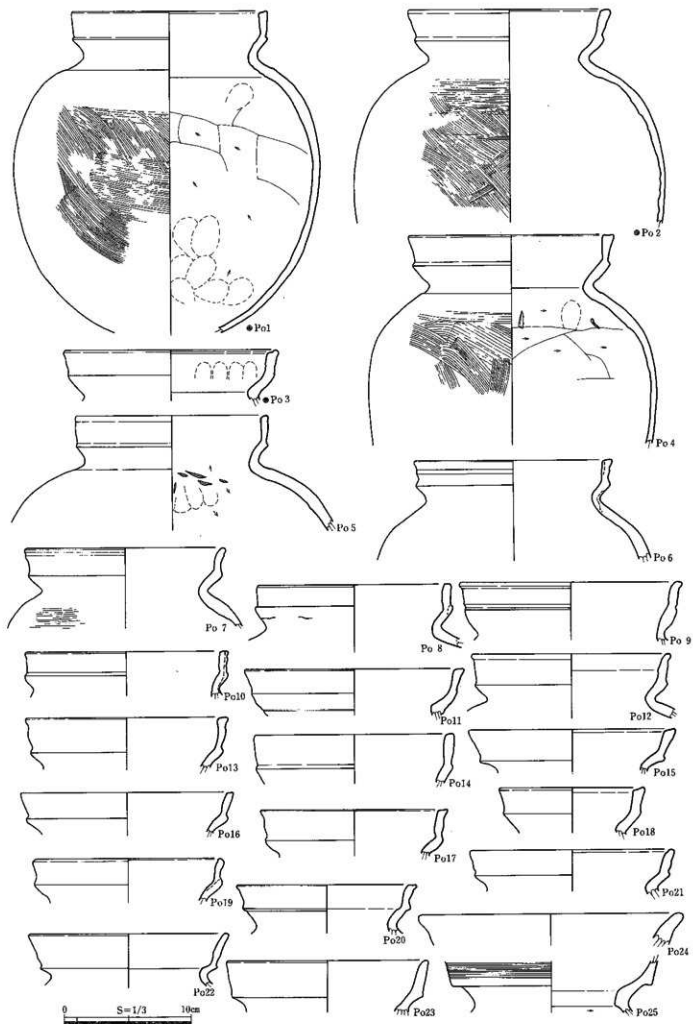


插图22 南谷大山遺跡B区S109出土遺物実測図(1)

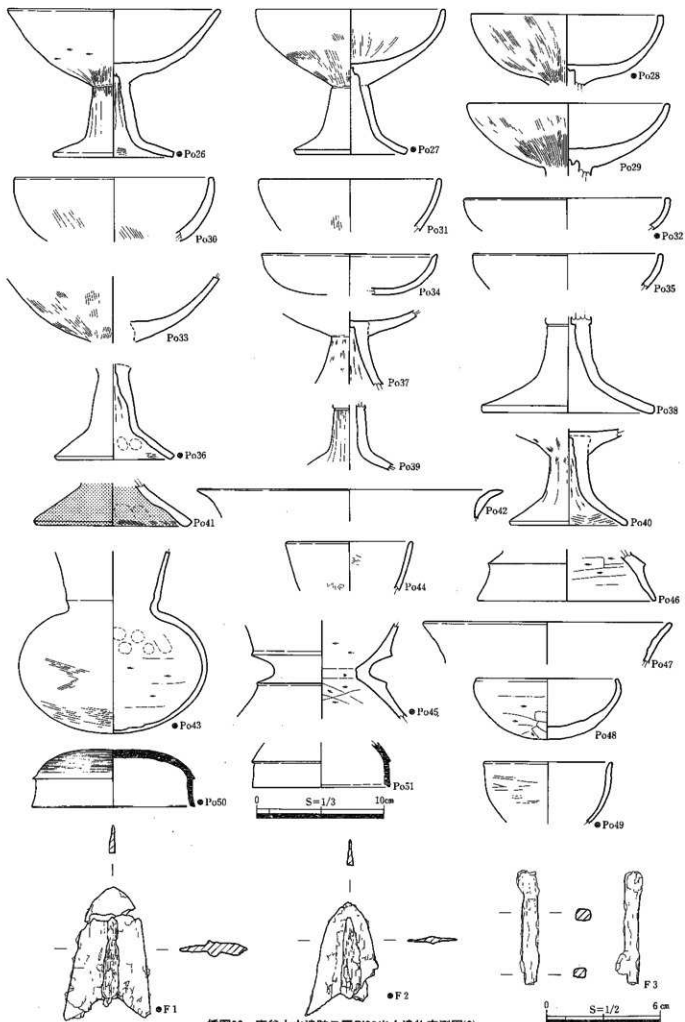


插图83 南谷大山遗址B区SI09出土文物实测图(2)

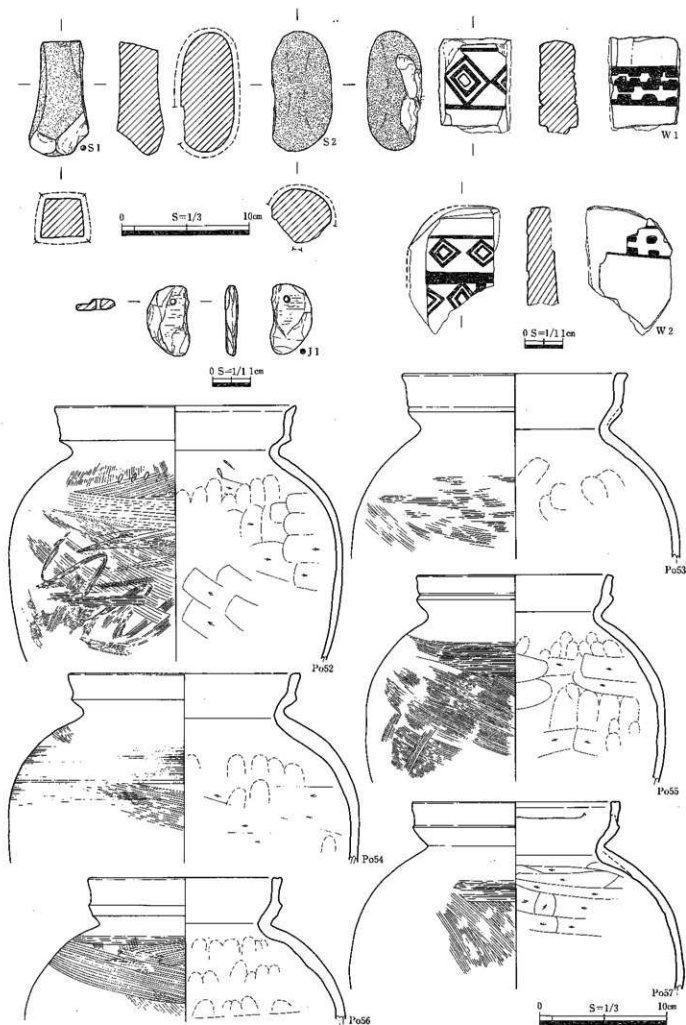
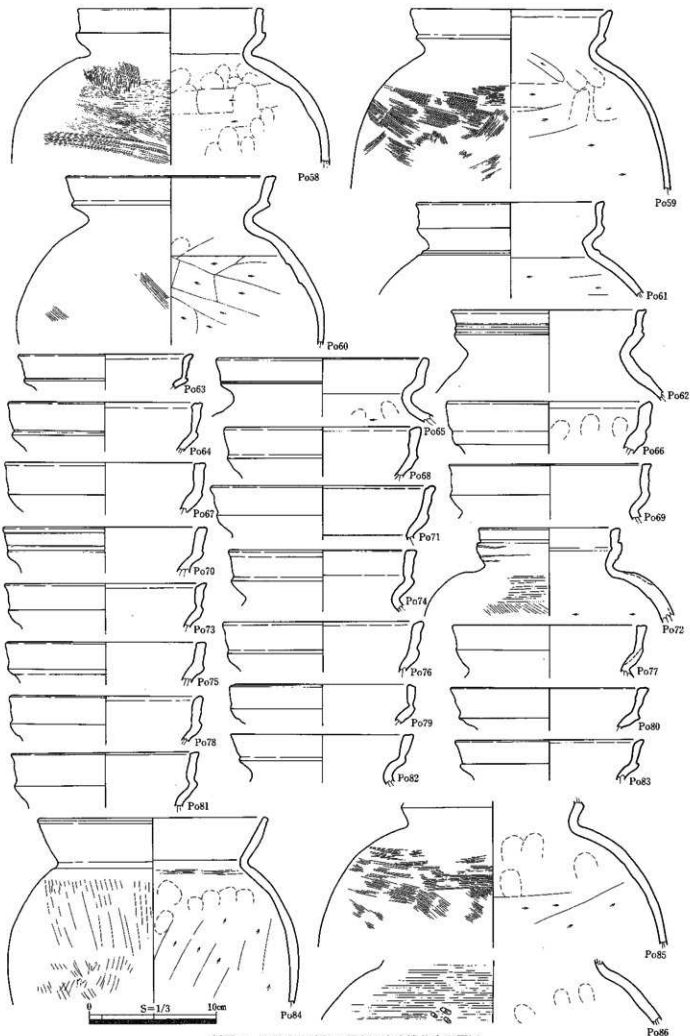


插图84 南谷大山遺跡B区S109出土遺物実測図(3)



挿図85 南谷大山遺跡B区S109出土遺物実測図(4)

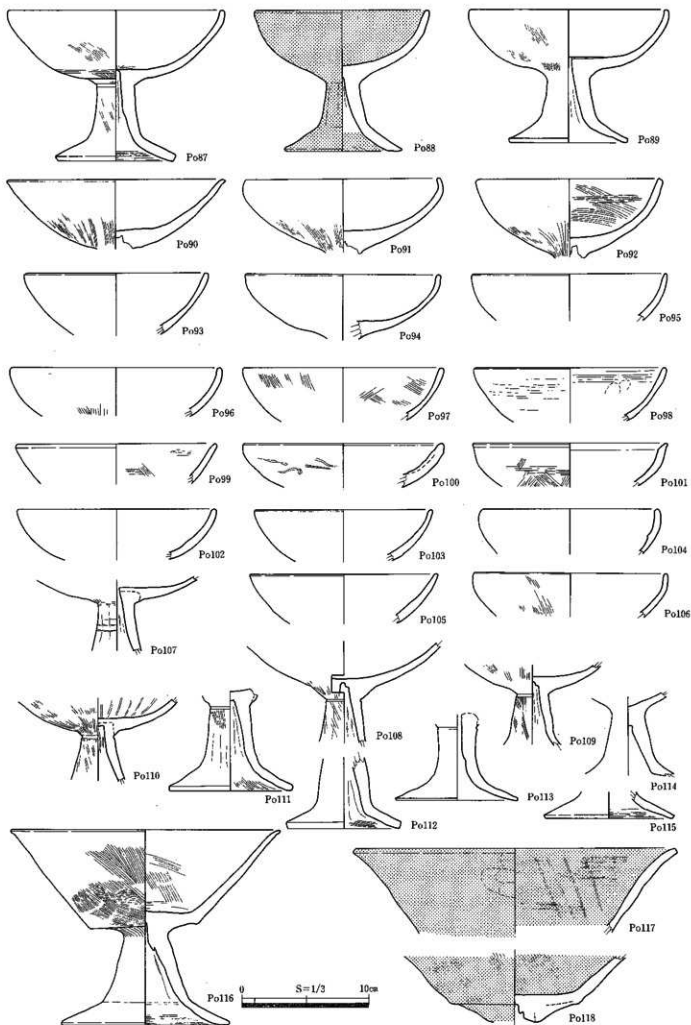
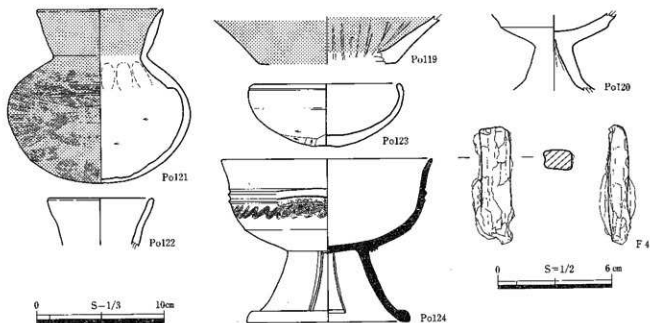


插图86 南谷大山遺跡B区SI09出土遺物実測図(5)



挿図87 南谷大山遺跡B区S109出土遺物実測図(6)

BS I 10 (図版88-93、挿図14・55・56)

位置 BS I 10は、調査区南西部 a22・b22・a23・b23グリッドに位置する。当地は標高68.5 m~69.5mで、南西を向いた緩斜面になっている。北西約3 mにはBS I 40が、南西約5 mにはBS I 22が、南東約5 mにはBSD03が、それぞれ位置している。

形態 平面は隅丸方形を呈する。遺構の外周は東西約7.5m、南北約7.3mである。床面は2段になっており、外側の平坦面が内側のものより10~30cmほど高くなっている。BS I 10は、確認されただけで4棟の住居が重複している。P10~P13を主柱穴とするものをBS I 10-1、P1~P4を主柱穴とするものをBS I 10-2、P6~P9を主柱穴とするものをBS I 10-3、外側の高い床面で営まれたものをBS I 10-4として、記述する。

BS I 10-1 BS I 10-1は、中央部に掘り込まれたもので、周壁の遺存状態は比較的よい。平面は隅丸方形を呈す。規模は東西5.6m、南北6.0mを測り、床面積は約33.6㎡である。残存壁高は、最も遺存状態のよい北壁で1.2mである。壁溝は、北側壁際に遺存している。幅7~9cm、深さ2~11cmを測り、断面「U」字状を呈す。主柱穴は、P10~P13の4個で、規模は順に、(49×46-55) cm、(55×55-50) cm、(35×35-43) cm、(55×43-27) cmである。主柱穴間距離は、P10~P11間から順に2.8m、2.8m、2.7m、2.8mである。P30はいわゆる特殊ビットと考えられる。西壁際に位置し、規模は(110×100-32) cmを測る。

特殊ビット 床面にはほぼ全面に、暗黄灰褐色土からなる貼床が施されている。厚さは3~18cmである。
貼床 焼土面は、北側のもの・P13付近のもの・中央部のもの3つが、検出された。前者は、楕円形を呈し、(50×38) cm、厚さ4 cmを測る。中者は不整形で(43×33) cm、厚さ4 cmである。後者は円形を呈し、(72×72) cm、厚さ6 cmを測る。

BS I 10-2 BS I 10-2は、BS I 10-1の貼床を除去し、柱穴を検出することで確認した。平面形は不明である。主柱穴はP1~P4の4個で、それぞれの規模は、順に(38×34-49) cm、(48×48-34) cm、(24×17-47) cm、(54×34-50) cmを測る。主柱穴間距離は、P1~P2間から順に、3.1m、2.7m、2.9m、2.8mである。

BS I 10-3 BS I 10-3も、BS I 10-1の貼床を除去し、ビットを検出することで確認できた。平面形は不明である。主柱穴はP6~P9の4個で、規模は順に(55×39-46) cm、(40×37-30) cm、(26×23-43) cm、(48×30-58) cmを測る。主柱穴間距離は、P6~P7間から順

に、2.1m、2.2m、2.1m、2.1mである。P 6-P 9間に幅20cm前後、深さ4-8cmを測り断面「V」字状を呈する溝が掘り込まれている。

BS I 10 BS I 10-4は、東西6.3m、南北6.4m、北壁での最大壁高0.6mを測る。北側・東側周壁
- 4 際に壁溝が巡っており、住居跡と判断した。壁溝の断面は「U」字形を呈し、深さは6-19cmを測る。床面積は40㎡だったと推定されるが、中央を掘り込まれており、幅25-60cmを測るテラス状の床面を残すのみである。当住居には、ビット・遺物が残っていないかった。

中央ビット P 5は中央ビットで、BS I 10-1の貼床を除去することで検出できた。規模は、(45×30-33)cmを測る。2段掘りになるもので、上縁部は楕円形を、2段目は不整形を呈す。埋土は、炭化物を含む暗黄灰褐色土である。P 5は貼床下で検出されたためBS I 10-1に伴うものではないことがわかったが、どの住居に伴うものかは断定できない。

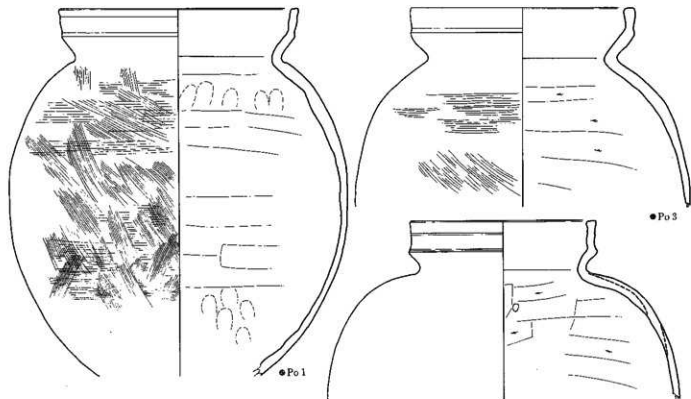
土 坑 当遺構内には、土坑が3基掘り込まれている。SK 1は遺構南東隅に、SK 2・SK 3は遺構南西隅に、各々位置する。いずれも平面は円形、断面はU字形を呈する。規模はSK 1(95×70-50)cm、SK 2(84×86-48)cm、SK 3(70×80-52)cmである。SK 2とSK 3は重複していた。埋土では両者の切り合い関係を確認できなかった。しかし、SK 2は貼床上で確認された。これに対して、SK 3は貼床の下より、検出された。よって、SK 2の方がSK 3より新しいといえる。3つの土坑は、屋内貯蔵穴の可能性もある。SKの各プランへの従属関係は、不明である。

埋 土 埋土は12層に分層される。①・②層は、北壁では③層を東壁では④層を、それぞれ切っている。③・④層はBS I 10-4の埋土、①・②は中央掘り込みのものと考えられる。故に、BS I 10-4よりも、下の3つの住居の方が新しいといえる。

遺 物 出土遺物の中で図化できたものに、複合口縁をもつ甕Po 1-Po 57、「く」字状口縁をもつ甕Po 58、立ち上がりが低くやや内傾する甕Po 59、緩やかに「く」字状口縁をもつ甕Po 60、底部Po 61・Po 62、碗状杯部をもつ高杯Po 63-Po 66、高杯脚部Po 67-Po 71、有段高杯Po 72-Po 74、直口壺Po 75-Po 77、碗Po 78-Po 82、脚付碗Po 83・Po 84、小型丸底壺Po 85-Po 86、須恵器杯蓋Po 87-Po 89、須恵器杯身Po 90-Po 91、須恵器Po 93-Po 95、須恵器有蓋高杯Po 96、土土Po 97-Po 99、無蓋鉄鏝F 1、鉄鏝F 2、細粒花崗岩製砥石がある。

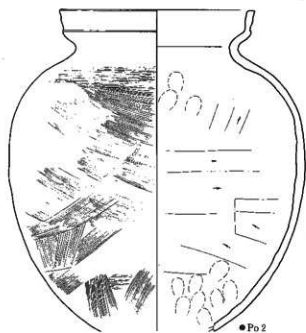
このうち、床面からは、北西コーナー付近で口縁部下端が丸味をもつPo 1が出土している。また、中央東寄りで口縁部下端が丸味をもつPo 2-Po 6・Po 9・Po 11-Po 13・Po 22、有段高杯杯部Po 74、直口壺Po 75、砥石S 1が、住居西側では甕Po 18、中央部では脚付碗Po 84が出土している。また、貼床中よりF 2が出土している。一方SK 2内では口縁部ナデのみの甕Po 51が、SK 3内では口縁部外面施文が施されるPo 39・口縁部施文後ナデ消すPo 41・口縁部ナデのみのPo 47が、P 9内より口縁部が平坦面をもつ甕Po 30が、P 2内より碗Po 78が、P 11内より「く」字状口縁をもつ甕Po 58が、P 30内では円形の透かしをもつ高杯脚部Po 70が、それぞれ出土した。他の遺構出土遺物と接合する土器がある。甕Po 13・須恵器Po 94はBS I 09と、高杯Po 65はBS I 14と、脚付碗Po 83・須恵器Po 93はBS I 11と、須恵器Po 96はBS I 12と、須恵器Po 87はBS D 03検出のものと、それぞれ接合する。

時 期 BS I 10-1とBS I 10-2の時期は、P 11・P 30とP 2で出土した土器より、ともに古墳時代中期後半と考えられる。後者は貼床下より検出されたため、貼床上の前者よりも古いといえる。BS I 10-3はP 9より検出された甕から、古墳時代前期前半のものといえる。BS I 10-4は切り合い関係より、4者の中では最古といえる。一方、土坑は出土遺物より、SK 2が弥生時代終末、SK 3が弥生時代後期の遺構と、考えられる。須恵器は、山本編年I期・陶邑編年TK 208-TK 23並行のものと考えられる。

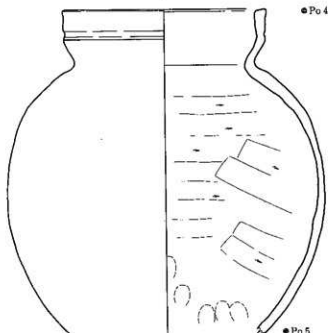


●Po1

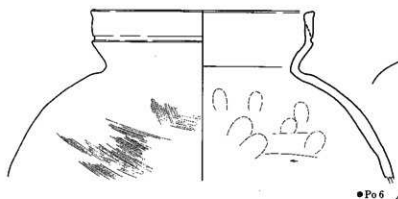
●Po3



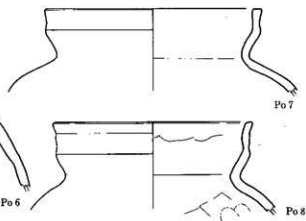
●Po2



●Po4



●Po6



Po7



Po8

0 S=1/3 10cm

插图89 南谷大山遺跡B区S110出土遺物実測図(1)

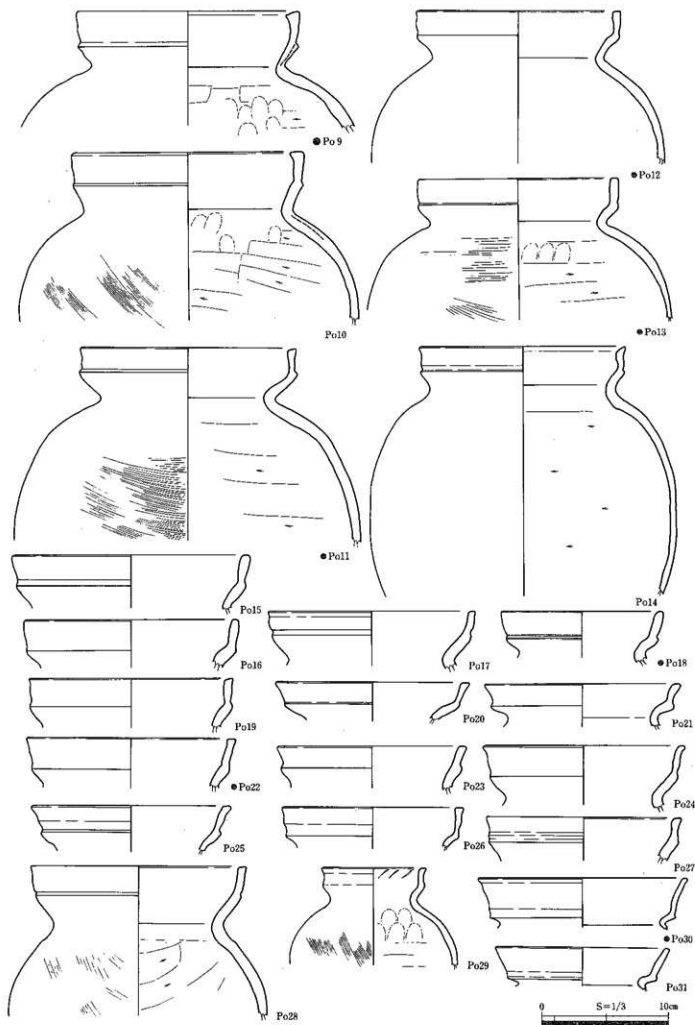


插图90 南谷大山遗址B区S110出土器物实测图(2)

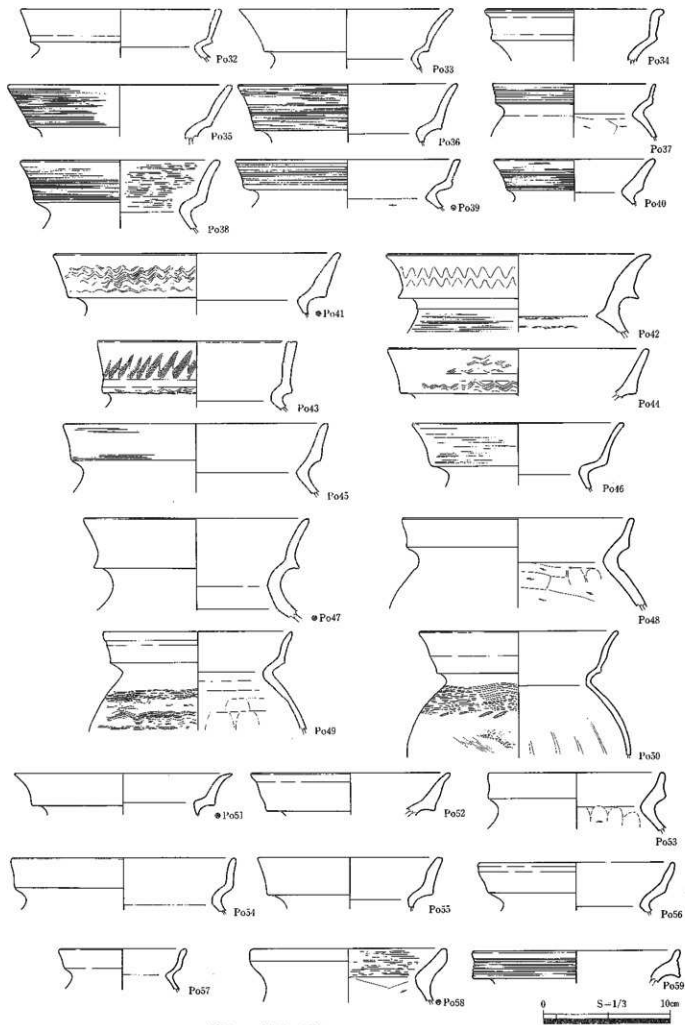
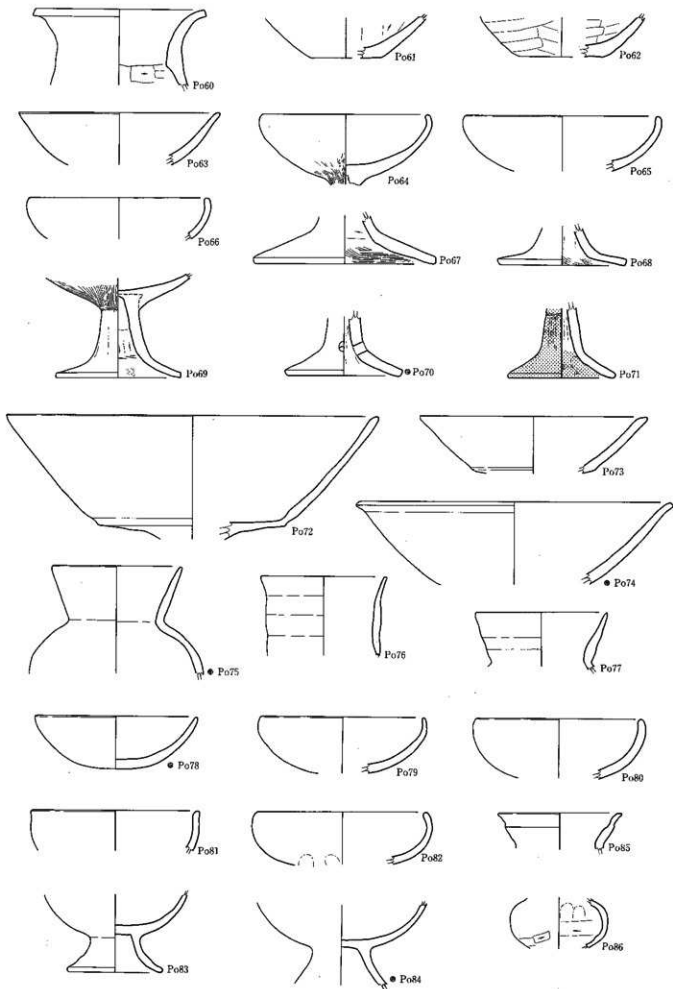
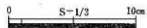


插图91 南谷大山遗址B区S110出土遗物实测图(3)



挿図92 南谷大山遺跡B区S110出土遺物実測図(4)



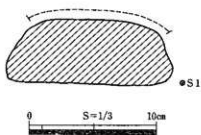
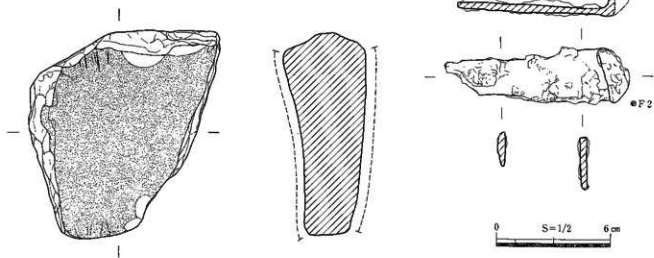
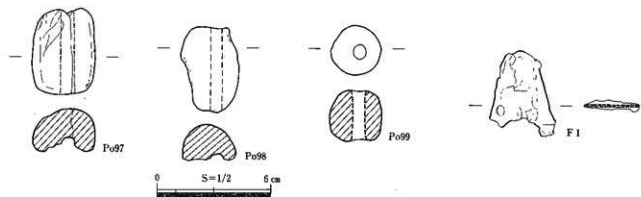
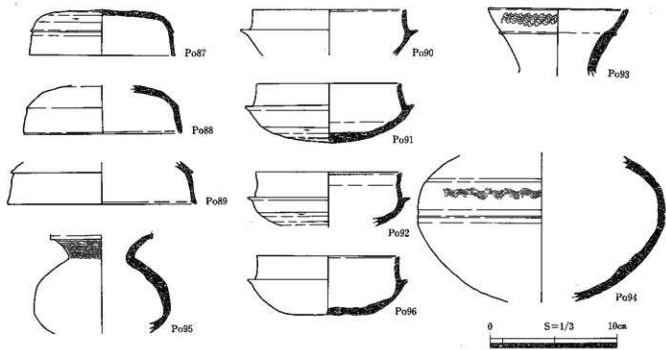


插图93 南谷大山遺跡B区S110出土遺物実測図(5)

BS111 (押函94-98、図版15・57)

位 置 調査区の西側、d22杭付近で、舌状に延びだした丘陵の先端で広い平坦面を成している標高約68m-68.5m付近に位置する。すぐ近くにたくさんの竪穴住居跡があり、中でも、BS113は2m程離れて北東側に隣接しており、BS121は東側に重複している。

住居区分 BS111は同時期に7回以上の建て替えが行なわれていたことが判明し、復元できる住居跡が7棟あるので、仮に、BS111-1~7と呼ぶことにした。7棟の住居跡は床面の高さで区分すると3区分できるようである。3区分はBS111-1、BS111-2・3、BS111-4~7である。

BS111 BS111-1は平面が方形である。規模は東西6.5m、南北1.7m以上、床面積11㎡以上で、
-1 残存壁高は最も残りの良い北壁で0.19mである。柱穴は貼床の下から検出されたP21・22である。規模はP21(31×29-43.6)cm、P22(67×59-40.2)cmで、柱穴間距離は3.5mであった。床面には直径10cm前後、深さ8cm前後の小ピットが33個検出された。

BS111 BS111-2は平面が歪な方形である。規模は東西が西壁で5.4m、東壁で6.2m、南北が
-2 5.5mで、床面積は32㎡である。残存壁高は最も残りの良い南東隅で0.72mである。柱穴はP28~P31が主柱穴、P32・P33が特殊ピットである。P28~P33の規模は、順に(49×45-41.4)cm、(42×26-64)cm、(56×40-46.9)cm、(50×26-50.8)cm、(72×61-47.5)cm、(66×60-58.3)cmである。主柱穴間距離はP28~P29から順に、3.1m、2.7m、2.3m、2.6mである。P32は上縁部が楕円形に対して底部は方形である。壁溝は北西側以外は検出され、深さは最大で8cm、最小2cmである。

BS111 BS111-3は平面が方形である。規模は東西5.4m、南北3.5m以上で、床面積は19㎡以上である。残存壁高は最も残りの良い北西隅で、0.16mである。柱穴は特定できない。壁溝は北西隅で確認でき、深さは6cm程である。

BS111 BS111-4は平面がやや歪な方形である。規模は東西7.0m、南北7.3m、床面積51.1㎡である。残存壁高は最も残りの良い南壁で0.43mである。柱穴はP1~P4が主柱穴で、P5が特殊ピットである。P1~P5の規模は、順に(42×39-28.3)cm、(42×36-39.3)cm、(53×32-73.8)cm、(53×48-92.5)cm、(48×30-38.8)cmである。主柱穴間距離はP1~P2から順に3.8m、3.8m、4.2m、3.9mである。壁溝は全周する。さらに、壁に直交するように延び出す舌状の溝が、西壁より4本、北壁から1本ある。規模は最大で1.7m、最小で0.7mで、深さが7cm程である。

BS111 BS111-5は平面が方形である。規模は東西5.2m、南北4.8m、床面積は25㎡である。
-5 埋土のなかに掘り込まれていたようで壁が確認できなかった。主柱穴はP13~P16で、規模は、順に(48×44-52.4)cm、(32×26-33.3)cm、(42×37-25.0)cm、(40×30-38.6)cmである。主柱穴間距離はP13~P14から順に2.0m、2.5m、2.0m、2.5mで、壁溝はほぼ全周すると思われる。深さは8cm程である。

BS111 BS111-6は平面が方形である。痕跡としては北西側に僅かに壁溝が残っており、BS
-6 I11-5とほぼ同じ形態をとるものと考えられる。柱穴はP8~P11が主柱穴で、P12が特殊ピットである。P8~P12の規模は、順に(45×44-72.3)cm、(36×33-43.3)cm、(36×35-65.1)cm、(33×25-28.0)cm、(75×49-50.4)cmである。主柱穴間距離はP8~P9から順に1.9m、2.0m、1.9m、2.1mである。

BS111 BS111-7は平面が方形である。規模は東西3.2m以上、南北3.7m以上、床面積12㎡以上である。主柱穴はP17~P20で、規模は、順に(55×53-69.1)cm、(77×51-63.0)cm、

(34×34-47.8) cm、(50×47-64.9) cmである。主柱穴間距離はP17～P18から順に2.2m、2.4m、1.8m、2.3mである。壁溝は北西側で検出でき、深さが7cm前後である。

焼土 どの住居跡に伴う焼土か特定できないが、5ヵ所から検出された。位置と規模は北壁の中央付近(100×56) cm、P17とP34の真上で、それぞれ(70×40) cm、(70×55) cm、P12の中(40×20) cm、北側の壁溝の縁(18×10) cmである。

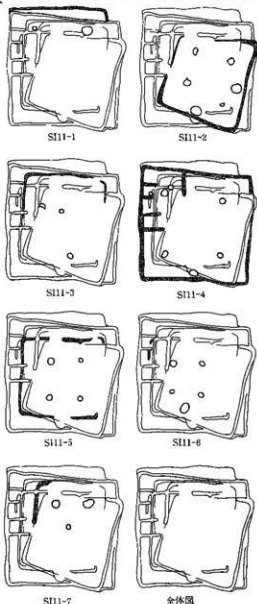
埋土 遺構埋土は47層に分層できた。①～⑦層がBS I11-5・6・7の埋土、⑧～⑬層がBS I11-4の埋土、⑭⑮層がBS I11-1の埋土、⑯～㉔層がBS I11-2・3の埋土であると考ええる。

A'-A'の断面をみると、⑨層が掘り込まれて、③層が堆積していることがわかる。また、C'-C'の断面をみると、BS I11-1の⑭⑮層、BS I11-4の⑨⑫層が、共に掘り込まれて、③層が堆積していることがわかる。⑯⑰層は暗赤褐色で粘性のある1枚目の貼床で、⑱層は暗黄褐色土で粘性のある2枚の貼床である。⑳㉑層の下から、BS I11-2・3の埋土が確認された。以上の層の様子から、7棟の住居の間に4つの時期が想定されると思う。4つの時期は、BS I11-1、BS I11-2・3、BS I11-4、BS I11-5・6・7である。

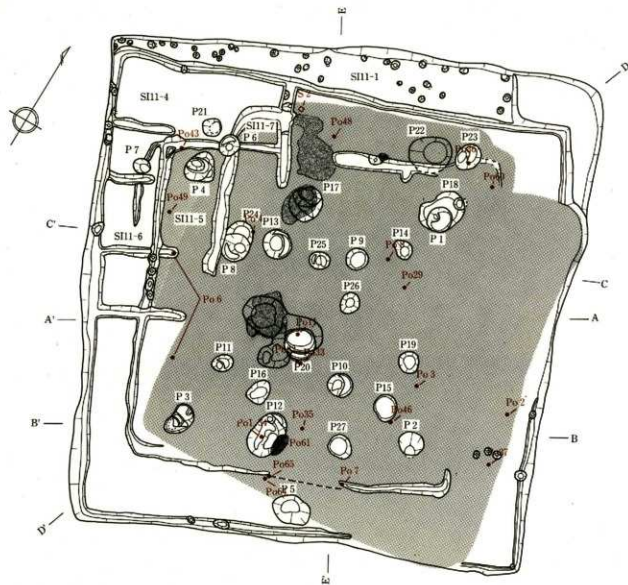
遺物 出土遺物には複合口縁をもつ甕Po1～Po29、直口壺Po30、複合口縁をもつ壺Po31、高杯Po31～60、須恵器杯身Po61～63、須恵器杯蓋Po64・Po65、須恵器甕Po66・Po67、土錘Po68～Po70、脇扶柳葉鍔の鉄鏝F1、鉄鏝の茎部F2、刀子F3・F4、鉄鏝F5、軽石S1、砥石S2がある。

この内、床面からは、甕Po1～Po5・Po11、高杯Po36・Po37、Po43、Po46、Po48・Po49須恵器蓋坏Po61、Po65が出土している。主なものの出土位置は口縁端部平坦、下端丸味をもち、頸部と底部内面に指頭圧痕の残る甕Po1がP12より、同様の口縁をもつ甕Po11がP20より、Po6が床面西側より2ヵ所に別れて出土している。また、浅い碗状の杯をもつ高杯Po36がP23の上より、端部が鈍い2段を成す須恵器蓋坏Po61がP12の縁にある焼土との際から出土し、形態は山本福年I期・陶色福年TK208～TK23併行である。さらに、貼床を除去した下から、甕Po7～Po10、壺Po30・Po31、高杯Po32～Po35が出土した。BS I11が弥生時代終末のBSK24・BSK25を壊して作られているために、甕Po25、Po29が混入したものと考ええる。

時期 床面出土土器より、BS I11-1～7の時期は、古墳時代中期後半にほぼ連続して建てられたと考える。

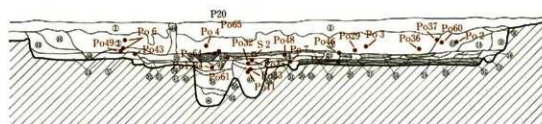


博図94 南谷大山遺跡B区SI11住居実測図



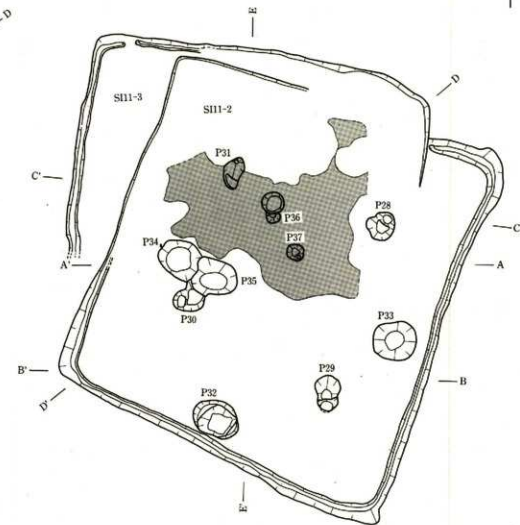
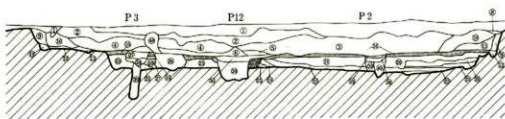
H=69.00m

A



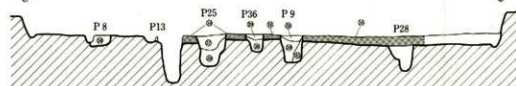
H=69.00m

B



H=68.50m

C



- ①暗黒褐色土
- ②暗黒灰色土
- ③暗赤褐色土
- ④暗赤褐色土
- ⑤暗赤褐色土(DKPを含む)
- ⑥淡黒褐色土
- ⑦淡黒灰色土
- ⑧暗黄褐色土
- ⑨暗黄褐色土
- ⑩淡黄褐色土
- ⑪暗赤赤褐色土
- ⑫暗灰色土
- ⑬暗褐色土
- ⑭淡黄赤褐色土
- ⑮暗赤褐色土(焼土粒を含む)
- ⑯暗赤褐色土(暗赤褐色粘質土粒を含み、良く締まる。粘)

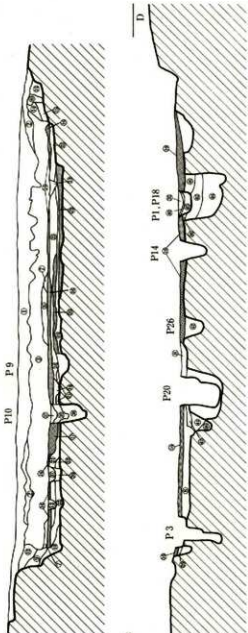
- ⑰暗赤褐色粘質土(粘床)
- ⑱焼土
- ⑲暗褐色土(DKP、赤褐色粘土を含む)
- ⑳暗褐色土
- ㉑明黄褐色土(よくしまる。粘床)
- ㉒暗褐色土(DKP、炭化物を含む)
- ㉓暗褐色土(DKP、炭化物、焼土を含む)
- ㉔淡褐色土(DKP、炭化物、基盤層粒を含む)
- ㉕淡褐色土(粘性あり)
- ㉖暗赤褐色土(炭化物を含む)
- ㉗暗赤褐色土(DKP、炭化物、焼土を含む)
- ㉘淡褐色土(DKP、炭化物、基盤層粒を含む)
- ㉙淡褐色土(粘性あり)
- ㉚暗赤褐色土(炭化物を含む)
- ㉛暗赤褐色土(基盤層粒をこわかに含む)
- ㉜暗黄褐色土(赤褐色粘土粒を含む)
- ㉝暗灰色土
- ㉞暗黄褐色土(DKPを多く含む)
- ㉟暗黄褐色土
- ㊱暗赤褐色土
- ㊲暗赤褐色土(基盤層粒を含む)
- ㊳暗赤褐色土
- ㊴暗赤褐色土
- ㊵暗赤褐色土
- ㊶暗赤褐色土
- ㊷暗赤褐色土
- ㊸暗赤褐色土
- ㊹暗赤褐色土
- ㊺暗赤褐色土
- ㊻暗赤褐色土
- ㊼暗赤褐色土
- ㊽暗赤褐色土
- ㊾暗赤褐色土
- ㊿暗赤褐色土

- ①暗黄褐色粘質土(粘床)
- ②焼土
- ③暗褐色土
- ④暗黄褐色土
- ⑤淡黄褐色土
- ⑥暗褐色土(DKPを含む)
- ⑦暗褐色土(炭化物、焼土を含む)
- ⑧暗黄褐色土(DKPを多く含む)
- ⑨明黄褐色土(DKP、赤褐色粘質土を含む)
- ⑩暗黄褐色土(炭化物を含む)
- ⑪暗黄褐色土(DKP、赤褐色粘質土を含む)
- ⑫暗赤褐色土(DKPをこわかに含む)
- ⑬暗褐色土
- ⑭暗赤褐色土
- ⑮暗赤褐色土
- ⑯暗赤褐色土
- ⑰暗赤褐色土
- ⑱暗赤褐色土
- ⑲暗赤褐色土
- ⑳暗赤褐色土
- ㉑暗赤褐色土
- ㉒暗赤褐色土
- ㉓暗赤褐色土
- ㉔暗赤褐色土
- ㉕暗赤褐色土
- ㉖暗赤褐色土
- ㉗暗赤褐色土
- ㉘暗赤褐色土
- ㉙暗赤褐色土
- ㉚暗赤褐色土
- ㉛暗赤褐色土
- ㉜暗赤褐色土
- ㉝暗赤褐色土
- ㉞暗赤褐色土
- ㉟暗赤褐色土
- ㊱暗赤褐色土
- ㊲暗赤褐色土
- ㊳暗赤褐色土
- ㊴暗赤褐色土
- ㊵暗赤褐色土
- ㊶暗赤褐色土
- ㊷暗赤褐色土
- ㊸暗赤褐色土
- ㊹暗赤褐色土
- ㊺暗赤褐色土
- ㊻暗赤褐色土
- ㊼暗赤褐色土
- ㊽暗赤褐色土
- ㊾暗赤褐色土
- ㊿暗赤褐色土

H=68.50m

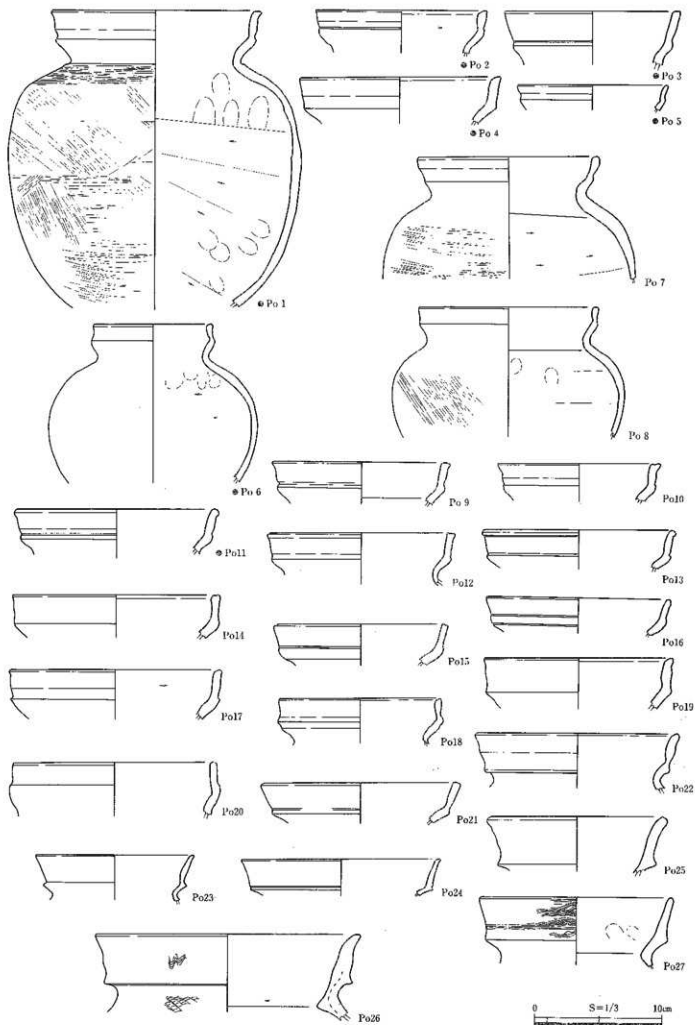
D

E



S=1/60 2m

插图95 南谷大山遺跡B区S11-1透視図



挿図98 南谷大山遺跡B区S111出土遺物実測図(1)

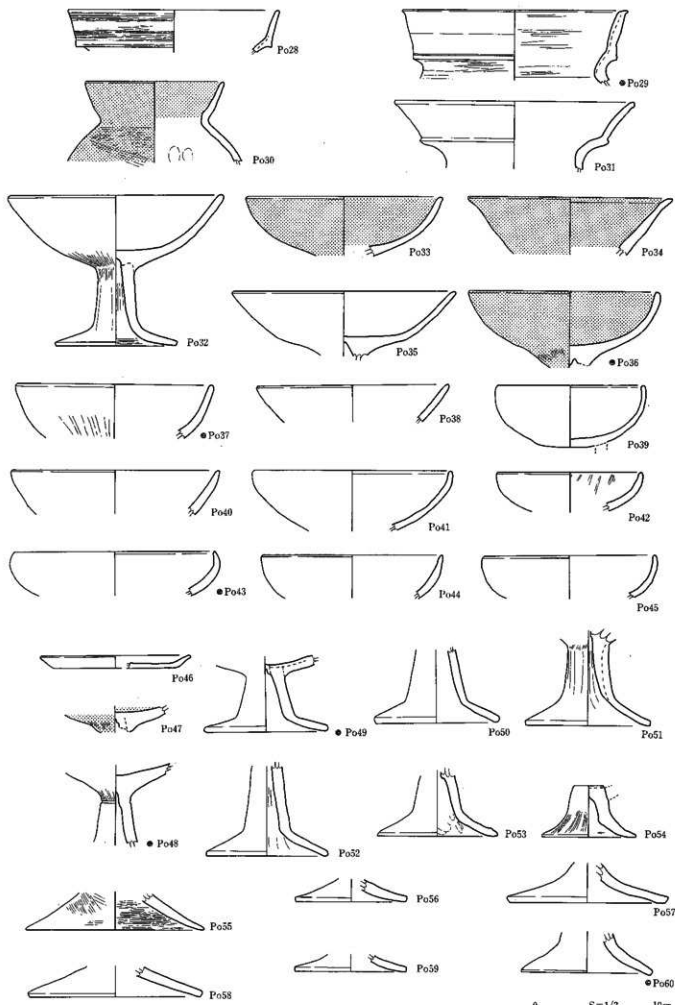
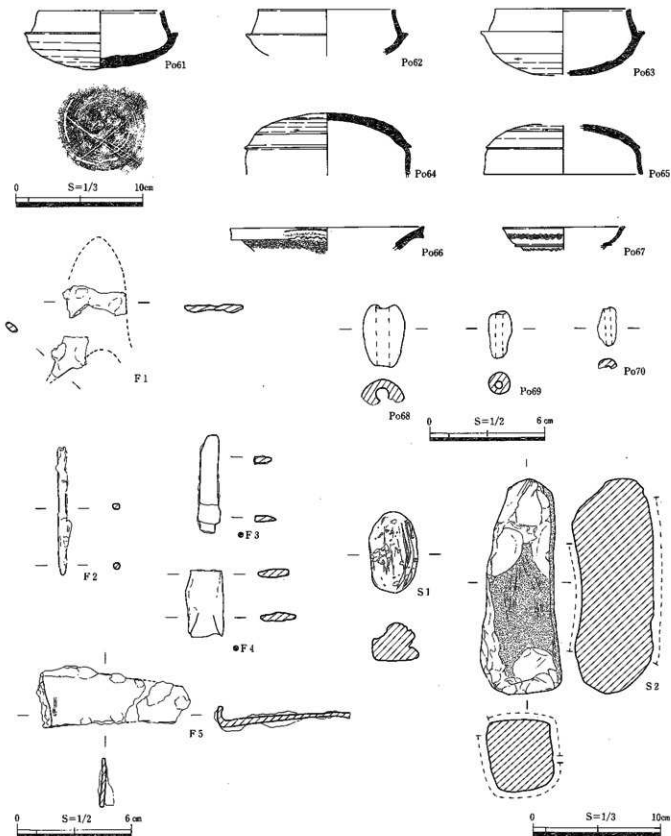


插图97 南谷大山遺跡B区S111出土遺物宾測图(2)



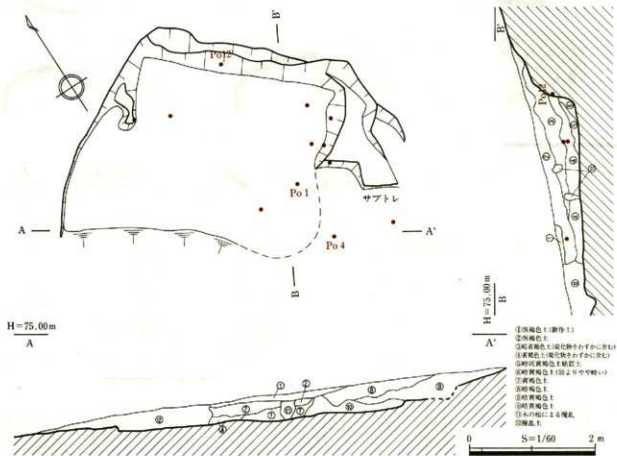
挿図98 南谷大山遺跡B区S111出土遺物実測図(3)

B S 112 (挿図99・100、図版16・57)

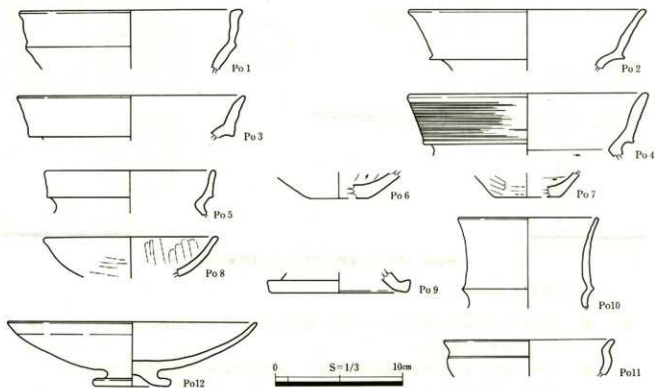
位置 調査区のはほぼ中央a18グリッドにあり、標高73.5m～74.9mの斜面に位置している。北東側には、B S S 03がある。

形態 斜面に位置するため四壁の遺存状態は悪く、西側壁は流失しており原形を留めていない。遺存している壁の様子から平面は方形を呈すものと考えられる。

規模は、東西2.55m以上、南北3.06mを測り、床面積は7.8㎡以上である。残存壁高は、最



挿図99 南谷大山遺跡B区S112遺構図



挿図100 南谷大山遺跡B区S112出土遺物実測図

も遺存状態の良い東壁で最大0.78mである。

壁溝・支柱穴は検出されなかった。

埋 土 埋土は5層に分層できる。これらは、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が窺えるが、壁際の⑤層は粘質土で、壁際に立てられた板状のものが腐朽したものと考えられる。

遺 物 出土遺物は、図化できたものに複合口縁をもつ甕Po1～Po5、底部Po6・Po8、高杯杯部Po8、高杯脚部Po9、直口壺Po10、低脚杯Pol1、小型鉢Pol2がある。

このうち、Pol1は大きく浅い杯部をもつもので、東壁際で浮いた状況で出土している。その他の他は、埋土中及び周辺からの出土である。

時 期 BS I12の時期は、出土土器から古墳時代前期前半と考えられる。

BS I13 (挿図101～108、図版16・17・57～60)

位 置 調査区の西側、d22グリッド付近で、舌状に延びだした丘陵の先端で広い平坦面を成している標高約68～68.5m付近に位置する。すぐ近くにたくさんの竪穴住居跡があり、中でも、BS I11は2m程離れて南西側に隣接しており、BS I21は南側に重複している。さらに、東側でBS I24・BS I26とも重複している。

住居区分 BS I13は北側で耕作による攪乱があるが、北側以外は比較的に遺存状態が良好であった。また、BS I13は同時期に4回以上の建て替えが行なわれていたことが判明し、復元できる住居跡が4棟あるので、仮に、BS I13-1～4と呼ぶことにした。4棟の住居跡は床面の高さで時期差がはっきりしており、調査順にBS I13-1～4とした。

BS I13 BS I13-1は平面が方形である。規模は東西2.7m、南北2.9m以上で、床面積は7.8㎡以上である。残存壁高は最も残りの良い西壁で0.21mである。柱穴はP13・P16と思われるが、西側で対になる柱穴が検出できなかった。規模はP13(34×25-50.9)cm、P16(40×30-46.7)cmで、柱穴間距離は1.3mであった。床面には直径20cm、深さ15cmの小ビット1つが検出されている。

BS I13 BS I13-2は平面が方形である。住居の規模は東西が北壁で5.1m、南北が西壁で4.7mで、床面積は24㎡である。残存壁高は最も残りの良い北西隅で0.37mである。柱穴は床面上で17個検出された。その内の2個はBS I13-1のビットであり、P1～P4が支柱穴、P11が特殊ビットである。P1～P4の規模は、順に(40×34-86.5)cm、(36×34-82.2)cm、(31×29-56.1)cm、(43×39-74.7)cmである。特殊ビットP11の規模は(65×54-35.0)cmで、平面が楕円形であった。支柱穴間距離はP1～P2から順に、2.0m、1.8m、2.0m、2.0mである。他のしっかりしたビットとして、P2のすぐ東にあるP7(50×44-36.7)cmがある。その他のビットは浅く、深さ10cm前後である。

焼土は床面北側中央から検出された。平面は歪な双円形である。規模は直径55cmと44cmの円が接する様相を呈し、南北方向が99cmである。

BS I13 BS I13-3は平面が方形である。規模は東西が北壁で3.7m、南北が西壁3.7mで、床面積は13.7㎡である。残存壁高は最も残りの良い西壁で0.12mであった。柱穴は床面上で新たに8個検出した。この内、P25は底面に径3～4cmの砂利が敷き詰められており、特殊ビット(土坑)と考えられる。P18・P20は検出したビットの中ではしっかりしている。しかし、支柱穴として特定できるものは検出できなかったで、支柱穴はBS I13-2と同じ位置にあったと思われる。ビットの規模はP25が、南北96cm、東西80cm、深さ18cmであり、P18・P20は、それぞれ(38×30-28)cm、(24×16-58.8)cmである。また、P23・P24は炭化物

の下から検出された。規模は、P23 (45×39-11) cm、P24 (14×13-4.0) cmである。焼土は床面中央北側にあり、その周辺に炭化物面が広がっていた。規模は南北方向が40cm、東西方向が14cmである。貼床はほぼ全面に施されているが、中央から南側にかけて、灰褐色粘質土の貼床があり、範囲は東西方向0.94m、南北方向1.1mである。

- BSI13
 -4 残存壁高は最も残りの良い北壁で0.4mである。床面上で検出できたのはP26、SK02である。従って、主柱穴が確認できなかった。P26は特殊ビットであり、規模は(58×58-24) cmである。SK02は屋内貯蔵穴か、それ以前に作られたものかは土器の出土がないため確認できないが、貼床がSK02の上には貼られていなかった。規模は東西1.2m、南北1.4m、深さ0.6mである。床面中央から南側に掘り窪められたところがあり、その中に焼土が検出された。焼土は不定型で南北70cm、東西38cmに広がり、非常に硬い焼土面であり、継続的に使われていたと考えられる。

埋土 遺構埋土は49層に分層できた。③層がBSI13-1の埋土、④層がBSI13-1の貼床、⑤⑥層がBSI13-2の貼床、⑦⑧⑨⑩層がBSI13-3の貼床、⑪層がBSI13-4の貼床であるとする。⑫~⑬層はビットの埋土である。⑭~⑯層は土坑の埋土である。

焼失住居 BSI13-2からは、北東隅から炭化物が出土している。また、層をみると、⑥⑦層に焼土、炭化物を多く含み、⑨層も赤褐色粘土ブロックを含んでおり、人為的に埋められた様相がみられる。従って、この住居は焼失したと考えられる。

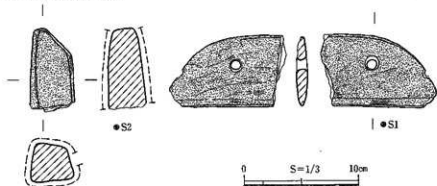
遺物 出土遺物には複合口縁をもつ甕Po1~Po49、直口壺Po50・Po52、小型丸底壺Po51・Po54~Po57、高杯Po58~Po89・Po91~Po93、鼓形器台Po90・Po94・Po100、腕Po95~Po99、壺Po101、土玉Po102・Po103、須恵器杯身Po104、須恵器壺Po105、脚部Po106、石庖丁S1、砥石S2、鉄器茎部F1、不明鉄片F2、鉄鋸と考えられるF3、刀子F5、鍬又は鋤先F6、鎌F7・F8である。

BSI13-1床面からは、甕Po32、腕Po95、須恵器杯身Po104(山本編年I期:陶邑編年TK203~TK23並行)、閃緑岩製の石庖丁S1が出土している。

BSI13-2の床面からは、口縁端部平坦、下端丸味をもち、頸部と底部内面に指頭圧痕の残る甕Po1~Po15を中心に、P2よりPo28が、P1よりPo29が出土している。また、Po50~Po53、浅い碗状の杯部をもつ高杯Po58~Po67・Po69、高杯脚部Po82~Po84、鼓形器台Po100、床面中央でF6、F7が出土している。

BSI13-3の床面からは、Po43、小型丸底壺Po57、高杯杯部Po68・Po79・Po80、細粒花崗岩製の砥石S2、P25の付近から鉄鋸F3が出土している。

BSI13-4の床面からは、F1・F2・F5が出土している。全体的に土器だけでなく、鉄が多く出土している。



挿図101 南谷大山遺跡B区SI13出土遺物実測図(6)

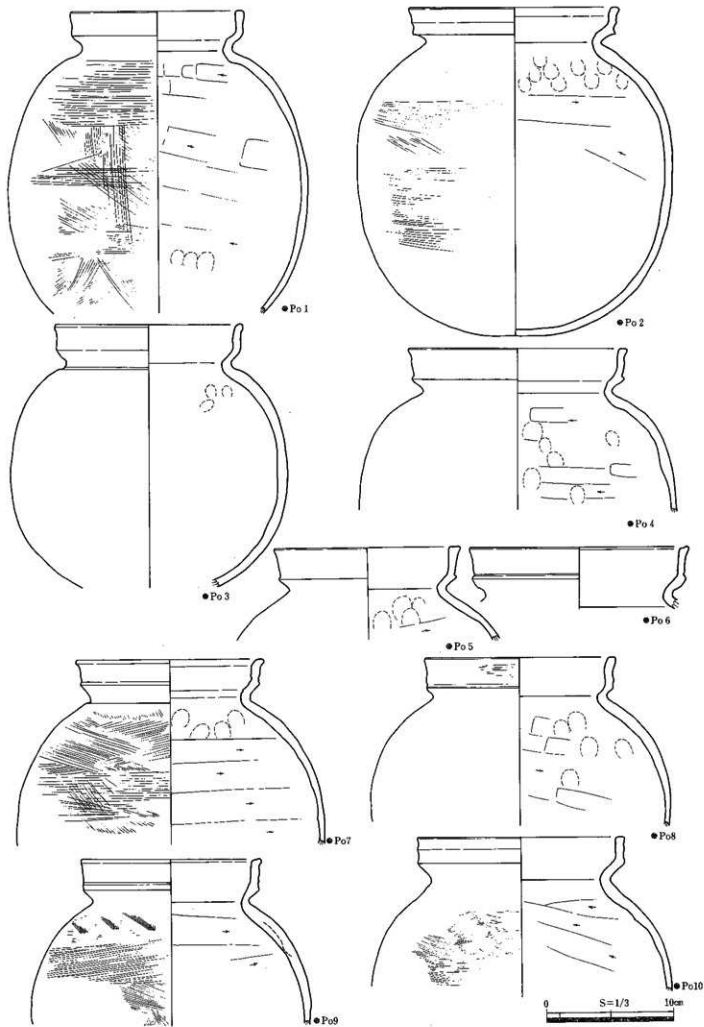


插图103 南谷大山遺跡B区S113出土遺物実測図(1)

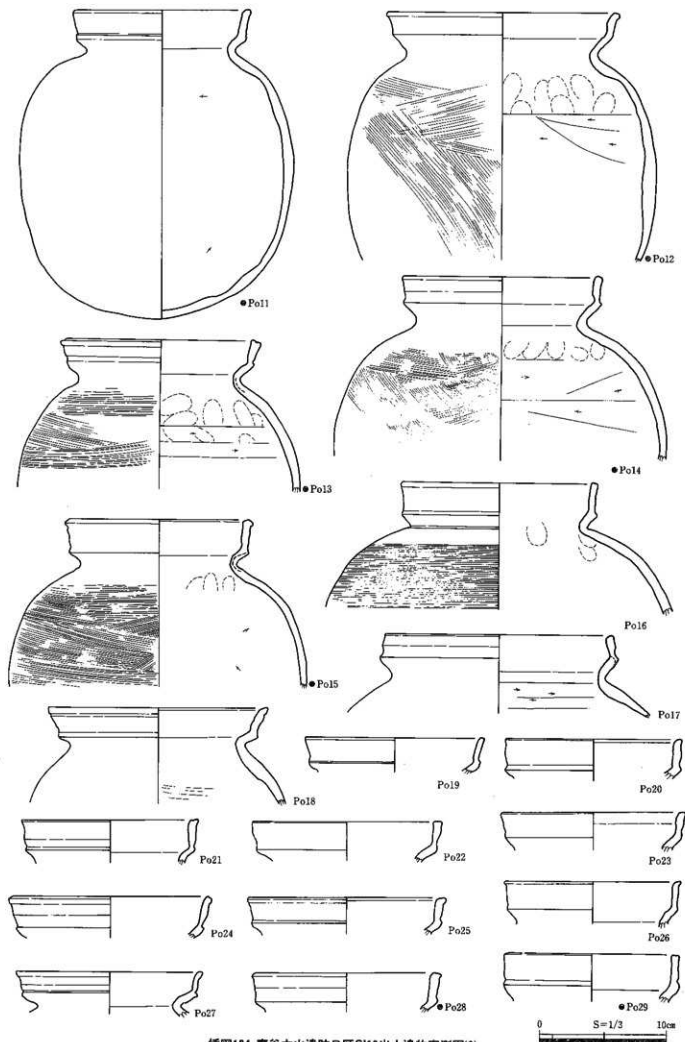


插图104 南谷大山遗址B区SI13出土文物实测图(2)

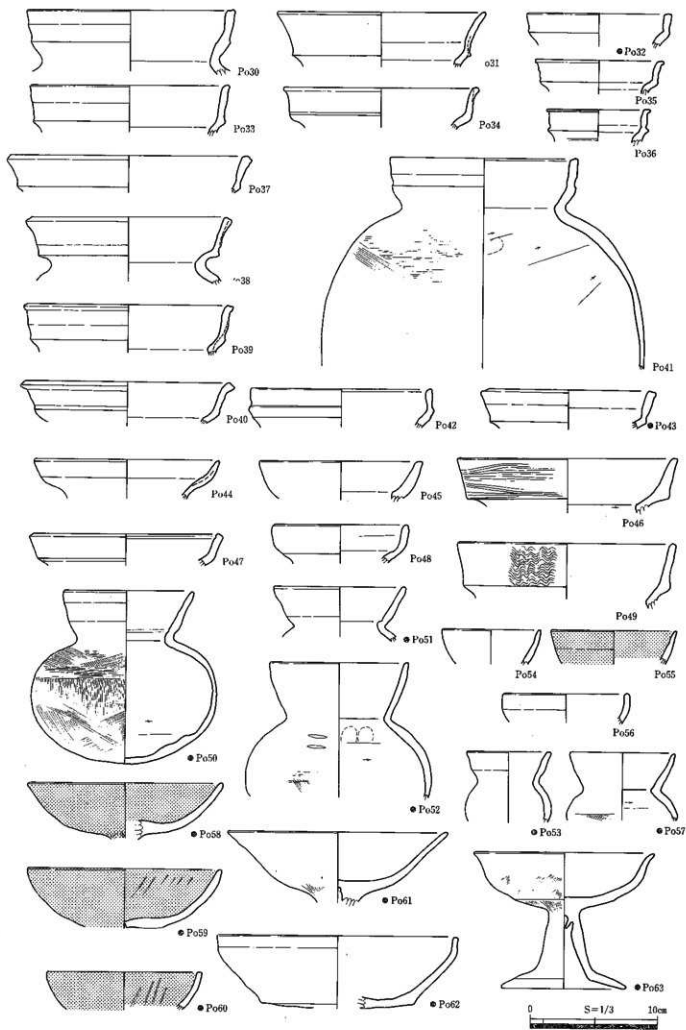
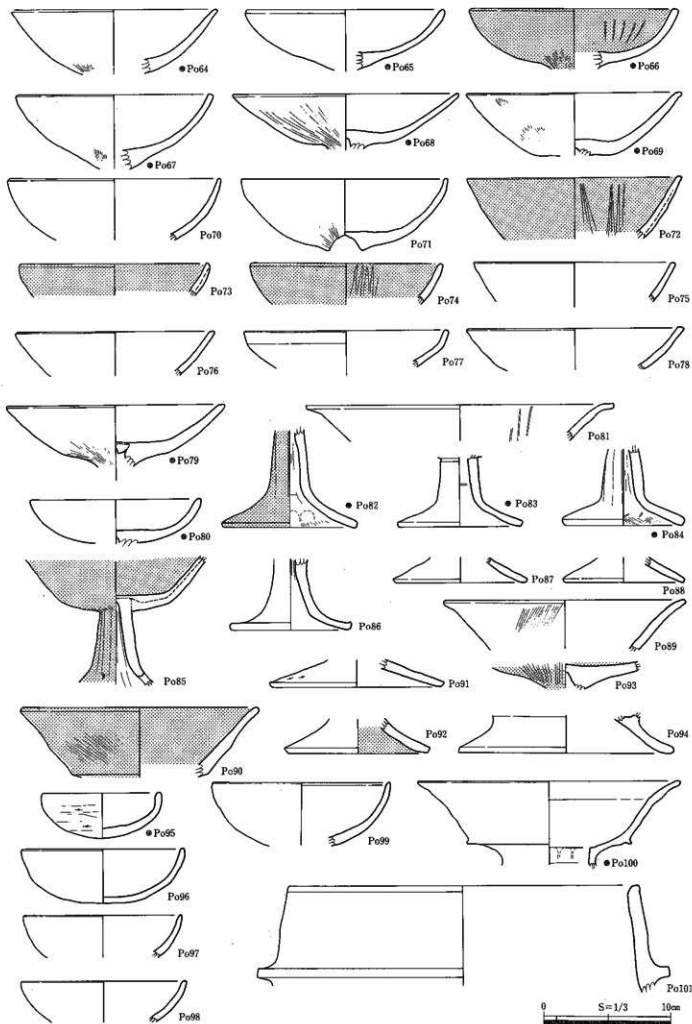


插图105 南谷大山遺跡B区S113出土遺物実測図(3)



神岡106 南谷大山道跡B区S113出土遺物実測図(4)

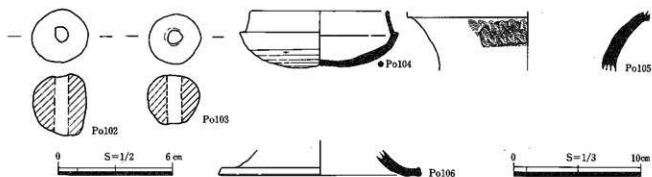


插图107 南谷大山遺跡B区SI13出土遺物実測図(5)

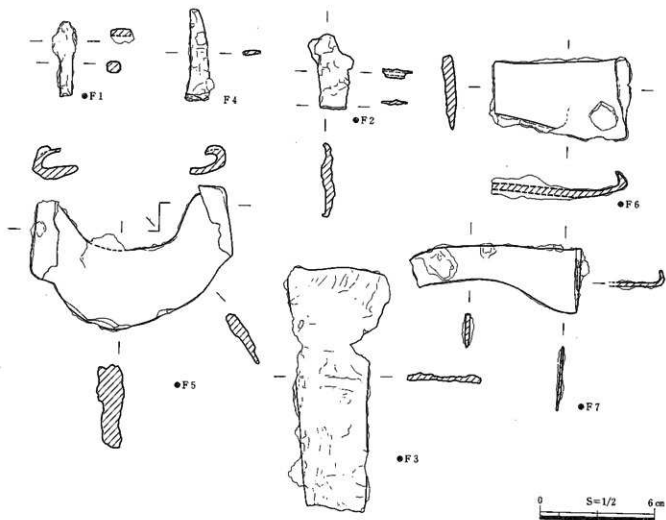


插图108 南谷大山遺跡B区SI13出土遺物実測図(7)

時期 BS I 13-1~4の時期は貼床が行なわれていることから、時期差をもちながら、古墳時代中期後半にはほぼ連続して建て替えられたと考える。

BS I 14 (挿図109・111~114、図版18・60)

位置 調査区の西側、c22グリッド付近で、舌状に延びだした丘陵の先端で広い平坦面を成している標高約68.5~69m付近に位置する。すぐ近くにたくさんの野穴住居跡があり、中でも、BS I 13は接するように、BS I 24・BS I 26は重複して建てられている。

住居区分 BS I 14はBS I 26の埋土を掘り込んで建てられているため、壁面を確認するのが非常に困難であり、この住居跡は僅かな壁の残りとし、壁溝によって存在を確認された。その結果、BS I 14は同時期に3回以上の建て替えが行なわれていたことが判明し、復元できる住居跡が2棟あるので、BS I 14-1・2と呼ぶことにした。2棟の住居跡は床面の貼床とビットの在り方の関係から時期差がはっきりしており、古い順にBS I 14-1・2とした。

BS I 14 BS I 14-1は平面が隅丸方形である。規模は東西が北壁で5.8m、南北が西壁で6.0mで、
-1 床面積は34.3m²で、残存壁高は最も残りの良い東壁で0.6mである。柱穴は貼床の下で検出された。この住居に伴うと考えられるものは、主柱穴P11~P13、中央ビットP16の4つである。主柱穴の規模は、P11 (34×30-76.6) cm、P12 (80×64-54.3) cm、P13 (40×32-47.2) cmである。主柱穴間距離はP11~P12、P12~P13の順に、4.0m、3.8mである。残りのビットはBS I 26のビットと区別できないが、P20・P21はそれぞれ (38×36-54.4) cm、(59×51-39.5) cmというしっかりした規模をしており、さらに、2つを繋ぐ線がBS I 14-1の北壁と平行していることから、BS I 14-1の中で建て替えがあったと思われる。中央ビットは3回掘り込んであり、この住居に伴うものは、貼床を除去した後に検出されたP16 (43×39-31.7) cmである。

壁溝は南側と東側で確認でき、幅が10~20cm、深さが6~9cm程であった。断面は「U」字形を呈する。

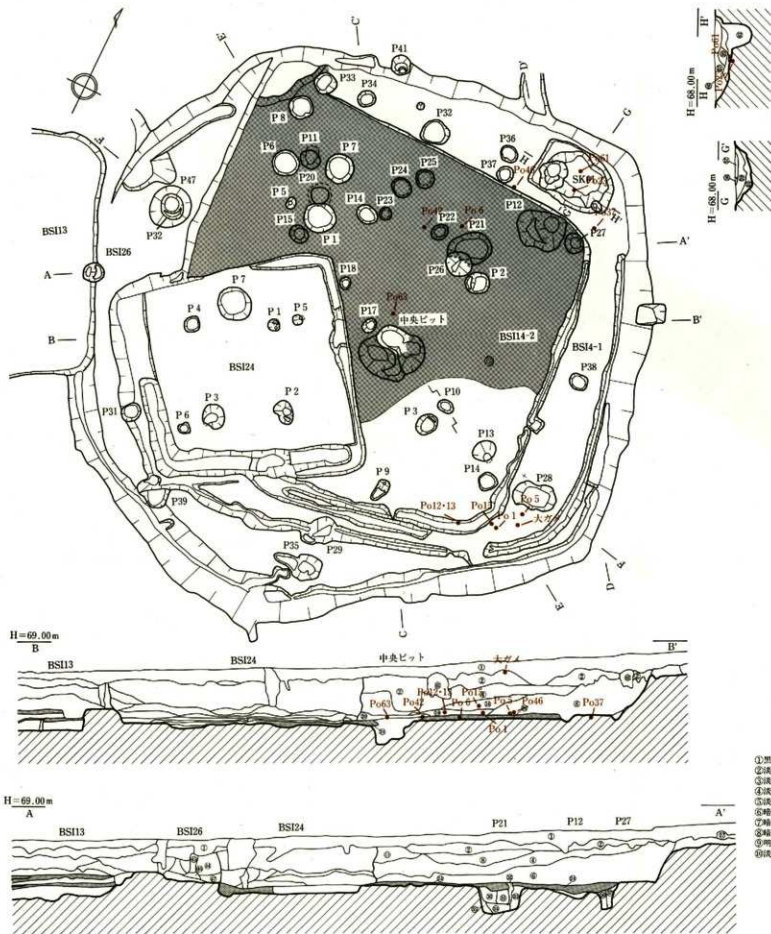
BS I 14 BS I 14-2は平面が隅丸方形である。規模は東西が北壁で4.8m、南北が東壁で4.9mで、
-2 床面積は23.5m²である。ビットは床面上で17個検出された。床面上で検出されたBS I 14-2に関わるビットはP1~P10・P17・P18の12個である。その内、主柱穴はP1~P3であるが、4本柱と考えたい。規模はP1 (54×48-56.1) cm、P2 (40×36-26.6) cm、P3 (40×28-40.3) cmで、柱穴間距離はP1~P2、P2~P3の順に2.8m、2.4mであった。床面の北側約3分の2に貼床が施される。

この住居に伴う中央ビットは、貼床がかかっていた北西側のP4と考える。規模は東西54cm、南北32cm、深さ30.8cmを測り、平面は楕円形である。中央ビットのすぐ西側にP17(24×20-15.7)cm、北西に1m離れてP18(20×15-15.4)cm、南東に1m離れてP10(26×18-10.3)cmで検出された。他のものは10cm未満の浅いビットであった。

硬い焼土は中央ビットの東側、約1.5mの所で検出された。継続的に使われていたと考えられる。規模は直径13cm程で、平面は円形である。

壁溝は南側と東側で確認でき、幅が8~30cm、深さが6cm程であった。南側の壁溝が2条に別れており、BS I 14-2の中でも建て替えがあったと考えられる。断面は「U」字形を呈する。

埋土 遺構埋土は61層に分層できた。①~⑱層がBS I 14の埋土、㉔~㉖層がBS I 14の貼床、㉗~㉙層がBS I 14の中央ビットの埋土、㉚~㉜層がBS I 14のビットの埋土で、その他の19の層はBS I 26に関係する層である。



- ①赤褐色土 (灰色の基盤粒を含む)
- ②灰黄褐色土
- ③灰黄褐色土 (灰化物、焼土を含む)
- ④赤黄灰褐色土 (灰化物、焼土を含む)
- ⑤灰黄褐色土
- ⑥赤黄褐色土
- ⑦灰黄褐色土 (灰化物、焼土、基盤層粒を含む、粘性がある)
- ⑧灰黄褐色土 (灰化物を含む)
- ⑨赤黄褐色土 (灰化物、灰黄土を含む)
- ⑩赤黄褐色土 (灰化物、焼土を含む)
- ⑪赤黄褐色土 (灰化物、焼土、基盤層粒を含む)
- ⑫赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ⑬赤黄褐色土 (灰化物を含む)
- ⑭赤黄褐色土 (灰化物、焼土を含む)
- ⑮赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ⑯赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ⑰赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ⑱赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ⑲赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ⑳赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉑赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉒赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉓赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉔赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉕赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉖赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉗赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉘赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉙赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉚赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉛赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉜赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉝赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉞赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㉟赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊱赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊲赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊳赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊴赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊵赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊶赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊷赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊸赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊹赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊺赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊻赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊼赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊽赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊾赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)
- ㊿赤黄褐色土 (灰化物、焼土、粘性がある)

挿図109 南谷大山遺跡B区BS14-26遺構図

土 坑 床面の北東隅の壁際にSK01が確認された。このSK01はBS I14-1の床面と同じ高さで検出された。

SK01の平面は西側が方形、東側が丸味をもった形になっている。規模は東西が1.3m、南北が0.7mを測り、深さは22cmである。土坑の底面東側にピットが検出された。このピットは土坑埋土上面から掘り込まれた形跡はなく、自然堆積した埋土の下から検出された。従って、このピットは土坑に伴うものか、それ以前に掘られたものであるかであろう。後者の場合、BS I26の主柱穴の移動があったと考えられる。

遺 物 出土遺物には複合口縁をもつ壺Po1~Po5、複合口縁をもつ甕Po6~Po36、直口壺Po37~Po40、小型丸底壺Po41~Po43、高杯Po44~Po62、小型高杯形器台Po63、鼓形器台Po64、甕Po65・Po66、須恵器蓋杯（山本編年I期・陶邑編年TK23並行）Po67、土錘Po69~Po71、土玉Po72・Po73、蓋Po68、斑晶岩質花崗岩製のスクレイパーS1、泥岩製の砥石S2、鎌F1、柳葉鍔系の鉄鏝F2、刀子F3~F5、碧玉製管玉J1が出土している。

BS I14-1の床面から出土した主なものは、北西隅で出土している口縁部ナテ仕上げで、大きく外反して立ち上がり端部に平坦面をもつ壺Po1・Po5、口縁部ナテ仕上げで、口縁部下端が鋭く外方に突出する甕Po15があり、北側で出土している口縁部外傾して立ち上がり、端部が丸く収められ、底部内面に指頭圧痕の残る直口壺Po37、浅い椀状の杯部をもつ高杯Po46がある。

また、口縁部ナテ仕上げで、器壁が薄く、端部が丸く収められ、頸部外面に波状紋の施されたPo7・Po23と深い椀状の杯部をもつ高杯Po60が、共に、BS I14-1内SK01より出土している。

BS I14-2の床面から出土した主なものは、中央より北側で出土している口縁部立ち上がりが長く、端部に平坦面をもつ甕Po6、小型丸底壺の胴部片Po42、高杯の裾部Po62がある。また、口縁部ナテ仕上げで、口縁部下端が鋭く外方に突出するPo12・Po13はPo13が北西隅から潰れた状態で出土し、その下からPo12が出土している。

時 期 BS I14-1・2の時期は床面出土土器から、古墳時代前期前半にはほぼ連続して建て替えられたと考えられる。BS I14-1の柱穴が、貼床下から検出されたことは、BS I14-1からBS I14-2へと縮小されたと考えられる。

BS I26（挿図109・110、図版18・64）

位 置 調査区の西側、c22グリッド付近で、舌状に延びだした丘陵の先端で広い平坦面を成している標高約68.5~69m付近に位置する。すぐ近くにたくさんの竪穴住居跡があり、中でも、BS I13・BS I14・BS I24はBS I26と重複して建てられている。

形 態 BS I26は平面が隅丸五角形である。規模は東西が9.3m、南北が8.9mで、床面積は57.0㎡である。残存壁高は最も残りの良い南壁で0.72mである。この住居に伴うと考えられるピットは15個ある。その内、主柱穴と考えられるものはP27~P31、中央ピットはP40である。主柱穴の規模は、P27~P32から順に、(36×31~76.6)cm、(70×40~44.2)cm、(59×42~37.1)cm、(30×26~40.5)cm、(68×65~74.8)cmである。主柱穴間距離はP27~P28の順に、4.1m、3.5m、3.5m、3.4m、4.3m、6.0mである。しかし、P31~P27の主柱穴間距離は他のものと比べると長いので、途中に、もう1本主柱穴があると思われる。検出ピットの位置関係より、P32又はP24が考えられる。BS I14によって、床面が15~20cm程削られていて残りが悪いが、規模はそれぞれP32(46×38~6.0)cm、P24(34×28~8.3)cmである。さらに、P25の南側にあるP35も主柱穴になる可能性があり、規模は(45×38~20.9)cmである。

中央ピット 中央ピットP40は3回の掘り込みがあった。このうち、2つのピット貼床の下から検出された。重複の関係が断面で判断できなかったが、2つのうちで柱穴を繋ぐ線の交点に近いもので判断した。規模は東西で72cm、南北で50cmを測り、深さは35.9cmであった。平面は東西に長い楕円形で、二段に掘り込まれていた。東側に平坦な面をもち、上縁部から平坦面までの深さは13.4cmであった。

壁溝 壁溝は南側と西側で確認でき、幅が20～50cm、深さが8～13cm程であった。特に南西側の壁溝は広く、断面は床面から壁際に向かって緩やかに傾斜し、壁際に最も深くなるという「レ」字状を呈する。東側の壁溝の断面は「U」字状を呈する。西側ではBSI13の貼床下から壁溝が検出できた部分もあるが、コーナー部分が正確には検出できなかった。

埋土 遺構埋土は61層に分層できた。⑬～⑳・㉔～㉙層がBSI26の埋土、㉑～㉓層がBSI26のピットの埋土、㉚～㉜層がBSI26内SK01の埋土である。その他はBSI14に関係する土層である。

遺物出土状況 出土遺物には、複合口縁をもつ甕Po1～Po3、壺又は甕の底部Po4、高杯Po5、不明鉄器F1がある。

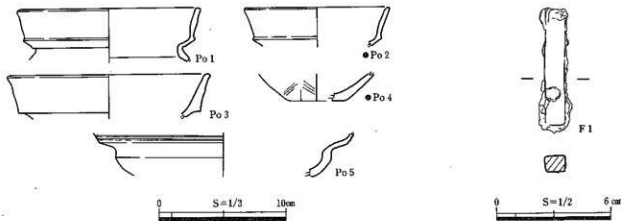
床面出土土器はないが、口縁部ナデ仕上げで、器壁が薄く、端部が丸く収められているPo2と平底を呈する底部Po4が、共に、P31より出土している。

時期 BSI26の時期は、P31出土の土器から弥生時代終末と考えられる。

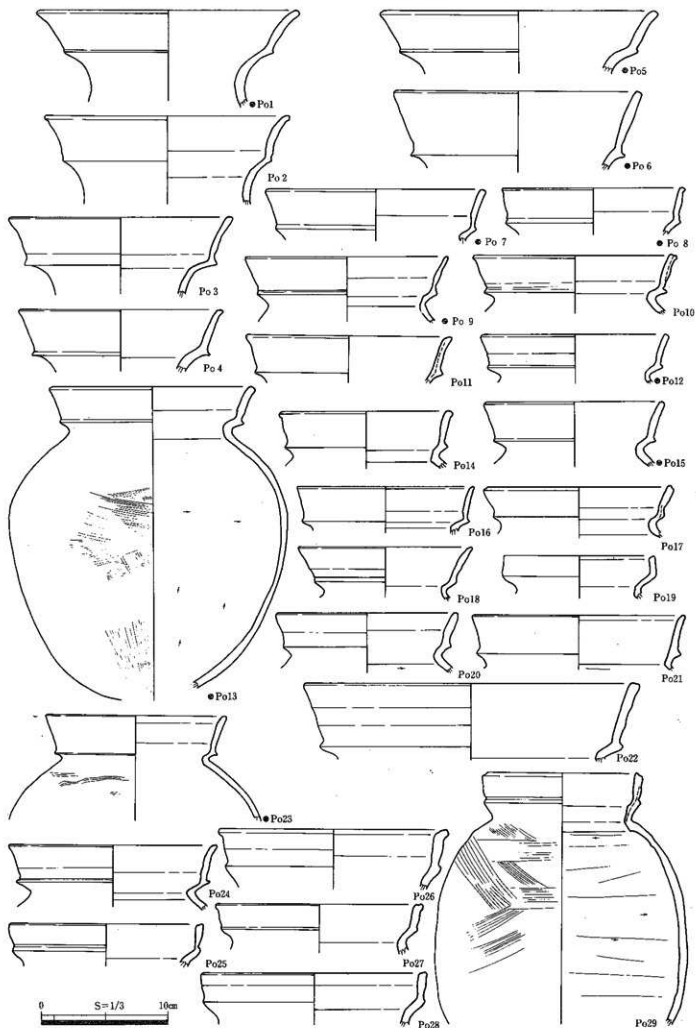
周辺住居の時期 六角形の大型の住居BSI21とBSI26との時期差は決め手はない。しかし、極めて近接して2つの住居が検出されたことから同時に建てられたとは考えられず、時期差を以て建てられていたと推察する。出土遺物の全体を比較したとき、BSI21の出土遺物で口縁部外面に平行沈線が施された甕Po1が床面より出土していることを考慮すると、BSI26の方が新しいと考えられる。

さらに、重複しあっている住居の関係について述べると次のようである。BSI26周辺には、BSI13・BSI14・BSI24・BSI21が存在する。これらの時期は、BSI13・BSI24が古墳時代中期後半で、両者間でも重複関係があり、断面の観察により、BSI24の方が新しいことが分かっている。BSI14は古墳時代前期前半であり、BSI21・BSI26は弥生時代終末である。

以上のことから、重複関係にある住居の時期は、新しい順に、BSI24、BSI13、BSI14、BSI26、BSI21と考えられる。



挿図110 南谷大山遺跡B区SI26出土遺物実測図



挿図111 南谷大山遺跡B区S114出土遺物実測図(1)

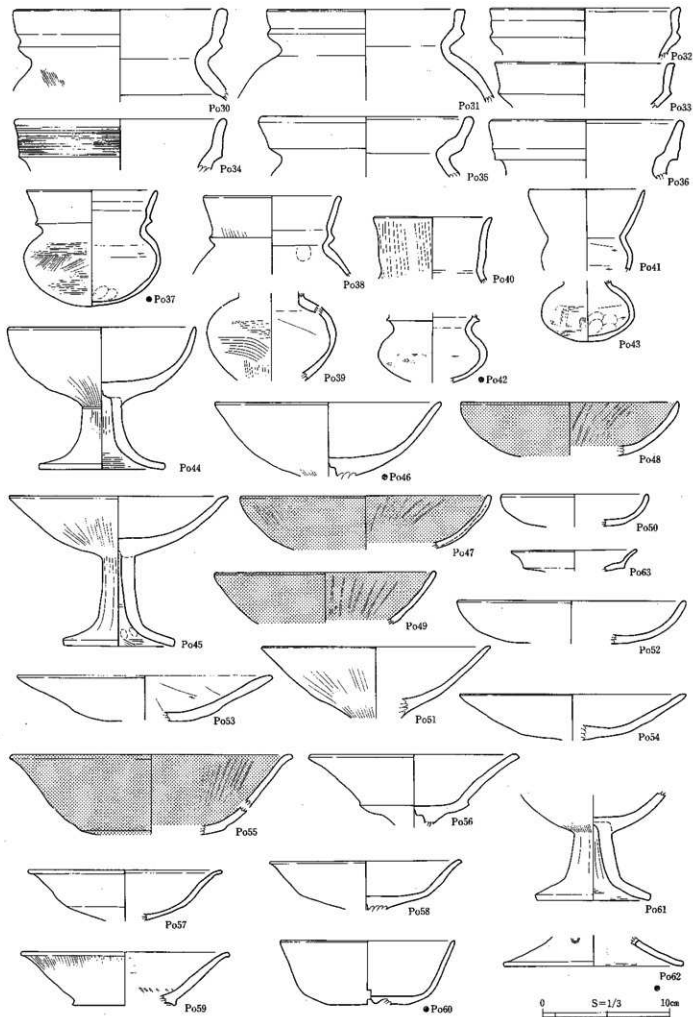
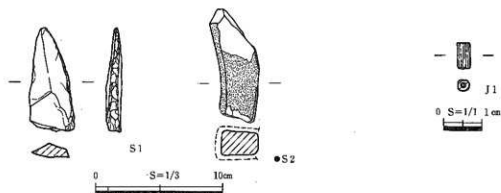
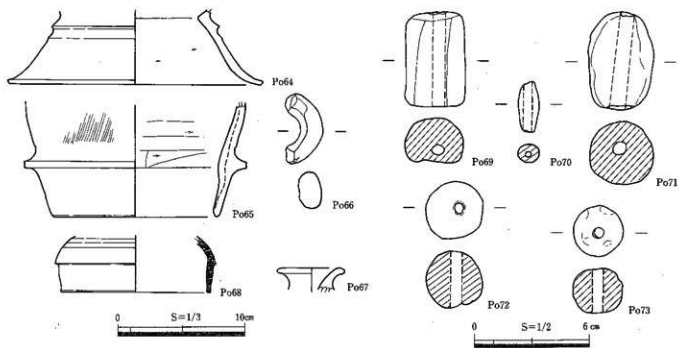
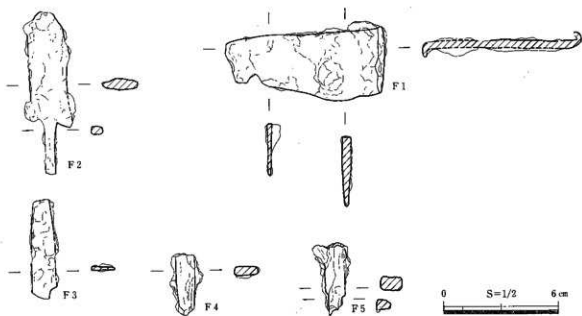


插图112 南谷大山遺跡B区S114出土遺物実測図(2)



挿図113 南谷大山遺跡B区SI14出土遺物実測図(3)



挿図114 南谷大山遺跡B区SI14出土遺物実測図(4)

BS I 15 (挿図115・116、図版18・61)

位 置 調査区のほぼ中央A20グリッドにあり、標高73.0m～73.6mのごく緩やかな斜面に位置している。北東側約3mにはBS I 17、南東側約2mにはBS I 16・25、南側2.5mにはBS I 19がある。

形 態 周辺は黒褐色土が堆積しており、これを除去することでプランを検出することができた。緩やかな斜面に立地しているために南側壁は流失しており、原形を留めていない。遺存している三壁の様子から平面は方形を呈すものと考えられる。

規模は、南側を復元して考えると東西3.22m、南北3.2mを測り、床面積は約10.3㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.47mである。

壁溝は、北側壁際に遺存しており、幅8～15cm、深さ2～4cmを測り、断面逆台形状を呈す。

主柱穴と考えられるものは確認できなかった。

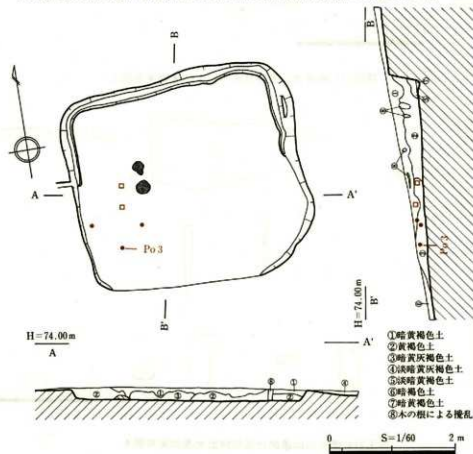
焼土面 住居の中央やや西側に当たる部分で2カ所の焼土面が検出された。付近には石が2個並んで検出された。

埋 土 埋土は4層に分層できる。これらは、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が窺える。

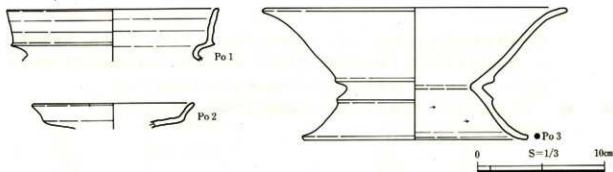
遺 物 出土遺物は、図化できたものに複合口縁をもつ甕Po 1、小型高杯形器台Po 2、鼓形器台Po 3がある。

出土状況 このうち床面からは、南側から端部がやや肥厚し、やや器高が低くなるPo 3が出土している。その他はいずれも埋土中からの出土である。

時 期 BS I 15の時期は、床面出土土器から古墳時代前期前半と考えられる。



挿図115 南谷大山遺跡B区SI15遺構図



挿図116 南谷大山遺跡B区SI15出土遺物実測図

B S I 16 (挿図117・118、図版19・61)

位置 調査区のはほぼ中央A・B20グリッドにあり、標高72.4m～73.2mの緩やかな斜面に位置している。北西側約2mにはBSI15、北側約2mにはBSI17があり、南側はBSI25の埋土を床面としている。

形態 周辺は黒褐色土が堆積しており、これを除去することでプランを検出することができた。緩やかな斜面に立地しているために南側壁は流失しており、原形を留めていない。遺存している三壁の様子から平面は隅丸方形を呈すものと考えられる。

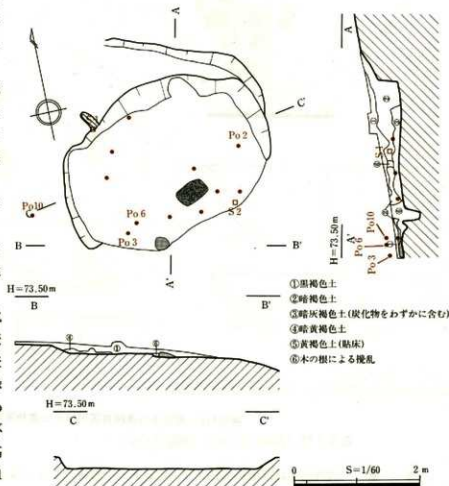
規模は、東西3.06m、南北2.1m以上を測り、床面積は約6.4㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.23mである。壁溝・支柱穴は検出されなかった。

焼土面 住居の中央に当たる部分で50×30cmの楕円形に広がる焼土面が検出された。

貼床 住居のはほぼ中央部分で、黄褐色土による貼床がなされ、この部分が固く締まっている。

埋土 埋土は4層に分層できる。これらは、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が窺える。

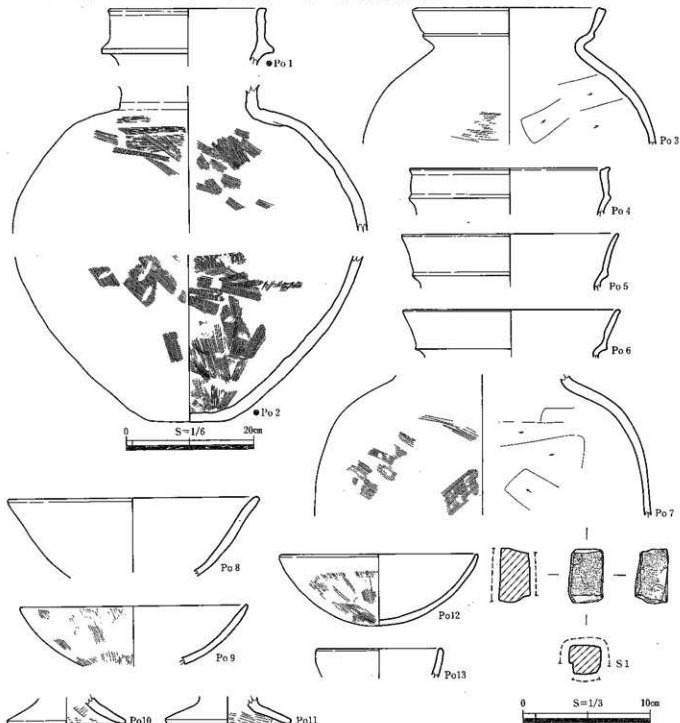
遺物出土状況 出土遺物は、図化できたものに大型壺口縁部Po1、大型壺胴部Po2、複合口縁をもつ甕Po3～Po6、胴部Po7、高杯杯部Po8・Po9、高杯脚部Po10・Po11、椀Po12、小型鉢と考えられるPo13、流紋



挿図117 南谷大山遺跡B区SI16遺構図

岩質凝灰岩製砥石 S1 がある。このうち床面からは Po1・Po2 が出土している。大型壺 Po2 は、底部が BS I14 の埋土中からの出土であるが、器壁の厚さ、内面の調整及び付着物が類似していることから同一個体と考えた。その他は埋土中からの出土である。

時期 BS I16 の時期は、床面出土土器から古墳時代中期後半と考えられる。



挿図118 南谷大山遺跡B区S116出土遺物実測図

BS I17 (挿図119~121、図版19・61)

位置 調査区のほぼ中央A19グリッドにあり、標高73.5m~74.0mのごく緩やかな斜面に位置している。西側約3mにはBS I15、南西側約2mにはBS I16がある。

形態 周辺は黒褐色土が堆積しており、これを除去することでプランを検出することができた。

緩やかな斜面に立地しているために南側壁は流失しており、原形を留めていない。遺存している三壁の様子から平面は方形を呈すものと考えられる。

規模は、南側を復元して考えると東西2.78m、南北2.8mを測り、床面積は約7.8㎡である。

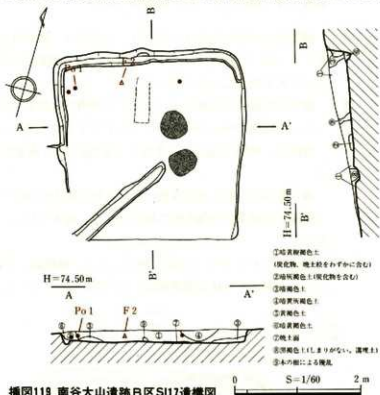
残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.33mである。

壁溝は北側及び西側壁際で検出された。幅7~14cm、深さ3~5cmを測り、断面逆台形状を呈す。

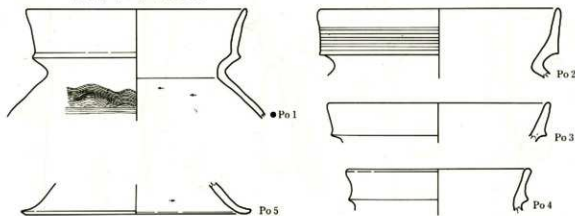
主柱穴は検出されなかった。

焼土面 住居の中央やや東寄り
で44×32cmの不整形
円形に広がる焼土面が
2カ所検出された。

炭化物 床面北側壁寄り
で炭化物片が検出されたが、
遺存状態は非常に悪く
どの部分であるかは特
定できない。BS I 17



挿図119 南谷大山遺跡B区SI17遺構図



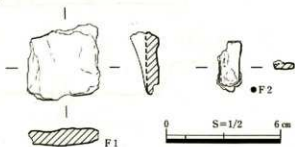
挿図120 南谷大山遺跡B区SI17出土遺物実測図(1)

はこのことから焼失したものと考えられる。

埋土 埋土は4層に分層できる。これらは、
住居中央に向かって堆積しており自然堆
積の状況が窺える。②層は炭化物を多量
に含んでいる。

遺物 出土遺物には、凶化できたものに複合
出土状況 口縁をもつ甕Po 1~Po 4、脚部Po 5、鉄
斧と考えられるF1、不明鉄器F2がある。

このうち床面からは、口縁部をナデの



挿図121 南谷大山遺跡B区SI17出土遺物実測図(2)

みて仕上げるPo1が北側壁寄り出土している。その他は埋土中からの出土である。

時期 BS I 17の時期は、床面出土土器から弥生時代終末と考えられる。

BS I 18 (挿図122-124、図版19・61)

位置 調査区のほぼ中央A20・21グリッドにあり、標高71.8m~72.3mのごく緩やかな斜面に位置している。北側約3.2mにはBS I 15、北東側約2mにはBS I 25がある。北東側では埋土上にBS I 19が造られている。

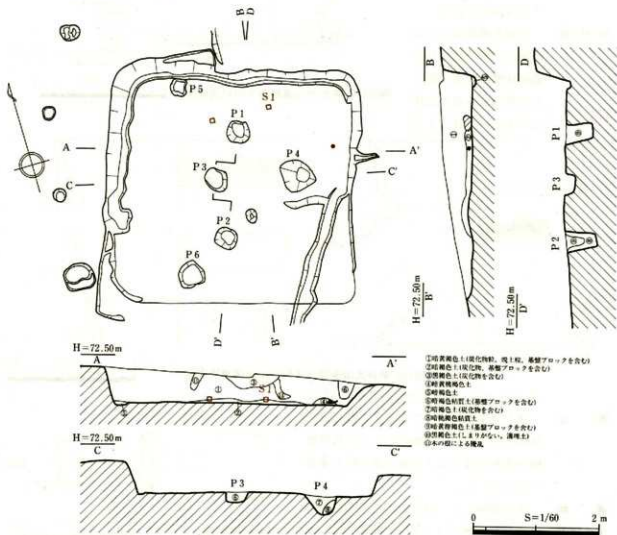
形態 緩やかな斜面に立地しているために南側壁は流失しており、原形を留めていないが、遺存している三壁の様子から平面は方形を呈すものと考えられる。

規模は、南側を復元して考えると東西3.5m、南北3.05mを測り、床面積は約10.7㎡である。

残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.7mである。

壁溝は北側及び西側壁際で検出された。幅8~14cm、深さ3~7cmを測り、断面逆台形状を呈す。

支柱穴はP1・P2の2個と考えられる。規模は、P1(34×33-49)cm、P2(36×32-52)cmを測る。支柱穴間距離は1.7mである。



挿図122 南谷大山遺跡B区SI18遺構図

中央ピット 中央ピットは、床面のほぼ中央P1-P2間にあるP3と考えられ、(42×35-16)cmを測る。埋土は、⑦層が単層で入る。

また、住居東壁付近に(50×48-30)cmを測るP4があるが、これはいわゆる特殊ピットと考えられる。埋土は⑧・⑨層が入る。⑧層には炭化物を含む。

埋土 埋土は厚く堆積した①層と床面付近の②層・③層の3層に分層できる。②層は炭化物を多量に含んでいる。

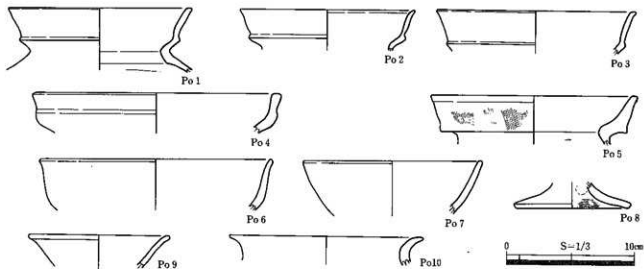
このことから、BSI18は火災に遭った可能性がある。

遺物出土 出土遺物は、図化できたものには複合口縁をもつ高杯Po1-Po5、碗状の杯部をもつ高杯Po

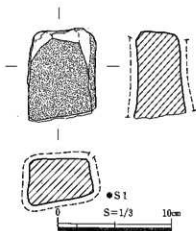
状況 6・Po7、高杯脚部Po8、器台上上部Po9、口縁部Po10、細粒花崗岩製砥石S1がある。

このうち、床面北寄りでS1、床面東壁寄りで高杯が出土している。高杯は図化できなかったが、杯底部が円盤充填されるものである。その他は、いずれも埋土中からの出土である。

時期 BSI18の時期は、出土土器から古墳時代前期前半と考えられる。



挿図123 南谷大山遺跡B区SI18出土遺物実測図(1)



挿図124 南谷大山遺跡B区SI18
出土遺物実測図(2)

BSI19 (挿図125・126、図版20・61)

位置 調査区のはほぼ中央A20・21グリッドにあり、標高72.2m～72.7mのごく緩やかな斜面に位置している。BSI19は、BSI18の北東側埋土を床面にし、BSI25を切って造っている。

形態 掘り込みが浅く四壁の遺存状態は悪い。また、東側では後世の耕作による溝が床面にまで達している。南側・東側壁は流失しており原形を留めていない。遺存している壁の様子から平面は隅丸方形を呈すものと考えられる。

規模は、東西3.1m以上、南北2.4m以上を測り、床面積は約7.4㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.27mである。

壁溝は検出されなかった。

主柱穴は4個と考えられるが、2個しか検出できなかった。それぞれの規模は、P1(30×28-44)cm、P2は後世の耕作による溝に切られており正確な規模は不明である。

焼土面 住居のはほぼ中央に当たる部分で大小2カ所の焼土面が検出された。大きいものは幅1.2m×0.6mの不整形に広がるもので、小さいものは径約30cmのはほぼ円形に広がるものである。

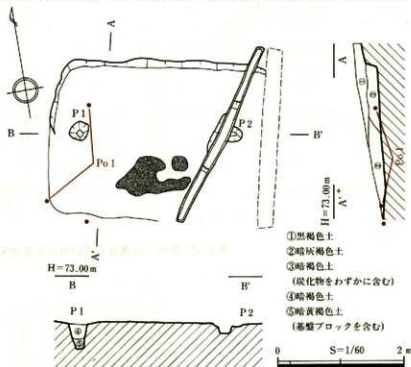
埋土 埋土は3層に分層できる。これらは、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が窺える。

**遺物
出土状況** 出土遺物は、図化できたものに複合口縁をもつ甕Po1～Po3、高杯杯部Po4、鼓形器台脚台部Po5がある。

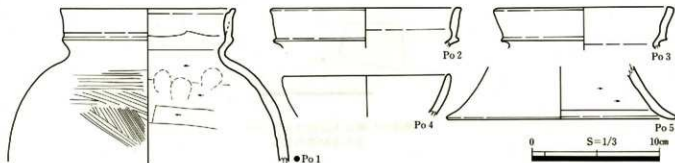
このうち床面からは西側壁寄り、肉厚で口縁部下端が丸味をもつPo1が出土している。その他は埋土中からの出土である。

このうち床面からは西側壁寄り、肉厚で口縁部下端が丸味をもつPo1が出土している。その他は埋土中からの出土である。

時期 BSI19の時期は、床面出土土器から古墳時代中期後半と考えられる。



挿図125 南谷大山遺跡B区SI19遺構図



挿図126 南谷大山遺跡B区SI19出土遺物実測図

位置 調査区はやや東側のB18グリッドにあり、標高75.8m~76.8mの緩やかな斜面に位置している。北側5mには、BSI32がある。また、住居西側はBSI33の埋土を掘り込んで作られている。

形態 四壁の遺存状態はよく、平面は隅丸方形を呈す。また、北側には、幅34~60cm、高さ25~60cmを測るテラスが、プランに沿って巡っている。

規模は、東西6.14m、南北6.00mを測り、床面積は約36.8㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大1.37m（上縁~テラス0.6m、テラス~床面0.7m）で、当遺跡内では最も深く掘り込まれている。

壁溝は南側がとぎれるものの、壁際をほぼ全周する。規模は、幅6~16cm、深さ3~7cmを測り、断面逆台形状を呈す。北側・西側・南側壁溝内に小ピットが検出されたが、これらは、壁溝内に立てたと考えられる板状のものを止めるためのものと考えられる。

支柱穴はP1~P4の4個と考えられる。それぞれの規模は、P1（50×48-87）cm、P2（55×40-80）cm、P3（52×50-87）cm、P4（54×50-83）cmを測る。柱穴間距離は、P1~P2間から順に、3.0m、3.1m、3.4m、3.0mを測る。また、P2~P3のライン上に、（48×40-35）cmを測るP6がある。P6は、支柱穴に比べると深さが浅いことから、補助柱穴と考えられる。

中央ピット 中央ピットの周囲は、長径1.77m、短径1.6m、高さ4cmに土手状に高くなっている。この段は淡灰赤黄色粘質土によって一段高く作られている。

中央ピットはP5で、この土手状に高い部分の中央部ではなく、やや東側に寄って掘られている。

平面は長楕円二段掘りするタイプである。まず、上縁部を（78×52-9）cmに掘り、さらにやや南側を（48×40-48）cmに掘っている。埋土は5層に分層でき、いずれも炭化物を含んでいる。

出入口 また、西側壁付近でごく浅いP7・P8の二つのピットが並んで検出された。P1~P4間には東側で見られた補助柱穴がなく、空間的に広いスペースがあることと考え合わせると、この二つのピットは、出入口で使用された階段状のものを立てたピットと考えられ、BSI20は住居の西側を出入口にしていたと考えられる。

焼土面 焼土面は検出されなかった。

炭化物 BSI20は火災に遭ったものと考えられ、床面のほぼ全面に、構造物と考えられる炭化物が多量に検出された。南東側コーナー付近では、他所に比べて炭化物の出土は少ない。

西側・南側壁から中央に向かって傾斜して出土しているものは、幅8~16cm前後を測る丸木状を呈し、垂木と考えられる。

また、北側、東側には床面のほぼ直上に、床面にほぼ平行して幅30cm前後の板状の炭化物が検出された。特に、北側のものに関しては、板状の炭化物の下から、母屋桁と考えられる幅5cm前後の丸木状の炭化物が出土している。

板状の炭化物の上には、カヤと考えられる炭化物が板と直交してのっている。この状況は、南側の垂木にも見られるもので、これらの板状のもの、垂木の代わりまたは屋根に使用されたものと考えられる。

北東・北西コーナーのものは、幅20cm前後と他のもの比べて太く、椀首と考えられる。コーナー部分の炭化物は、他所に比べて密に出土している。

北東側に壁に平行して検出された幅18cm前後・厚さ15cm前後の比較的大い炭化物は、桁または梁と考えられる。

西側壁には、幅3cm前後の丸木状の炭化物が、垂木と考えられる炭化物に直交して検出された。これらは、木舞と考えられる。

鑑定を依頼したものには、9種類の樹木のうち8種類までが広葉樹で、広葉樹の中でもスゲイが多く使用されていた。板と考えられるものにはスギが、使用されていた。

ところで、北西側には甔形土器が倒立したままの状態で見出された。甔形土器の回りには炭化物が折り重なるようにあり、偶然炭化物がない部分に土器があったことから、倒れることなく検出されたと考えられる。

埋土 埋土は25層に分層できる。⑦・⑧・⑩層を除き①～⑭層はほとんど均質な層で、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が窺えるが、⑮・⑯・⑰・⑱は中央部で盛り上がるような堆積状況を示し、炭化物を多量に含んでいることから、屋根などが燃え落ちた状況が窺われる。また、炭化物を含む⑰層の下にはP6があり、燃え残った柱が立っていたと考えられる。⑦・⑧・⑩層には砂礫が含まれており、屋根には茅などの他に砂礫と一緒に葺かれていたと考えられる。

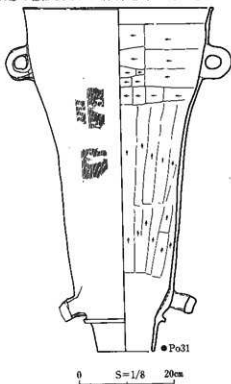
焼土・炭 中央ビット周辺を除く床面の中央部分で、炭化物を多量に含む層が、また、同様の部分でこの炭化物層の下からは、焼土を含む層が盛り上がるように検出された。これらは、炭化物を覆うように出土していることから、屋根には茅などの他に土と一緒に葺かれていたと考えられる。

遺物出土状況 出土遺物には、図化できたものに複合口縁をもつ壺Po1～Po5、複合口縁をもつ甕Po6～Po18、高杯Po19～Po24、鼓形器台上部Po25～Po27、小型高杯形器台Po28、小型丸底壺Po29、土玉Po30、釘状鉄器F1がある。

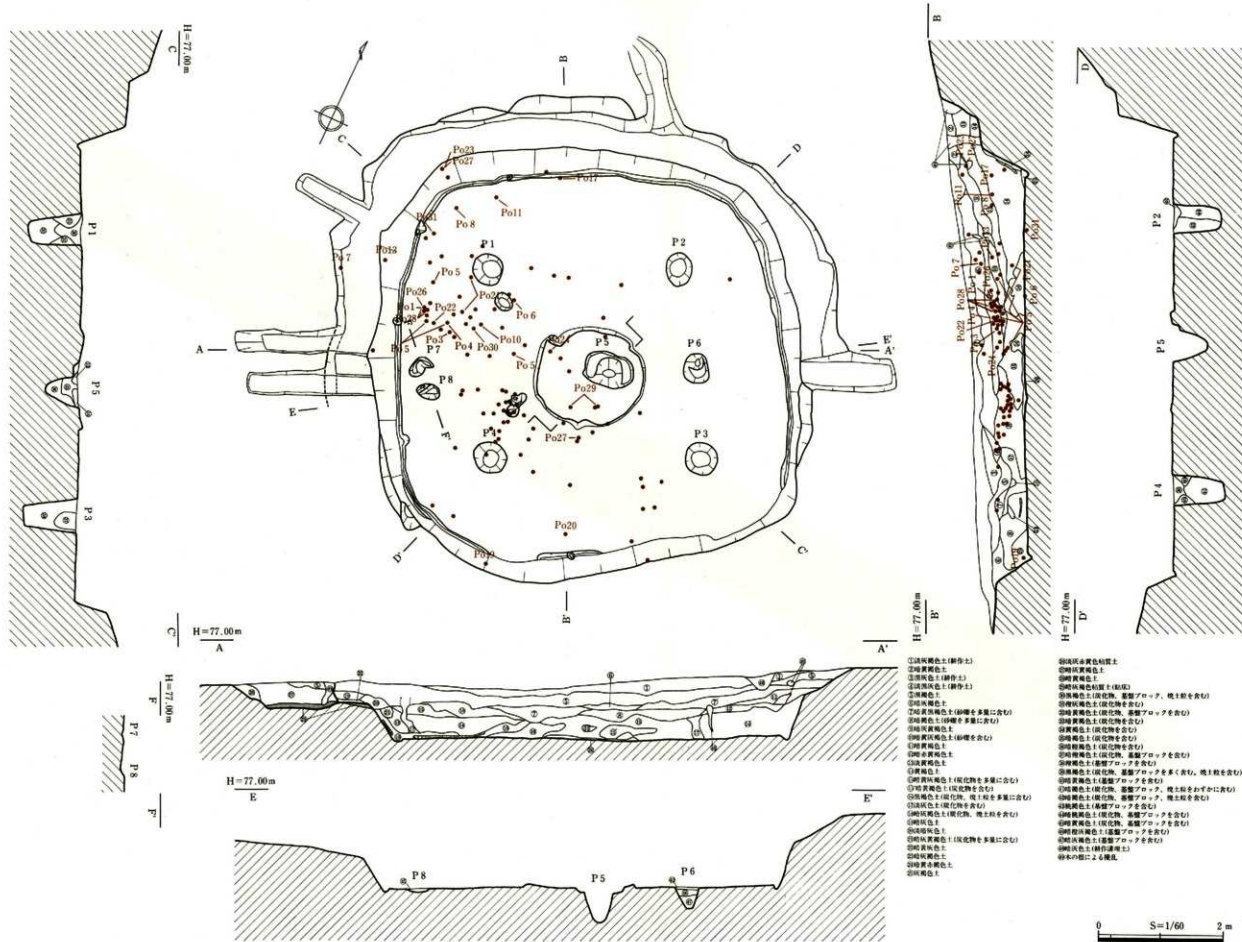
このうち床面からは、P1付近で口縁端部が平坦面をもつPo1、南西コーナー付近で大形でやや深い皿状の杯部をもつPo19、北西コーナー付近で甔Po31が口縁部を下にして立ったままの状態出土している。

その他は埋土中からの出土であるが、黒褐色土中で多量の土器が出土しており、火災で倒壊した後に土器が捨てられた可能性がある。

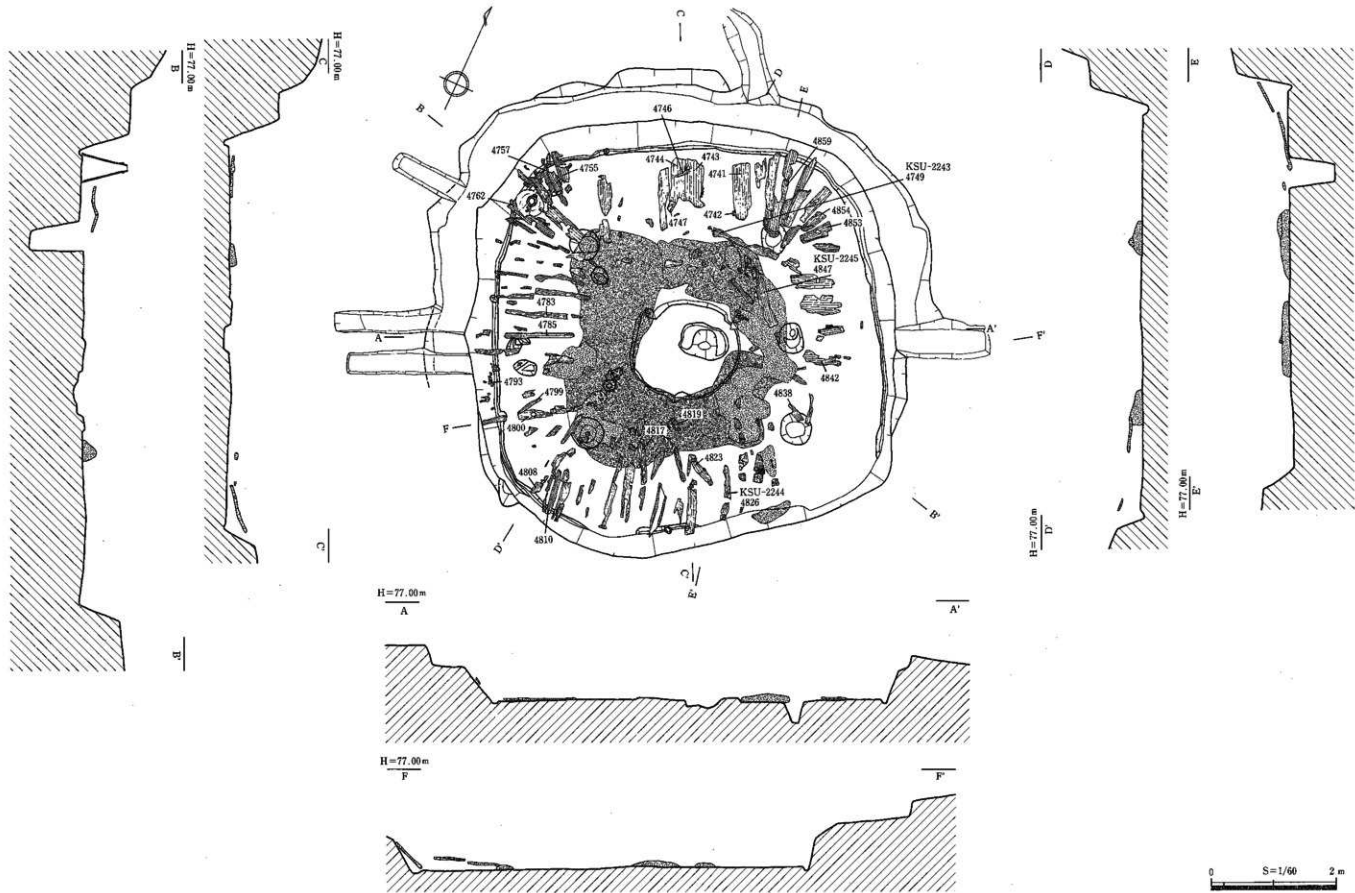
時期 BS I20の時期は、床面出土土器から古墳時代前期前半と考えられる。なお、Po11～Po18・Po30は弥生後期後半～終末にかけての特徴をもつものであるが、BS I20は、BS I33を壊して作られており、BS I33の土器が混入したものと考えられる。



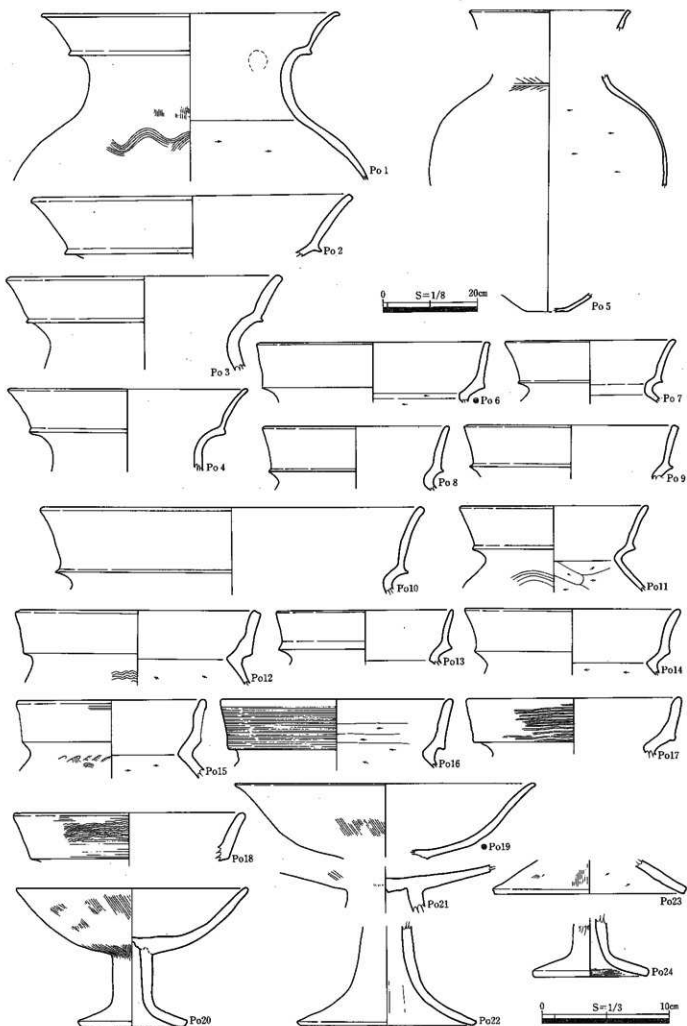
挿圖127 南谷大山遺跡B区SI20
出土遺物実測図(3)



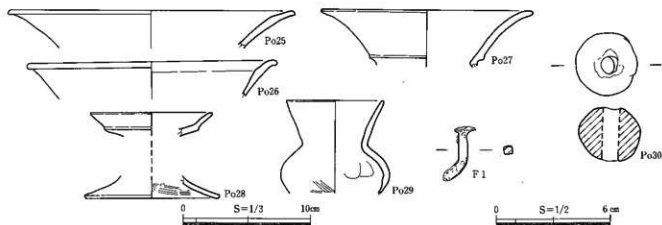
押田128 南谷大山遺跡B区S120遺構図



挿図129 南谷大山遺跡B区S120炭化物出土状況図



挿図130 南谷大山遺跡B区S120出土遺物実測図(1)



挿図131 南谷大山遺跡B区S120出土遺物実測図(2)

BSI 21 (挿図132・133、図版23)

位置 調査区の西側、d23グリッド付近で、舌状に延びだした丘陵の先端で広い平坦面を成している標高約68.5m～69m付近に位置する。すぐ近くにたくさんの堅穴住居跡があり、中でもBSI11・BSI13と重複して建てられている。

形態 BSI 21は平面が六角形である。規模は東西が11.1m、南北が9.4m以上で、床面積は82.8㎡である。非常に大型の住居であり、この集落の中心的な建てものだと考えられる。残存壁高は最も残りの良い南壁で0.4mである。床面上で検出できたピットは33個である。この内、主柱穴P1～P6、補助柱穴P7～P10、中央ピットP11である。主柱穴の規模は、P1～P6の順に(86×80-70.6)cm、(66×56-71.3)cm、(46×46-65.5)cm、(60×41-54.3)cm、(60×54-85.9)cm、(52×46-86.1)cmである。主柱穴間距離はP1～P2の順に、4.7m、4.5m、4.5m、4.5m、4.3m、4.3mである。P4はBSI13によって、かなり削られている。P1・P2には柱を固定するための石がそれぞれP1から3個、P2から3個、底の方より出土した。石の大きさは、最大で長さ20cm、幅13cm、最小で長さ10cm、幅5cmであり、角礫と円礫があった。補助柱の規模は、P7～P10の順に、(57×54-61.5)cm、(50×50-29.4)cm、(32×30-25.8)cm、(40×34-52.1)cmである。P3～P4、P4～P5の間で補助柱穴は確認できなかった。

中央ピット 壁溝は南壁の中央部と南東壁で確認でき、幅が10～15cm、深さが3～8cm程であった。中央ピットP11は平面が不定形で、規模は長軸、短軸共に約1m、深さ0.66mである。東側では2段を呈し、上縁部から1段目までが、0.36mであった。ピットの埋土中からは、モモの種子が出土した。

貼床 北西隅で、暗赤褐色粘質土の貼床が施されていた。確認できた範囲は南北1.5m、東西で2.6mである。

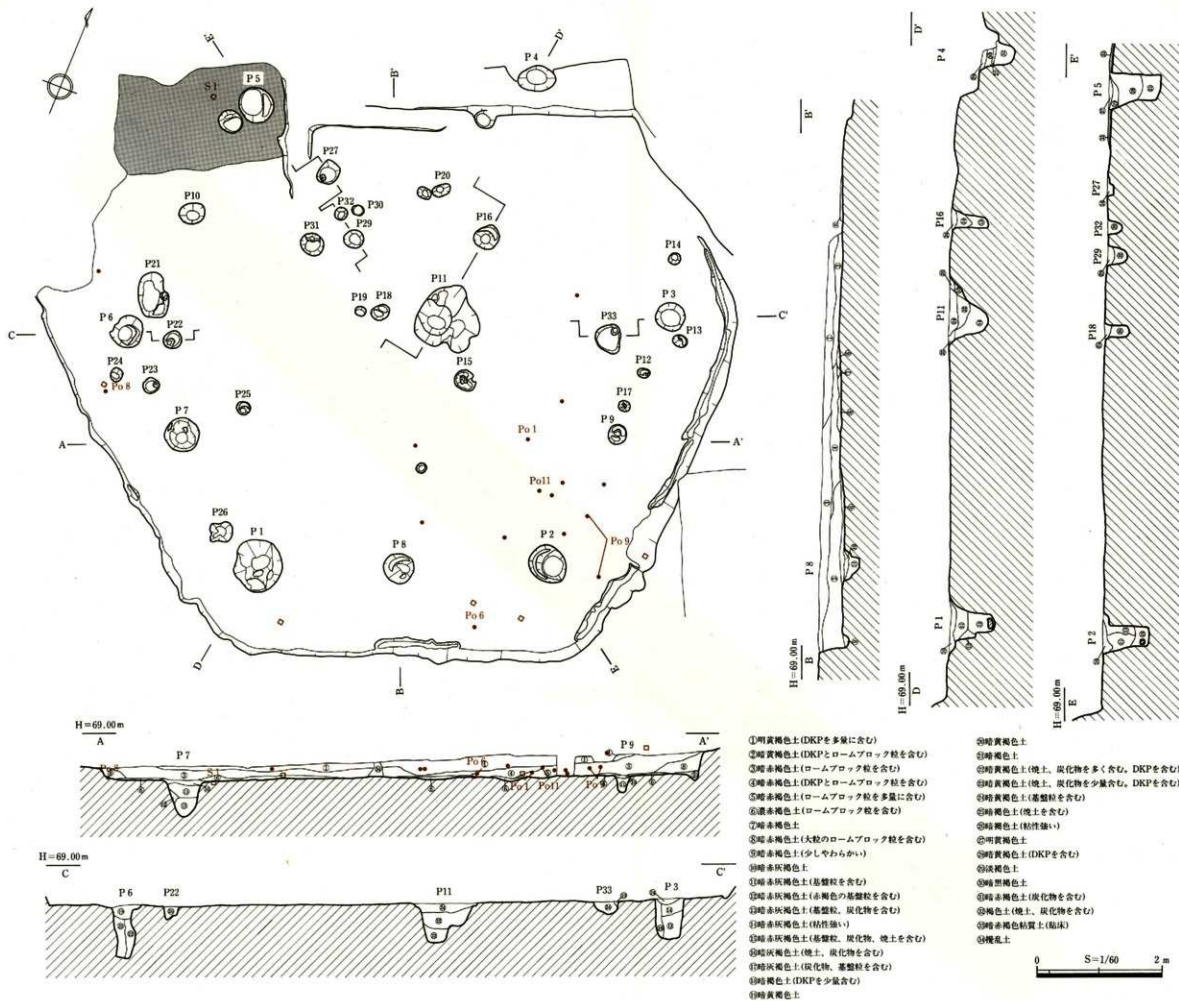
埋土 遺構埋土は33層に分層できた。①～⑨層は埋土、⑩～⑳層はピットの埋土、㉑層は貼床である。埋土は自然堆積である。

遺物出土状況 出土遺物には複合口縁をもつ甕Po1～Po6、複合口縁をもつ壺Po7、小壺Po10、器台Po9、高杯脚部Po8、脚部Po11、碧玉の石核S1が出土している。

床面から出土したものは、床面の中央付近で、口縁部平行沈線が施され、口縁部下端が下垂する甕口縁Po1、大きく外反して立ち上がり、端部を外方に引き出し、丸く収めているPo6、南東壁際で、外面ナデ仕上げ、端部は外反して丸く収め、内面削り後にナデ仕上げしてある器台Po9である。北西隅で貼床の上から碧玉の石核S1が出土している。

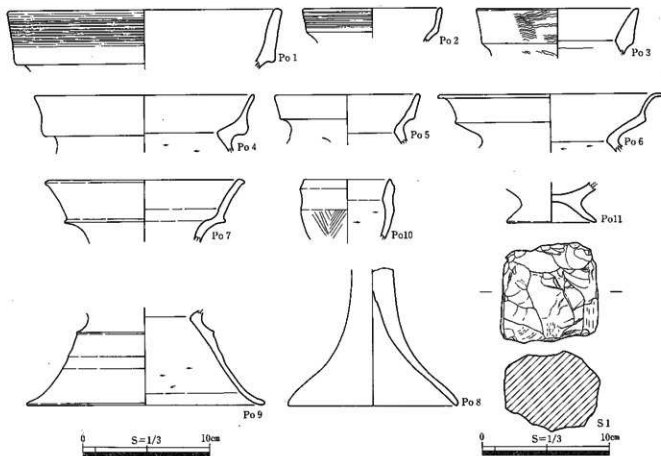
時期 時期は床面出土土器から、弥生時代終末と考えられる。

北東側で確認された大型の五角形の住居BSI26との時期差は平面的な重複関係が試掘トレンチがあり、判断できなかった。また、BSI21の床面出土の甕Po6、器台Po9とピット



挿図132 南谷大山遺跡B区S121遺構図

内出土土器甕Po2・底部Po4との比較でも判断しにくい。しかし、両者の位置が非常に接近し、同時期に建てられていた可能性は少ない。従って、時期差をもたせるならば、出土遺物の全体を観察したとき、BS I 21の甕Po1が床面から出土していることに注目すれば、BS I 21の方が先行して建てられたといえよう。



押図133 南谷大山遺跡B区SI21出土遺物実測図

BS I 22 (押図134~141、図版23・62・63)

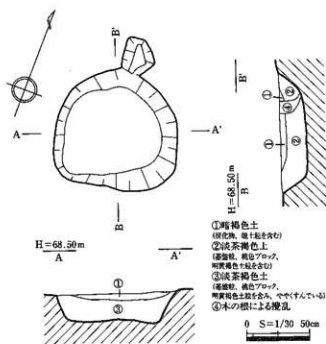
位置 BS I 22は、調査区西南部b23・b24グリッドに位置する。当地は標高66.3m~69mで、南西を向いた斜面である。当遺構付近では勾配が緩やかだが、遺構より下では急斜面となっている。北東約5mにはBS I 10が、北西約9mにはBS I 39が、南西約5mにはBS D 03が、それぞれ位置する。

形態規模 平面は方形を呈する。規模は東西約4.3m、南北約4.1m、最も残りのよい北壁で最大壁高約0.4mを測る。床面積は約16㎡である。

ピット ピットは全部で12個である。主柱穴はP1~P4で4本柱で建っていた。規模はP1(43×42~43)cm、P2(45×45~43)cm、P3(43×41~45)cm、P4(38×38~38)cmを測る。主柱穴間距離はP1~P2間の順に2.1m、1.8m、1.9m、1.7mである。

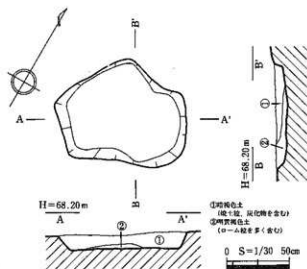
壁溝 東壁・南壁・西壁ぎわには、壁溝が走っている。断面はいずれも逆台形を呈し、深さはそれぞれ9cm・8cm・5cmを測る。

土坑 住居内に5つの土坑がみられる。SK01は、遺構内東部壁ぎわに位置する。平面は不整形、断面は逆台形を呈する。東部は一部、溝と重複している。規模は(103×83~10)cmを測る。

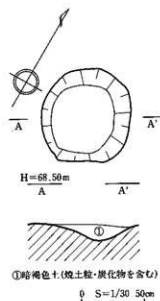


挿図135 南谷大山遺跡B区S122内SK02遺構図

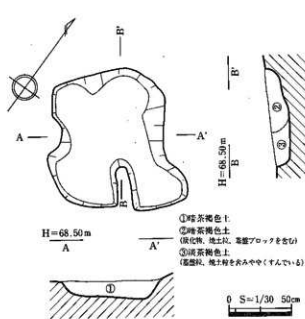
埋土は2層である。①層の暗褐色土（焼土粒・炭化物を含む）と②層明黄褐色土（ローム粒を多く含む）からなる。埋土を観察すると、当土坑が溝を切っていることがわかる。SK02は、住居内中央南に位置する。平面は円形を呈する、断面は逆台形を呈する。規模は $(100 \times 97 - 21)$ cmである。埋土は2層で、①層暗褐色土・②層淡茶褐色土からなる。土坑内には、P9・P10が位置する。SK03は遺構南西部、壁ぎわに位置する。平面は円形を、断面は逆台形を呈する。規模は $(72 \times 75 - 27)$ cmである。暗褐色土を埋土とする。上坑南部には、P5が存在する。埋土



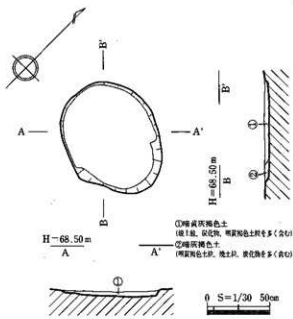
挿図134 南谷大山遺跡B区S122内SK01遺構図



挿図136 南谷大山遺跡B区S122内SK03遺構図



挿図137 南谷大山遺跡B区S122内SK04遺構図



挿図138 南谷大山遺跡B区S122内SK05遺構図

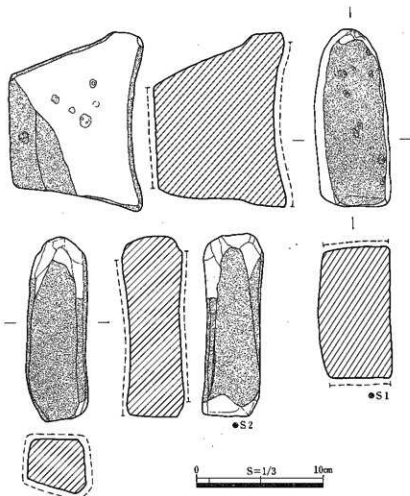
から、P5よりも当土坑の方が新しいといえる。SK04は、床面北部に位置する。平面は不整形を、断面は逆台形を呈する。規模は、(82×80-16)cmを測る。暗茶褐色土・淡茶褐色土を埋土とする。P6・P7・P8は当土坑内にある。当土坑南側の一部には、貼床がかかっていた。SK05は、遺構中央南、壁ぎわに位置する。平面は楕円形を、断面は逆台形を呈する。規模は(94×75-5)cmである。埋土は暗黄灰褐色土からなる。当土坑中央にP11がある。

貼床焼土 床面には貼床が施されている。SK01・P4・P12の間、SK02とSK05の間、SK04の3ヶ所である。厚さは4-2cmで、暗茶褐色土からなる。SK03の東側付近で、焼土面がみられる。平面は楕円形を呈し、(4×3.1)cmを測る。炭化物を伴う硬いものである。

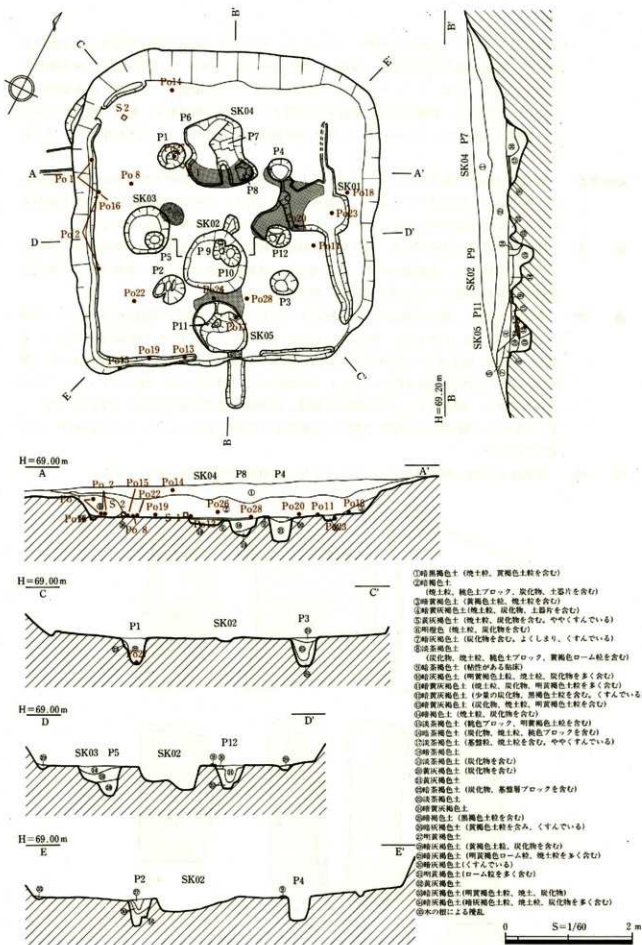
埋土 埋土は、8層に分層される。最上層の①層暗黒褐色土には、多くの土器片が含まれている。下の②・③層には、基盤層のブロックが混じる。各層の堆積の仕方から判断すると、埋土は住居の壁から中央にかけて流れ込んだ、自然堆積と思われる。

遺物 遺物としては、複合口縁を有する甕Po1-Po13、甕または壺の底部Po14・Po15、高杯Po16-Po18、直口壺Po19、椀Po20-Po22、器台Po23、杯Po24、杯脚部Po25、土玉Po26-Po28、砥石S1・S2が挙げられる。床面から検出されたものは、複合口縁をもつ甕Po1-Po3・Po8、高杯Po16・Po18、直口壺Po19、椀Po20・21、砥石S1・S2である。これらのうち、砥石S1・S2は鑑定の結果、流紋岩質凝灰岩製であることがわかった。一方、SK01より器台Po23が寝た状態で、SK05より高杯Po17が、P1より土玉Po27が、それぞれ出土した。

時期 床面出土の甕口縁Po1・Po2・Po3より、古墳時代中期後半と考えられる。



挿圖139 南谷大山遺跡B区S122出土遺物実測図(2)



挿図140 南谷大山遺跡B区S122遺構図

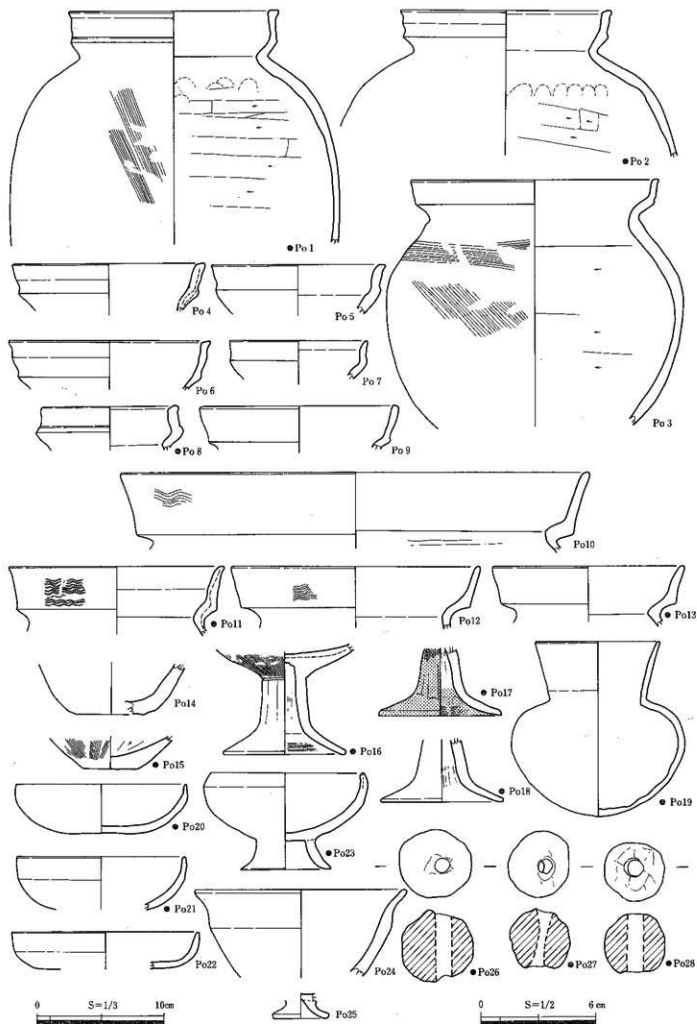


插图141 南谷大山遗址B区S122出土文物实测图(1)

B S I 23 (押図142~144、図版24・63)

位置 調査区のほぼ中央に20グリッドにあり、標高72m~72.7mの緩やかな斜面に位置している。北側周壁は耕作のために削平され、西側周壁はBS I 09によって切られている。

形態 各周壁は耕作等により攪乱されており、四壁の遺存状態は悪いが、遺存している壁の様子から平面は隅丸方形を呈するものと考えられる。

規模は、東西4m以上、南北5.06mを測り、床面積は約20.2㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い東壁で最大0.54mである。

壁溝は検出されなかった。

主柱穴はP 1~P 4の4個と考えられ、それぞれの規模は、P 1 (50×44-69) cm、P 2 (50×32-72) cm、P 3 (60×38-64) cm、P 4 (47×38-70) cmを測る。主柱穴間距離は、P 1~P 2間から順に2.7m、2.6m、2.7m、2.6mである。

また、(46×30-40) cmを測るP 6、(44×32-41) cmを測るP 7は主柱穴のラインより外側にあり、棟持柱の柱穴と考えられる。

その他にも床面上には、かなりの深さをもった13個のビットが検出された。それぞれの規模は、P 8 (61×30-42) cm、P 9 (50×44-48) cm、P 10 (34×26-10) cm、P 11 (39×25-40) cm、P 12 (19×19-20) cm、P 13 (37×34-6) cm、P 14 (36×19-10) cm、P 15 (38×33-41) cm、P 16 (45×38-39) cm、P 17 (46×30-25) cm、P 18 (31×26-52) cm、P 19 (45×29-51) cm、P 20 (43×22-62) cmを測るが、いずれも不規則に並んでおり柱穴等とは考えられない。用途は不明である。

中央ビット 中央ビットはP 5で、平面不整形円形で二段掘りとなる。上縁部は(67×56-10) cmに掘り、さらに東寄り(23×13-32) cm掘り込む。埋土は3層に分層でき、炭化物を含んでいる。

焼土面 焼土面は検出されなかった。

埋土 埋土は3層に分層できる。これらは、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が窺える。

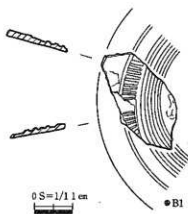
遺物出土状況 出土遺物は、図化できたものに複合口縁をもつ甕Po 1~Po 10、底部Po 11、鼓形器台上部Po 12、土玉Po 13~Po 17、甕F 1、仿製重圏文鏡B 1がある。

このうち床面からは、北西側で平行沈線が施されるPo 1、南西側で土玉Po 15、南東側で土玉Po 13・Po 14・Po 16・甕F 1・仿製鏡B 1、東壁際で土玉Po 17、P 8内で口縁部ナデのみのPo 5がそれぞれ出土している。その他は埋土中からの出土である。

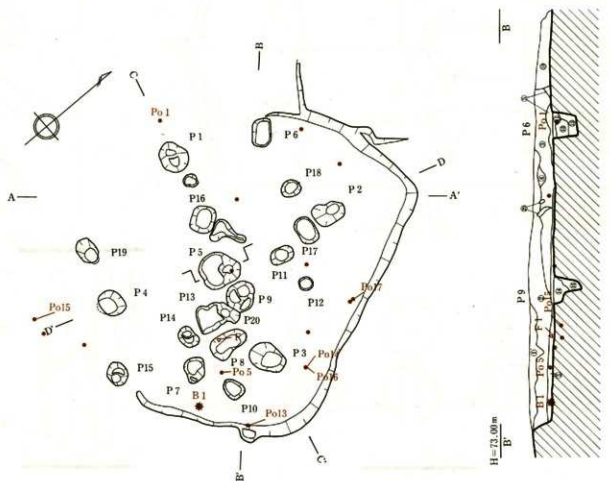
仿製重圏文鏡B 1は、復元径7.5cm、厚さ1.3mm~2mmを測り、幅6mmの平縁の内側にやや斜方向の櫛歯文が施され、その内側に4条の重圏が巡る。内区には、不明瞭ではあるが文様が施されるものと考えられる。

時期 BS I 23の時期は、床面出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。

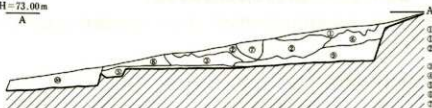
弥生時代後期の住居跡からの仿製鏡の出



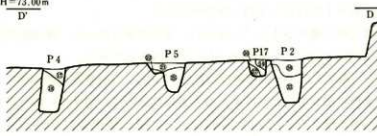
押図142 南谷大山遺跡B区SI23
出土遺物実測図(2)



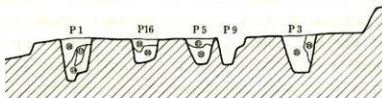
H=73.00m
A



H=73.00m
D'



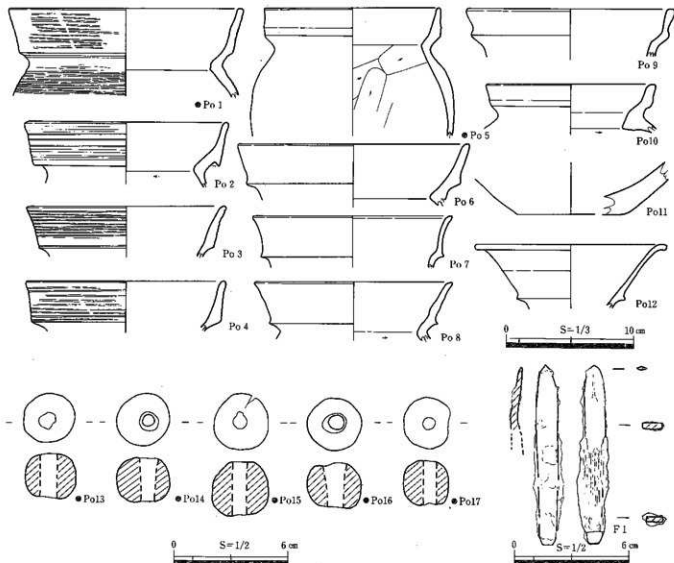
H=73.00m
C



- ①暗褐色土
- ②暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ③暗褐色土(炭化物、基盤ブロックをおよかに含む)
- ④暗褐色土
- ⑤暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ⑥暗褐色土
- ⑦暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ⑧暗褐色土
- ⑨暗褐色土
- ⑩暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ⑪暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ⑫暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ⑬暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ⑭暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ⑮暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ⑯暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ⑰暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ⑱暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ⑲暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ⑳暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉑暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉒暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉓暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉔暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉕暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉖暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉗暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉘暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉙暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉚暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉛暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉜暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉝暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉞暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㉟暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊱暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊲暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊳暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊴暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊵暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊶暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊷暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊸暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊹暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊺暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊻暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊼暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊽暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊾暗褐色土(炭化物をおよかに含む)
- ㊿暗褐色土(炭化物をおよかに含む)

0 S=1/60 2m

挿図143 南谷大山遺跡B区S123遺構図

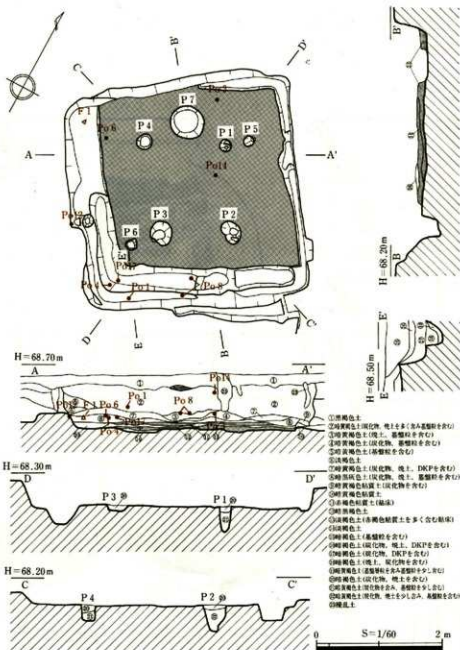


挿図144 南谷大山遺跡B区S123出土遺物実測図(1)

上例は、県内では米子市・福市遺跡吉塚31号住居跡、米子市・青木遺跡HS I 60に次いで3例目である。

BS I 24 (挿図145・146、図版24・63)

- 位置** 調査区の中央、C22グリッドの西側で尾根の頂部が大きく広がり平坦面をなす標高約68.5 m付近に位置する。BS I 24はBS I 14・26の中にある。
- 形態** BS I 14・26の埋土中に掘り込まれているため、遺存状態は良いが、検出作業が難しかったために発掘時には浅いものとなってしまった。平面は方形を呈す。
規模は東西3.64 m、南北3.61 m、床面積は13.14 m²である。残存壁高は断面図でみると、約0.60 mであるが、実際に掘りあげたものは、最も遺存状態の良い南壁で0.41 mである。
- 壁溝** 壁溝は南壁から西壁の壁ぎわに「L」字状にはしっていた。規模は全長が4.2 m、幅が最大42 cm、最小30 cmである。深さは南壁際中央で床面より最大26 cm、南西隅で最小20 cmであった。この壁溝は住居に伴うものとしては規模が大きく、もう一つの特徴として、南壁際中央やや東寄りに東西76 cm、南北44 cmの隅丸長方形の土坑状のものが床面より32 cm掘り込まれていた。柱穴は床面上で7個検出され、その内、主柱穴はP 1～P 4、特殊ピットはP 7と考えられる。主柱穴の規模はP 1～P 4の順に(19×18-54.1) cm、(38×24-47.6) cm、(39×34-29.4) cm、(25×23-26.1) cmである。主柱穴間距離はP 1～P 2間から順に、1.4 m、1.2 m、1.5 m、1.3 mである。特殊ピットと思われるP 7は(54×52-16) cmである。P 5・P 6は規模が順に(16×16-24.4) cm、(18×16-11.2) cmである。この2つのピットは、P 5



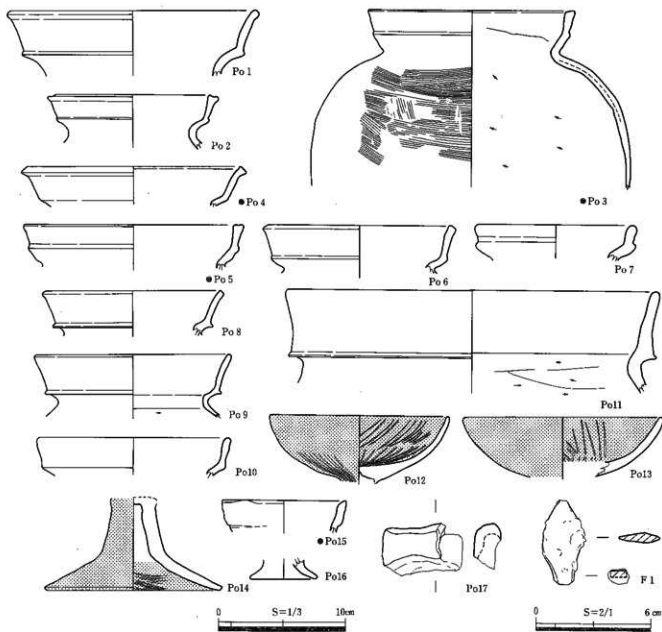
採図145 南谷大山遺跡B区SI24遺構図

がP1と、P6がP3と壁に平行するように並び、しかも、P1～P5、P3～P6間の距離がどちらも約70cmである。

埋土 埋土は22層に分層できた。①～⑩・⑮～⑰層は遺構埋土、⑪⑬層は貼床、⑫⑱層溝の埋土、⑳～㉒層はピット埋土である。②⑤⑥⑨層が東側でBS I14、西側でBS I13の埋土を掘り込んだ中に溜っている。従って、BS I24は②層上面から掘り込まれていることが分かる。さらに、南側でもBS I26の埋土を掘り込み、⑮層が溜っていた。従って、付近にあつて重複している住居の中で、一番新しい住居であることが分かった。貼床が2層あることから、床の貼り替えがあつたと思われる。

遺物 出土遺物は複合口縁をもつ壺Po1、同じく甕Po2～Po11、高杯Po12～Po14、直口壺Po15、脚部Po16、瓶の把手Po17、鉄鎌F1である。床面出土土器は、口縁部ナテ仕上げで、端部にしっかりした平坦面をもつPo3～Po5が出土し、Po5はP3から出土している。

時期 P3内出土壺口縁Po5から古墳時代中期後半と考えられる。



挿図146 南谷大山遺跡B区S124出土遺物実測図

BS I 25 (挿図147-149、図版25・63・64)

位置 調査区のほぼ中央A20グリッドにあり、標高71.9m～72.6mの緩やかな斜面に位置しているため、南側周壁は流失している。北側では、BS I 25の埋土をBS I 16が床面にし、西側はBS I 19によって切られている。

形態 四壁の遺存状態は非常に悪く、平面形は不明である。

規模は、東西7.2m以上、南北2.7m以上を測り、床面積は約19.4㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.38mである。

壁溝・主柱穴は検出されなかったが、大型の不定形のピットが検出された。それぞれの規模は、P 1 (246×90-8) cm, P 2 (93×56-15) cm, P 3 (148×70-24) cmを測る。

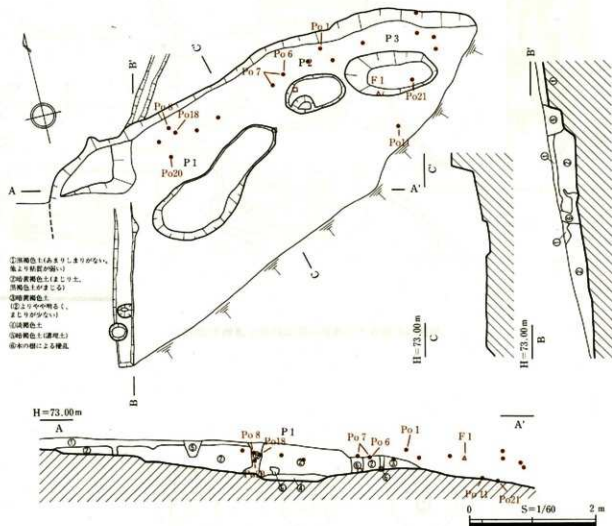
焼土面 焼土面は検出されなかった。

埋土 埋土は3層に分層できる。これらは、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が窺える。

遺物 出土遺物には、図化できたものに複合口縁をもつ甕Po1~Po12、底部Po13・Po14、高杯脚部Po15~Po17、鼓形器台上上部Po18、脚付短頸壺Po19、無頸壺Po20、土玉Po21・Po22、不明鉄器F1がある。

このうち床面からは、南側で口縁部施文の後一部ナデ消すPo11・土玉Po21、P3内で土玉Po22・F1が出土している。その他は埋土中の出土である。

時期 BS I 25の時期は、出土土器から弥生時代終末と考えられる。



挿図147 南谷大山遺跡B区SI25遺構図

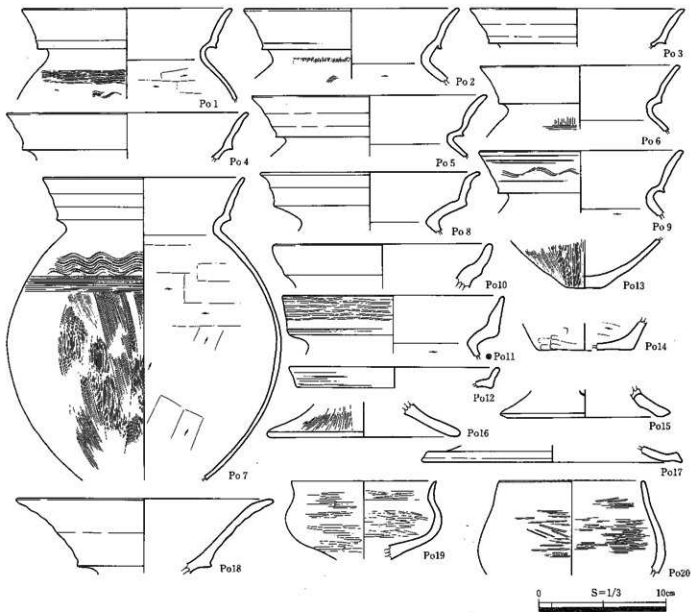


插图148 南谷大山遗址B区S125出土物实测图(1)

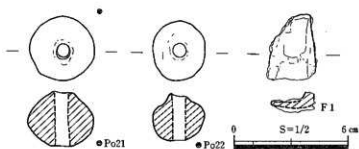
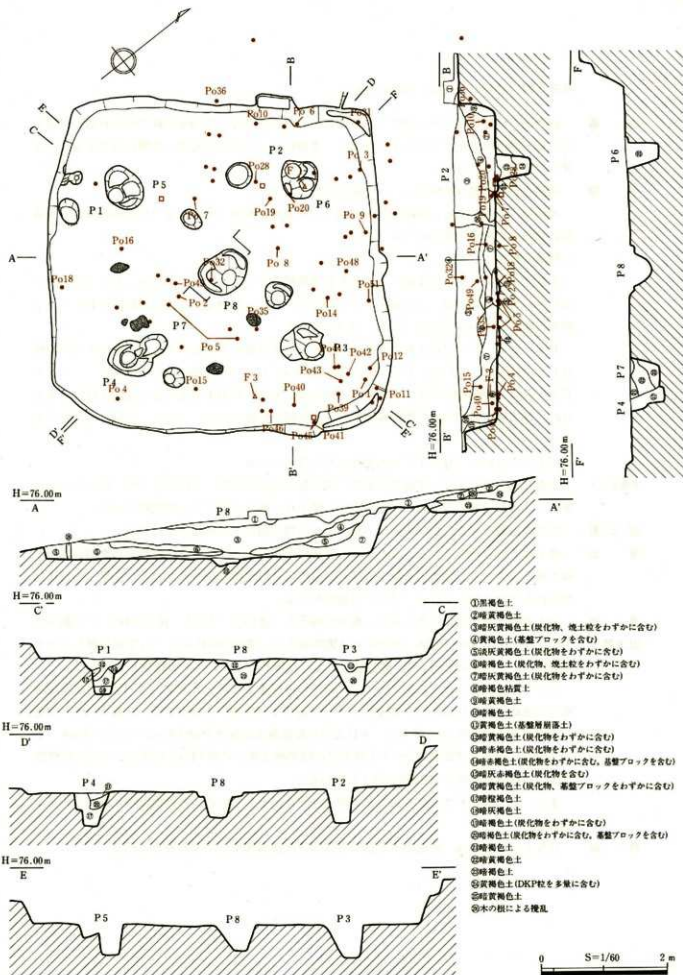


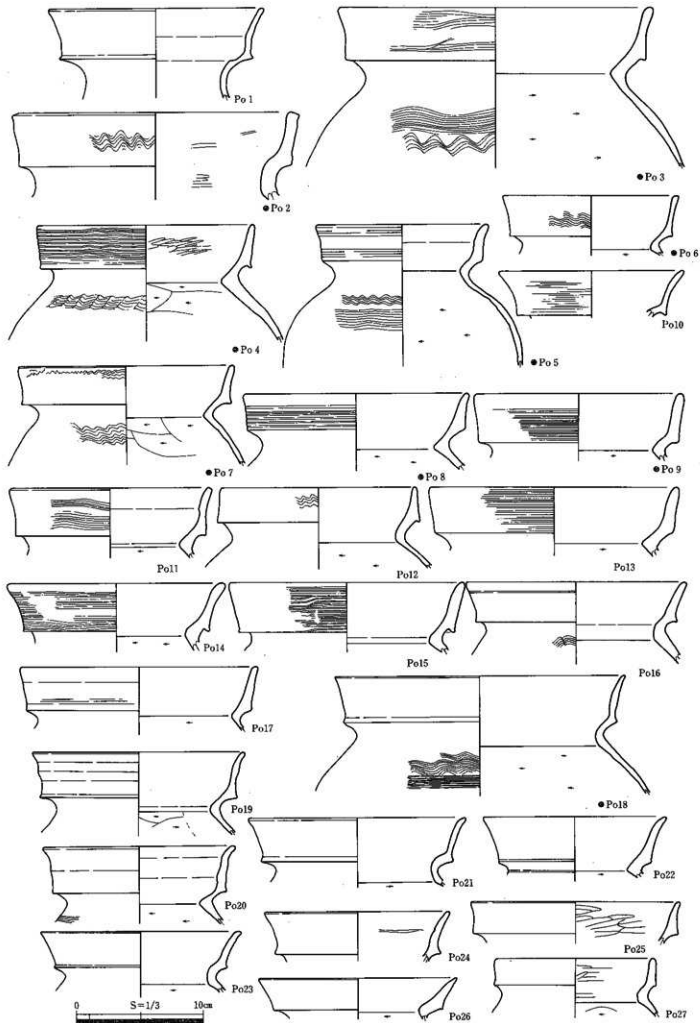
插图149 南谷大山遗址B区S125出土物实测图(2)

BSI27 (挿図150~152、図版24・64)

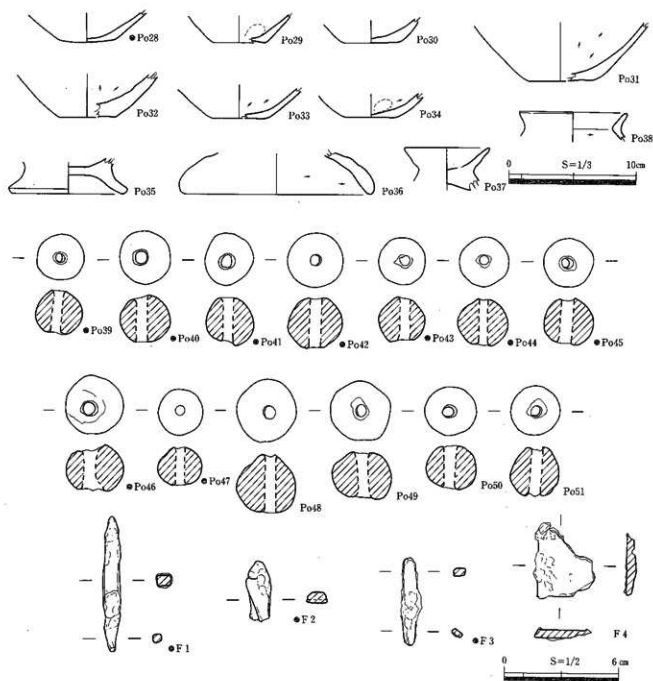
- 位置** 調査区のはほぼ中央A18・19グリッドにあり、標高75.1m~75.9mの緩やかな斜面に位置している。西側約6mにはBSI12があり、東側約2mにはBSK16、北側にはBSK17が近接して作られている。
- 形態** 四壁の遺存状態は比較的よく、平面は方形を呈す。
規模は、東西5.08m、南北5.18mを測り、床面積は約26.3㎡である。残存壁高は、最も遺存状態の良い東壁で最大0.73mである。
壁溝は検出されなかった。
主柱穴はP1~P4の4個で、それぞれの規模はP1(34×27-55)cm、P2(40×36-55)cm、P3(44×38-54)cm、P4(70×54-54)cmを測る。主柱穴間距離はP1~P2間から順に、2.9m、2.9m、3.0m、2.6mである。
P1・P2・P4にはそれぞれP5・P6・P7が接して造られている。それぞれの規模はP5(40×32-41)cm、P6(50×30-50)cm、P7(55×35-46)cmを測る。いずれもP1~P4より規模が小さく、浅い。これらは、P3を共用する建て替え前の主柱穴と考えられ、建て替え前の主柱穴間距離はP5~P6間から順に2.8m、2.6m、2.6m、2.6mである。
- 以上のことから、BSI27は拡張されたと考えられる。
- 中央ビット** 中央ビットはP8で、平面楕円形で二段に掘り込むもので、上縁部を(80×63-5)cmに掘り、さらに(26×22-32)cm掘り込む。埋土は2層に分層でき、炭化物を含む。
- 焼土面** 住居の南側半分で、30cm前後に不整に広がる焼土面が5カ所検出された。
- 埋土** 埋土は3層に分層できる。これらは、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が窺える。このうち、③層・⑤層・⑥層・⑦層中には炭化物を含み、さらに、③層・⑥層には焼土粒を含む。BSI27は、焼失の可能性がある。
- 遺物** 出土遺物には、図化できたものに複合口縁をもつ壺Po1・Po2、複合口縁をもつ甕Po3~Po27、底部Po28~Po34、脚付壺又は甕脚部Po35、蓋Po36・Po37、「く」字状口縁をもつ小型甕Po38、土玉Po39~Po51、鬘状鉄器F1、鉄鉋F2・F3、不明鉄器F4がある。
- このうち床面からは、北東コーナー付近で口縁部施文の後ナデ消すPo3・Po6、東壁中央寄りで沈線が施されるPo9、南東コーナー付近で土玉Po39~Po46・F3、南西コーナー付近で沈線が施されるPo4、中央ビット付近で口縁部施文の後ナデ消すPo2・Po5・Po8、P2付近で平底を呈す底部Po28、P1付近で口縁部施文後ナデ消すPo7が出土している。南壁際では、口縁部ナデのみのPo18が出土している。
- また、P1内でF2、P6内でF1がそれぞれ出土している。その他は埋土中からの出土である。
- 時期** BSI27の時期は、床面出土土器から弥生時代後期後半~終末と考えられる。



挿図150 南谷大山遺跡B区S127遺構図



挿図151 南谷大山遺跡B区S127出土遺物実測図(1)



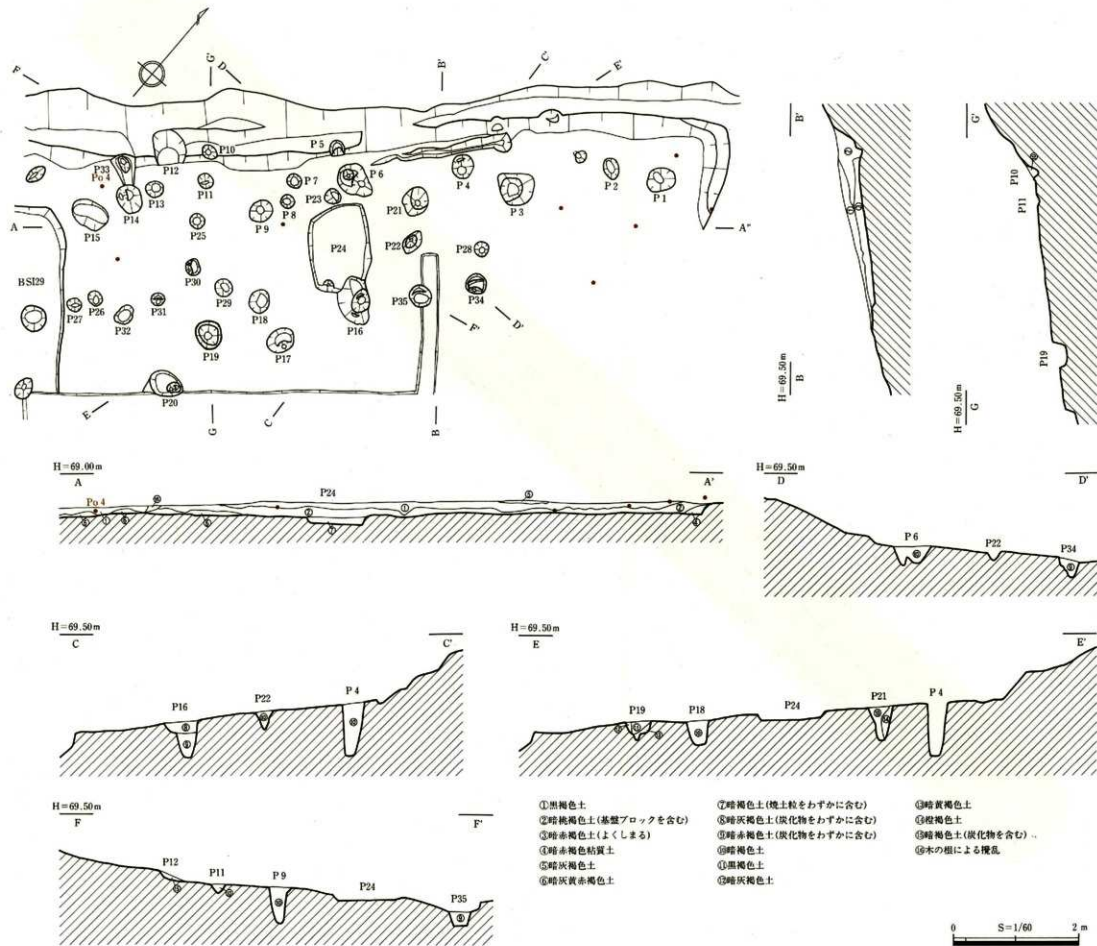
挿図152 南谷大山遺跡B区SI27出土遺物実測図(2)

BS I 28 (挿図153・154、図版25・64)

位置 調査区のほぼ中央B20・C20グリッドにあり、標高67.7m～69.2mの極めて急な南側斜面に位置している。北西側約5m上方にはBS I 25があり、西側はBS I 29によって切られている。

形態 この一帯は、東西10.2m以上、南北3.8m以上を測る平坦面になっているが、急な斜面に立地しているために、南側は流失しており原形を留めてはいない。残存している壁の状況・ピットの配列から、方形ないし隅丸方形を呈するものが、確認できた範囲では3棟あると考えられる。

ここでは、P1・P3を支柱穴とするものをBS I 28-1、P4・P6・P16・P34を支柱穴とするものをBS I 28-2、P9・P18・P21・P35を支柱穴とするものをBS I 28-3として述べることにする。



挿図153 南谷大山遺跡B区S128遺構図

- BSI28 周壁の遺存状態は悪く、北壁・東壁のみ遺存している。北側コーナーは明瞭であるが西側
-1 コーナーは不明瞭である。この状況から推定すると、平面は方形を呈すと考えられる。

規模は東西3.14m、南北1.5m以上を測る。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.45mである。

北側には幅12cm~25cm、高さ20cm~30cmのテラスが巡っており、さらにもう一軒の住居があった可能性がある。

主柱穴はP1・P3の2個検出できたが、本来は4個であったと考えられる。規模は、P1(48×34-32)cm、P3(63×58-71)cmを測る。主柱穴間距離は、2.4mを測る。

- BSI28 周壁は北壁のみ遺存しており平面形・規模とも不明である。残存壁高は、最大0.61mである
-2

壁溝は北側にのみ検出された。規模は、幅15cm~19cm、深さ4cm~6cmを測る。

主柱穴はP6・P4・P34・P16の4個で、それぞれの規模はP6(45×35-32)cm、P4(39×34-86)cm、P34(33×32-25)cm、P16(40×36-58)cmを測る。主柱穴間距離はP6~P4間から順に1.8m、1.9m、1.8m、2.0mである。

- BSI28 BSI28-3は、ピットの配列で確認した。BSI28-2と重複しており、平面形・規模
-3 共に不明である。切り合い関係も不明である。

主柱穴はP9・P21・P35・P17の4個で、それぞれの規模は、P9(41×34-58)cm、P21(40×40-55)cm、P35(38×35-30)cm、P17(37×35-40)cmを測る。主柱穴間距離はP9~P21間から順に、2.5m、1.5m、2.5m、1.5mである。

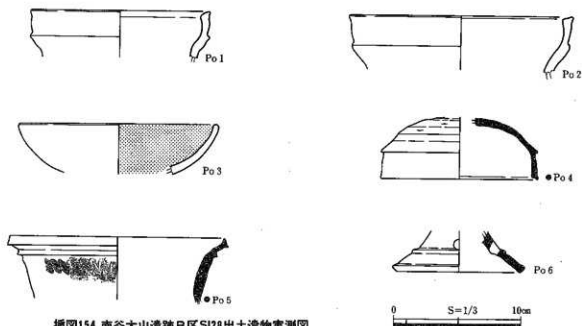
さらに西側に平坦面が続いており、この場所に住居があった可能性がある。

- 埋土 埋土は6層に分層できる。これらは、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が
窺える。

- 遺物 出土遺物には、図化できたものに複合口縁をもつ甕Po1・Po2、高杯杯部Po3、須恵器杯
出土状況 蓋Po4、須恵器甕口縁部Po5、須恵器高杯脚部Po6がある。

このうち床面からは、BSI28-3の西側で、陶色編年TK23の特徴をもつPo4、また、BSI28-2のP16内からPo5が出土している。その他は埋土中からの出土である。

- 時期 BSI28の時期は、床面出土土器から古墳時代中期後半と考えられる。須恵器は山本編年
I期・陶色編年TK23並行と考えられる。



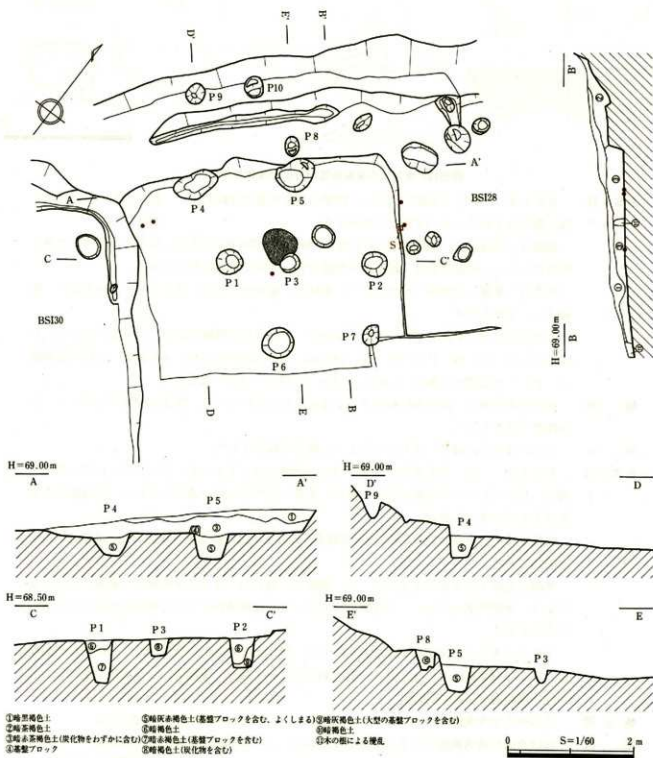
挿図154 南谷大山遺跡B区SI28出土遺物実測図

BS I 28 (挿図155・156、図版25・64)

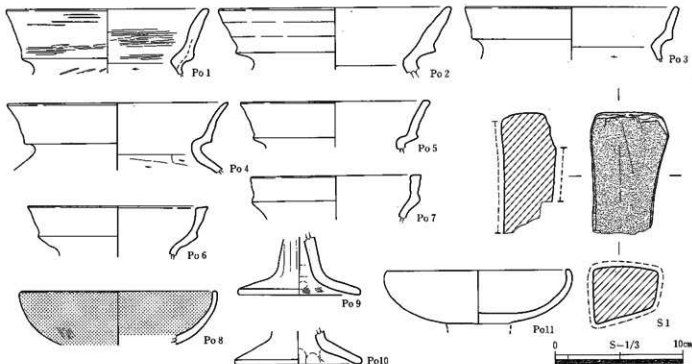
- 位置** 調査区のはほぼ中央B20・21グリッドにあり、標高67.9m～69.0mの極めて急な南側斜面に位置している。東側はBS I 28を切っており、西側はBS I 30によって切られている。
- 形態** このグリッドには3棟の住居が切りあっていると考えられ、南側のものからBS I 29-1、BS I 29-2、BS I 29-3として記述することにする。
- BS I 29** BS I 29-1は、四壁の遺存状態は悪いが、北東コーナーが遺存しており平面は方形を呈すものと考えられる。
- 規模は、東西4.3m以上、南北3.2m以上を測り、床面積は13.7㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.24mである。
- 壁溝は検出されなかった。
- 主柱穴はP1・P2の2個で、それぞれの規模はP1(42×40-70)cm、P2(41×41-48)cmを測る。主柱穴間距離は2.3mである。
- 中央ビット** P1・P2間には中央ビットと考えられるP4がある。規模は、(33×27-27)cmを測る。埋土は、焼土粒・炭化物を含む暗褐色土が入る。
- 焼土面** 中央ビットに接して(53×48)cmに広がる焼土面が検出された。
- BS I 29** BS I 29-2は、BS I 29-1によって切られており、平面形・規模共に不明であるが、
- 2 北壁のみ遺存している。残存壁高は、最大0.17mである。北壁際には長さ3.1m、幅15cm-25cm、深さ3cm-7cmを測る壁溝が遺存している。断面は逆台形状を呈す。
- 主柱穴は、BS I 29-1の北壁際にあるP4・P5と考えられ、それぞれの規模は、P4(63×40-51)cm、P5(60×54-57)cmを測る。主柱穴は2個しか確認できなかったが、本来は4個あったものと考えられる。
- BS I 29** BS I 29-3は、BS I 29-2の北側にわずかに幅16cm-36cmのテラス状の段があることで確認した。平面形・規模共に不明である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.39mである。
- 3 壁溝・主柱穴は検出されなかった。
- 北壁際にP9・P10が検出された。それぞれの規模は、P9(33×30-25)cm、P10(34×30-22)cmを測る。用途は不明である。
- 埋土** 埋土は3層に分層できる。いずれも自然堆積の状況が窺われるが、土層の切り合い関係を見ると、BS I 29-1は、BS I 29-2を切っていることがわかる。
- 遺物** 出土遺物には、図化できたものに複合口縁をもつ甕Po1～Po7、椀状の高杯杯部Po8、高杯脚部Po9・Po10、脚付椀Po11、シルト質泥岩製砥石S1がある。
- このうち、BS I 29-1の床面からは、東壁際でS1が出土している。
- その他は、埋土中からの出土である。
- 時期** BS I 29の時期は、埋土中の最も新しい様相をもつ土器から古墳時代中期後半と考えられるが、3→2→1の順に作られていると考えられる。

BS I 30 (挿図157～160、図版26・27・65・66)

- 位置** 調査区のはほぼ中央A21・B21グリッドにあり、標高67.9m～68.0mの急な南側斜面に位置している。南西側約3mにはBS I 43があり、東側はBS I 29-1を切っている。
- 形態** このグリッドでは、6棟の住居が重複しているため、BS I 30をBS I 30-1～6に分けて記述する。



挿図155 南谷大山遺跡B区S129遺構図



挿図156 南谷大山遺跡B区S129出土遺物実測図

BS I 30 BS I 30-1 はやや西側に位置し、四壁の遺存状態は比較的良好、BS I 30の中では最も深く掘り込まれている。平面は方形を呈す。

規模は、東西3.15m、南北2.79mを測り、床面積は約8.8㎡である。BS I 30の中では最も規模が小さい。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.12mである。

壁溝は、東壁・南壁際で検出された。規模は、幅10cm～15cm、深さ2cm～4cmを測り、断面「U」字状を呈す。

主柱穴はP32・P25・P29、P34の4個で、それぞれの規模はP32(45×35-20)cm、P25(35×32-52)cm、P29(36×32-49)cm、P4(40×30-20)cmを測る。主柱穴間距離は、P32～P25間から順に、1.6m、1.3m、1.7m、1.3mである。

貼床 住居の南東側に、灰黄褐色粘質土による貼床がなされている。厚さは均等ではないが、5cm程度の厚さをもつ。

焼土 住居のほぼ中央部で、盛り上がるように焼土が検出された。

BS I 30 BS I 30-2 は、最も東側にあるもので、西側はBS I 30-1によって切られている。北側は、BS I 30-5を⑨層～⑭層で埋め、東壁・北壁の一部が遺存している。平面形は方形を呈すものと考えられる。

規模は不明であるが、南北約4.5mを測る。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で、最大0.91mである。

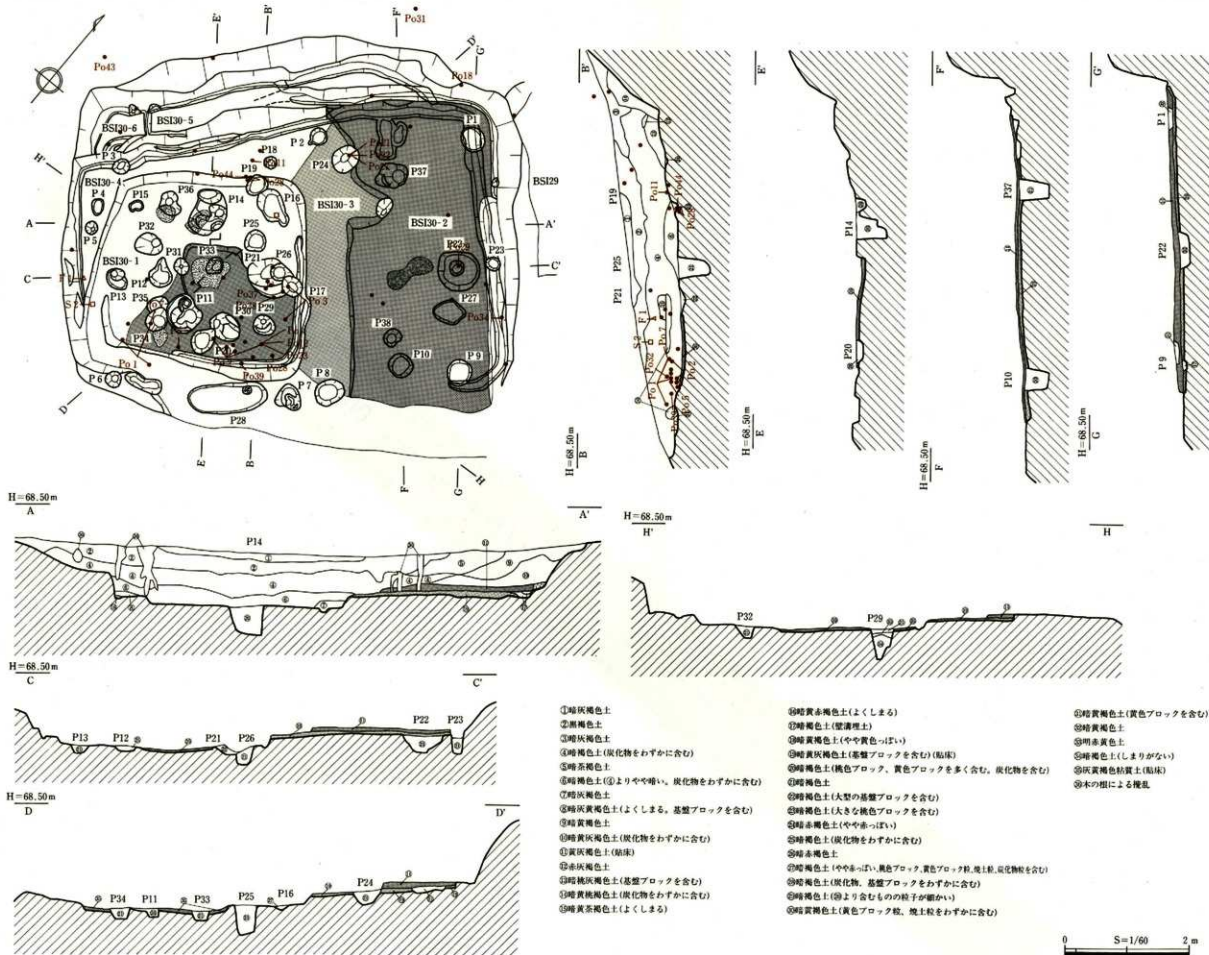
壁溝は北側・東側壁際を巡っている。規模は、幅15cm、深さ3cmを測り、断面「U」字状を呈す。東側壁溝内で小ピットを検出したが、これは壁溝内に立てた板を止めるためのものと考えられる。

主柱穴と考えられるものは、P1・P9で、その他は検出されなかった。それぞれの規模は、P1(38×36-9)cm、P9(44×40-7)cmを測り、主柱穴にしては浅いものである。主柱穴間距離は3.8mである。

焼土面 住居中央やや東側で、(75×20)cmにひょうたん型に広がる焼土面を検出した。

貼床 ほぼ全面に灰黄褐色土による貼床がなされている。厚さは、7cm～13cmを測る。

BS I 30 BS I 30-3 は、BS I 30-2の貼床を除去することで確認できた。西側はBS I 30-1によって切られている。北側は、BS I 30-5を⑨層～⑭層で埋めている。平面形は、遺存



挿図157 南谷大山遺跡B区S130遺構図

している壁溝の状態から、長方形を呈すものと考えられる。

正確な規模は不明であるが、東西約5.5m、南北4.25mを測る。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で、最大0.91mである。

壁溝は、北壁・東壁際を巡っており、幅10cm～25cm、深さ2cm～6cmを測り、断面「U」字状を呈す。東側壁溝内で(22×22-25)cmを測るP23を検出した。これは他の壁溝内のピットよりかなり大きいもので別の用途が考えられるが、特定はできない。

主柱穴はP37・P10で、その他は確認できなかった。それぞれの規模は、P37(55×46-53)cm、P10(39×35-45)cmを測る。主柱穴間距離は3.1mである。

特殊ピット 東側壁溝寄り、二段掘りになるP22を検出した。これはいわゆる特殊ピットと呼ばれるもので、(70×64-35)cmを測る。埋土は暗黄褐色土が単層ではいる。埋土中から高杯杯部Po29が出土している。

貼床 住居の東半分以上に、暗黄灰褐色土による貼床がなされている。厚さは均等ではなく6cm～10cmを測る。

BSI30-4 BSI30-4は、最も西側にあるもので、BSI30-1・3によって切られ、北西コーナー付近のみ遺存している。この状況から、平面は方形を呈すものと考えられる。

規模は不明であるが、南北2.1m以上を測る。残存壁溝は、最も遺存状態のよい西壁で、最大0.43mである。

壁溝は北壁・西壁際を巡っており、幅8cm～12cm、深さ3cm～8cmを測り、断面逆台形状を呈す。壁溝内で(28×24-27)cmを測るP3が検出された。これは、BSI30-3のもと同様な性格をもつものと考えられる。

主柱穴と考えられるものは確認できなかった。

BSI30-5 BSI30-5は、最も北側にあるもので、BSI30-2・3・4・6によって切られているために平面形・規模共に不明であるが、コーナーの状況から判断すると隅丸方形または多角形の可能性がある。

壁溝は、壁際を巡っており、幅8cm～15cm、深さ4cmを測り、断面「U」字状を呈す。

BSI30-6 BSI30-6は、BSI30-5の床面に掘り込まれた壁溝の一部を検出することで確認した。

壁溝は、ごくわずかの部分にだけしか遺存していないために、平面形・規模共に不明である。

壁溝は、幅15cm、深さ4cmを測る。

埋土 BSI30の埋土は16層に分層できる。土層断面を見ると、①層～⑥層はBSI30-1の埋土、⑦～⑩層はBSI30-2の埋土と考えられる。これらは、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が窺えるが、炭化物を含む④層中に焼け落ちの焼土と考えられる⑮～⑳層があり、BSI30-1は焼失した可能性がある。

また、BSI30-1は、掘り込む時にBSI30-2・3の貼床を切っており、かなり広い範囲を掘り込んでいることが確認された。さらに、BSI30-5の埋土である㊸～㊺層は、ともによく締まる層で、他の埋土とは異なることから、BSI30-3・4が掘り込まれる時点でBSI30-5は埋められた可能性がある。

遺物出土状況 出土遺物には、図化できたものに複合口縁をもつ甕Po1～Po21・Po24・Po25、胴部Po22・Po23、「く」字状口縁をもつ甕Po26、複合口縁をもつ壺Po27、碗状の高杯杯部Po28～Po30、高杯脚部Po31～Po33、有段の高杯杯部Po34、大型高杯杯部Po35、鼓形器台上上部Po36、碗Po37～Po41、脚付椀Po42、深皿Po43、須恵器杯蓋Po44～Po47、須恵器杯身Po48～Po50、

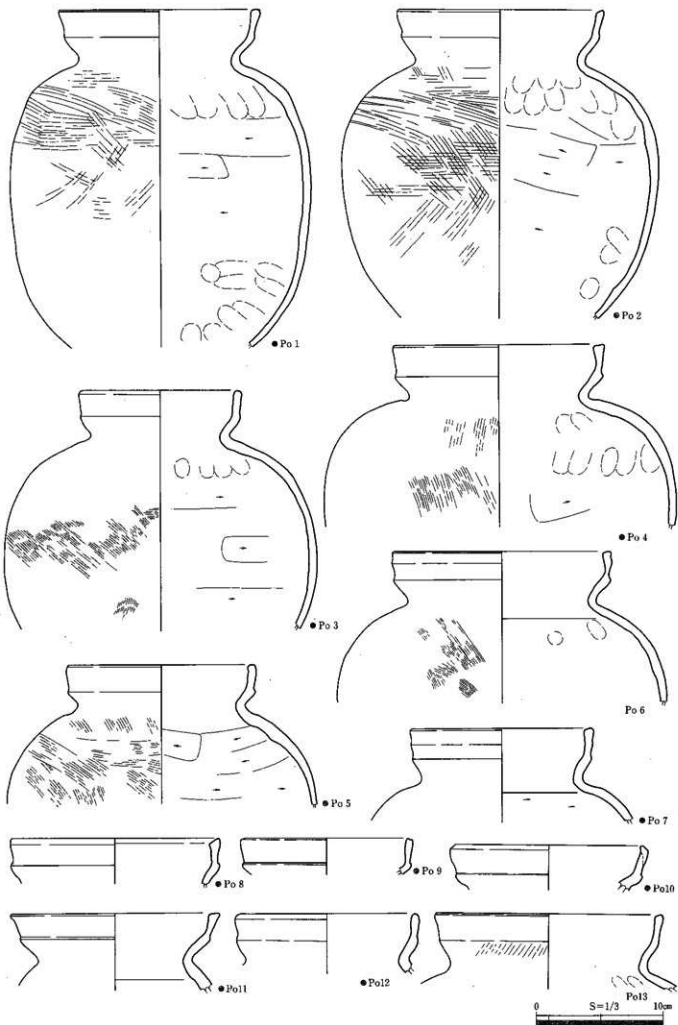
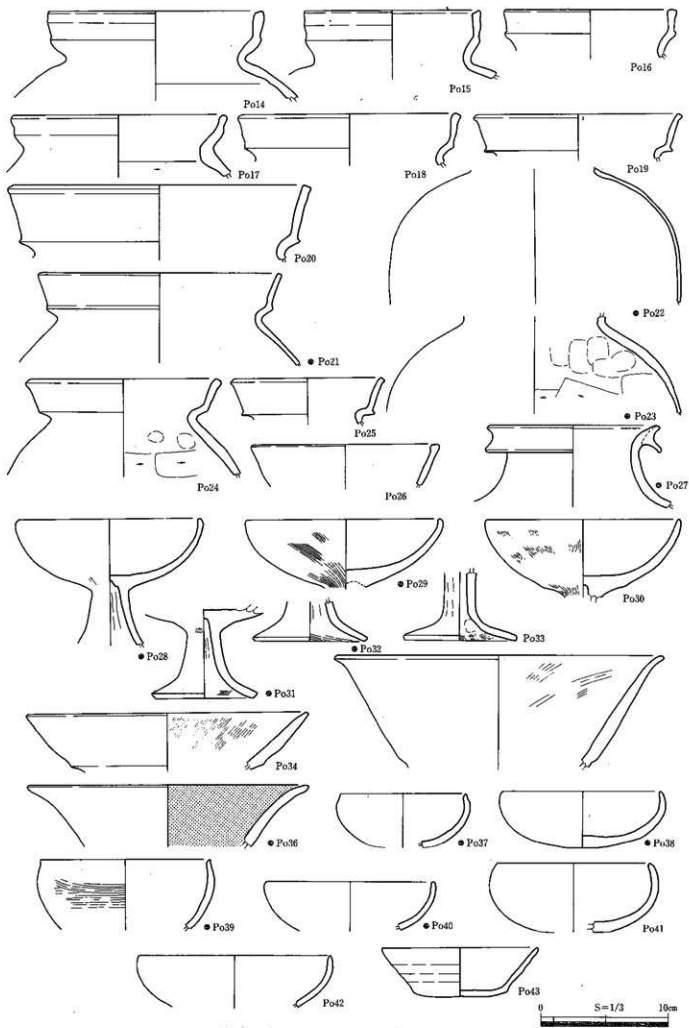


插图158 南谷大山遺跡B区SI30出土遺物実測図(1)



挿図159 南谷大山遺跡B区S130出土遺物実測図(2)

須恵器甕Po51、土鍾Po52、角閃石安山岩製敲石S1、石英安山岩質凝灰岩製砥石S2、凝灰岩製砥石S3、アブライト製砥石S4、凝灰岩質泥岩製砥石S5、鉄鎌刃部F1がある。

このうち床面からは、BSI30-1の南側で口縁下部がさらに退化したPo1~Po5・Po7~Po10・Po12、高杯Po31、鼓形器台Po36、椀Po37・Po38が、また、北側では口縁下部がさらに退化したPo11、椀状の杯部をもつ高杯Po28、須恵器杯蓋Po44が、出土している。

BSI30-3からは、特殊ビットP22から椀状の杯部をもつ高杯Po22が出土している。

また、P24内から肉薄で口縁端部が平坦面をもつPo21、胴部Po22、複合口縁状の口縁部をもつPo27が出土している。

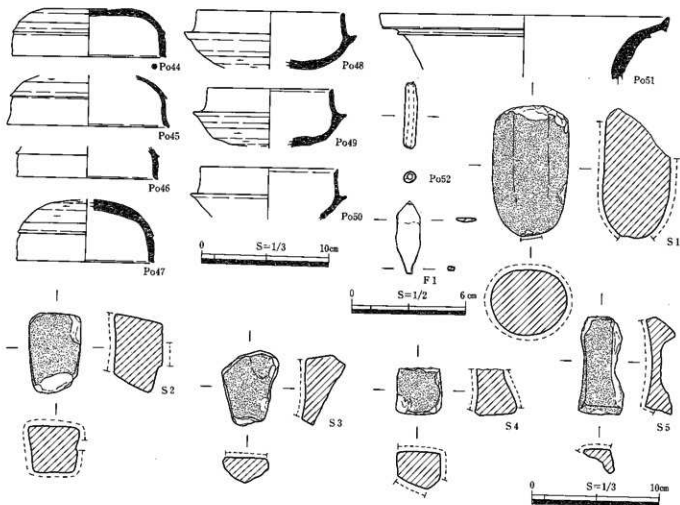
時期 BSI30は6棟の住居が重複しているが、その切り合い関係から5・6→3・4→2→1の順に作られたと考えられる。

BSI30-1の時期は、床面出土土器から古墳時代中期後半と考えられ、山本編年I期・陶邑編年TK23並行の須恵器が共存する。

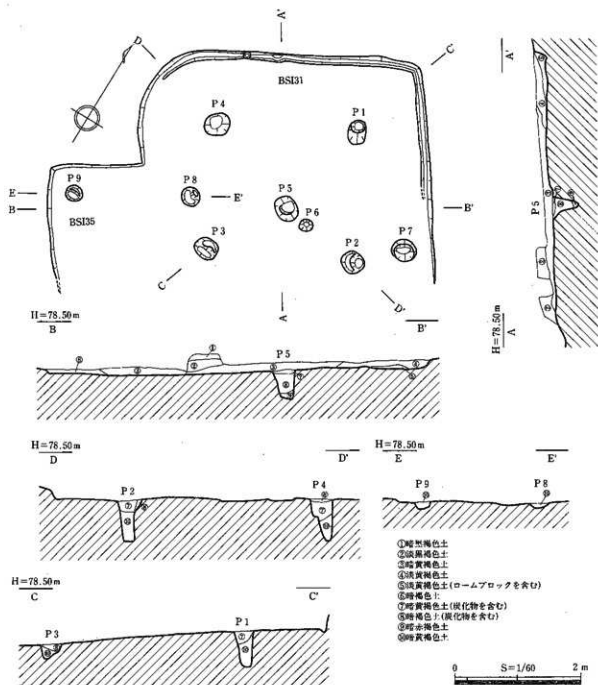
BSI30-3の時期は、P22内の土器から古墳時代中期後半と考えられる。

BSI30-1~3は出土土器には差が見いだせず、短期間に建て替えがあり、3→2→1と縮小傾向にある。

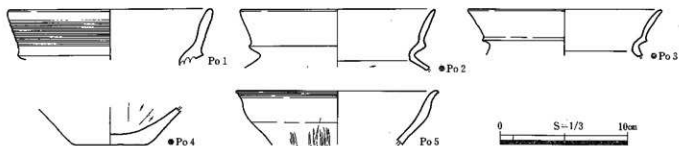
また、P24内からは古墳時代前期前半と考えられる土器が出土しており、これが切り合い関係で最もさかのぼるBSI30-5に伴うものと考え、BSI30-5はこの時期に作られたとすることができる。



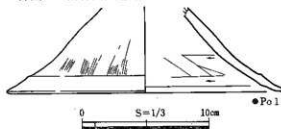
挿図160 南谷大山遺跡B区SI30出土遺物実測図(3)



挿図161 南谷大山遺跡B区S131・35透視図



挿図162 南谷大山遺跡B区S131出土遺物実測図



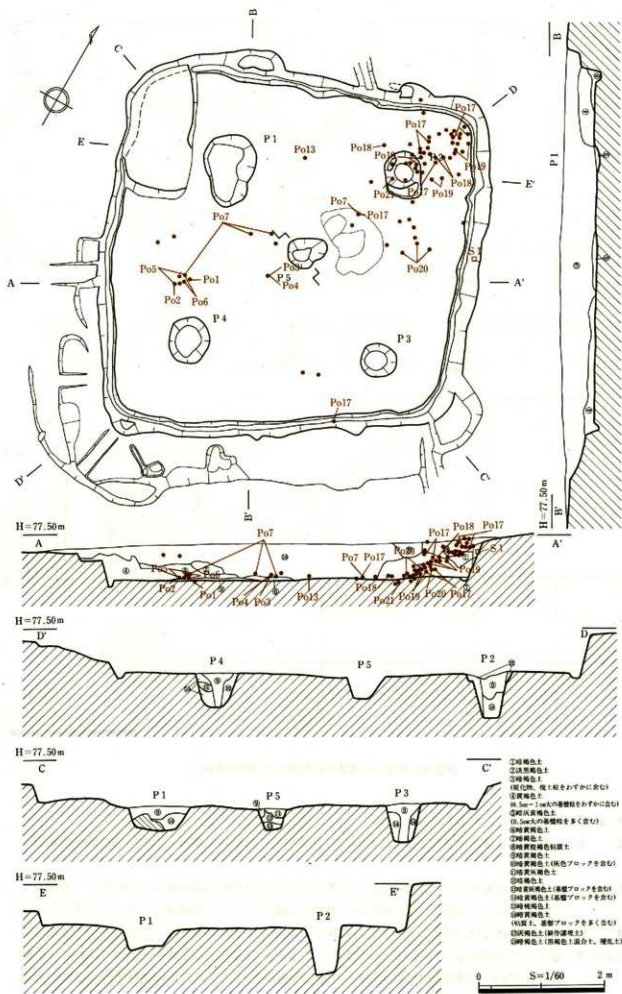
挿図163 南谷大山遺跡B区S135出土遺物実測図

BS I 31・35 (挿図161・162・163、図版27・66)

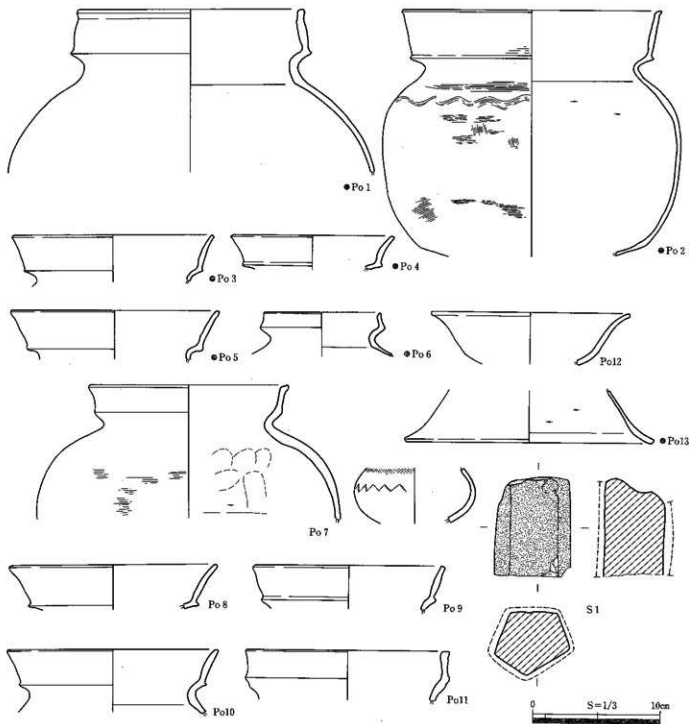
- 位置** 調査区の中央、C16グリッドの東側で尾根の頂部が大きく広がり平坦面をなす標高約77.5~78m付近に位置する。すぐ、西側にBSK13があり、北西側周辺にはビット群02が広がっている。
- 置 復** 後世の削平でかなり、壁面が削られ遺存状態が非常に悪い。BS I 31とBS I 35は重複して建てられていた。しかし、新旧関係は断面でも平面でも判断できなかった。
- BS I 31** 平面は北隅で方形を呈し、西隅では隅丸方形を呈する。規模は東西で4.5m、南北で3.5m以上を測り、床面積は15.8㎡以上である。残存壁高は最も残りの良い南壁で最大28cmあった。柱穴は床面で7個検出した。その内、P1~P4は主柱穴、P5は中央ビットである。主柱穴の規模は、P1~P4の順に(38×28-58)cm、(36×34-66)cm、(38×32-24)cm、(42×34-66)cmである。中央ビットの規模は(42×34-47.5)cmで、平面は円形である。残りのP6・P7の規模は、それぞれ(24×20-22.5)cm、(42×36-46.3)cmである。
- 壁 溝** 北西壁際から北東壁際にかけて、壁溝が検出された。断面は「U」字形を呈し、深さは2.0~4.6cmである。
- BS I 35** 平面は方形を呈し、規模は東西がビットの範囲で2.5m以上、南北が2.0m以上で、床面積は5㎡以上である。残存壁高は最も残りの良い南壁で最大7.9cmあった。
- 埋 土** 遺構埋土は10層に分層できた。①~⑥層は遺構埋土、⑦~⑩層はビットの埋土である。
- 遺 物** BS I 31より出土した遺物は、複合口縁をもつ甕Po1~Po3、甕又は壺の底部Po4、高杯Po5である。この内、床面出土遺物は、口縁部がナゲ仕上、端部が丸く収められ、口縁部下端が外方に突出するPo2が南西側より、平底を呈する底部Po4が北東側より出土している。
- 出土状況** BS I 35の床面より出土した遺物は、脚台部の端部に段があり、内面に削りが入る器台Po1であり、これは西側から出土している。
- 時 期** BS I 31・BS I 35は床面出土土器より、弥生時代終末と考えられる。

BS I 32 (挿図164~166、図版27・66・67)

- 位置** 調査区東側A17グリッドにあり、標高77.3m~77.5mの平坦面に位置している。南側約5mにはBS I 20があり、北側約2mにはBS I 36がある。北西側ではBS I 34を切っている。
- 形 態** 周辺が後世の耕作等により攪乱されているが、四壁の遺存状態は比較的良好、平面は方形を呈すものと考えられる。規模は、東西5.5m、南北5.33mを測り、床面積は約29.3㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い東壁で最大0.71mである。壁溝は北西コーナーを除きほぼ全周する。規模は、幅8cm~12cm、深さ4cm~8cmを測り、断面逆台形状を呈す。主柱穴はP1~P4の4個で、それぞれの規模はP1(118×85-38)cm、P2(74×52-76)cm、P3(58×54-62)cm、P4(76×65-58)cmを測る。主柱穴間距離はP1~P2間から順に2.9m、3.0m、3.0m、2.5mを測る。P1~P2間、P1~P4間がいびつになっているのは、P1内には大型の基盤の礎があり本来の位置よりやや内側に作らざるを得なかったためと考えられる。
- 中央ビット** 中央ビットはP5で、平面不整形円形を呈す。規模は、(63×50-37)cmを測る。埋土は4層に分層できる。
- ベッド状遺 構** 住居北西コーナーに、長さ約2m、幅約1m、高さ約13cmを測るベッド状遺構が付設されている。



挿図164 南谷大山遺跡B区S132遺構図



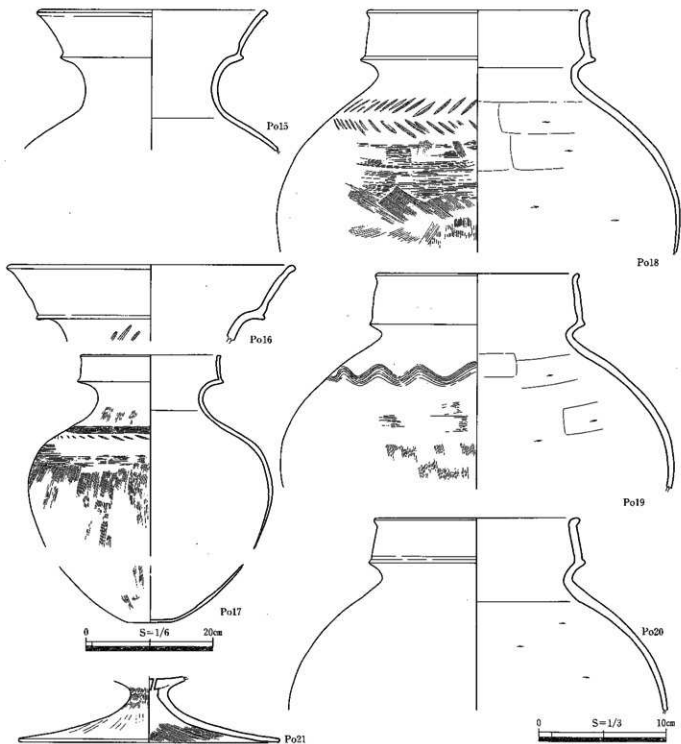
挿図185 南谷大山遺跡B区S132出土遺物実測図(1)

焼土面 焼土面は、検出されなかった。

埋土 埋土は8層に分層できる。これらは、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が窺える。

土器溜り 住居の北東コーナーの埋土上に、多数の土器片が住居中央部に向かって傾斜して堆積していた。これらの土器は、出土状況から、住居の廃絶に伴って一括廃棄されたものと考えられる。

遺物 出土遺物には、図化できたものに内傾する複合口縁をもつ壺Po1、大きく外反する複合口縁をもつ壺Po15~Po17、複合口縁をもつ甕Po2~Po11、内傾する複合口縁をもつ甕Po18~Po20、高杯杯部Po12、大きく広がる高杯脚部Po21、鼓形器台脚部Po13、小型丸底壺Po14、砥石S1がある。

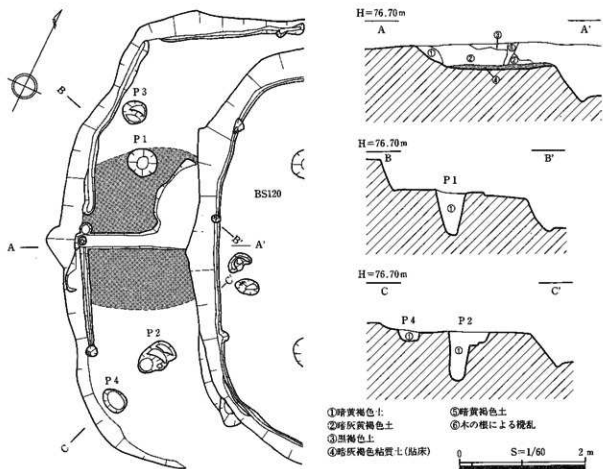


挿図166 南谷大山遺跡B区SI32出土遺物実測図(2)

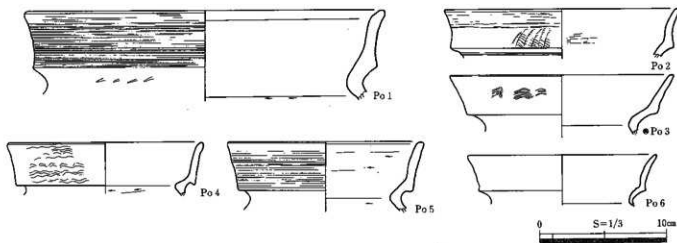
このうち、床面からは、住居中央部で口縁部ナデのみのPo3・Po4、中央やや西寄りで口縁部が内傾するPo1・端部が平坦面をもつPo2・ナデのみのPo5・口縁部が内傾するPo6、中央やや北寄りで端部がやや肥厚するPo13が出土している。

また、Po15～Po21は土器溜りからの出土である。その他は埋土中からの出土である。

時 期 BSI32の時期は、床面出土土器から古墳時代前期前半と考えられる。



挿図167 南谷大山遺跡B区SI33遺構図

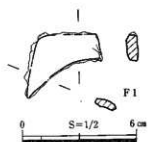


挿図168 南谷大山遺跡B区SI33出土遺物実測図(1)

BS133 (挿図167~169、図版28・67)

位置 調査区東側、A16・B16グリッドにあり、標高75.9~76.8 mの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。北側約4 mにはBS132があり、東側はBS120によって大きく削り取られている。

形態 住居東側の半分以上をBS120によって削り取られているため



挿図169 南谷大山遺跡B区SI33出土遺物実測図(2)

に、平面形・規模ともに不明であるが、遺存している壁の状況から平面は隅丸方形で、規模は一辺6.7m程度と考えられる。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.61mである。

壁溝は西壁・北壁際で断続的に検出できた。規模は、幅6~16cm、深さ3~5cmを測り、断面逆台形状を呈す。

主柱穴はP1・P2の2個遺存していたが、本来は4個であったと考えられる。それぞれの規模は、P1(50×44-74)cm、P2(46×36-74)cmを測る。主柱穴間距離は3.2mである。P1・P2の外側にはそれぞれP3・P4がある。規模は、P3(38×36-14)cm、P4(41×34-19)cmを測る。用途は不明である。

貼床 厚さ10cm程度の暗灰褐色粘質土による貼床がなされている。

埋土 埋土は、3層に分層できる。

遺物 出土遺物は、図化できたものに複合
出土状況 図線をもつ甕Po1~Po6、不明鉄器F1がある。

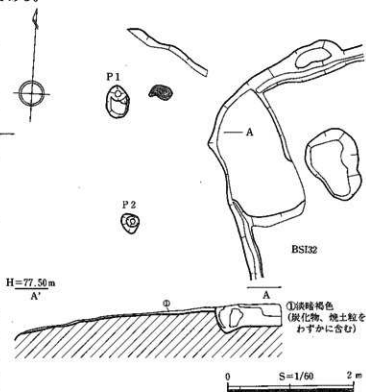
このうち、床面からは、口縁部施文の後ナテ消すPo3が出土している。その他は埋土中からの出土である。

時期 BSI33の時期は、床面出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。

BSI34(挿図170、)

位置 調査区の東側、A17グリッドにあり、標高77.1m~77.2mの平坦面に位置している。北東約2mにはBSI36があり、東側はBSI32によって大きく削り取られている。

形態 四壁の遺存状態は非常に悪く、平面



挿図170 南谷大山遺跡B区SI34遺構図

形・規模ともに不明であるが、わずかに4cm程度掘り込むもので、平地式の住居と考えられる。

壁溝は検出されなかった。

主柱穴はP1・P2の2個と考えられ、それぞれの規模はP1(53×35-30)cm、P2(33×29-20)cmを測る。いずれも規模が小さく、BSI34は簡単な上屋構造であったものと考えられる。

焼土面 P1付近に、34×24cmに広がる焼土面を検出した。

埋土 埋土は、炭化物・焼土粒を含む淡暗褐色土のみである。

遺物 出土遺物は、小片のため図化できなかったが、弥生時代後期の特徴を示す土器片が出土している。

時期 BSI34の時期は、出土土器から弥生時代後期と考えられる。

BSI36(挿図171・172、図版28)

位置 調査区の西側、a16グリッドの東側にあり、尾根の平坦面から北西に緩やかに下り始める標高約77m付近に位置する。BSI36はBSK14・BSK15の5m南側、BSS03の東側にある。

形態 北側の壁が後世の溝で壊されており、遺存状態は悪い。BS I 36は平面が隅丸方形で、規模は東西2.7m、南北2.9mを測り、床面積は7.6㎡である。残存壁高は最も残りの良い北壁で0.4mであった。検出できたピットは、5個である。主柱穴は特定できない。P1～P5の規模は、順に(32×32-32.2)cm、(55×52-18.2)cm、(28×22-18.1)cm、(26×22-8.0)cm、(74×68-12.0)cmである。

焼土 床面にはおびただしい細かい炭化物が広がり、柔らかい焼土もみられ、炭化物の層を取り払うと、焼土が床中央から両側に5ヶ所検出された。焼土の規模は東から順に、(28×20)cm、(64×62)cm、(62×54)cm、(56×40)cm、(34×10)cmである。平面はすべて不定形であるが、P5の内側にある焼土は検出を進めるとほぼP5の上縁部にあり円形を呈した。こ

焼失 の焼土は、ピットの底まで溜まり、最大厚12cmあった。

貼床 炭化物と焼土の出土状況と柔らかい焼土であることを考えると、この住居は焼失した可能性がある。炭化物と焼土を除去したら、床面に貼床が施されていることが分かった。範囲は床面中央か

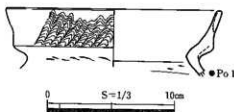


図171 南谷大山遺跡B区SI36
出土遺物実測図

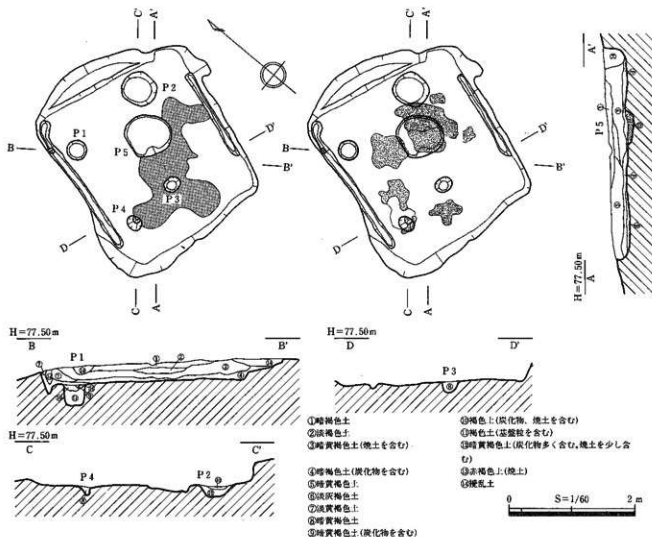


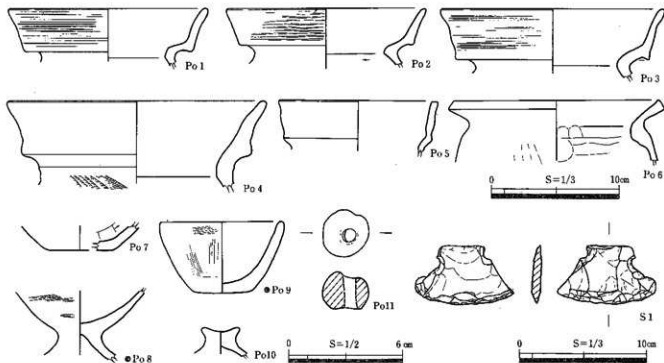
図172 南谷大山遺跡B区SI36遺構図

ら南側にかけて、貼られていたが薄いものであった。

- 壁溝** 壁溝は東側と西側で検出された。西側の壁溝は全長が2.3m、深さが1.2cmであり、断面が「U」字状を呈したものである。東側の壁溝は全長が1.5m、深さが6.0~18cmと深く、断面が「V」字状であった。
- 埋土** 遺構埋土は13層に分層できた。①~⑦層が遺構の埋土で自然堆積である。また、⑧~⑫層がピットの埋土である。⑬層がP5に堆積した焼土である。
- 遺物** 出土遺物は口縁部に波状紋が施されている複合口縁の甕Po1が床面上の中央と北側から出土している。
- 時期** 床面出土の甕Po1より、弥生時代後期後半と考えられる。

BSI37 (図版173・174、挿図28・67)

- 位置** BSI37は、調査区南西部f24・f25・g24・g25グリッドに位置する。当地は標高約66.5m~66.8mで、南西を向いた緩斜面になっている。調査前は、梨などの栽培をしていた果樹園だった。当遺構は南西部で、BSI38・BSI41に切られている。北東約10mには南谷28号墳が、南東約6mにはBSI45が、それぞれ位置している。
- 形態** 平面は隅丸方形を呈する。規模は東西約6.2m、南北約6.5m、最も残りのよい北東壁付近で最大壁高約1mを測る。推定される床面積は約40㎡である。
- 主柱穴のうち残っているものは、P1・P2である。規模はそれぞれP1(53×54~34)cm、P2(48×48~35)cmである。主柱穴間距離はP1~P2が、4.3mである。両者の中間点にP4が位置する。規模は(52×47~22)cmである。用途は不明である。
- 壁溝** 北部・北東部・南東部の壁ぎわには、壁溝が巡っている。断面はU字形を呈し、深さは4~13cmである。明黄灰褐色土を埋土とする。一方、北東側壁溝中央から南西へ向かって、溝



挿図173 南谷大山遺跡B区SI37出土遺物実測図

が走っている。断面「U」字状を呈し、深さは13cmを測る。一部でP4と重複している。埋土を検討すると、P4が切り込んでいた。当遺構には、貼床・焼土面は伴わなかった。

埋土 当遺構の埋土のうち、上の層は激しく攪乱を受けている。残っているのは⑤・⑥層である。⑤層は、BSI38の埋土③・⑦層に切られている。

遺物 遺物としては、複合口縁を有する甕Po1～Po5、「く」字状口縁をもつ甕Po6、甕または壺の底部Po7、低脚杯Po8、椀Po9、蓋Po10、土玉Po11、細粒花崗岩製石廬丁S1が、挙げられる。

これらのうち床面で検出された土器は、甕または壺底部Po9、低脚杯Po8である。床面に近い所では、北西部壁ぎわより甕口縁Po3が、北壁下より甕口縁Po5が、それぞれ出土した。両者ともに複合口縁をもつ。一方では、北西部の壁ぎわ攪乱土中より「く」字状口縁を有する甕Po6が、検出された。このほか、西南部東端よりS1が出土した。

時期 床面より出土した土器から、弥生時代後期と考えられる。

BSI38 (図版174～176、挿図28・29・68)

位置 BSI38は、調査区南西部f24・f25・g24・g25グリッドに位置する。当地は標高約65.5m～66mで、南西を向いた緩斜面になっている。BSI37同様、以前は農地であった。前述のとおり、当遺構はBSI37・BSI41と重複している。南西約4mには、BSD03が走っている。

形態 平面は方形を呈する。規模は東西約5.1m、南北約5.2m、北東壁付近で最大壁高約0.48mを測る。床面積は約26.5㎡である。

ピットは全部で10個みられる。これらのうち主柱穴はP1～P4である。規模はそれぞれP1(58×55-33)cm、P2(37×23-5)cm、P3(63×60-15)cm、P4(54×50-12)cmである。

主柱穴間距離はP1～P2の順にそれぞれ、2.4m・2.3m・2.3m・2.3mである。

中央ピット 中央ピットはP5である。上縁部はほぼ円形を呈し、規模は(82×45-54)cmを測る。

壁溝 壁ぎわには、壁溝が全周する。断面は「V」字形を呈し、深さは約5cmである。黄灰褐色土を埋土とする。

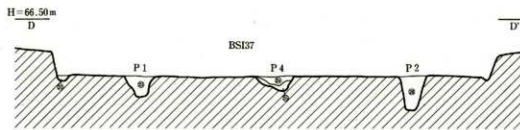
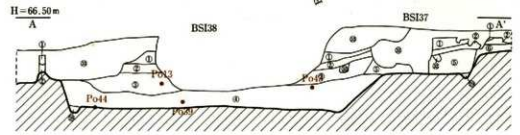
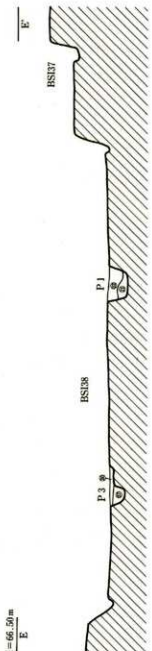
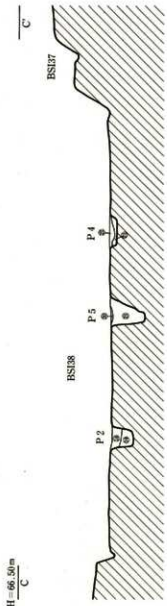
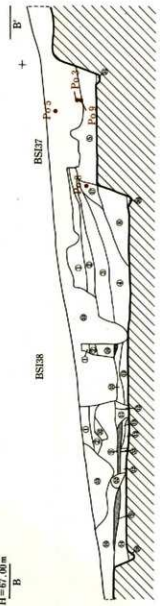
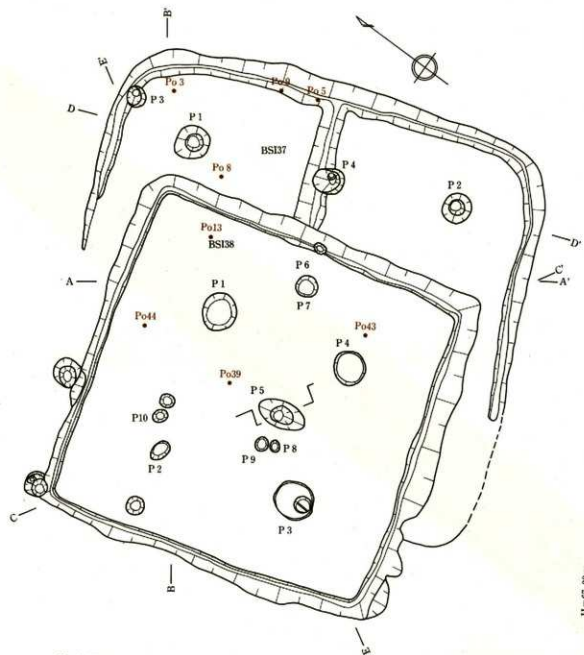
埋土 当住居の埋土は、北部・東部ではBSI37の埋土を切り、南西部ではBSI41に切られている。BSI37の⑤層は北部では③層に、東部では⑦層に切られている。一方、南西部では攪乱のため、BSI41との切り合いは観察できない。しかし、当遺構プラン内で、貼床⑨層がみられる。この貼床は、位置・レベルを考慮に入れると、BSI41のものと判断することができる。B-B'断面においては、貼床を境に上の⑩層がBSI41に、下の⑩・⑪～⑭層はBSI38の埋土に属する。BSI41が当住居の埋土を掘って、造られたことがわかる。

遺物 遺物としては、複合口縁を有する甕Po1～Po33、高杯Po34～Po37、直口壺Po38、鼓形器台Po39・Po40、椀Po41、低脚杯Po42・Po43、須恵器杯身Po44、土玉Po45～Po49が、挙げられる。

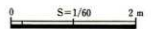
これらのうち、床面より出土した土器は、中央付近で検出された鼓形器台Po39がある。

また、西壁近くより須恵器杯身Po44が、それぞれ出土した。

時期 BSI38の時期は、床面より出土した須恵器杯身Po44より、古墳時代中期後半と考えられる。埋土の切り合いより、当住居はBSI37よりも新しく、BSI41よりも古いといえる。須恵器は、山本編年I期・陶色編年TK208 並行のものと考えられる。



- ①暗褐色土
- ②暗褐色土(黒じりけが少ない)
- ③暗褐色土(焼土粒・炭化物を含み、やや黒みを帯びている)
- ④暗茶褐色土(焼土粒・炭化物を含む)
- ⑤暗黄褐色土(焼土粒・炭化物を含む)
- ⑥暗赤褐色土(黄褐色ロームブロックを含み、粘性が強い)
- ⑦黄褐色土(ややぐすんでいる)
- ⑧暗茶褐色土(④の中に明黄褐色ロームブロックを多く含む)
- ⑨明黄褐色土・黄灰褐色粘土の混土(粘炭)
- ⑩暗黄褐色土(焼土粒を含み、黒みを帯びている)
- ⑪暗茶褐色土(炭化物・焼土粒を含む)
- ⑫明黄褐色土・焼土粒・黄灰褐色粘土の混土
- ⑬黄灰褐色土(明黄褐色土粒・焼土粒・炭化物を含む)
- ⑭明黄褐色土(かなりしまっている)
- ⑮明黄灰褐色土
- ⑯暗茶褐色土
- ⑰暗黄褐色土(焼土粒・炭化物を含み、やや黒みを帯びている)
- ⑱明黄褐色土(ロームブロック・焼土・炭化物を含む)
- ⑲明黄褐色土(炭化物を含む)
- ⑳明黄褐色土(黄褐色土粒を多く含む、粘性がある)
- ㉑明赤黄褐色土(ロームブロックを多く含む)
- ㉒黄灰褐色土
- ㉓明黄灰褐色土
- ㉔明黄灰褐色土
- ㉕明黄灰褐色土(黄褐色ロームを多く含む)
- ㉖暗赤褐色土(炭化物を含む)
- ㉗明黄灰褐色土(炭化物を含む)
- ㉘暗黄灰褐色土(ローム粒・炭化物を含む)
- ㉙黄灰褐色土(炭化物を含む)
- ㉚明黄灰褐色土(かなりぐすんでいる、炭化物を含む)
- ㉛黄灰褐色土(ロームブロックを含む)
- ㉜明黄灰褐色土(ローム粒を多く含む)
- ㉝木の柱による覆土
- ㉞暗褐色土



挿図174 南谷大山遺跡B区S137・38遺構図

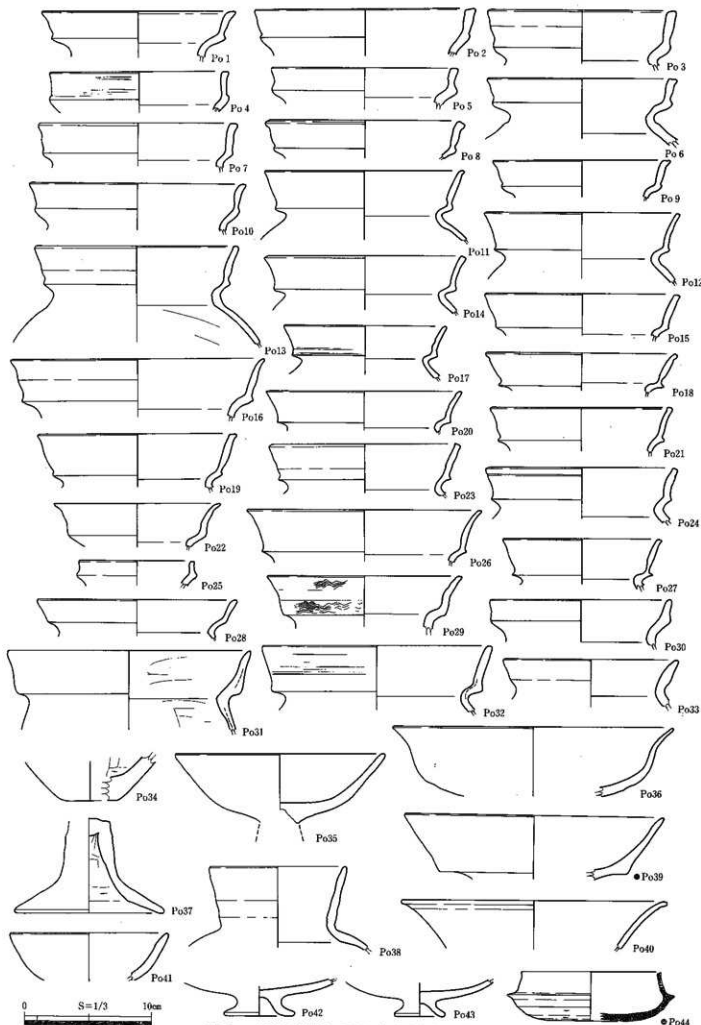
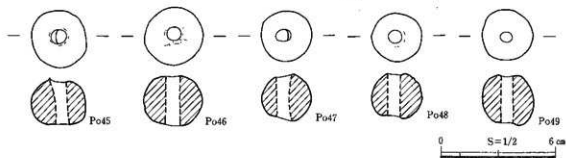


插图175 南谷大山遗址B区S138出土文物实测图(1)



挿図176 南谷大山遺跡B区S139出土遺物実測図(2)

BS139 (挿図177・178、図版29・68)

位置 調査区の中央、c23グリッドの西側で尾根の頂部が大きく広がり平坦面をなす標高約69m付近に位置する。ほぼ平坦面の中央にある。BS139はBS121東側に重複し、BSB03の中におさまっている。

形態 BS139は比較的遺存状態が良く、平面は方形を呈す。規模は東西で3.1m、南北で3.2mを測り、床面積は約10㎡、深さは最も遺存状態の良い南壁で0.26mである。

壁溝は全周する。断面は「U」字状を呈し、深さは南隅で5.3cmである。

柱穴は床面上で4個検出され、その内、主柱穴はP1・P2で、特殊ピットはP3と考えられる。この住居は2本柱で建てられた住居であった。主柱穴の規模はP1(32×28-46)cm、P2(34×32-60)cmである。主柱穴間距離P1-P2は1.0mである。

特殊ピットと思われるP3の規模は(52×46-22)cmである。この遺跡では、特殊ピットが壁際中央にあるものが多いが、この住居は東隅の壁際にあった。用途については不明である。その他に、P1から南東側に約80cm、南壁からも約80cm離れたところに、小ピットがある。規模は(18×14-13.3)cmである。

埋土 埋土は11層に分層できた。①～⑥層は遺構埋土である。⑦～⑪層はピットの埋土である。

遺物 出土遺物には複合口縁をもつ甕Po1、「く」字状口縁をもつ甕Po2、高杯Po3～Po5、壺Po6、直口壺Po7、裾部Po8である。床面では口縁端部に平坦面をもち頸部に指頭圧痕の残る甕Po2が北隅で、壺Po6が南隅で潰れた状態で出土している。高杯Po4が南東壁際で、高杯Po5は北隅でそれぞれ出土した。

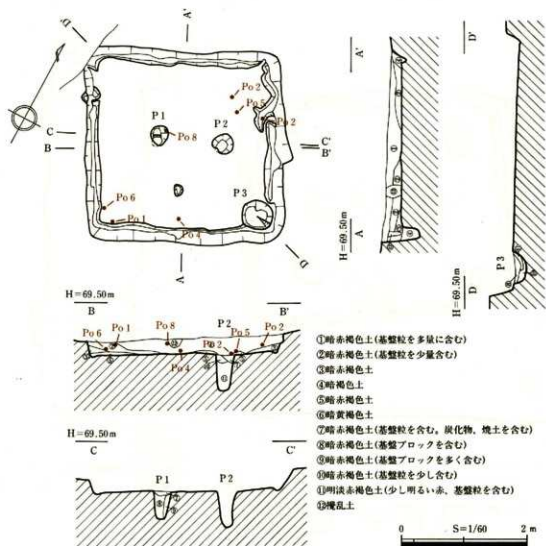
時期 時期は床面上出土器から、古墳時代中期後半と考えられる。

BS140 (挿図179・180、図版30)

位置 調査区の中央、b22グリッドの東側にあり、尾根の平坦面から南西に緩やかに下り始める標高約70m付近に位置する。BS140はBS110の4m北西側にあり、BSI14の8m東側にある。

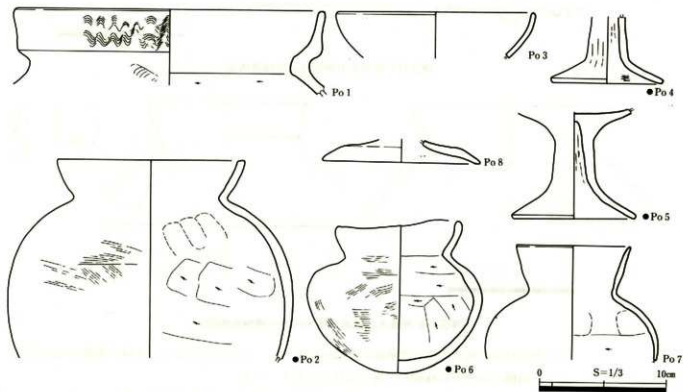
重複 BS140は後世に削平を受けており、遺存状態は悪く、この削平は南側で床面にまで達している。BS140は西側で2条の壁溝が検出できたことから、建て替えがあったものと考えられる。また、BS140は東側では内側の壁溝に沿い、西側では外側の壁溝に沿って平面プランが検出された。従って、このプランの方の住居が新しく、東側の外側の壁溝と西側の外側の壁溝で囲まれるプランをもつ住居の方が古いと考えられる。

形態 形態は平面がどちらも方形である。規模は、新しい住居が東西4.4m、南北3.6mを測り、床面積が15.8㎡であり、古い住居が東西4.3m、南北3.6mを測り、床面積が15.5㎡である。

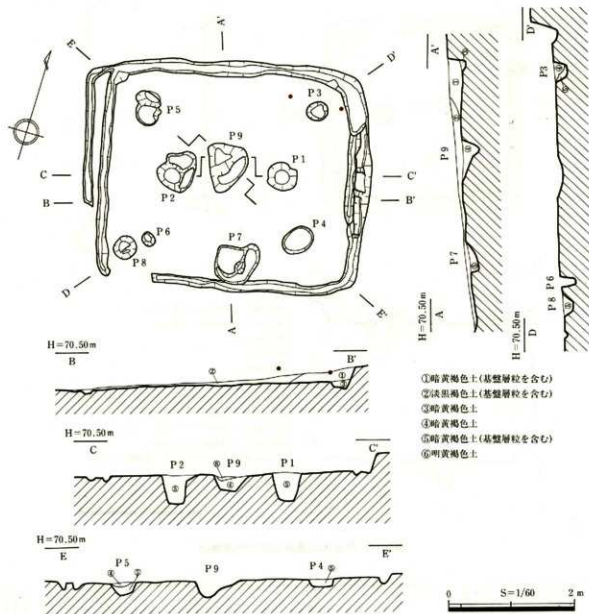


- ①暗赤褐色土(基盤粒を多量を含む)
- ②暗赤褐色土(基盤粒を少量含む)
- ③暗赤褐色土
- ④暗褐色土
- ⑤暗赤褐色土
- ⑥暗黄褐色土
- ⑦暗赤褐色土(基盤粒を含む。炭化物、焼土を含む)
- ⑧暗赤褐色土(基盤ブロックを含む)
- ⑨暗赤褐色土(基盤ブロックを多く含む)
- ⑩暗赤褐色土(基盤粒を少し含む)
- ⑪明淡赤褐色土(少し明るい赤、基盤粒を含む)
- ⑫礫乱上

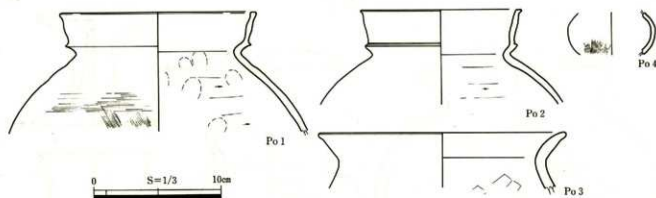
挿図177 南谷大山遺跡B区S139遺構図



挿図178 南谷大山遺跡B区S139出土物実測図



挿図179 南谷大山遺跡B区S140遺構図



挿図180 南谷大山遺跡B区S140出土遺物実測図

残存壁高は最も残りの良い北東隅で0.33mであった。以上のことから、2棟の規模はほぼ同じで、西側にわずかに移動して建てられたと考えられる。

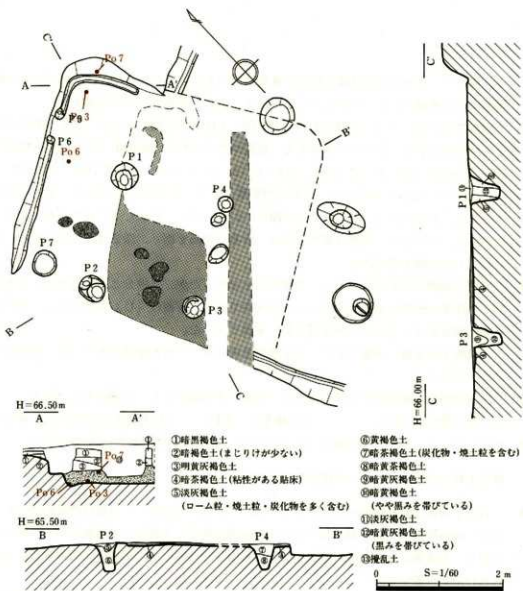
さらに、柱穴の配置でも、2本柱と4本柱の住居が想定でき、建て替えがあったと考えられ

る。従って、BS I 40は2棟の住居が重複していると考えられるが、壁溝とビットの関係は断面からも平面からもつかめなかった。以下、柱穴と壁溝は分けて記述する。

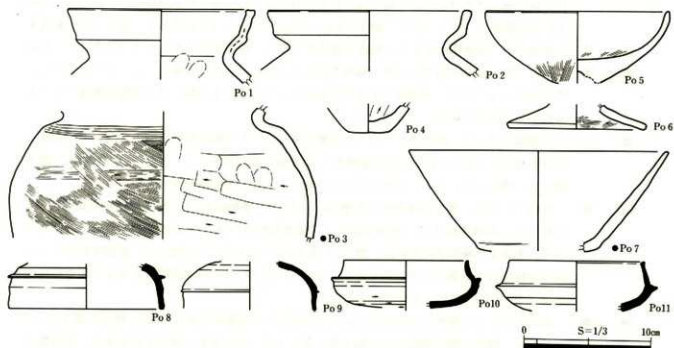
- 柱 穴** 検出できたビットは、9個である。この内、主柱穴は6個であるが、P1～P2の2本柱をもつ住居とP3～P6の4本柱をもつ住居が考えられる。規模は、P1～P6の順に(69×56-79.9)cm、(48×46-42.1)cm、(45×32-21.0)cm、(53×40-12.7)cm、(42×30-30.3)cm、(24×23-24.9)cmである。主柱穴間距離はP1～P2が1.8mであり、P2～P3、P3～P6、P6～P5、P5～P3の順に2.0m、2.5m、2.4m、2.7mである。次に、P9は中央ビットである。規模は東西で62cm、南北で76cmを測り、深さは28.9cmである。その他のビットは用途不明である。
- 壁 溝** 壁溝は南側で削平がおよんでいて検出できなかったが、2棟分とも全周すると考えられる。新しい住居の壁溝の規模は深さが6～10cm程であり、断面は「U」字状を呈し、古い住居の壁溝は深さが3～6cmで、断面は「U」字状であった。
- 埋 土** 遺構埋土は6層に分層できた。①②層が遺構の埋土で自然堆積であり、③～⑥層がビットの埋土である。
- 遺 物** 出土遺物は口縁部がナテ仕上げされ、端部に平坦面をもち、下端が外方に突出している複合口縁の甕Po1・Po2、「く」字状口縁をもつ甕Po3、小型丸底壺の胴部Po4が埋土中から
- 時 期** 出土している。埋土出土の甕Po1・Po2より、古墳時代前期前半と思われる。

BS I 41 (図版181・182、挿図29・68・69)

- 位 置** BS I 41は、調査区南西部f25・g24・g25グリッドに位置する。当地は標高約65.2m～66.8mで、南西を向いた緩斜面になっている。以前は梨などを栽培する耕地だった。前に述べたとおり、当遺構はBS I 37・BS I 38と、重なり合っている。当住居の南西約2.5mには、BS D03が位置する。
- 形 態** 平面は方形を呈する。規模は東西約3.2m、南北約3.7m、北西壁付近で最大壁高約0.4mを測る。床面積は約11.8㎡である。主柱穴は、P1～P4である。規模はそれぞれP1(40×43-48)cm、P2(40×52-45)cm、P3(32×38-47)cm、P4(24×25-42)cmである。主柱穴間距離は、P1～P2の順に1.9m・1.6m・1.8m・1.7mである。BS I 38と重複する範囲には、同遺構の埋土上に貼床が施されていた。暗茶褐色土からなり、厚さは3～6cmである。焼土面は床面で5ヶ所、検出された。これらはいずれも硬く、しっかりしていた。厚さは約3cmである。当遺構で生活が営まれていた時期のもの或いは、住居廃棄時のものと推察することができる。
- 埋 土** 当遺構の埋土で、確認されたものは5層である。うち1層はBS I 38のプラン上の⑨層、暗灰茶褐色土である。詳しくは同遺構B-B断面を参照されたい。また、A-A断面の最下層には、焼土がみられる。厚さは約20cmで硬く、土器・炭化物片を含んでいる。
- 遺 物** 遺物としては、複合口縁を有する甕Po1・Po2、甕胴部Po3、甕または壺の底部Po4、高杯Po5、高杯裾部Po6、高杯杯部Po7、須恵器杯身Po8～Po11が挙げられる。これらのうち、床面より検出されたのは、甕Po3・高杯Po7である。この他には、北部床面近くより複合口縁を有する甕Po2が、西壁近くより高杯Po6が、さらに北部掘乱土中より須恵器杯身Po8・Po9・Po10が、それぞれ出土した。
- 時 期** 床面で出土した甕Po3・高杯Po7より、古墳時代中期後半と考えられる。埋土の切り合い土器から、住居の新旧関係は古い順より、BS I 37→BS I 38→BS I 41となる。須恵器は、山本編年I期・陶邑編年TK208～TK23並行のものと考えられる。

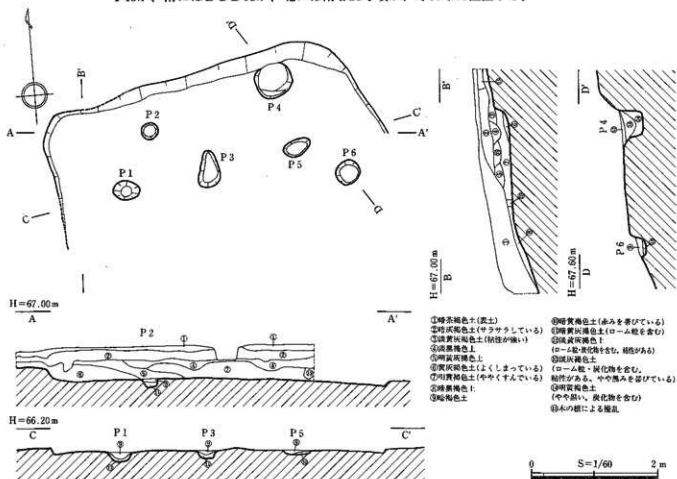


挿図181 南谷大山遺跡B区S141遺構図

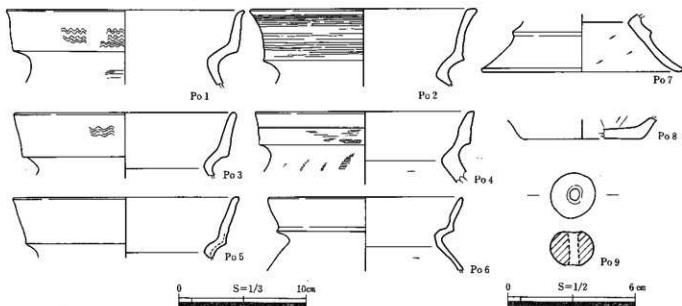


挿図182 南谷大山遺跡B区S141出土遺物実測図

位置 BS142は、調査区南部e26・d25・d26グリッドに位置する。このあたりは、標高約65.5m～66mの南を向いた緩斜面である。当遺構はBS S04の中に位置する。西約6mにはBS I45が、南にはBSD03が、北には南谷28号墳が、それぞれ位置する。



挿図183 南谷大山遺跡B区SI42遺構図



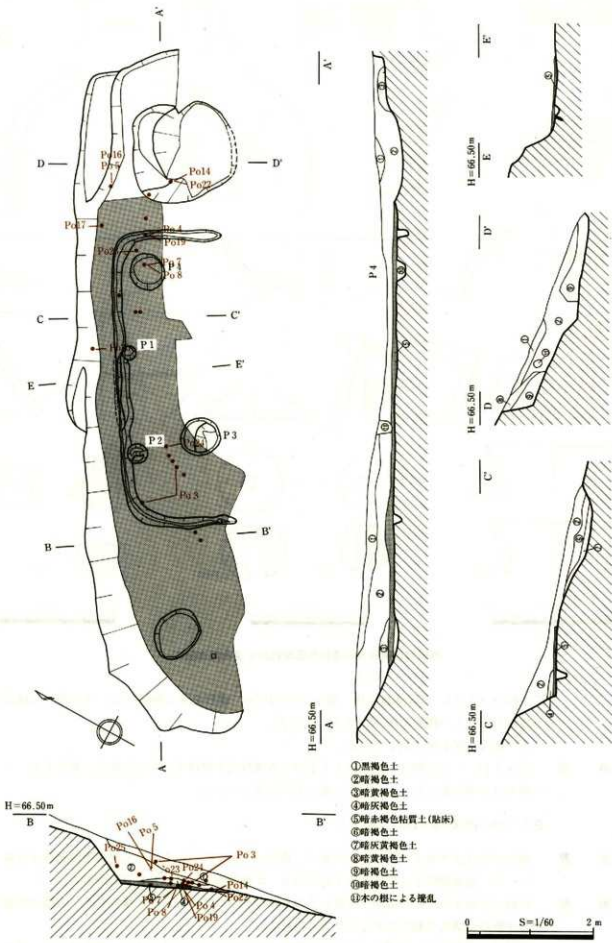
挿図184 南谷大山遺跡B区遺跡SI42出土遺物実測図

- 形態** 当住居跡は、南半分が流失している。残っている部分から推定すると、方形を呈していたものと思われる。
- 規模** 規模は、東西4.8m、南北2.2m以上を測る。最も残りのよい北壁での最大壁高は、0.43mである。残存している部分の、床面積は11㎡以上である。
- ピット** ピットは全部で6個存在する。これらのうち主柱穴と考えられるものは、P1・P5であるが、本来は4個あったと思われる。それぞれの規模は(42×31-14)cm、(45×24-6)cmである。主柱穴間距離は、2.8mを測る。
- 当遺構には、貼床・壁溝・焼土面は、伴わない。
- 埋土** 北壁付近では、当住居独自の埋土⑦層の上に、③～⑤層が堆積している。当遺構の埋土と、BSS04の埋土には共通なものがない。一方、⑦層と北壁の肩、BSS04の床面を結ぶ線は、ほぼフラットといつてよい。よって、当住居が廃棄された後に、BSS04が作られた、といえる。当住居跡の南半分では埋土が激しく削り取られている。
- 遺物** 遺物としては、複合口縁を有する甕Po1～Po6、鼓形器台Po7、底部Po8、土玉Po9が挙げられる。いずれも埋土中からの出土である。
- 時期** 甕口縁Po1・Po2・Po3より、当住居跡は弥生時代後期終末のものと言え。埋土の状況および、出土遺物の時期差により、当遺構はBSS04よりも古いといえる。

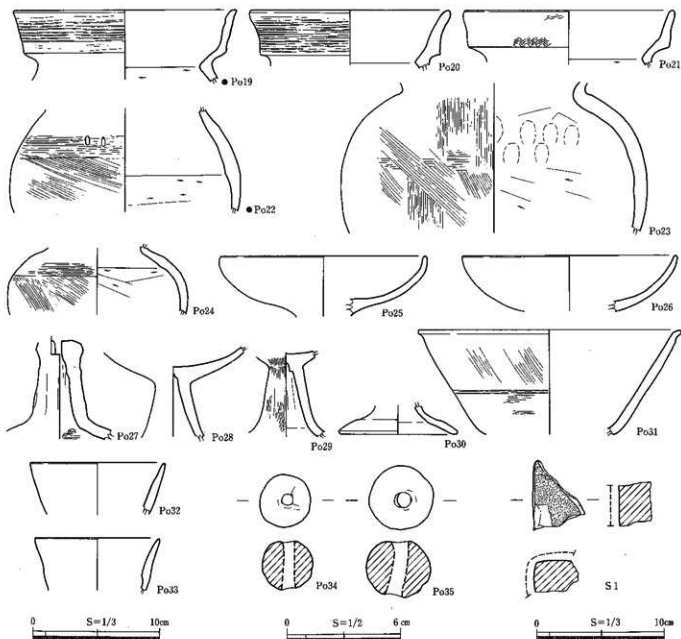
BS143 (挿図185～187、図版30・69)

- 位置** 調査区のほぼ中央A22・B22グリッドにあり、標高64.9m～66.1mのかなり急な南側斜面に位置している。北東約3mにはBSI30、南西約2mにはBSI44がある。
- 形態** この位置で、貼床下にもう一棟の住居を検出したが、貼床をもつものをBSI43-1、貼床下のもをBSI43-2として記述する事とする。
- BSI43** 斜面に立地するために南側は流失しており原形を留めていないが、遺存している壁の状況から平面は隅丸長方形を呈すものと考えられる。
- 規模は、東西8.2m、南北2.2m以上を測り、床面積は18㎡以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.67mである。
- 主柱穴と考えられるものは検出されなかった。
- 貼床** 厚さ8cm程度の、暗赤褐色粘質土による貼床が全面に施されている。
- BSI43** BSI43-2は貼床下で検出された。南側は流失しているが、壁溝の遺存状態から、平面-2は方形を呈すと考えられる。
- 規模は、東西4.48m、南北1.6m以上を測り、床面積は7.1㎡以上である。
- 壁溝は、幅12cm～20cm、深さ10cm～17cmを測り、断面「V」字状を呈すが、北側は外側に入り込みオーバーハングしている。
- 主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、壁溝際でP1・P2が検出された。それぞれの規模は、P1(23×22-21)cm、P2(30×30-20)cmを測る。これらは、壁溝内に立てた板を止めるためのものとも考えられるが、性格は不明である。
- 埋土** 埋土は4層に分層できる。これらは、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が窺える。
- 遺物** 出土遺物には、岡化できたものに複合口縁をもつPo1～Po21、胴部Po22～Po24、高杯杯部Po25・Po26、高杯脚部Po27～Po30、大型高杯杯部Po31、直口壺口縁部Po32・Po33、土玉Po34・Po35、砥石S1がある。

このうち、BSI43-1の床面直上からは東側で口縁部下端が丸味をもつ程度のPo4・Po



挿図185 南谷大山遺跡B区S143遺構図



挿図186 南谷大山遺跡B区SI43出土遺物実測図(2)

7・Po8・Po14、口縁部施文後一部ナテ消すPo19、球形を呈す胴部Po22、中央部で口縁部下端が丸味をもつ程度のPo3が出土している。

その他は、埋土中の出土である。

時期 BS I 43-1の時期は、床面出土土器から古墳時代中期後半と考えられる。BS I 43-2の時期は不明であるが、1より若干遡るものと考えられる。

BS I 44 (挿図188・189、図版31)

位置 調査区のはほぼ中央A23グリッドにあり、標高63.5m～64.7mの極めて急な南側斜面に位置している。北東側約2mにはBS I 43があり、北西側約3mにはBSD03がある。

形態 斜面に立地するために南側は流失しており原形を留めていないが、残存している壁の状態から不整形な隅丸方形を呈すものと考えられる。

規模は、東西5.0m、南北1.3m以上を測り、床面積は6.5m²以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大1.04mである。

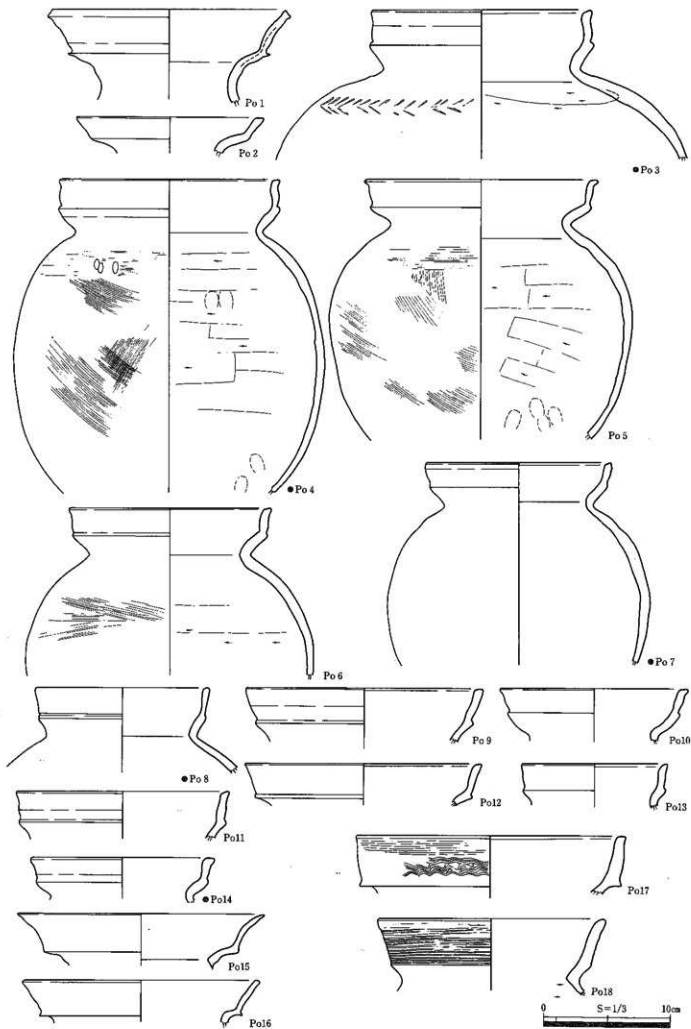


插图187 南谷大山遺跡B区S143出土遺物実測図(1)

壁溝は、東壁を除き壁際で検出された。幅は他のものに比べて広く、18cm～32cm、深さ5cm～11cmを測る。断面は逆台形状を呈す。

主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、壁寄りにP1・P2が検出された。それぞれの規模は、P1(22×20-12)cm、P2(36×28-10)cmを測る。用途は不明である。

貼床

床面のほぼ全面に、厚さ6cm前後の暗灰桃褐色粘質土による貼床がなされている。

貼床下からも壁溝・ピットが検出され、BSI44は埋て替えがあったものと考えられる。検出したピットはP3～P6の4個で、それぞれの規模はP3(30×29-44)cm、P4(37×31-45)cm、P5(22×20-16)cm、P6(18×14-12)cmを測る。いずれも壁溝内またはその近辺に作られているもので、壁溝内に立てた板を止める枕を立てたものと考えられるが、P3・P4は深さもかなりあり、それらとは異なる柱穴の可能性もある。

焼土面

焼土面は、検出されなかった。

埋土

埋土は8層に分層できる。これらは、住居中央に向かって堆積しており自然堆積の状況が窺える。

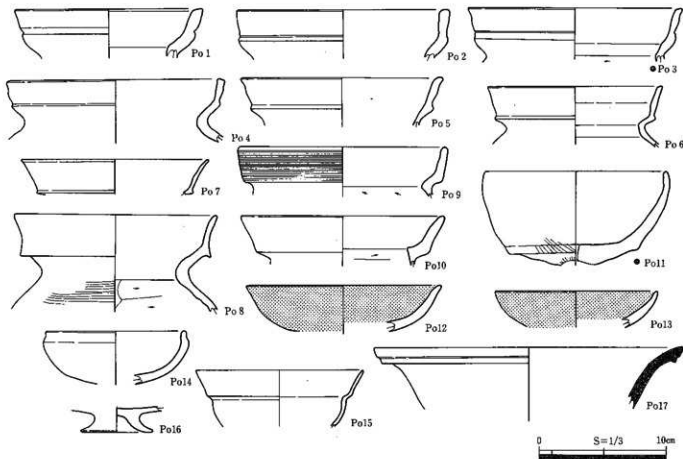
遺物

出土遺物には、図化できたものに複合口縁をもつ甕Po1～Po10、有段の杯部をもつ高杯Po11、高杯杯部Po12・Po13、椀Po14、小型丸底鉢Po15、低脚杯脚部Po16、須恵器甕Po17がある。このうち、床面からは西側で、肉厚で口縁部下端が丸味をもつ程度程度のPo3、椀状の有段高杯Po11が出土している。その他は、埋土中からの出土である。

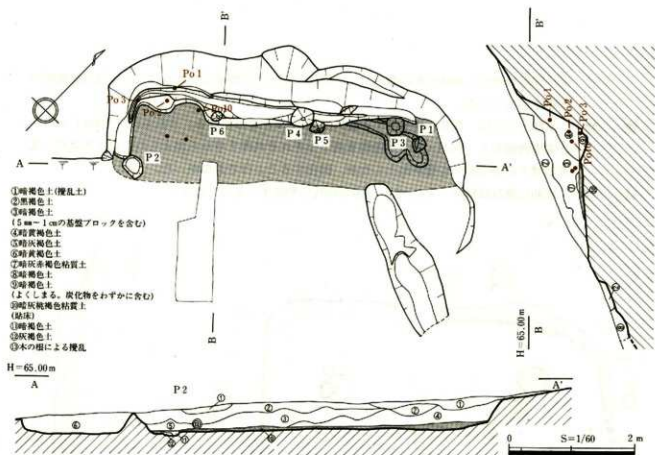
時期

BSI44の時期は、床面出土土器から古墳時代中期後半と考えられる。

埋土中から出土した古墳時代前期前葉の特徴をもつPo6は、胎土が灰黄褐色のもので、この時期の南谷大山遺跡から出土する甕の胎土とは異なっており、他地域から搬入されたものと考えられる。



挿図188 南谷大山遺跡B区SI44出土遺物実測図



挿図189 南谷大山遺跡B区SI44遺構図

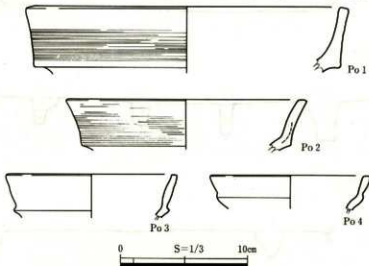
B S I 45 (挿図190・191、図版31・69)

位置 B S I 45は調査区南西部e25グリッドに位置する。当遺構周辺は、標高約65.5m～66mの平坦面である。

形態 擾乱のため西部・南西部の壁が失われているが、平面は方形を呈する。遺構の規模は、東西約4.6m、南北約5.2mである。最も残りのよい北東壁での、最大壁高は0.26mを測る。床面積は約24㎡である。主柱穴はP1～P4の4つである。それぞれの規模は、P1(56×46-44)cm、P2(54×52-52)cm、P3(63×54-25)cm、P4(55×43-42)cmである。主柱穴間距離はP1～P2から順に、3.3m、3.4m、3m、3.3mである。

壁溝 西壁北部壁ぎわより、北西部隅を経て北壁中央に至る区間には、壁溝が走っている。断面は「V」字形で、深さは約5cmである。淡黄褐色土を埋土とする。また、北西部壁ぎわには、ビットが2個みられる。両者ともに、壁溝の延長線上に位置する。規模はP18(9×8-12)cm、P19(7×7-5)cmである。当遺構では、貼床・焼土はみられなかった。

埋土 埋土は10層からなっている。上部の層は擾乱されているものの、下部の②・③・

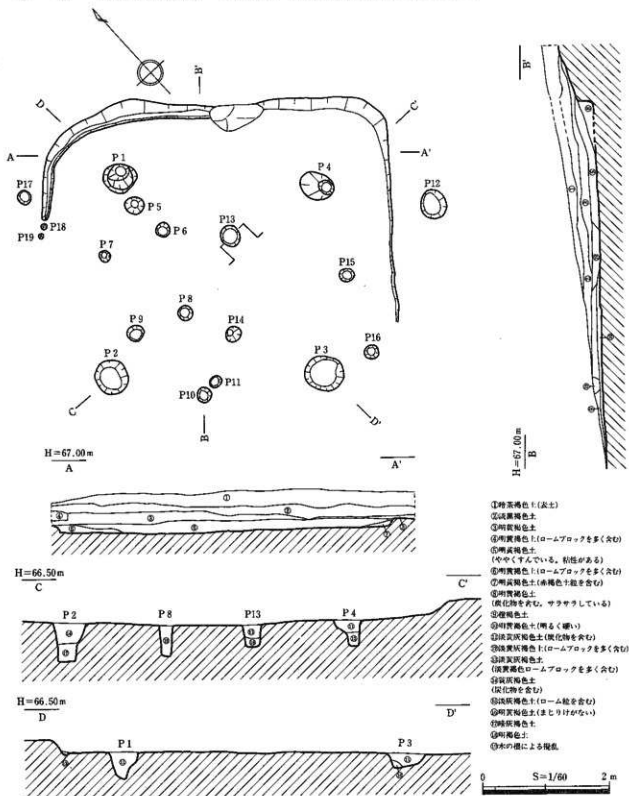


挿図190 南谷大山遺跡B区SI45出土遺物実測図

⑤～⑧層は壁から遺構中央に向かって、流れこむように堆積している。これらは自然堆積の様相を示している。

遺物 遺物としては、複合口縁を有する甕Po1～Po4が挙げられる。これらのうちPo1・Po2は遺構西側から、Po3・Po4が遺構東側よりそれぞれ埋土中から出土した。以上のほか、北東部壁ぎわ中央からも甕が出土したが、図化することはできなかった。

時期 時期は甕口縁Po3・Po4より、古墳時代中期後半と考えられる。



挿図191 南谷大山遺跡B区S145遺構図

遺跡名	形態	規模 (m)	所在地 (座)	所在 標高 (m)	主軸 長 (m)	横軸 長 (m)	遺構	時期	備考
AS101	隅丸方形	6.5×5.8	37.7	1.10	4	—	礎・壁・勾玉・土	弥生時代 前期後半	ナラス・中央 ビット・炭化材
AS102	隅丸方形	4.2×3.6	11.3	0.41	3	—	礎・高杯・手掘り 土・土盤	弥生時代 前期後半	炭土層
AS103	隅丸方形	6.82× 6.91	40.9	0.44	—	—	礎・磨石器	弥生時代 前期後半	室内貯蔵穴AS K101
AS104	平壇	6.41×3.5	36.3	0.46	4	?	—	弥生時代 前期後半	—
BS105	隅丸方形	4.65×4.5	20.9	0.47	4	—	—	弥生時代 前期後半	中央ビット・植 土層・炭化材
BS106	方形	4.82×4.06	19.6	0.62	4	—	—	弥生時代 終末	中央ビット・地 土層・礎で埋え
BS107	方形	2.9×2.88	5.6	0.26	4	—	—	弥生時代 終末	中央ビット
BS108	方形	2.48× 2.1	5.2	0.29	2	—	—	弥生時代 終末	—
HS109	隅丸方形	3.48× 3.0	27.4	0.16	4	2	—	弥生時代 前期後半	不明土坑
BS106	隅丸方形	3.55×3.05	10.6	0.4	2	—	—	弥生時代 終末	—
BS107	隅丸方形	3.2×1.71	2.4	0.15	—	—	—	弥生時代 終末	中地式住居
BS108	隅丸方形	5.6×2.31	12.9	0.83	4	?	—	弥生時代 終末	ナラス・磨石 ビット
BS109	方形	6.38×6.32	40.3	0.72	4	2	—	弥生時代 終末	特殊ビット・土 器器り・炭化材
BS110-1	方形	6×5.8	35.6	1.2	4	—	—	弥生時代 前期後半	特殊ビット・粘 土層・礎
BS110-2	不明	—	—	—	4	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS110-3	不明	—	—	—	4	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS110-4	隅丸方形	6.4×6.3	40.3	0.6	?	—	—	不明	—
BS111-1	方形	6.5×1.7*	11.0	0.19	4	?	—	弥生時代 前期後半	—
BS111-2	方形	6.2×5.5	32	0.72	4	—	—	弥生時代 前期後半	特殊ビット
BS111-3	方形	5.4×3.51	19.1	0.15	—	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS111-4	方形	7.3×7.0	51.1	0.42	4	—	—	弥生時代 前期後半	特殊ビット
BS111-5	方形	5.2×4.8	25	—	4	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS111-6	方形	—	—	—	4	—	—	弥生時代 前期後半	特殊ビット
BS111-7	方形	3.7*× 3.21	12.1	—	4	—	—	弥生時代 前期後半	—
HS112	方形	3.06× 2.55	7.8*	0.78	—	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS113-1	方形	2.91×2.7	7.8	0.21	4	?	—	弥生時代 前期後半	—
BS113-2	方形	3.1×4.7	24	0.37	4	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS113-3	方形	3.7×3.7	13.7	0.12	—	—	—	弥生時代 前期後半	炭化層・礎土
BS113-4	方形	3.5×3.5	12.3	0.4	—	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS114-1	隅丸方形	4.0×5.8	34.3	0.4	4	?	—	弥生時代 前期後半	中央ビット・礎 で埋え
BS114-2	隅丸方形	4.0×4.8	23.5	—	4	?	—	弥生時代 前期後半	中央ビット
BS115	方形	3.22×3.2	10.3	0.47	—	—	—	弥生時代 前期後半	礎土層
BS116	隅丸方形	3.06× 2.1*	6.41	0.23	—	—	—	弥生時代 前期後半	礎土層・粘 土層
BS117	方形	2.8×2.78	7.8	0.33	—	—	—	弥生時代 終末	炭化材
BS118	方形	3.5×3.05	10.7	0.7	2	—	—	弥生時代 前期後半	中央ビット・特 殊ビット
BS119	隅丸方形	3.1×2.41	7.4	0.27	4	?	—	弥生時代 前期後半	礎土層
BS120	隅丸方形	6.14×6.0	36.8	1.37	4	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS121	六角形	11.1× 9.4	62.8	1	6	—	—	弥生時代 前期後半	中央ビット・粘 土層
BS122	方形	4.3×4.1	16	0.4	4	—	—	弥生時代 前期後半	炭土層・礎土 層・土器
BS123	隅丸方形	5.06× 4.07	20.2	0.54	4	2	—	弥生時代 前期後半	中央ビット
BS124	方形	3.84×3.61	13.1	0.6	4	—	—	弥生時代 前期後半	特殊ビット
BS125	不明	7.2×2.7	19.4	0.38	—	—	—	弥生時代 終末	—
BS126	隅丸五角形	9.3×8.9	57.0	0.72	3	—	—	弥生時代 終末	—
BS127	方形	5.18×5.08	26.3	0.73	4	—	—	弥生時代 前期後半	中央ビット・礎 で埋え
BS128-1	方形	3.14× 1.5*	—	0.45	4	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS128-2	不明	—	—	—	4	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS128-3	不明	—	—	—	4	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS129-1	方形	4.31× 3.21*	10.7	0.24	2	—	—	弥生時代 前期後半	中央ビット 礎土層
BS129-2	不明	—	—	—	4	—	—	—	—
BS129-3	不明	—	—	—	4	—	—	—	—
BS130-1	方形	3.15×2.70	8.8	0.12	4	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS130-2	方形	4.5	—	—	4	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS130-3	長方形	5.3×4.25	—	0.91	1	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS130-4	方形	—	—	—	—	—	—	—	—
BS130-5	隅丸方形	—	—	—	—	—	—	—	—
BS130-6	不明	—	—	—	—	—	—	—	—
BS131	方形	4.3×3.51	15.8	0.28	4	—	—	弥生時代 終末	中央ビット
BS132	方形	3.5×3.35	29.3	0.71	4	—	—	弥生時代 前期後半	中央ビット・ベ ッド遺構
BS133	隅丸方形	6.7	—	0.61	4	?	—	弥生時代 前期後半	—
BS134	不明	—	—	—	0.04	2	—	—	—
BS135	方形	2.51× 2.0*	3	0.08	—	—	—	—	—
BS136	隅丸方形	2.8×2.7	7.6	0.4	—	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS137	隅丸方形	6.5×6.2	48	1	4	?	—	弥生時代 前期後半	—
BS138	方形	5.2×5.1	26.5	0.48	4	—	—	弥生時代 前期後半	中央ビット
BS139	方形	3.2×3.1	10	0.27	2	—	—	弥生時代 前期後半	特殊ビット
BS140	方形	4.3×3.6	15.3	0.33	2	(4)	—	弥生時代 前期後半	—
BS141	方形	3.7×3.2	11.6	0.4	4	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS142	方形	4.8×2.2	11	0.43	?	—	—	弥生時代 終末	—
BS143	隅丸方形	8.3×2.21	18.7	0.67	—	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS143-1	方形	4.48× 1.6*	7.1	—	—	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS144	隅丸方形	5.0×1.9*	6.2	1.04	—	—	—	弥生時代 前期後半	—
BS145	方形	5.2×4.6	34	0.26	4	—	—	弥生時代 前期後半	—

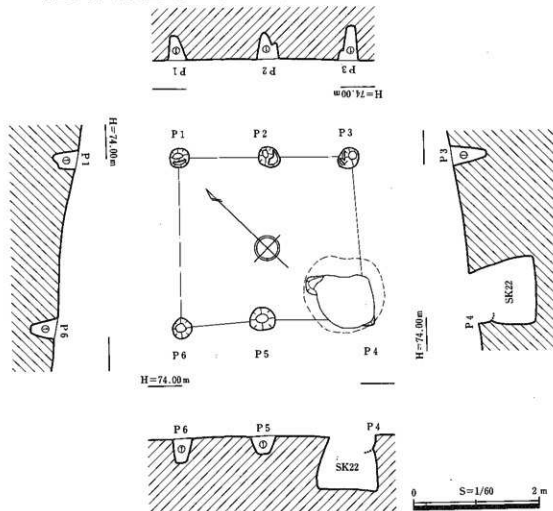
挿表1 南谷大山遺跡壙穴住居層一覽表

↑は調査以上
↑は不明、無し

2. 掘立柱建物跡

BSB01 (挿図192、図版32)

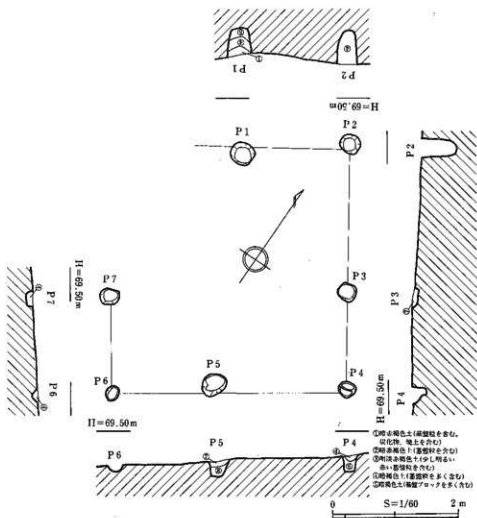
- 位置** BSB01は、調査区のはほぼ中央a19グリッドにあり、標高73.2m～73.6mのゆるく南西側に傾斜する斜面に位置する。東側にはBSB02が接している。
- 形態** 桁行2間・2.8m、梁行1間・2.7mを測る掘立柱建物跡である。主軸方向は、N-72°-Wである。柱穴は6個と考えられるが、P4はBSK22の埋土中に掘り込まれたもので検出することができなかった。規模はそれぞれP1(31×30-41)cm、P2(38×32-45)cm、P3(36×30-59)cm、P5(40×39-30)cm、P6(33×31-43)cmを測る。柱穴間距離は、P1～P2間から順に、1.4m、1.4m、(2.6m)、(1.7m)、1.3m、2.75mである。
- 埋土** 埋土は、いずれも暗褐色土が単層ではいる。
- 時期** P5内から土器片が出土しているが小片のため図化できず、時期は不明である。掘立柱建物跡は3棟しか検出されず、そのうちのBSB03から古墳時代前期前半の土器が出土しており同時期のものと考えられる。



挿図192 南谷大山遺跡B区SB01遺構図

BSB02 (挿図193、図版32)

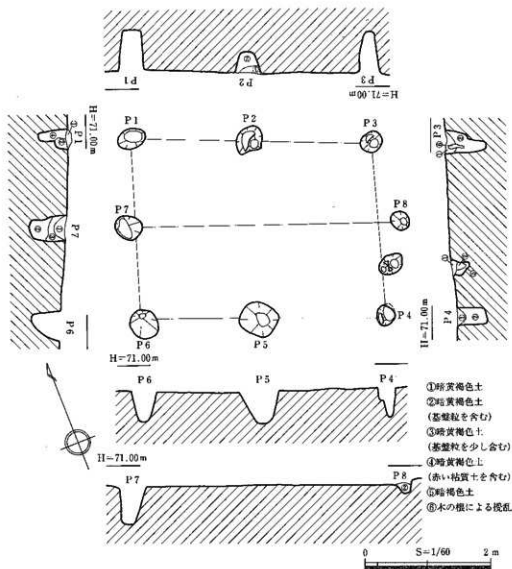
- 位置** 調査区の中央、c23グリッドの西側で尾根の頂部が大きく広がり平坦面をなす標高約69m付近に位置する。ほぼ平坦面の中央にある。BSB02はBSI21と西側で重複し、BSI39の周囲にある。
- 形態** 桁行2間・3.9m、梁行2間・3.8mの掘立柱建物跡である。主軸方向はN-49°20'-Eである。柱穴は7個で、規模はそれぞれP1(42×36-48)cm、P2(30×32-54)cm、P3(28×30-9)cm、P4(28×28-24)cm、P5(38×39-24)cm、P6(20×24-10)cm、P7(26×32-10)cmを測る。柱穴間距離は、P1～P2間から順に、1.6m、2.3m、1.5m、2.1m、1.7m、1.6mである。
- 時期** 時期は不明である。掘立柱建物跡は3棟しか検出されず、そのうちのBSB03から古墳時代前期前半の土器が出土しており、同時期のものと考えられる。



BSB03 (挿図194・195、図版32・69)

挿図193 南谷大山遺跡B区SB02遺構図

- 位置** 調査区の中央、a22グリッドの東側で、尾根が南西に緩やかに下る標高70.5～71m付近に位置する。BSB03はBSB01より南西側に20m、BSB02より東側に20m離れており、ちょうど中間に位置する。
- 形態** 桁行2間・3.9m、梁行2間・2.9mの掘立柱建物跡である。主軸方向はN-69°20'-Eである。柱穴は9個で、規模はそれぞれP1(32×48-62)cm、P2(40×42-33)cm、P3(32

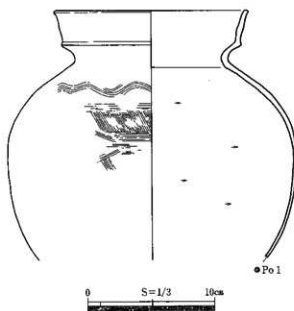


挿図194 南谷大山遺跡B区SB03遺構図

×36-64) cm, P 4 (30×34-48) cm, P 5 (66×56-54) cm, P 6 (45×48-50) cm, P 7 (44×40-60) cm, P 8 (30×30-20) cmを測る。柱穴間距離は、P 1～P 2間から順に、1.8m、2.0m、2.0m、2.7m、1.9m、1.4 m、4.5 mで、P 7～P 1は1.5mである。P 8は近接棟持柱の可能性があり、P 3～P 8・P 8～P 4のそれぞれの距離は1.3m、1.5mである。

遺物 P 1内埋土の中層から、口縁部ナデ仕上げ、下端が外方に突出する複合口縁の甕Po1が出土した。

時期 時期はPo1より、古墳時代前期前半である。



挿図195 南谷大山遺跡B区SB03出土遺物実測図

3. 土 坑

BSK10 (挿図196・197、図版33・72)

位 置 BSK10は、調査区のほぼ中央b20グリッドにあり、標高71.4m~71.6mのほぼ平坦面に位置する。周辺は、後世の耕作によって削平されており、遺存状況は必ずしもよくない。南側約1mにはBSI09が、東側約6mにはBSI23がある。

形 態 平面は不整形な円形を呈し、上縁部長径1.98m×短径1.10m、底部長径1.73m×短径1.50mを測る。深さは0.59mを測り、断面は袋状を呈す。

埋 土 埋土は2層に分層できた。①層は炭化物・焼土粒を含んでいる。②層には基盤層を含んでおり、壁が崩れながら堆積したものと考えられる。

遺 物 出土遺物は、②層から小型丸底鉢Po1が出土している。

時 期 BSK10は、出土土器から弥生時代終末に作られたものと考えられる。

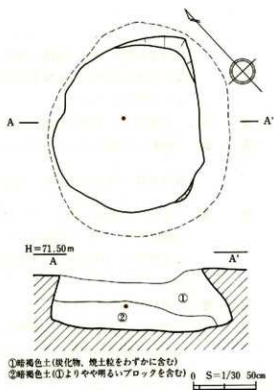
性 格 BSK10は、形態上の特徴から貯蔵穴として利用されたものと考えられる。

BSK11

(挿図198、図版33)

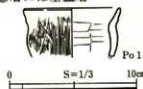
位 置 BSK11は、南谷28号墳周溝内西北部に

形 態 位置する。平面は円形、断

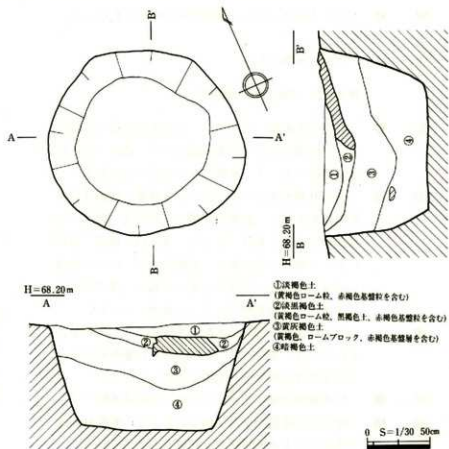


①暗褐色土(炭化物、焼土粒をわずかに含む)
②暗褐色土(①よりやや明るいアブロックを含む) S=1/30 50cm

挿図196 南谷大山遺跡B区SK10遺構図



挿図197 南谷大山遺跡B区SK10出土遺物実測図



①淡褐色土(黄褐色ローム粒、赤褐色基盤層を含む)
②淡黄褐色土(黄褐色ローム粒、黒褐色土、赤褐色基盤層を含む)
③黄褐色土(黄褐色土、ロームブロック、赤褐色基盤層を含む)
④暗褐色土

挿図198 南谷大山遺跡B区SK11遺構図

面は逆台形を呈す。規模は東西1.5m、南北1.6m、深さ約9mを測る。上縁部壁面には、粘性の強い水土が貼られていた。

遺物 ②層中で、4個の石が検出された。
時期 時期・用途ともに不明である。

B S K 12 (挿図199・200、図版33・72)

位置 B区の北東端、B17グリッドの北西付近で広い平坦面をなしている南端辺りで、標高77.5m付近に位置する。BSI31・35から約10m離れた南西側にある。

形態 遺存状態があまり良くない。上縁部、底面共に平面はほぼ円形を呈し、断面は長方形であった。規模は上縁部で長径1.21m×短径1.10mあり、底面で長径1.05m×短径0.86mであった。残存する部分の最大の深さは0.41mであった。

埋土 埋土は3層に分層できた。③層中には焼土が含まれていた。この土坑はDKP層まで掘り込まれている。

遺物 ①層より、ヨコナデで仕上げられた装口縁Po1が出土した。

時期 出土土器Po1から、弥生時代終末と考えられる。

性格 性格は不明である。

B S K 13 (挿図201、図版33)

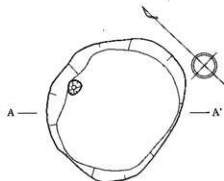
位置 B区の北東端、C16グリッドの北西付近で尾根が広い平坦面をなしている南端辺りで、標高77.5m付近に位置する。すぐ東側にBSI31・35がある。

形態 遺存状態があまり良くない。上縁部、底面共に平面は円形を呈し、断面は北側で上縁部から最大5cm壁面が内湾する袋状であった。規模は上縁部で長径1.15m×短径1.05mあり、底面で長径1.09m×短径1.07mであった。残存部分の最大の深さは0.35mであった。南東側でビットと重複していた。

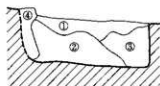
埋土 埋土は4層に分層できた。④層中には炭化物が含まれていた。また、この土坑はDKP層を掘り込み、その下の淡赤灰色の粘土層まで達していた。

時期 出土遺物は全くなかったため、時期は不明である。

性格 埋土中に炭化物が含まれていること、断面が袋状であることより推察すると貯蔵穴と考えられる。

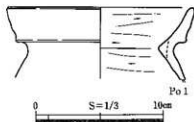


H=77.80m
A A'

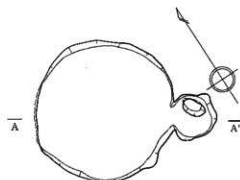


①暗黄褐色土
②淡黄褐色土
③淡黄褐色土(焼土を含む)
④木の根による段境
0 S=1/30 50cm

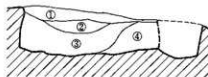
挿図199 南谷大山遺跡B区SK12遺構図



挿図200 南谷大山遺跡B区SK12
出土土物実測図



H=78.00m
A A'



①淡赤褐色土
②淡黄褐色土
③暗黄褐色土
④暗黄褐色土(炭化物を含む)
0 S=1/30 50cm

挿図201 南谷大山遺跡B区SK13遺構図

BSK14 (挿図202・203、図版34・72)

位置 B区の北東端、A16グリッドの北西付近で広い平坦面をなしている西端辺りで、斜面の始まる標高77m付近に位置する。南側約3mにはBSI36が、北側約1mにはBSK15がある。

形態 遺存状態が良く、平面は上縁部で卵形、底面で東側が突出する円形を呈し、断面は、東側で上縁部から最大0.9m壁面が内湾する袋状であった。規模は上縁部で長径1.35m×短径1.22mを測り、底面で長径1.93m×短径1.61mを測る。残存する最大の深さは1.11mである。

埋土 埋土は6層に分層できた。①層は基盤層のブロックを多量に含み、粘性が強いことから、人為的に埋められた可能性が考えられる。③・⑥層中に炭化物が含まれていた。

また、この土坑はDKP層を掘り込み、その下の淡赤灰色の粘土層まで達していた。

遺物 出土遺物には、複合口縁をもち、口縁部施文が施される甕Po1～Po3が埋土中から出土している。

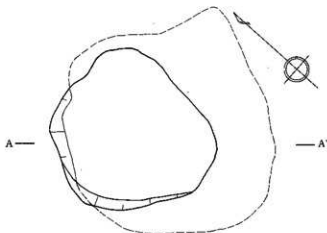
時期 出土遺物から推察すると弥生時代後期後半と思われる。

性格 BSK14は、形態上の特徴から貯蔵穴と考えられる。

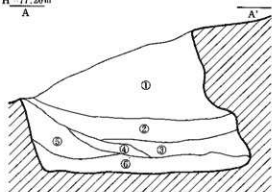
BSK15 (挿図204・205、図版34・72)

位置 B区の北東端、A16グリッドの北西付近で広い平坦面をなしている西端辺りで、斜面の始まる標高76m付近に位置する。南側約1mにBSK14、南側約5mにBSI36がある。

形態 遺存状態が良く、平面は上縁部で卵形、底面は南側が突出するいびつな円形を呈し、断面は、南側で上縁部から最大0.73m壁面が内湾する袋状である。規模は上縁部で長径1.24m×短径0.84mを測り、底面で長径1.63m×短径1.44mを測る。



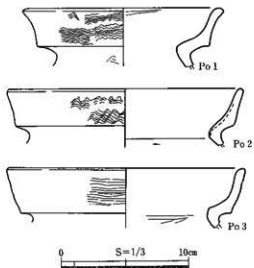
H=77.20m
A



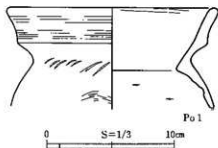
- ①暗赤褐色土(基盤ブロックを含む)
- ②明黄褐色土
- ③明黄褐色土(炭化物を含む)
- ④暗褐色土
- ⑤暗黄褐色土
- ⑥暗黄褐色土(炭化物を含む)

0 S=1/30 50cm

挿図202 南谷大山遺跡B区SK14遺構図



挿図203 南谷大山遺跡B区SK14出土遺物実測図



挿図204 南谷大山遺跡B区SK15
出土遺物実測図

残存する最大の深さは南東側で0.73mを測る。

埋 土 埋土は3層に分層できた。①層は基盤層のブロックを多量に含み、粘性が強いことから人為的に埋められた可能性が考えられる。②層中に炭化物が含まれていた。また、この土坑はDKP層を掘り込み、その下の淡赤灰色の粘土層まで達していた。

遺 物 出土遺物には、埋土下層から、口縁部に平行沈線を施した後にナデ消しするPo1が出土している。

時 期 出土遺物から推察すると弥生時代後期後半頃と思われる。

性 格 BSK15は、形態上の特徴から貯蔵穴と考えられる。

BSK16 (挿図206・207、図版34・72)

位 置 BSK16は、調査区のやや東側A18グリッドにあり、標高75.9m～76.4mの緩やかに南西側に傾斜する斜面に位置する。南西側約2mにはBSI27が、東側約2mにはBSI33がある。

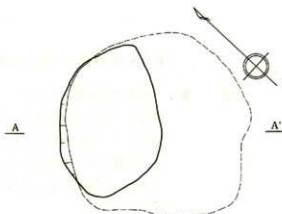
形 態 平面は不整形な円形を呈し、上縁部長径1.40m×短径1.28m、底部長径1.28m×1.20mを測る。深さは0.3mを測り、断面は一部袋状を呈す。底面は平坦ではなく、南西側に緩やかに傾斜している。

また、南西側には(66×49-112)cmを測るビットが掘り込まれているが、これはBSK16が埋まった以後に掘り込まれていた。

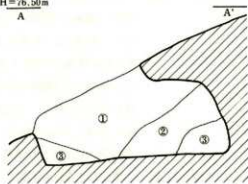
埋 土 埋土は2層に分層できた。①層は基盤層を多量に含んでおり、壁が崩れたものと考えられる。②層は中央部で盛り上がるように堆積している。

遺 物 出土遺物は、暗黄褐色土中から複合口縁をもつ甕Po1・Po2、甕F1が出土している。

出土状況 Po1は口縁部ナデ仕上げをするもので、Po2は、口縁部施工後一部ナデ消しをするもので

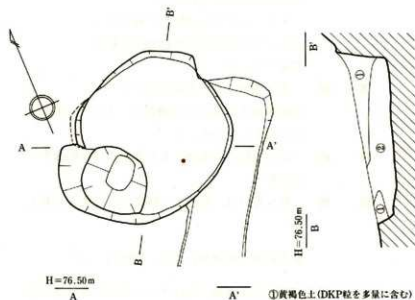


H=76.50m
A



①暗赤褐色土(基盤ブロックを含む)
②暗黄褐色土(炭化物を含む)
③明黄褐色土

挿図205 南谷大山遺跡B区SK15遺構図



H=76.50m
A

H=76.50m
B

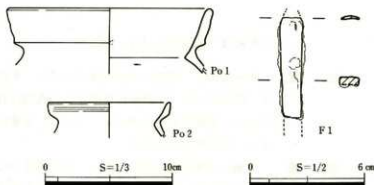
①黄褐色土(DKP粒を多量に含む)
②暗黄褐色土

挿図206 南谷大山遺跡SK16遺構図

ある。

時期 BSK16は、出土土器から弥生時代終末に作られたものと考えられる。

性格 BSK16は、形態上の特徴から貯蔵穴として作られたものと考えられる。



挿図207 南谷大山遺跡B区SK16出土遺物実測図

BSK17
(挿図208・209、図版34・72)

位置 BSK17は、調査区やや東側A18グリッドにあり、標高75.7mの平坦面に位置する。南東側約1mにはBS127が、北側はBSS03に接している。

形態 平面は不整形な楕円形を呈し、上縁部長径0.94m×短径0.79m、底部長径1.11×0.90mを測る。深さは0.4mを測り、断面は袋状を呈す。底面西側には(58×35-10)cmを測るピットが掘り込まれている。

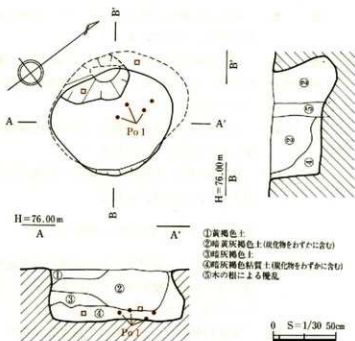
埋土 埋土は4層に分層でき、①層は基盤層を多量に含んでおり、壁が崩れたものと考えられる。④層は粘質土で、花粉分析の結果雑草の花粉を含んでいた。

遺物 出土遺物は、底面から複合口縁をもつ甕Po1が出土している。Po1は、口縁部ナデ仕上げをするものである。

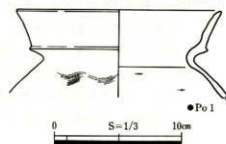
また、底面から板石も土器と一緒に出土している。

時期 BSK17は、出土土器から弥生時代終末に作られたものと考えられ、近接するBSK16より時期が下るものと考えられる。

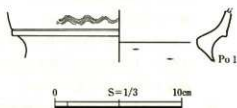
性格 BSK17は、形態上の特徴から貯蔵穴として利用されたものと考えられる。



挿図208 南谷大山遺跡B区SK17遺構図



挿図209 南谷大山遺跡B区SK17出土遺物実測図



挿図210 南谷大山遺跡B区SK18出土遺物実測図

BSK18 (挿図210・211、図版35)

位置 BSK18は、調査区の中央部A20グリッドにあり、標高72.2mの平坦面に位置する。西側はBSI18が、東側はBSI19が切っている。北東側約2mにはBSI25がある。

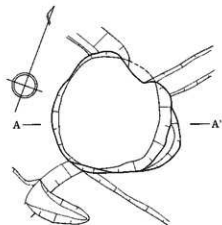
形態 平面は不整形な円形を呈し、上縁部長径0.96m×短径0.94m、底部長径0.9m×0.8mを測る。深さは1.38mを測り、断面は袋状を呈す。

埋土 埋土は5層に分層でき、①・③・④層は炭化物をわずかに含んでいる。

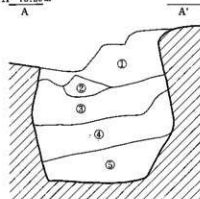
遺物 出土遺物は、埋土中から複合口縁をもつ甕Po1
出土状況 が出土している。Po1は、口縁部施文の後一部ナデ消すものである。

時期 BSK18は、出土土器から弥生時代後期後半に作られたものと考えられる。

性格 BSK18は、形態上の特徴から貯蔵穴として利用されたものと考えられる。



H=72.20m



①暗赤褐色土(炭化物、褐色ブロックをわずかに含む)
②暗褐色土(褐色ブロックをわずかに含む)
③暗褐色土(炭化物をこく(わずかに含む))
④暗赤褐色土(炭化物をこく(わずかに含む))
⑤暗褐色土(褐色ブロックを含む)

S=1/30 50cm

挿図211 南谷大山遺跡B区SK18遺構図

BSK19 (挿図212・213、図版35・72)

位置 B区中央、c21グリッドの北東付近で北側の斜面が下り始める標高68m付近に位置する。南側約3mには、BSI14、BSI26がある。

形態 遺存状態が良い。平面は上縁部で半円形、底面で隅丸長方形を呈し、断面は東側で上縁部から最大0.55m壁面が内湾する袋状であった。規模は上縁部で長径2.87m×短径1.46mを測り、底面で長径3.41m×短径1.48mを測る。

残存する部分の最大の深さは、南側で0.73mあった。

埋土 埋土は9層に分層できた。①層は遺構全体にかぶったものである。②～⑨層がこの土坑の埋土であり、③～⑧層中に炭化物が含まれていた。

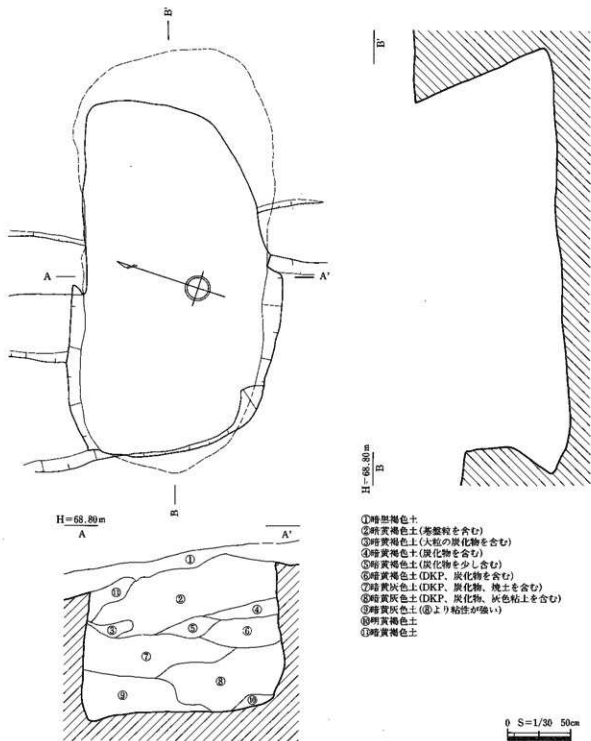
また、この土坑はDKP層を掘り込み、その下の淡赤灰色の粘土層まで達していた。さらに、斜面側に平坦面を作るために積みだされたと考えられる層が2層あるが、これらの層をも掘り込んでいた。

遺物 出土遺物には複合口縁をもつ甕Po1～Po15、壺Po16・Po17、壺又は甕の底部Po18～Po20、鼓形器台Po21～Po23、須恵器杯身Po24、土玉Po25が出土している。いずれも埋土中からの出土である。

Po1～Po9・Po12・Po13・Po17は口縁部施文が施されるもので、Po10・Po14はナデ仕上げされる。Po11・Po15は立ち上がりが高く、内傾する口縁部をもつ。須恵器杯身Po19は、口縁部が二段になるものである。

時期 出土遺物から推察すると弥生時代後期後半～終末頃と思われるが、この他にさまざまな時期の土器を含んでいる。Po11・Po15は弥生時代後期前半の特徴をもち、当遺跡内では最も時期が遡る遺物である。また、須恵器Po19は山本編年I期・陶邑編年TK209に並行するものと考えられる。

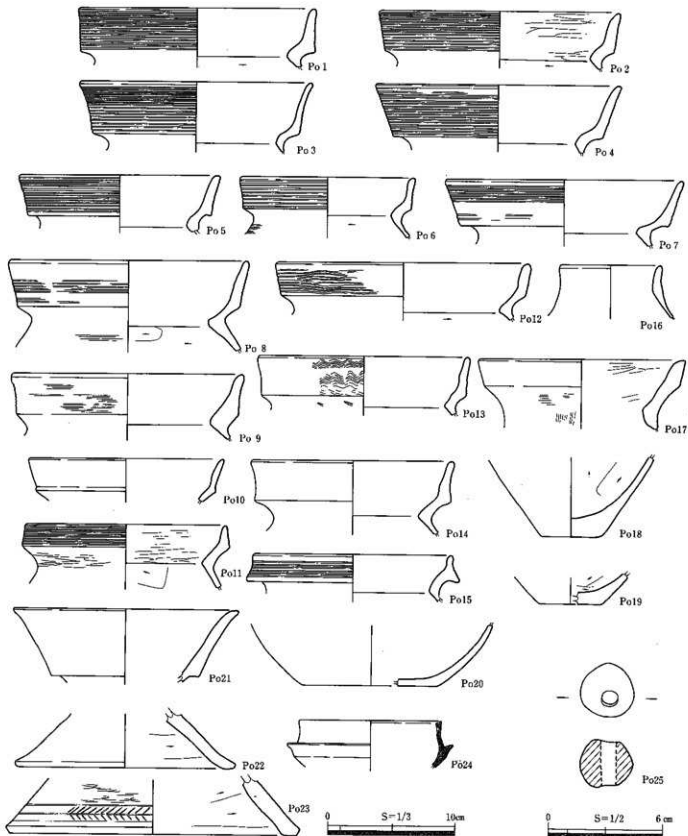
性 格 BSK19は、埋土中に炭化物が含まれていること、断面が袋状であることより推察すると貯蔵穴と考える。



挿図212 南谷大山遺跡B区SK19遺構図

B S K 20 (挿図214・215、図版35)

位 置 調査区西側、e23グリッドの北西側、丘陵の先端で広い平坦面を成している標高68m付近に位置する。B S K 20はB S I 11の4m南西側にある。

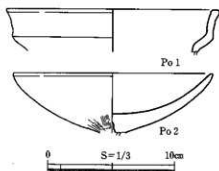


押図213 南谷大山遺跡B区SK19出土遺物実測図

形態 後世の溝が東側に掘られており、土坑の半分は削られていた。平面は上縁部、底面共に円形を呈し、断面は皿状である。規模は、上縁部で長径1.46m×短径1.26m、底面で長径1.0m×短径0.8m、残存する最大の深さ0.15mである。

埋土 埋土は2層に分層できる。②層は土器を含んでいた。

遺物 出土遺物は口縁部はナテ仕上げで、端部に水平な平坦



押図214 南谷大山遺跡B区SK20出土遺物実測図

面をもち、口縁部下端が丸味をもって突出する複合口縁の甕Po1、浅い椀状の杯をもつ高杯Po2が②層中より出土している。

時期 埋土中出土遺物より、BSK20の時期は古墳時代中期後半と考えられる。

性格 性格は不明である。

BSK21 (挿図216、図版35)

位置 BSK21は、調査区の中央部a19グリッドにある。BSS02の平坦面に位置し、標高は73.9mである。南側約1mにはBSI15が、東側約3mにはBSI17がある。

形態 平面は不整形な楕円形を呈し、上縁部長径1.35m×短径1.16m、底部長径1.29m×1.09mを測る。深さは0.4mを測り、断面は袋状を呈す。

埋土 埋土は5層に分層でき、いずれも自然堆積の状況が窺われる。

遺物 出土遺物は、埋土中から土器片が出土しているが図化できなかった。そのため、BSK21の時期は不明である。

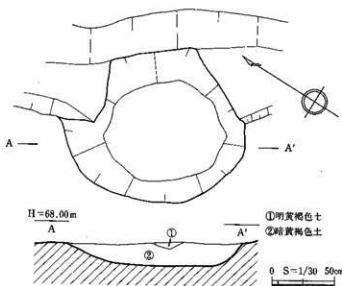
性格 BSK21は、形態上の特徴から貯蔵穴として利用されたものと考えられる。

BSK22

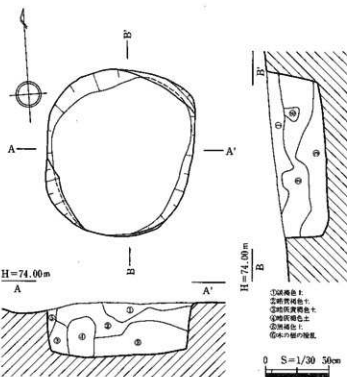
(挿図217・218、図版36・72)

位置 BSK22は、調査区の中央部a19グリッドにある。BSS02の平坦面に位置し、標高は73.2mである。南西側約2mにはBSI23がある。また、BBS01のP4が埋土中に掘り込まれていた。

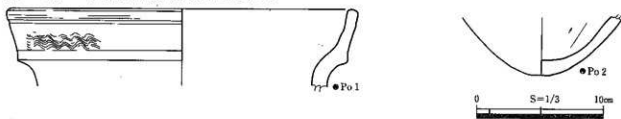
形態 平面は不整形な円形を呈し、上



挿図215 南谷大山遺跡B区SK20遺構図



挿図216 南谷大山遺跡B区SK21遺構図



挿図217 南谷大山遺跡B区SK22出土遺物実測図

縁部長径0.89m×短径0.85m、底部長径1.31m×1.18mを測る。深さは1.02mを測り、断面は袋状を呈す。

埋土 埋土は4層に分層でき、いずれも自然堆積の状況が窺われるが、そのうち③層は基盤層の崩落土で、④層は、部分的に盛り上がる粘質土層である。

遺物 出土遺物は、底面中央部から複合口縁をもつ甕Po
出土状況 1、尖り底気味の底部Po2が出土している。Po1は、口縁部施工後一部ナテ消すものである。

時期 BSK22は、底面出土土器から、弥生時代後期後半のものと考えられる。

性格 BSK22は、形態上の特徴から貯蔵穴として利用されたものと考えられる。

BSK23 (挿図219・220、図版36・72)

位置 BSK23は、調査区南西部e25グリッド、標高66.5mの南西向き斜面に位置する。約0.7m南西にはBSI45がある。

形態 平面は円形、断面は四角形を呈す。東西7.5m、南北7m、深さ0.3mを測る。形態・規模から推定すると、当遺構は上部を削り取られたものと思われる。

埋土 残っている埋土は、明黄褐色土(ロームブロックを含む、ややくすんでいる)のみである。この土は土器を含み、硬くしっかりとしている。

遺物 遺物としては、複合口縁を有する甕Po1・Po2、甕または壺の底部Po3が、挙げられる。

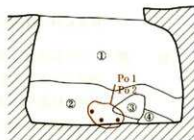
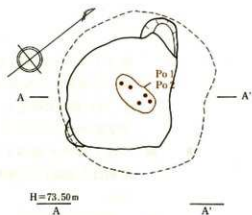
時期 複合口縁Po1・Po2より、当遺構は弥生時代終末といえる。

BSI45との関係であるが、時期差・位置等を考慮すると、当遺構は同住居に伴うものとはいいがたい。

BSK24 (挿図221・222、図版36・73)

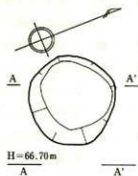
位置 調査区西側、e22グリッドの西側、丘陵の先端で広い平坦面を成している標高68m付近に位置する。BSI11によって削平されている。

形態 平面は卵形を呈し、断面は南壁で最大26cm内湾する袋状である。規模は、上縁部で長径1.64m×短径1.31



- ①暗灰黄褐色土
- ②暗灰褐色土
- ③黄褐色土(基盤ブロック崩落土)
- ④暗灰褐色粘質土

挿図218 南谷大山遺跡B区SK22遺構図



挿図219 南谷大山遺跡B区SK23遺構図



挿図220 南谷大山遺跡B区SK23出土遺物実測図

m、底面で長径1.90m×短径1.51m残存する最大の深さ0.98mである。

埋 土 埋土は5層に分層できる。③層は多量の炭化物と土器を含んでいた。

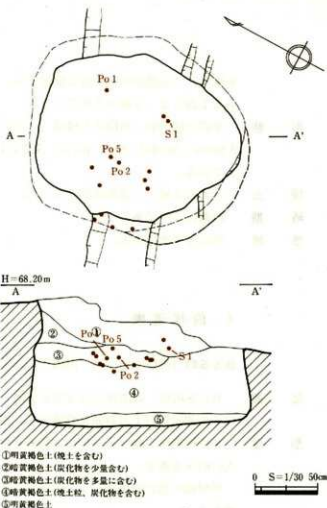
遺 物 出土遺物は口縁部に施文を施した後にナデ消してある複合口縁をもつ甕Po 1～Po 3・Po 5、ナデ仕上げし、口縁部下端が下垂する複合口縁をもつ甕Po 4、平底の底部Po 6、砥石S 1が埋土中から出土している。

時 期 時期は埋土中出土物より、弥生時代後期後半と考えられる。

性 格 形態より、貯蔵穴と考えられる。

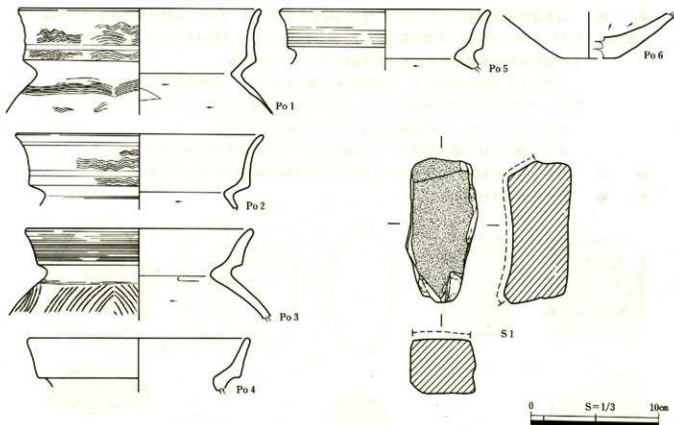
BSK 25 (挿図223)

位 置 調査区西側、e 22グリッドの西側、丘陵の先端で広い平坦面



- ①明黄褐色土(焼土を含む)
- ②暗黄褐色土(炭化物を少量含む)
- ③暗黄褐色土(炭化物を多量に含む)
- ④暗黄褐色土(焼土粒、炭化物を含む)
- ⑤明黄褐色土

挿図221 南谷大山遺跡B区SK24遺構図



挿図222 南谷大山遺跡B区SK24出土遺物実測図

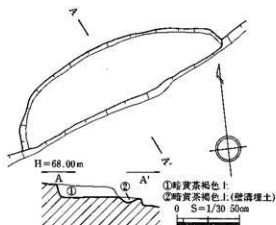
を成している標高68m付近に位置する。
BSI11によって削平されている。

形態 平面は楕円形、規模は上縁部(1.31×0.84)m、底面(1.76×0.45)m、深さ0.1mである。

埋土 埋土は1層で、暗茶褐色であった。

時期 時期は不明である。

性格 性格は不明である。



4. 段状遺構

挿図223 南谷大山遺跡B区SK25遺構図

BSS01 (挿図224~226、図版37・73・74)

位置 BSS01は、調査区のほぼ中央b21・a21・A21グリッドにあり、標高70m~71.5mのゆるく南側に傾斜する斜面に位置する。西側にはBSB03がある。

形態 長さ約19m、幅4m~10mに斜面を掘り込んで平坦面を作っている。掘り込み壁高は、最大0.63mを測る。

平坦面には計34個のピットが掘り込まれている。このうちP5~P12はBSB03のピットである。

埋土 埋土は、7層に分層でき、いずれも自然堆積の状況が窺われる。

出土状況 出土遺物には、図化できたものに複合口縁をもつ甕Po1~Po12、高杯杯部Po13、高杯脚部Po14、碗Po15~Po16、小型短頸壺Po17、須恵器甕Po18、上玉Po19~Po21、花崗岩製砥石S1、細粒花崗岩製砥石S2、安山岩製砥石S3・S4がある。

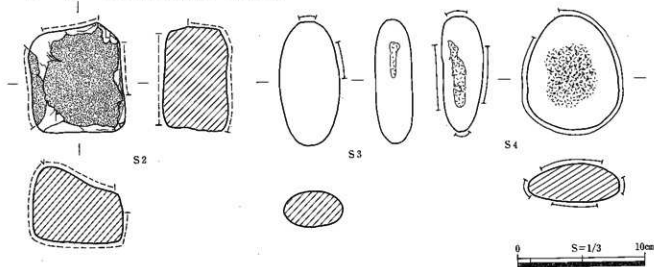
このうち北東側P28内から、口縁部施文が施されるPo1、口縁部施文の後ナデ消すPo4・Po9、ナデ仕上げをするPo6・Po7、土玉Po19・Po20が出土している。

また、P29内から、口縁部施文を施すPo2が出土している。

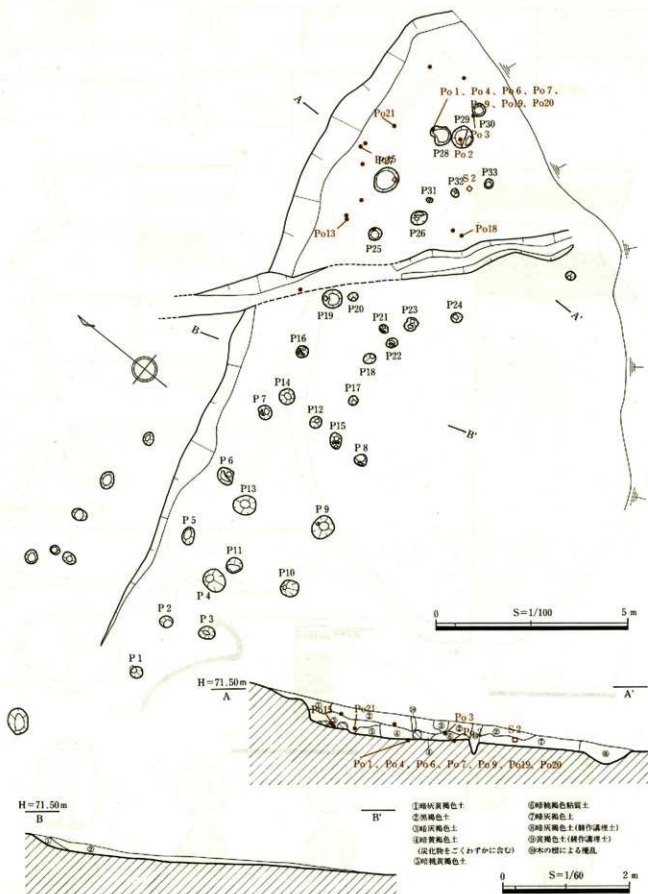
また、耕作に伴う溝の東側から、内面叩きをナデ消す須恵器Po18が出土している。

時期 BSS01の時期は、底面出土の土器から、弥生時代後期後半のものと考えられる。

性格 BSS01の性格は不明である。



挿図224 南谷大山遺跡B区SS01出土物実測図(2)



挿図225 南谷大山遺跡B区SS01遺構図

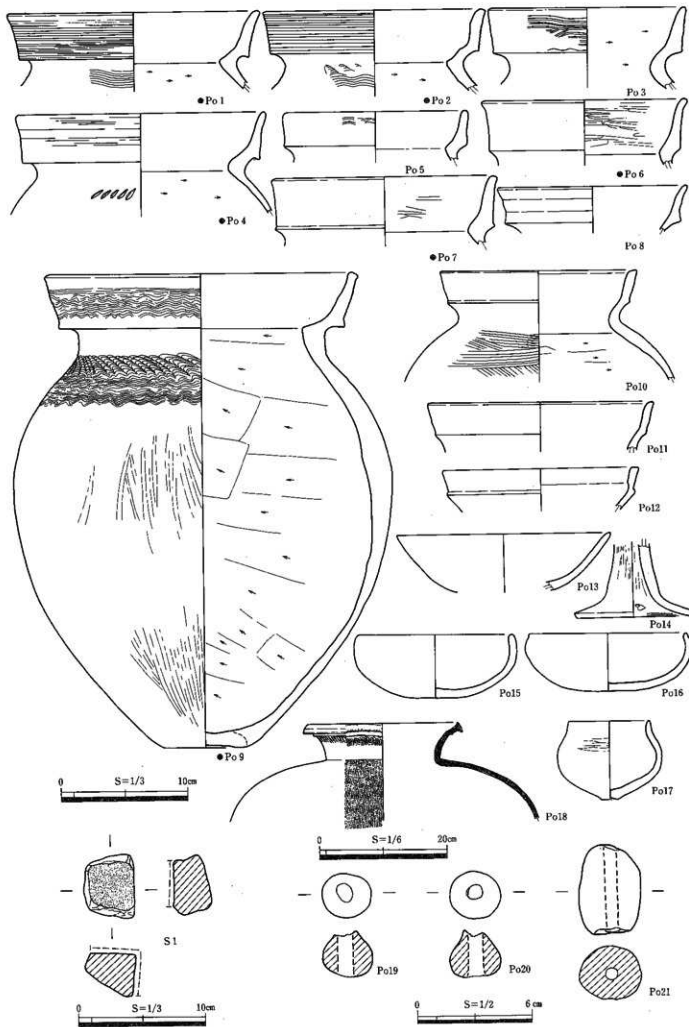


插图226 南谷大山遺跡B区SS01出土物実測図(1)

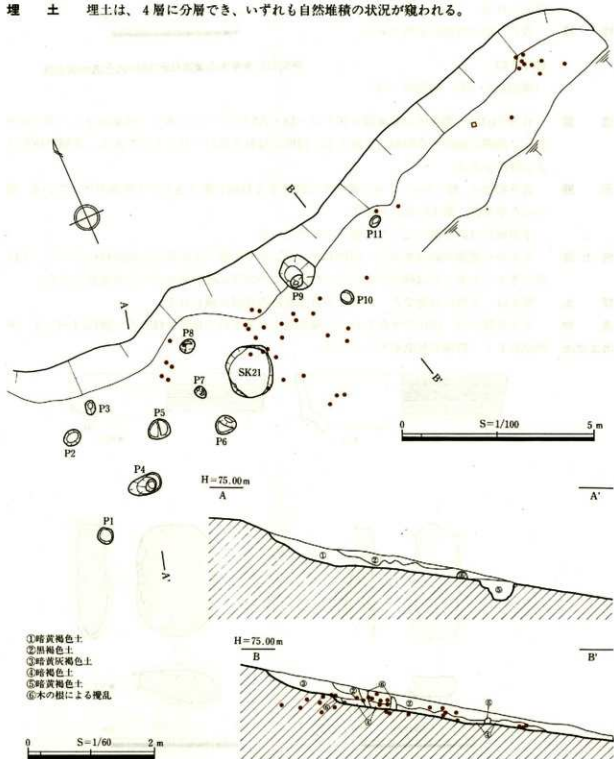
BSS02 (挿図227・228、図版37)

位置 BSS02は、調査区のほぼ中央A19・B19グリッドにあり、標高74m～74.6mのゆるく南西側に傾斜する斜面に位置する。ほぼ中央にはBSK21が、西側にはBSB01がある。

形態 長さ約18m、幅1.5m～3mに斜面を掘り込んで平坦面を作っている。掘り込み壁高は、最大0.73mを測る。

平坦面には計11個のピットが掘り込まれている。

埋土 埋土は、4層に分層でき、いずれも自然堆積の状況が窺われる。



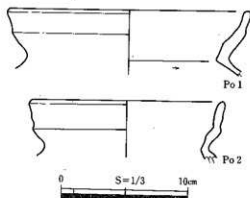
挿図227 南谷大山遺跡B区SS02遺構図

遺物 出土遺物には、凶化できたも
出土状況 のに口縁部下端がさらに退化し

た複合口縁をもつ甕Po 1・Po 2がある。いずれも、埋土中からの出土である。

時期 B S S 02の時期は、出土土器から古墳時代中期後半のものと考えられる。

性格 B S S 02の性格は不明である。



B S S 03

(挿図229・230、岡版37・74)

挿図228 南谷大山遺跡B区SS02出土遺物実測図

位置 B S S 03は、調査区a 16・17・18・A18グリッドにあり、標高74.4m～76.2mのゆるく西側に傾斜する斜面に位置する。南側にはB S K 17・B S I 27がある。北側は耕作による攪乱がある。

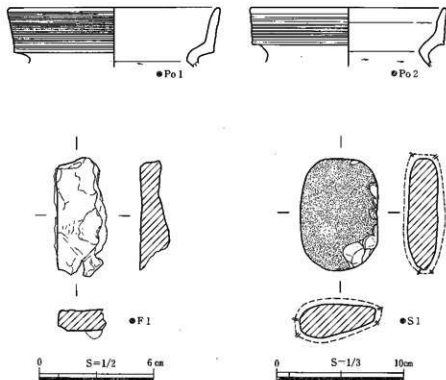
形態 長さ約24m、幅3.5m～7mに緩やかに湾曲する斜面を掘り込んで平坦面を作っている。掘り込み壁高は、最大0.92mを測る。

平坦面には計18個のピットが掘り込まれている。

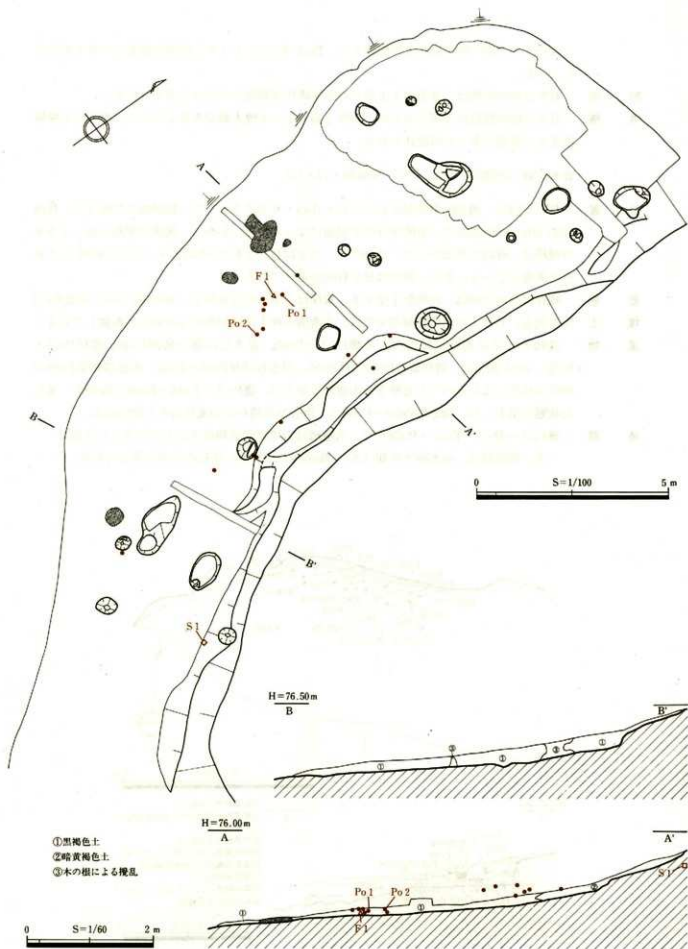
焼土面 中央やや北側の斜面寄りと、南側P17付近に分厚く盛り上がる焼上面が検出された。主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、この位置に住居跡があった可能性もある。

埋土 埋土は、2層に分層でき、いずれも自然堆積の状況が窺われる。

遺物 出土遺物には、凶化できたものに口縁部施文が施される複合口縁をもつ甕Po 1・Po 2、
出土状況 明鉄器F 1、閃緑岩製磨石S 1がある。



挿図229 南谷大山遺跡B区SS03出土遺物実測図



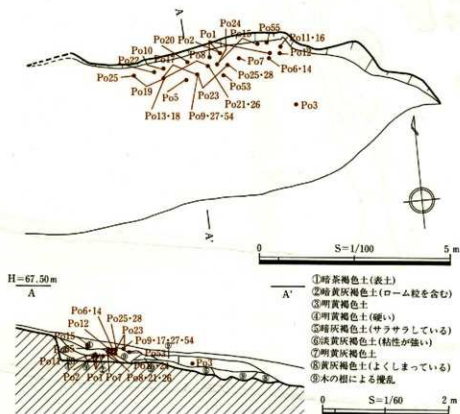
挿図230 南谷大山遺跡B区SS03遺構図

このうち北側の焼土面付近の底面から、Po1・Po2、F1が、南側の壁寄りでS1が出土している。

- 時期** BSS03の時期は、底面出土土器から弥生時代後期後半のものと考えられる。
- 性格** BSS03の性格は不明であるが、分厚く盛り上がる焼土面があることから、簡単な上屋構造をもつ住居があった可能性がある。

BSS04 (挿図231・233～235、図版38・74・75)

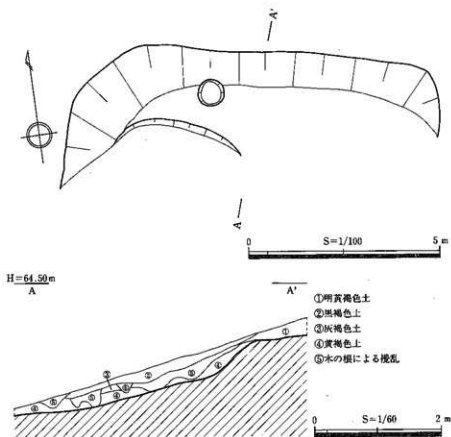
- 位置** BSS04は、調査区南西部d25・e25・d26・e26グリッドの、緩斜面に位置する。標高は65.50m～66.75mで、遺構部分は平坦面になっている。しかし、後世の攪乱が激しく本来の規模は、確認できなかった。d26グリッドではBS142と、d25グリッドでは石列と、それぞれ重複している。また、南にはBSD03が走っている。
- 形態** 残存部分の平面は、四角形を呈する。規模は、東西約11m以上、南北約4.5m、高低差0.4mを測る。BS142との重複部分では、当遺構の埋土は同住居のものの上に堆積している。
- 遺物** 遺物としては複合口縁を有する甕Po1～Po49、壺または甕の底部Po50、高杯Po51・Po52、直口壺Po53、鼓形器台Po54、杯Po55、須恵器杯身Po56・Po57、須恵器脚部Po58が、挙げられる。これらのうち北壁ぎわ床面直上からは、甕Po1・Po16・Po19・Po22が、潰れた状態で出土した。須恵器Po56～Po58は、南谷28号墳からの流れ込みと思われる。
- 時期** 甕Po1～Po3・Po5～Po28より、当遺構は古墳時代前期前半のものと考えられる。一方、須恵器は、山本編年Ⅳ期(古)・陶邑編年TK209並行のものと考えられる。



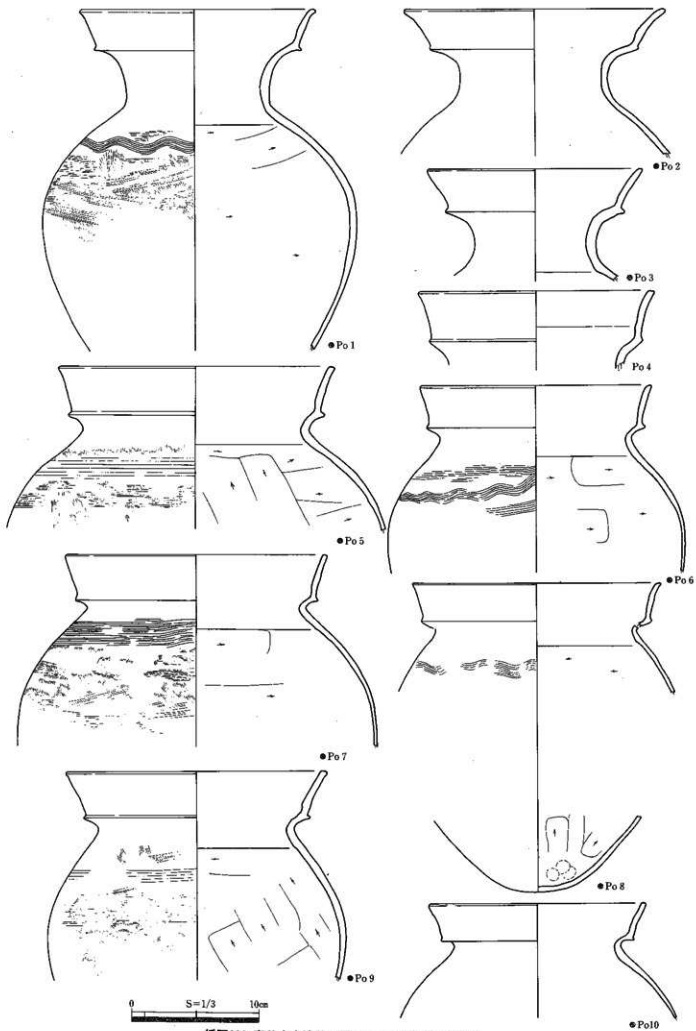
挿図231 南谷大山遺跡B区SS04遺構図

BSS05 (挿図232、図版37)

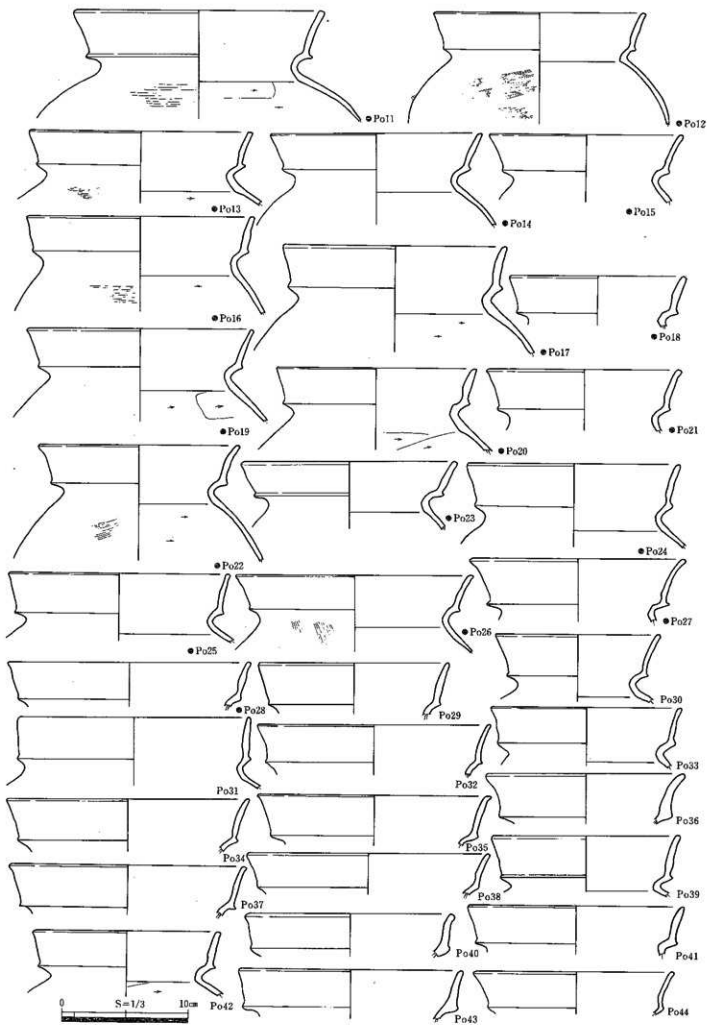
- 位置** BSS05は調査区南西部 f26・f27・e26・e27グリッドに位置する。当遺構周辺は、標高約62m～64mの緩斜面である。とりわけ、遺構内では等高線の幅が広がり、平坦面に近くなっている。当遺構の北1.5mには、BSD03が走っている。
- 形態** 平面はほぼ、隅丸長方形を呈する。断面はL字状で、斜面をカットしたことを窺わせる。遺構の規模は、長さ8m、幅1.8m、高低差1.3mを測る。
- ピット** 遺構の北西部、壁ぎわにピットを有する。規模は(80×70-24)cmである。
- 埋土** しっかりとした暗黒褐色土を埋土とする。
- 遺物** 遺物としては甕口縁・高杯筒部・須恵器が出土した。しかしながら、いずれも図化することができなかった。
- 時期** 時期・用途ともに不明である。



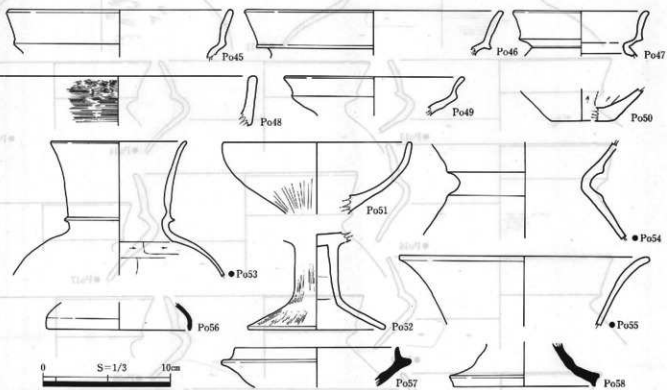
挿図232 南谷大山遺跡B区SS05遺構図



挿圖233 南谷大山遺跡B区SS04出土遺物実測図(1)



挿図234 南谷大山遺跡B区SS04出土遺物実測図(2)



挿図235 南谷大山遺跡B区SS04出土遺物実測図(3)



写真5 現地説明会

5. 溝状遺構

BSD03 (挿図236～240、図版39・75)

位置 BSD03は、調査区を取り囲むように斜面の中腹に作られている。おおむね丘陵の地形に沿って作られており、標高63.8m～73.2mの斜面に位置する。

形態 北側斜面の東端は流失し、南側斜面の東端はa23グリッドで途切れている。また、西側斜面のg23・24・25グリッドでは梨耕作のために著しく攪乱を受けている。現状では長さ210m以上、幅約1.05m～2.8m、深さ0.47m～1.32mを測る。断面は「U」字状を呈すが、南側の一部には底面に幅30cm～65cm、深さ11cm～22cmの浅い溝が掘り込まれる箇所がある。

また、北側斜面のa16グリッド、南側斜面のf26・e26グリッドでは、底面に小ピットが掘り込まれており、枕状のものが立て並べられた可能性がある。

埋土 埋土は基本的に暗褐色土が単層で入る。いずれも自然堆積の状況が窺われるが、北側を断割したところ、BSD03は、C-C'ラインで弥生時代後期後半の土器を含む暗黄褐色土を掘り込んでいることがわかった。

この層は、BSI14の基盤層であり、古墳時代中期後半頃には北側斜面に掻き出されていたものと考えられる。

また、D-D'ライン、F-F'ラインでは、外側にも暗黄褐色土・明黄褐色土を盛りあげて、土手状のものを作ったことが確認された。

遺物出土状況 出土遺物には、図化できたものに立ち上がりが低い口縁をもつ壺Po1、複合口縁をもつ壺Po2・Po3、複合口縁をもつ甕Po4～Po33、底部Po34～Po39、高杯脚部Po40、鼓形器台上部Po41、鼓形器台脚部Po42、蓋Po43、小型椀Po44、特殊器台脚部Po45、須恵器杯身Po46・Po47、須恵器高杯脚部Po48、土玉Po49、土釜Po50・Po51、鉄鍬基部F1がある。

これらはいずれも埋土中からの出土であるが、北側から出土したもののうちPo1・Po4～Po21・Po41・Po43・Po45は弥生時代後期後半、Po2・Po3・Po22～Po30・Po42は弥生時代終末、Po31～Po33・Po40は古墳時代中期後半の特徴をもつ。

また、南側から出土したもののうちPo46～Po48は古墳時代後期後半の特徴をもつ。これら須恵器は、南谷28号墳から転落したものと考えられる。

時期 BSD03から出土した遺物は弥生時代後期の土器がほとんどであるが、C-C'ラインで確認したところ、弥生時代後期後半の土器を含む暗黄褐色土を掘り込んで作られていること、また、この層がBSI14の基盤層となっていること、北側で出土した土器のうち最も新しい様相をもつPo31～Po33が古墳時代中期後半の特徴をもつことから、BSD03は、この時期に作られたものと考えられる。

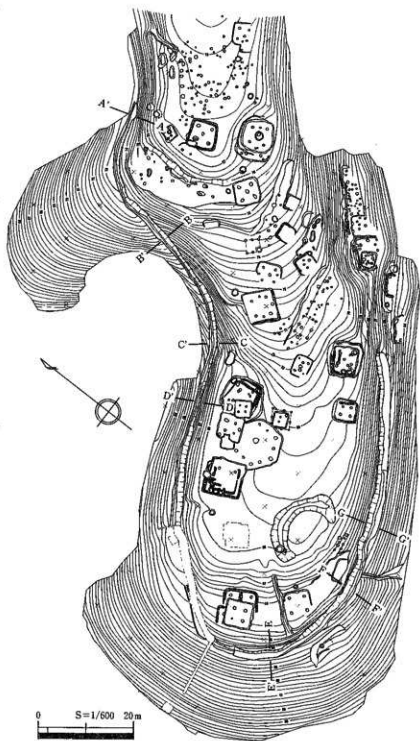
性格 BSD03は、幅・深さがあまりなく防衛的な施設とは考え難く、底面に小ピットが見られることなどから、溝内に杭を立てて集落を区画するためのものと考えられる。

BSD04・05 (挿図241～243、図版39・75・76)

位置 調査区の北東端、A16グリッドで尾根が北側へ下っていく標高約77m付近に位置する。BSD04・05の南側にはピット群が広がる。

形態 BSD04・05は隣接しており、BSD04は北から南に向かって「L」字状に延び、BSD05はBSD04の北西側にある。

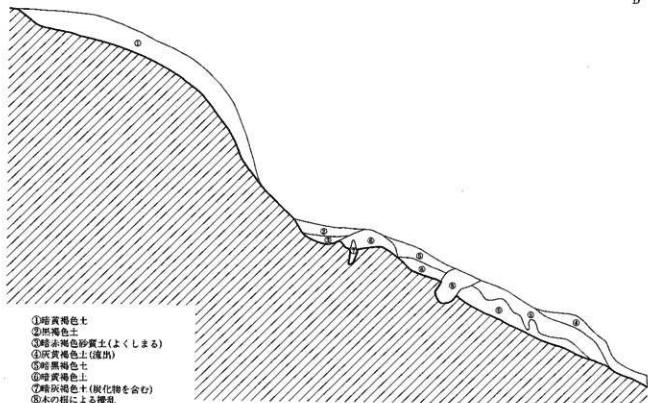
BSD04 BSD04は残りの悪いところがあり、南側で東西の2つに分かれている。規模は東側で全長5.4m、幅が0.43m～0.64m、深さが0.1m～0.74mである。西側は全長1.6m、幅が0.6m、



挿図236 南谷大山遺跡B区SD03遺構図

H=68.50m

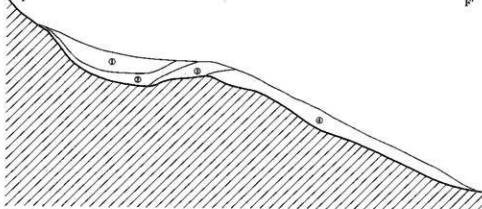
D



- ①暗黄褐色土
- ②黑褐色土
- ③暗赤褐色砂質土(よくしまる)
- ④灰黄褐色土(流出)
- ⑤暗黒褐色土
- ⑥暗灰褐色土
- ⑦暗灰褐色土(炭化物を含む)
- ⑧木の根による擾乱

H=65.50m

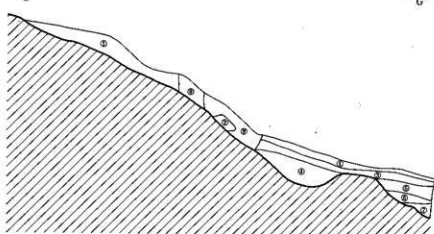
F



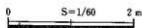
- ①淡褐色土
- ②暗黄褐色土
- ③明黄褐色土
- ④黒褐色土

H=67.50m

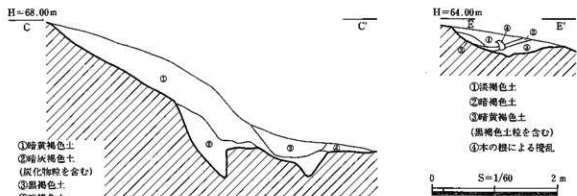
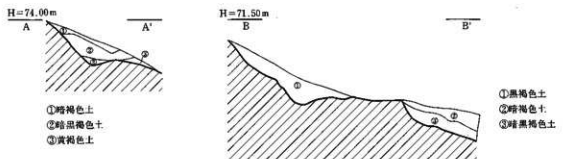
G



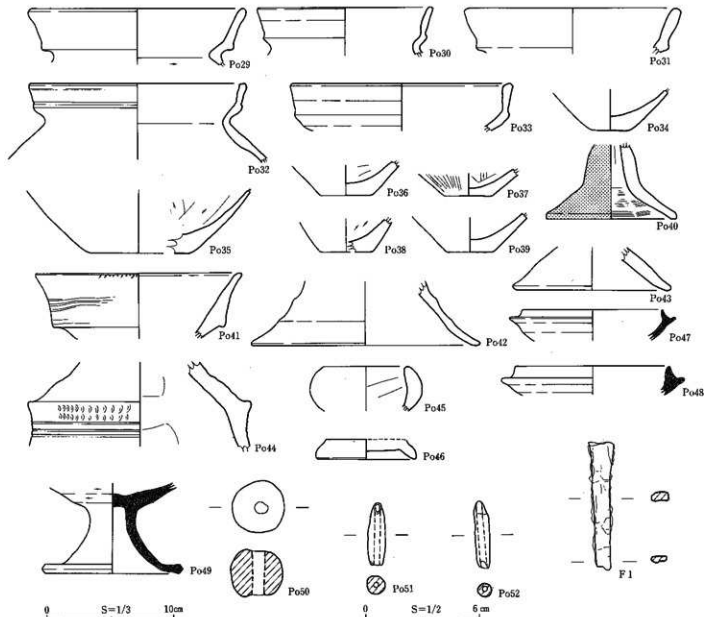
- ①淡黒褐色土(表土、竹の根を含む)
 - ②明黄褐色土
 - ③淡褐色土
 - ④暗褐色土
 - ⑤黒褐色土
 - ⑥暗黄褐色土
 - ⑦暗黒褐色土
 - ⑧木の根による擾乱
 - ⑨擾乱土
- (明黄褐色ローム粒、黒褐色土粒を含む)



挿図237 南谷大山遺跡B区SD03土層断面図(1)



挿図238 南谷大山遺跡B区SD03土層断面図(2)



挿図239 南谷大山遺跡B区SD03出土遺物実測図(2)

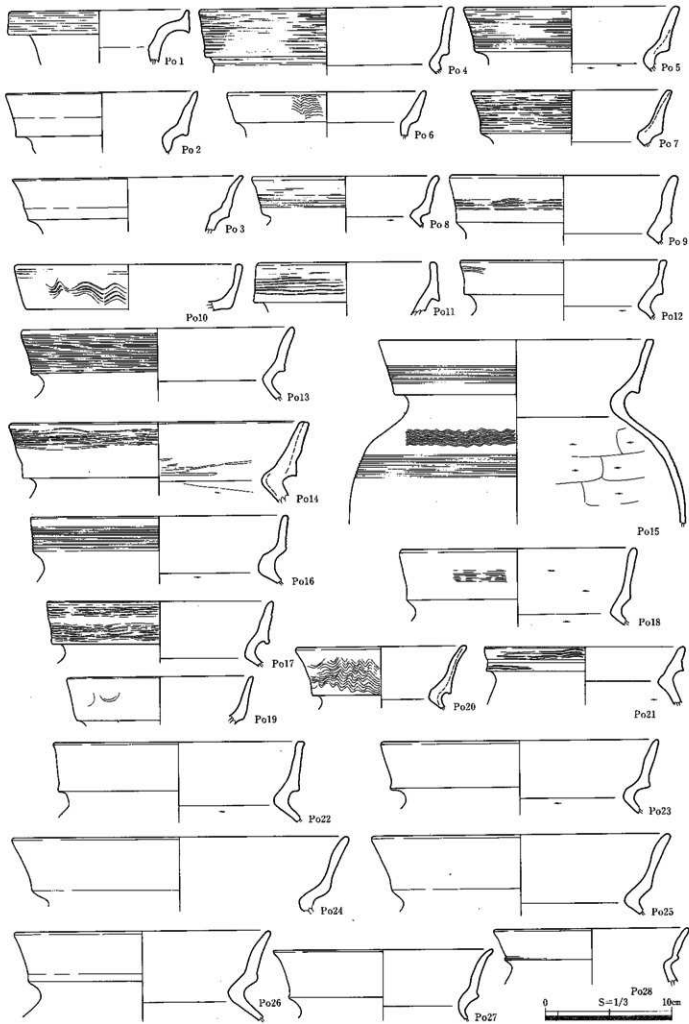


插图240 南谷大山遺跡B区SD03出土遺物実測図(1)

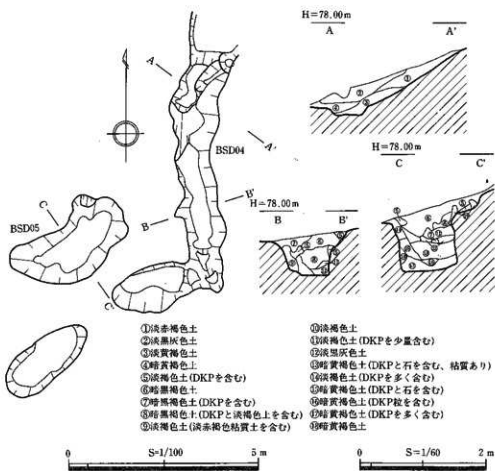
深さが0.1mである。南北に延びる底面を観察すると、階段状に登っていく様相を呈しているが、東西に走る溝との接合部で、61cmの段差がある。

BSD05 BSD05は土坑状に延びるもので、規模は全長1.7m、幅が0.82m、深さが88cmである。埋土は18層に分层できる。②層中に土器が含まれる。1991年度調査でも、土器を多量に含む落ち込みがあったが、そこでも同じ状況であった。

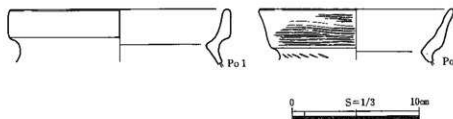
遺物 BSD04の出土遺物は、複合口縁をもつ甕Po1～Po25、壺または甕の平底を呈する底部Po22～Po24、蓋の桶みPo26、浅い椀状の杯部をもつ高杯Po27～Po30、器台Po31である。

出土状況 BSD05の出土遺物は複合口縁をもつ甕Po1・Po2で埋土から出土した。Po1は口縁部ナデ仕上げしてあり、Po2は口縁部に平行沈線が施されている。

時期 BSD05の時期は埋土出土遺物より、弥生時代後期後半頃と思われる。BSD04は同じ埋土をしていたことから、BSD05と同時期と思われる。



挿図241 南谷大山遺跡B区SD04・05遺構図



挿図242 南谷大山遺跡B区SD05出土遺物実測図

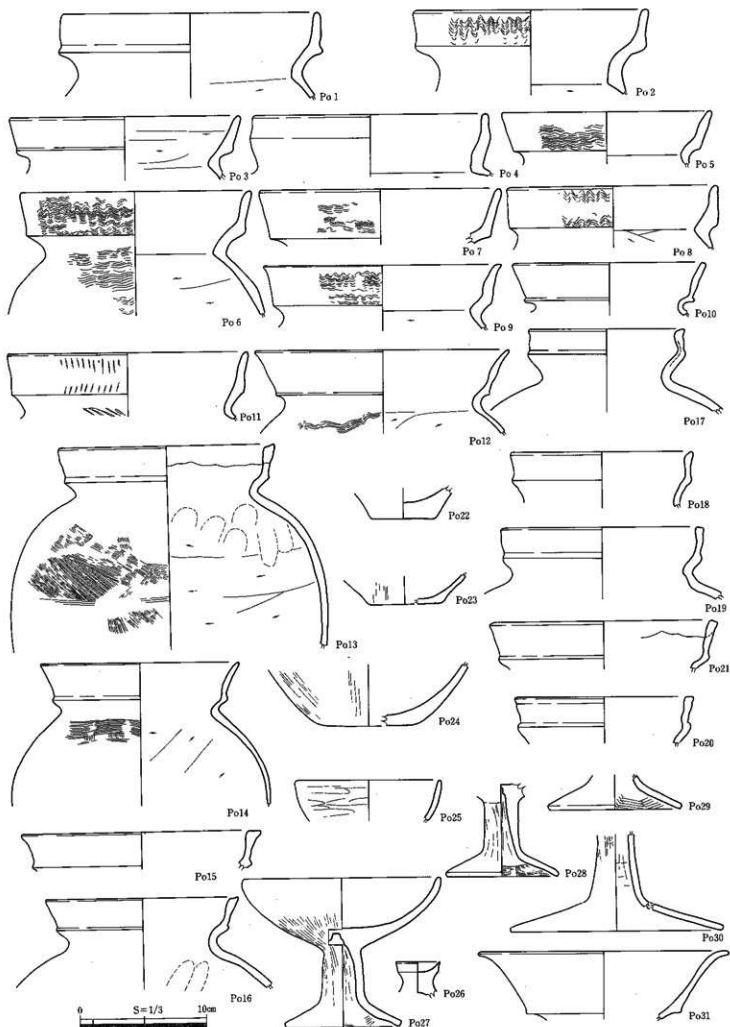


插图243 南谷大山遺跡B区SD04出土遺物実測図

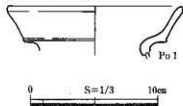
BSD06 (挿図244・245、図版39)

位置 BSD06は調査区南西部d26に位置する。当遺構はBSD03より派生し、標高約61m~64mの南面する斜面を、南北に下っている。平面はほぼ直線状だが、一部にくびれが見られる。また、南端部は「ハ」字状に開いている。断面は「U」字状を呈する。

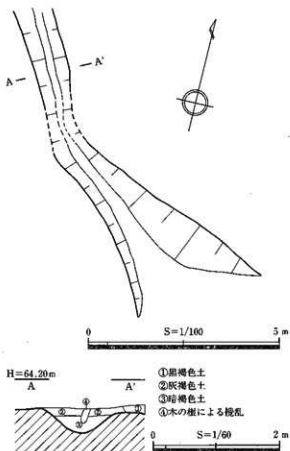
規模は、長さ8.6m、幅0.8~3.4m、深さ0.35mを測る。

埋土遺物 BSD03との切り合い関係については、確認できなかった。複合口縁を有する甕と土器片が出土した。これらは南谷28号墳・BSD03などからの流れ込みと考えられる。

時期 時期・用途ともに不明である。



挿図244 南谷大山遺跡B区SD06出土遺物実測図



挿図245 南谷大山遺跡B区SD06遺構図

6. ビット群

Bビット群02 (挿図246・247、図版39)

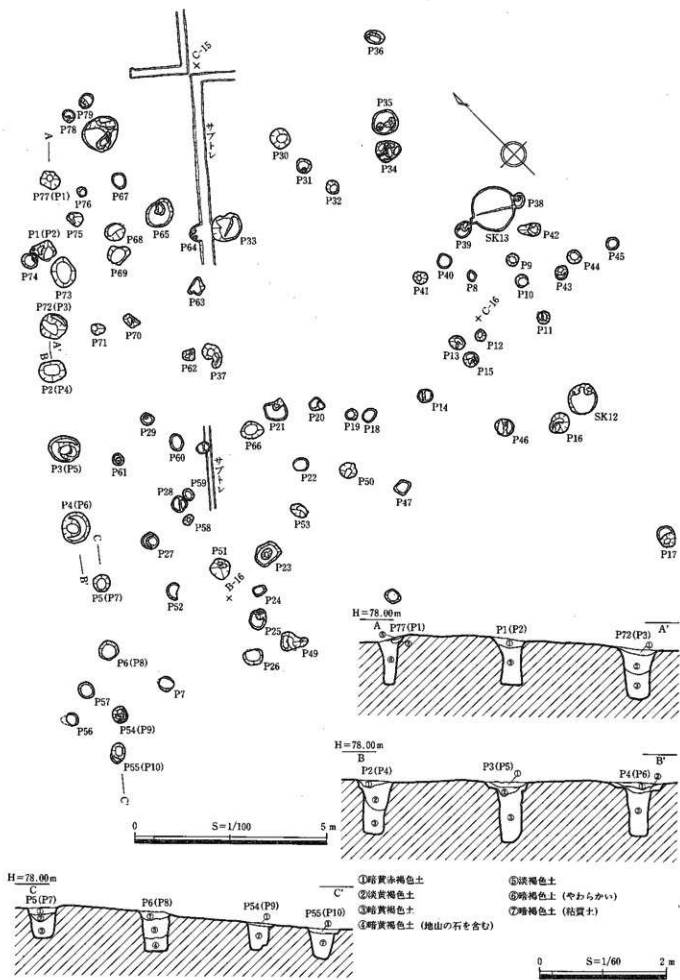
位置 調査区の北東端、丘陵の中間辺りの平坦面、標高78m付近に位置する。東側にBSI35・31、西側にBSI36・32、南側にBSI33・20が取り囲むように存在する。

ビット数 検出したビットの数は79個であった。ほとんどのビットが浅い中で、北側斜面の肩部に平行するようにP77・P1・P72・P2~P6・P54・P55を検出した。10個のビットは前述の順に、(P1)~(P10)と仮称する。規模は(P1)から順に、(50×40-82)cm、(70×50-74)cm、(70×65-80)cm、(68×56-86)cm、(84×69-96)cm、(82×72-84)cm、(46×42-52)cm、(56×52-64)cm、(44×40-42)cm、(54×36-46)cmで、柱穴間距離は(P1)~(P2)の順に、2.0m、2.0m、1.1m、2.1m、2.1m、1.6m、1.8m、1.7m、1.0mである。計測値から、(P1)~(P3)、(P4)~(P6)、(P7)~(P9)、(P10)の4つのグループに分けられ、(P10)のグループが南西側にあった可能性があるが検出できなかった。その他のしっかりしたビットは(P9)付近のP7・P56・P57、東側のP9~P12・P41・P42で、直径が33cm前後、深さが36~70cmである。中でも、P41は規模が(37×32-55)cmで、焼土が10cm程堆積していた。

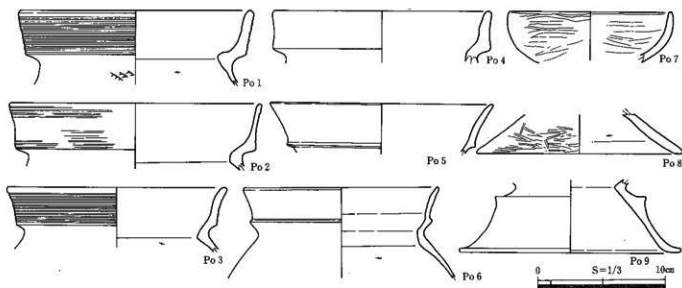
遺物 P2(P4)より、平行沈線が施された口縁片、波状紋の施された頸部片が出土したが図化できなかった。複合口縁をもつ甕Po1~Po6、高杯Po7、裾部Po8、器台Po9が出土している。

時期 P2(P4)出土土器より、弥生時代後期後半と考えられる。

性格 掘立柱建物跡とするには対になる柱穴が検出できなかったため、用途不明である。



擇園246 南谷大山遺跡B区ピット群02遺構図



挿図247 南谷大山遺跡B区ビット群02出土遺物実測図

7. 遺構外遺物について (押図248~251、図版76)

遺構外から多量の遺物が出土している。

北側斜面からは、複合口縁をもつ壺Po1~Po3、立ち上がりが低く内傾する甕Po5、複合口縁をもつ甕Po6~Po33、「く」字状口縁をもつ壺Po34、小型で複合口縁をもつ壺Po35、「く」字状口縁をもつ甕Po36~Po38、小型鉢Po39~Po41、底部Po42・Po43、高杯杯部Po44・Po45、高杯筒部Po46、鼓形器台上台部Po47、鼓形器台脚部Po48、蓋Po49~Po51、鉢Po52~Po56、不明鉄器F1、細粒花崗岩製玉砥石S1が出土している。

南側斜面からは、複合口縁をもつ甕Po57~Po64、高杯脚部Po65が出土している。

平坦面からは、複合口縁状の大型壺Po66~Po69が出土している。

壺は、口縁部施文が施されるPo1、ナデ仕上げのPo2・Po3、頸部に突帯をもつものPo4、「く」字状口縁をもち端部が短く立つPo34、小型のPo35がある。

甕は、立ち上がりが低く内傾する口縁をもつPo5、口縁部施文を施すPo6~Po9・Po57~Po59、口縁部施文の後一部ナデ消すPo10~Po20・Po60・Po61、肉厚でナデ仕上げのPo21~Po23、肉薄でナデ仕上げのPo24~Po32、肉薄で端部が平坦面をもつPo62・Po63、肉厚で立ち上がりが低く口縁部下端が丸みをもつPo33・Po64、「く」字状口縁をもち厚手のPo36・Po37、薄手の「く」字状口縁をもつPo38がある。

底部は、不明瞭ではあるが平底を呈すものである。

高杯のうちPo45・Po46は他地域からの搬入品と考えられる。

大型壺は、広い範囲で出土したものが接合している。Po66は、1991年度調査したF14グリッド出土のもの、b17・18グリッド出土のもの、BSI30の埋土中から出土のものが接合している。Po68は、西側斜面から出土している。

これらは、弥生時代後期後半から古墳時代中期後半にかけてのもので、B区で検出された遺構の時期と重なるものである。とりわけ、北側斜面で弥生時代後期後半から終末にかけての土器が多く出土しているのは、古墳時代中期後半に集落が営まれる際に平坦面を削平したためと考えられる。

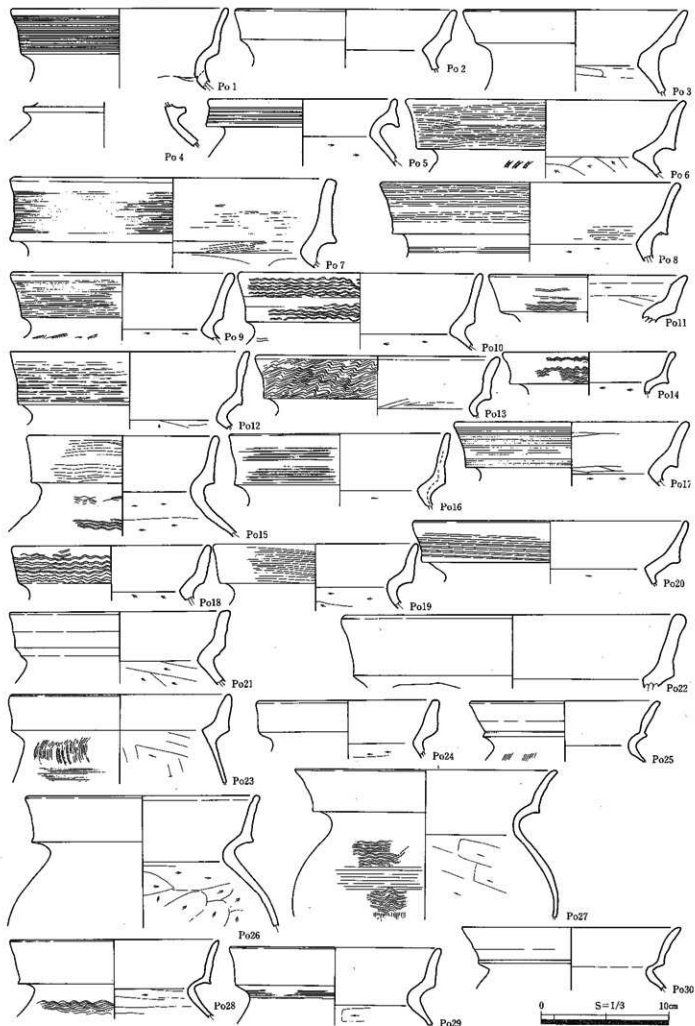


插图248 南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(7)

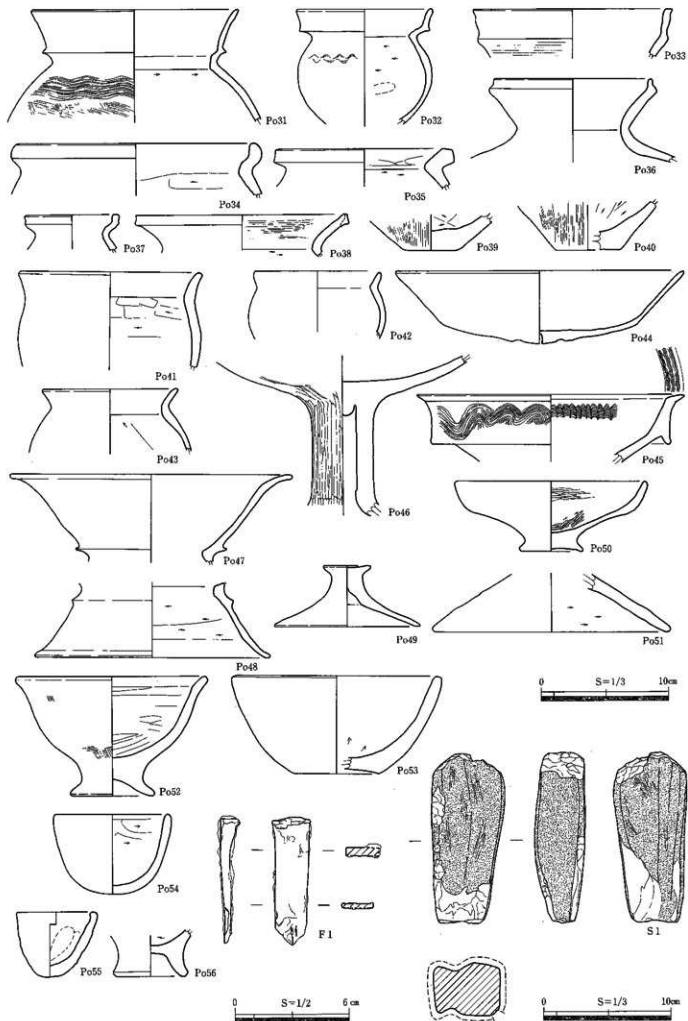


插图249 南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(6)

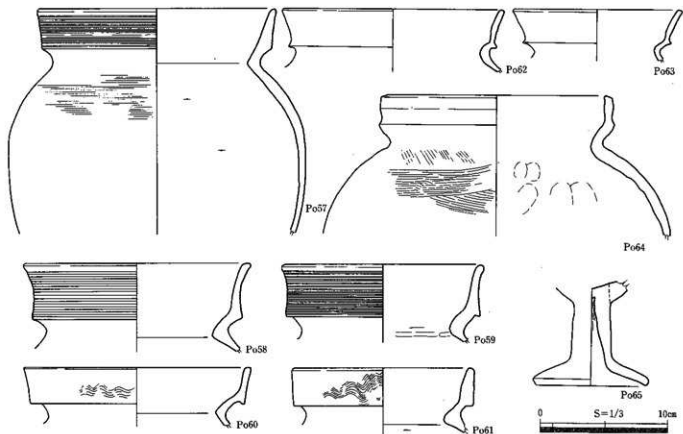


插图250 南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(9)

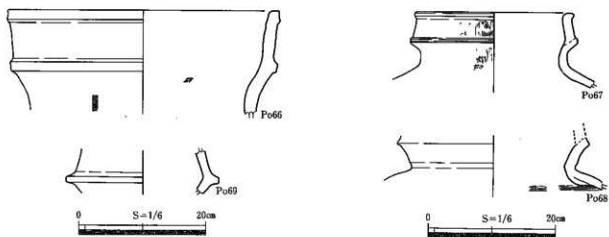


插图251 南谷大山遺跡B区遺構外出土遺物実測図(10)

第5章 南谷古墳群の調査

第1節 南谷22・24～26・28号墳の概要

位 置 南谷古墳群は、総数28基からなり、斜面裾部に位置し横穴式石室をもつ14～17号墳と、丘陵上に位置する古墳群とに大別することができる。

このうち後者は4群に分かれ、南谷ヒジリ遺跡が立地し、西方に延びる低丘陵上にある1～3・27号墳、南谷夫婦塚遺跡が立地し、標高78m～94mと高く西方に延びる丘陵上にある4～6・18号墳・7～13・19～23号墳、南谷大山遺跡が立地し、標高89m～92mと高く北西方向に延びる丘陵上にある24～26号墳、同じく南谷大山遺跡が南西方向に延び出す丘陵の先端部、標高68m付近にある28号墳である。

南谷古墳群は、橋津(馬ノ山)4号墳を含む25基からなる橋津古墳群に隣接している。

南谷古墳群では従来23基の古墳群であると考えられていたが、新たに5基の古墳が確認され、新発見の古墳を24～28号墳と命名した。

27号墳は、1990年に調査された南谷ヒジリ遺跡のSD01として報告されていたもので、1992年に全体の調査が行われ、古墳時代前期の一辺約15mの方墳であることが確認された。

南谷22号墳 22号墳は、1990年にその大半が調査されていたが、1993年に残りの南東側を調査し、22号墳の全形を調査することができた。

南谷24号墳 24号墳は、径約10mの円墳で、主体部は箱式石棺が埋納されていた。断ち割りを行ったところ、主体部の真下に、主軸方向を同じくする箱式石棺が検出された。内部から、乳幼児と考えられる歯牙が検出されている。また、盛土の状況から、24号墳は下部の主体部に伴う小さい墳丘をさらに大きくしたものと考えられ、古墳築造の契機、主体部の構造及び被葬者の性格を解明する上で大変興味深い資料である。

南谷25号墳 25号墳は、擾乱が著しく周溝のみが検出された。径約10mを測る円墳と考えられる。26号墳と接するように検出されたが、出土遺物から25号墳が先行するものと確認された。

南谷26号墳 26号墳は、径約22mを測る円墳で、墳丘中心からはずれた位置で大小2つの主体部が検出された。これらの主体部は大半が破壊されていたが箱式石棺と推定される。盛土もわずかに残っており、北側に傾斜する基盤層上に盛土が行われていたことが確認された。

南側で25号墳と接するように築造されているが、接する部分で周溝が途切れており、規模的にはるかに上回る26号墳が、小さな25号墳を意識していたことが窺われる。

南谷28号墳 28号墳は、半円形の周溝を検出することで確認できた、復元径約12mを測る円墳である。内部主体は不明であるが、南側斜面に大型の安山岩の板石が落ち込んでおり、横穴式石室が内包されていたと推定される。

24～26・28号墳の時期は、出土遺物から、24号墳が古墳時代後期後半、25号墳が古墳時代中期後半、26号墳が古墳時代後期中葉、28号墳が古墳時代後期後半と考えられる。

特に、25号墳は、そのとなりの丘陵にある宇野4号墳と同時期と考えられる。また、南谷大山遺跡の集落とほぼ時期を同じくしており、集落と墳墓の関係を解明するための大変貴重な資料を提供できると考える。

第2節 南谷22・24～26・28号墳の調査結果

南谷22号墳 (挿図252～254、図版40)

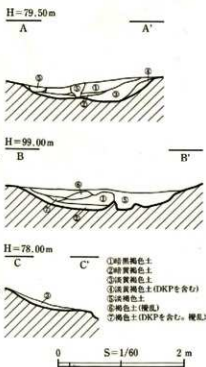
位置 1990年度調査区の西側、東郷池に向かって舌状に延びだす尾根の先端にあり、標高約77m～79mに位置する。この尾根づたいには南谷古墳群の一群があるが、この一群の最先端に築造されている。

1990年度の調査できなかつた部分で、開墾段の下側で、墳丘は殆ど削り取られ、周溝のみが残っていた。その周溝も耕作による攪乱で残りが悪く、今年度調査区で検出できたのは北側で2.5m、西側で1.5m程である。周溝の規模は北側の残りの良い所で幅が2.1m、深さが0.4mあり、西側で幅が1.2m、深さが0.1mであった。

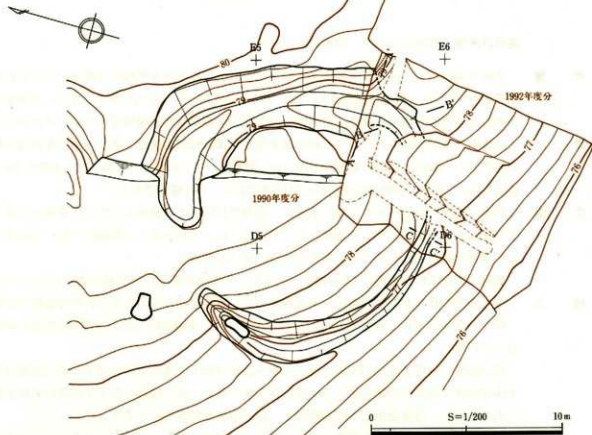
この調査によって、南谷22号墳の全容が明らかとなり、やや急な斜面に掛かり立地としては悪い所に、周溝を掘って作られていたことがわかった。

遺物 遺物の出土はなかつた。

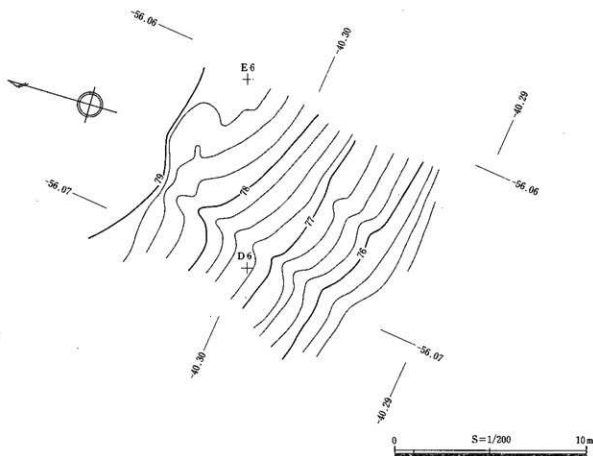
時期 時期は1990年度の調査結果から南谷23号墳とほぼ同じとすると、6世紀末葉に築造されたと考えられる。



挿図252 南谷22号墳周溝土層断面図



挿図253 南谷22号墳墳丘図



挿図254 南谷22号墳調査前地形測量図

南谷24号墳 (挿図255~263、図版41~45・77)

位置 A区の西側、E4・E5・F4・F6グリッド付近、平坦な尾根から緩やかに下る斜面の標高89m~89.75m付近に位置する。墳丘下にAS I04、ASK04がある。また、北西側の周溝部分と墳裾から墳頂に向かって東西に羽合町教育委員会の試掘調査のトレンチがあった。

墳丘 調査前の地形でも0.7m~1.1m程の高まりと周溝の輪郭が確認でき、古墳の存在は容易に判断できた。墳丘の規模は東西軸が10.4m、南北軸が10.2mを測り、高さは北側で1.2m、西側で1.5mである。形態は直径約10mの円墳であることが確認された。

周溝 周溝は南側ではしっかりと堀り込まれ、北側では周溝の輪郭がなくなり、東西から巡ってきた溝はだんだん浅くなって途切れる。平面は「C」字状を呈し、断面は「U」字状を呈する。規模は幅が2.0m~3.3m、深さが0.1m~0.8mを測る。

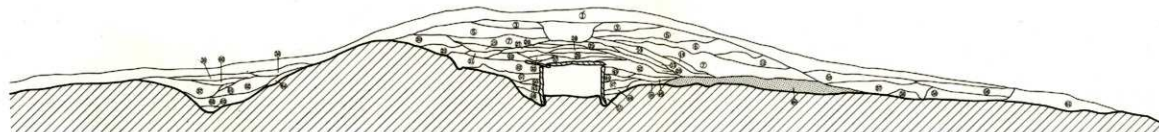
周溝の東側で壁が東側に0.8m程削り込まれ、平坦面が作られて石棺が納められていた。

盛土 墳丘盛土の残りが非常に良く、土層観察して、築造過程を考える上で良好な資料である。緩やかに下っていく斜面を利用して築造しており、斜面側にあたる北西側で盛土が厚くなっている。

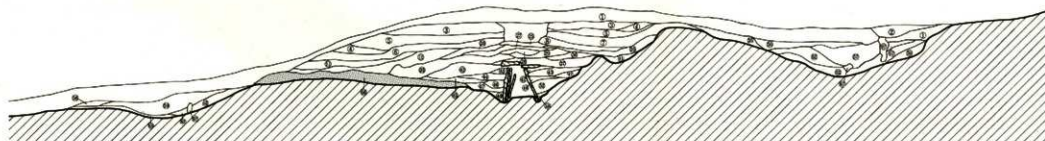
層は66層に分層でき、①②層は表土、③~⑭層は第1主体部に伴う盛土、⑮~⑳層は第2主体部に伴う盛土、㉑層は第2主体部に伴う溝の埋土、㉒~㉓層は第2主体部の石棺を造るための埋め土、㉔層は墳丘下の遺構埋土、㉕~㉖層は周溝埋土と考えられる。

㉗~㉘層は第2主体部を意識するかのようになり、石棺に向かって盛り上げるように積まれている。特に、㉗層・㉘層は暗黒褐色土で、これを手がかりにして、盛土を除去していくと、

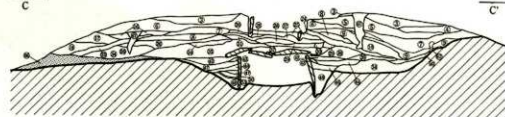
H=90.50m
A



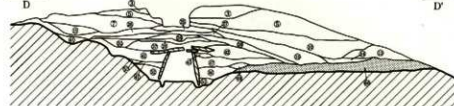
H=90.50m
B



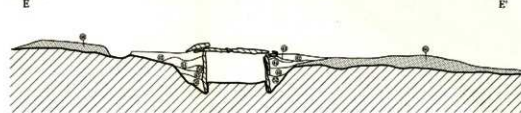
H=90.00m
C



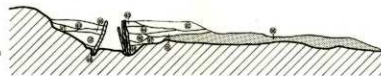
H=89.00m
D



H=89.00m
E



H=89.00m
F



- ① 灰黄粘土 (灰黄粘土、陶片、陶器)
- ② 灰黄粘土
- ③ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ④ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑤ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑥ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑦ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑧ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑨ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑩ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑪ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑫ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑬ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑭ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑮ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑯ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑰ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑱ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑲ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ⑳ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉑ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉒ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉓ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉔ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉕ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉖ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉗ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉘ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉙ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉚ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉛ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉜ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉝ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉞ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㉟ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊱ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊲ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊳ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊴ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊵ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊶ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊷ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊸ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊹ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊺ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊻ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊼ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊽ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊾ 灰黄粘土 (灰黄粘土)
- ㊿ 灰黄粘土 (灰黄粘土)

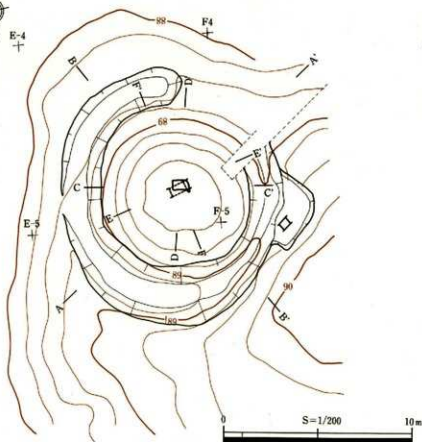
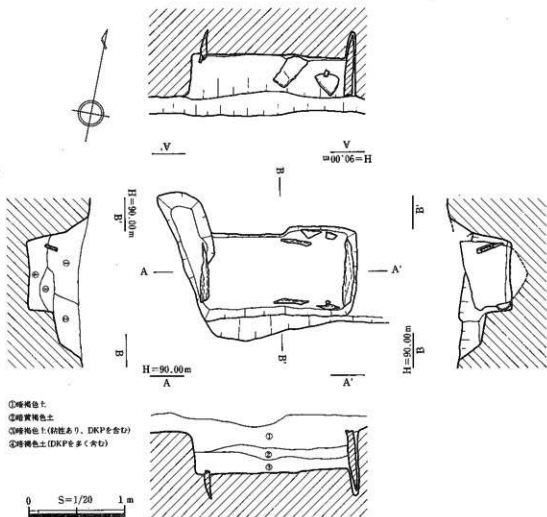


插图255 南谷24号墳丘・土層断面图

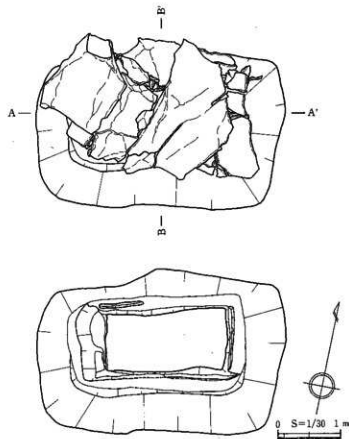


挿図256 南谷24号墳第1主体部遺構図

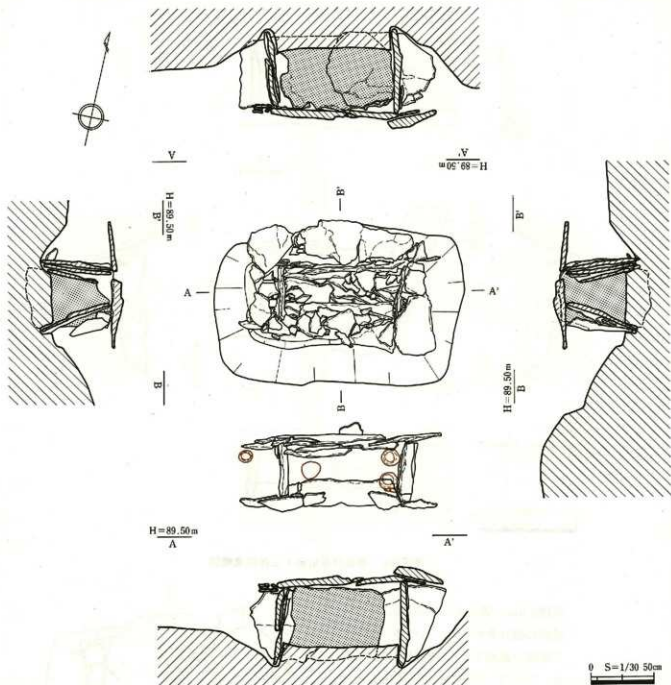
直径3.5m、蓋石からの高さ0.3mの円墳状に盛り上がった。この盛り上がりの裾部を観察すると、溝状に検出できた。さらに、②層を除去してみると、④層が検出でき、それを除くと幅約40cm、深さ約10cmの溝が検出できた。また、地山の掘り込まれ方が、南東側で鋭く掘り込まれているのも、この盛り上がりに関係したものと考え、第2主体部にかかわるこの盛り上がり第1次墳丘と考える。これに対して、③～②層は第1主体部を意識して盛り上げられ、墳丘を形成している。これを第2次墳丘と考える。

第1
主体部

墳頂部ほぼ中央に、盗掘と大木の根によって攪乱を受けた第1主体部が検出された。第1主体部は、攪乱土の中に板石片が散乱し、小口石が2枚共立っ



挿図257 南谷24号墳第2主体部石置と掘り方図



挿図258 南谷24号墳第2主体部遺構図

たままに残っており、組み石の箱式石棺であったと考えられる。規模は長軸1.5m、短軸0.75mで、主軸方向はN-79°-Eである。底面は粘質土であった。

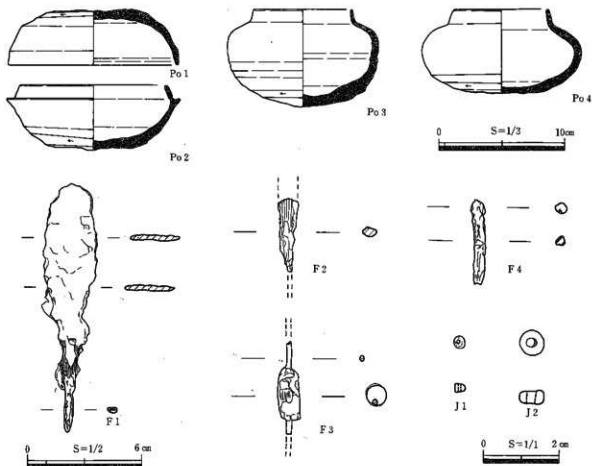
第2主体部 第2主体部は第1主体部とほぼ重なるように、真下に造られていた。第1主体部の底面から第2主体部の蓋石までの距離は0.35m離れている。第2主体部は、南谷24号墳から検出された3つの主体部の中では一番精巧に造られており、中心主体部と考える。基本的に4枚の板石を重ねて蓋としていた。

蓋石を取り除くと、組み合わせ箱式石棺が造られていた。この石棺の小口石と側板の回りに、大きいもので(30×40)cmの板石が並べられ、石棺外の西側に短径壺が置かれていた。石棺内には蓋石や側板の崩壊した石片が多量に落ち込んでいた。崩落した石片や側板には赤色塗彩されたものがたくさんあり、作られた当時は石棺内が真っ赤に染められていたと考えられる。さらに、崩落石を除去すると洪砂が敷き詰められ、その中に赤色顔料の付着した蓋杯のセットが枕として東側に置かれ、蓋杯の北側に鉄鎌が置かれていた。従って、被葬者の

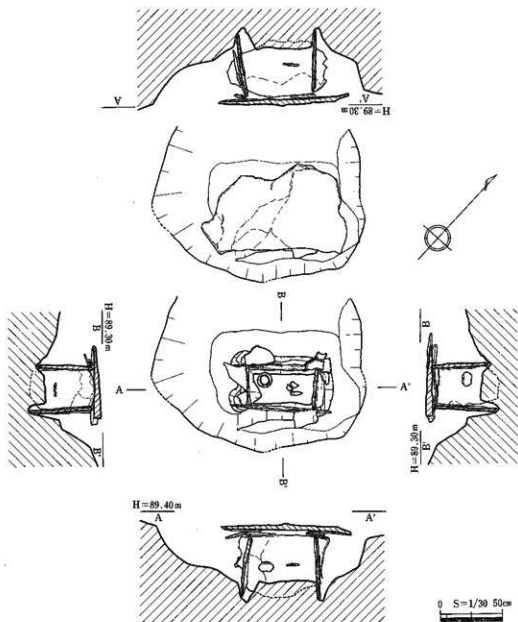
頭位は東側と考えられる。頭位側の蓋石をみると、真上に大型の蓋石(1.1×0.6)mが、一番上に置かれていた。石棺の規模は長軸1.0m、短軸0.55mで、深さは0.5mである。主軸方向はN-79°-Eである。

歯の鑑定 頭位付近の砂をふるいにかけてところ、針状鉄製品とケース、ガラス小玉2点と共に、被葬者の歯が出土した。この歯を鑑定した結果、右下顎第2乳臼歯であることが分かり、年齢が1-2才の乳幼児であることが判明した。その理由として、歯冠が短いこと、歯根の発育がまだ初期であることが挙げられる。石棺自体が小型のものであるのも、被葬者の年齢に関係があったのかもしれない。また、足元と考えられる箇所には、赤色顔料を含む砂が直径が15cmの円形範囲に置かれていた。第1主体部と第2主体部に主軸方向は、同じであり、被葬者間に血縁的に関係があったと思われる。

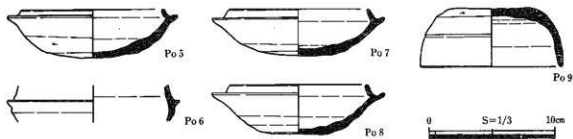
周溝内 周溝の南東側で周溝の壁を大きく削り、埋葬施設が納められていた。断面からこの石棺の掘り方は周溝の埋土を掘り込んで作られており、第1主体部、第2主体部より、新しく埋葬したものと考えられる。この石棺には、1枚の蓋石が被せられていた。蓋石の大きさは、長軸1.0m、短軸0.6mであり、北東側が幅0.75m、南西0.45mであった。蓋石を取ると、4枚の板石を組み合わせた石棺があった。石棺内には、短頸壺と長径10cm、短径5cm程の板石



挿図259 南谷24号墳主体部・周溝内埋葬施設出土遺物実測図



挿図260 南谷24号墳周溝内石棺遺構図



挿図261 南谷24号墳周溝内出土遺物実測図

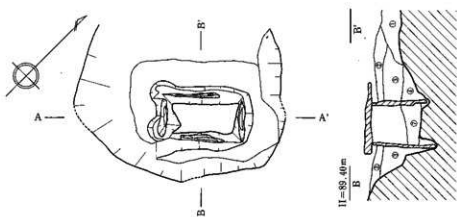
が3枚、北東側の小口石から10cm離れたところにあった。これは、石の枕と考えられる。従って、被葬者の頭位は北東側と考えられ、主軸方向は $N-46^{\circ}30'-E$ である。この石棺はしっかりしているが、全体に小型であった。

遺物 第1主体部からの遺物の出土はなかった。第2主体部からは、須恵器杯蓋Po1、須恵器杯身Po2、短頸壺Po3、柳葉鉄系の鉄鏡F1、針状鉄製品とケースF3～F4、ガラス小玉J1・J2が出土している。Po1・Po2はセット関係にあり、枕として使用され、赤色顔料が付着していた。山本編年Ⅲ期・陶邑編年TK43並行である。周溝内石棺からは、短頸壺Po4が出

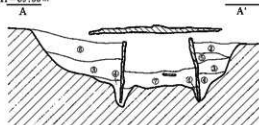
土している。周溝内の北西側より、須恵器杯身Po5~Po8、須恵器杯蓋Po9が出土しており、山本編年Ⅳ期(古)・陶邑編年TK209並行である。

盛土中からは、口縁部に平行沈線が施されている複合口縁をもつ甕Po10~Po15、高杯Po16~Po18が出土している。Po11は墳丘下の遺構埋土から出土している。

時期 時期は第2主体部出土の須恵器杯蓋により、6世紀後半頃と考えられる。



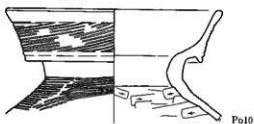
H=89.50m



- ①暗黄褐色土——周溝埋土
- ②淡黄褐色土
- ③明黄褐色土
- ④暗黄褐色土(DKP-埋土を含む)
- ⑤暗黄褐色土(DKPを含む)
- ⑥淡黄褐色土
- ⑦暗黄褐色土

0 S=1/30 1m

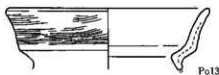
挿図262 南谷24号墳周溝内石棺土層断面図



Po10



Po12



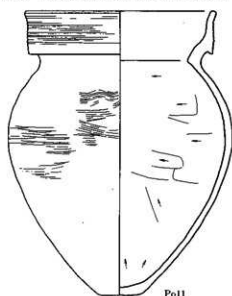
Po13



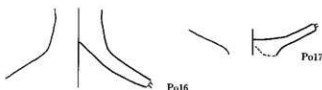
Po14



Po15



Po11



Po16



Po17



Po18



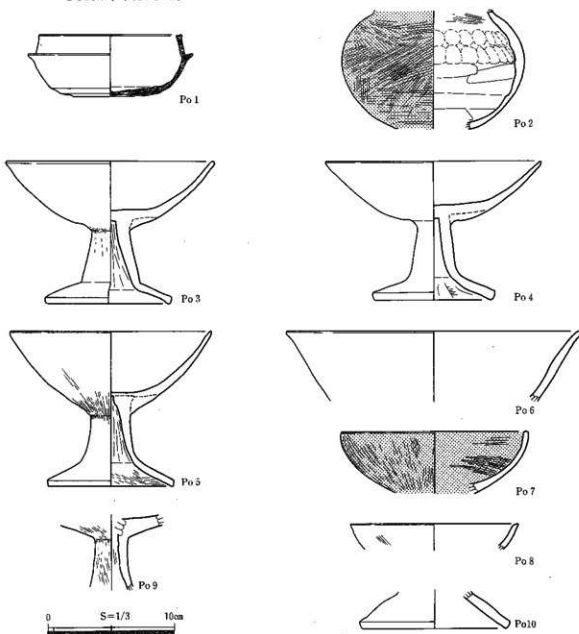
Po19

0 S=1/3 10cm

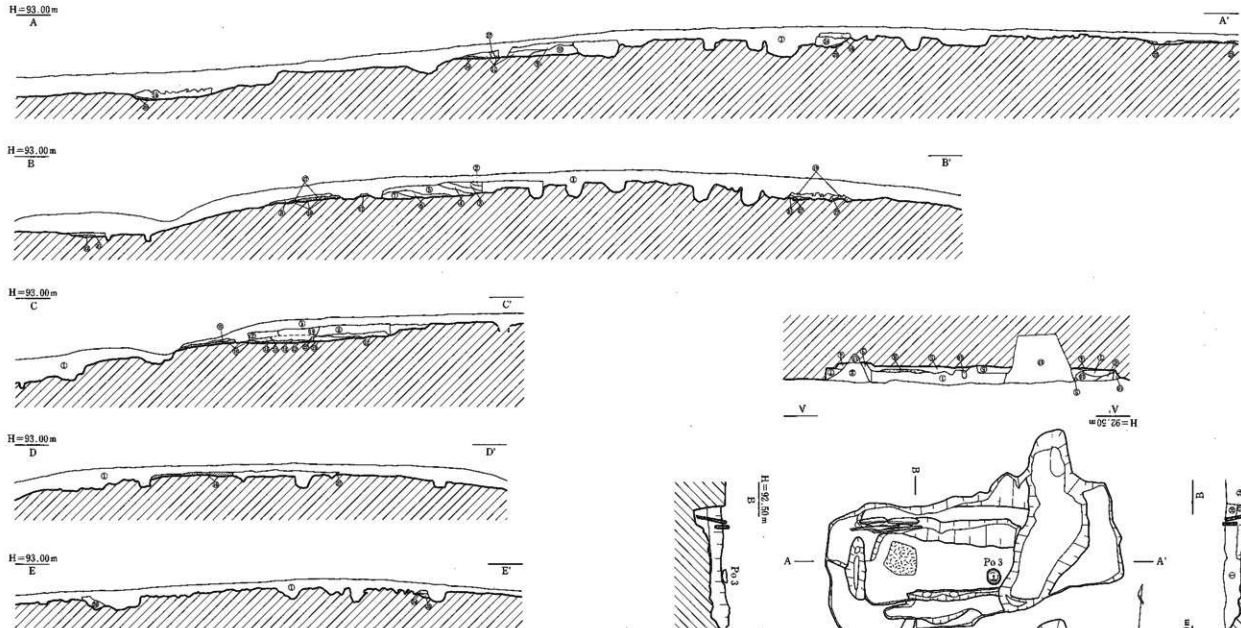
挿図263 南谷24号墳盛土内出土遺物実測図

南谷25号墳 (挿図264・265・267、図版45～47・78)

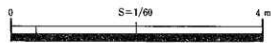
- 位置** 南谷25号墳は、調査区北部J8・K8・J9・K9グリッドに位置する。遺構周辺は、南西へ走るなだらかな尾根の頂上部である。標高は約92.25m～92.5mと、ほぼ平坦になっている。北側で、南谷26号墳と接している。調査前は農地だったために、遺構全体にわたって擾乱を受けている。
- 周溝** 当遺構は円墳である。周溝は南西区がよく残っている。幅は約1.3mである。
- 墳丘** 墳丘部は擾乱のため削り取られている。墳丘部の直径は約10m、残っている高さは約20cmである。
- 埋葬施設** 墳丘・周溝内ともに、埋葬施設は存在しない。
- 遺物** 南部周溝内より、須恵器杯身Po1が検出された。西側周溝からは、甕胴部Po2、高杯Po3～Po10が、出土した。



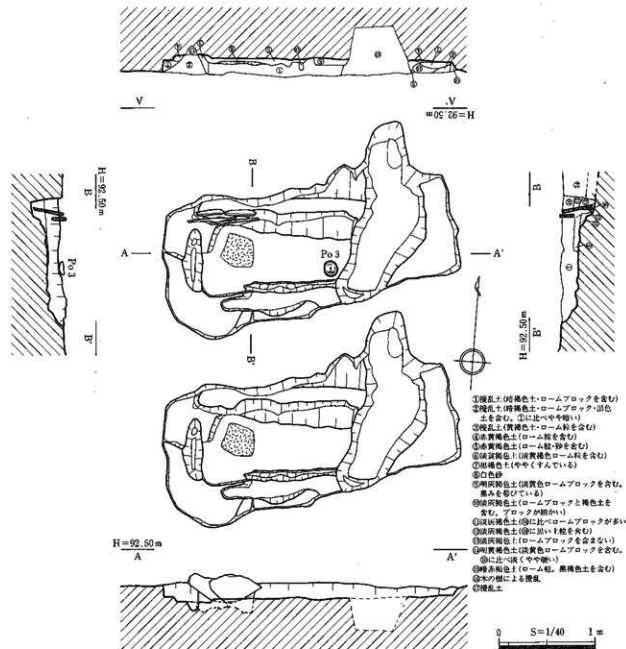
挿図264 南谷25号墳周溝内出土遺物実測図



- ①表土・耕作土(暗茶褐色土)
- ②明褐色土(ロームブロックを多く含む)
- ③暗黄褐色土(②に比べややブロックが大きい。崩れを著している)
- ④暗茶褐色土(大きいロームブロックを含む)
- ⑤明黄褐色土(暗土粒を含む)
- ⑥淡黄褐色土(硬く大きいロームブロックを含む。かなり崩れている)
- ⑦明褐色土(暗土粒を少量含む)
- ⑧暗赤褐色土
- ⑨淡黄褐色土(大きなロームブロックを含む)
- ⑩淡黄褐色土(⑨に崩れを著した土粒が混じる)
- ⑪淡灰褐色土(小さいロームブロックを含む)
- ⑫暗灰褐色土
- ⑬(暗)土・ロームブロック・崩れを著した土粒・崩れを著した土粒を含む)
- ⑭淡黄褐色土(大きいロームブロックを含む)
- ⑮明灰褐色土(塊状されている)
- ⑯淡黄褐色土(暗土を多く含む。くずんでいる)
- ⑰暗褐色土(暗赤土、B・B層)
- ⑱暗赤土(暗褐色土を多く含む)
- ⑲暗褐色土
- ⑳暗黄褐色土
- ㉑暗赤褐色土
- ㉒暗赤褐色土(ローム粒を含む)
- ㉓明黄褐色ローム粒
- ㉔暗赤褐色土
- ㉕暗赤褐色土
- ㉖明赤褐色土(土部を含む)
- ㉗木の根による暗灰



挿図265 南谷25・26号墳土層断面図



- ①暗赤土(暗褐色土・ロームブロックを含む)
- ②暗赤土(暗褐色土・ロームブロックを含む)
- ③暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ④暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑤暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑥暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑦暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑧暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑨暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑩暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑪暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑫暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑬暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑭暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑮暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑯暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑰暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑱暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑲暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ⑳暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉑暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉒暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉓暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉔暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉕暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉖暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉗暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉘暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉙暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉚暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉛暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉜暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉝暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉞暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㉟暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊱暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊲暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊳暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊴暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊵暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊶暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊷暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊸暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊹暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊺暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊻暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊼暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊽暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊾暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)
- ㊿暗赤土(暗褐色土・ローム粒を含む)

挿図266 南谷26号墳第1主体部遺構図

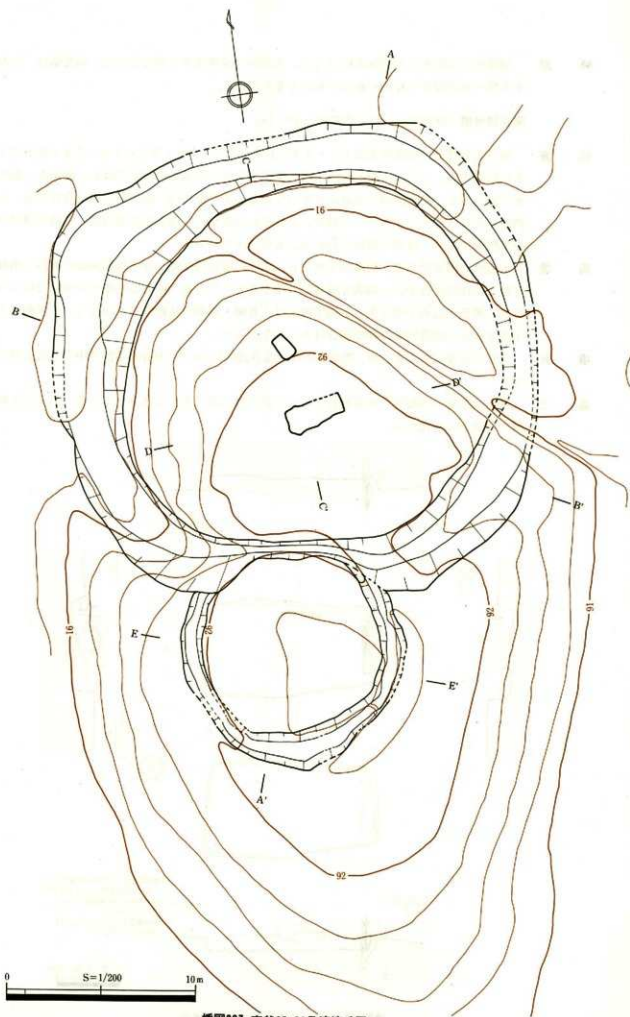


插图267 南谷25-26号墳丘图
-251-

時期 周溝内より出土した須恵器P01より、古墳時代前期後半と推定される。須恵器は、山本編年I期・陶邑編年TK208 並行のものと考えられる。

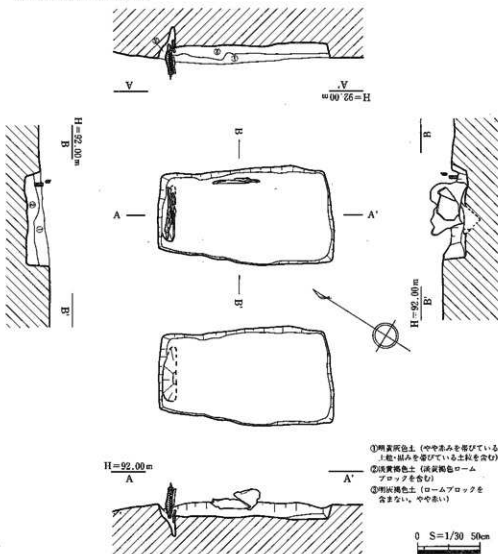
南谷26号墳 (挿図265~269、図版45~48・78)

位置 南谷26号墳は、調査区北部I6・J6・K6・I7・J7・K7・I8・J8・K8グリッドに位置する。ここは、西・南西・南へ派生する3つの尾根の根元である。標高も、約90.5m~92.5mと、調査区内でも最高となっている。すぐ南には、南谷25号墳が存在する。一方、西側6mにはASI02とピット群が、それぞれ存在する。南谷25号墳同様、遺構のほぼ全域が果樹園であり、後世の擾乱を免れることができなかった。

周溝 当遺構は円墳である。周溝は全周する。周溝の幅は約3m、深さは約40cmである。南谷25号墳との接点付近では、周溝を南谷25号墳と共有している。南谷25号墳との切り合いについては、擾乱のため不明である。周溝埋土は、北側・西側で比較的残りがよく、暗黒褐色土が主流である。周溝内には埋葬施設はみられなかった。

墳丘 墳丘の直径はおよそ22m、周溝底からの高さは約1.9mで、南谷古墳群の中でも最大級である。

盛土 盛土は②層~⑤層で、明黄褐色土(ロームブロック)を、主体としている。もっとも厚い所では50cmにも達する。



挿図268 南谷26号墳第2主体部遺構図

旧表 墳丘下の旧表は、遺構の西部から北部にかけてよく残っている。厚さは約10cmである。墳丘下には、遺構がみられなかった。

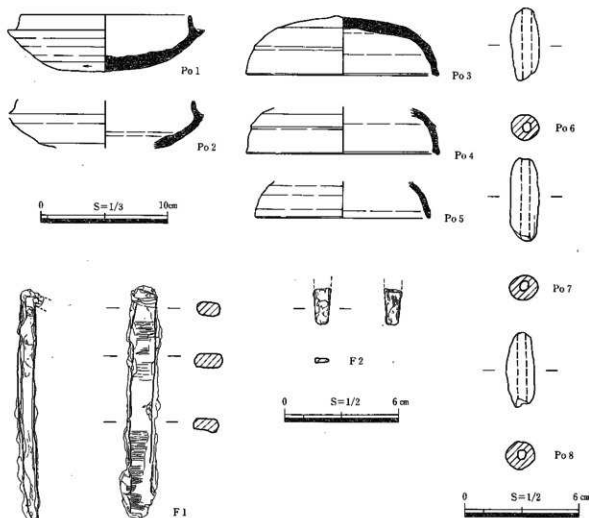
第1 主体部 第1主体部は墳丘の中心よりも、2mほど南に位置する。規模は東西3.2m、南北1.3m、深さ20cmを測る。主軸方向はN-82°-Eに振る。北西区には、石棺材がしっかりした状態で立っている。大半が破壊されていたが、箱式石棺であったと思われる。床面では、西区を中心に砂が敷かれている。厚い所では3cmにも達する。

一方、南区・北区には抜き取り痕がみられる。南区の抜き取り痕は、基盤層につけられている。これに対して、北区のものは、古墳の盛土につけられている。よって、(1) 基盤層が当主体部から北にかけて低くなっていたこと、(2) 平らな床面を作るために、当主体部中央以北に土を盛ったことがわかる。

第2 主体部 第2主体部は、墳丘の中心から1.5mほど西に位置する。規模は東西1.4m、南北0.8m、深さ18cmを測る。主軸方向はN-34°-Wに振る。盛土を切って設けられた埋葬施設である。北部に石棺材が残っているものの、全体的に激しく攪乱されている。当主体部も、箱式石棺と推定される。

両主体部間の関係は、わからなかった。

遺物 遺物としては、須恵器杯身Po1・Po2、須恵器杯蓋Po3～Po5、土師Po6～Po8、鉄器



挿図269 南谷26号墳出土遺物実測図

F1・F2が、挙げられる。これらのうち、第1主体部より出土したのは、Po2・Po3、刀子F2である。須恵器杯身Po2は主体部東部の攪乱溝から、バラバラの状態で見えられた。一方、須恵器杯蓋Po3は、主体部中央の攪乱土中より、逆さまの状態出土した。さらに、刀子F2は主体部北東部の④層赤黄褐色土上より、検出された。

時期 須恵器杯蓋Po3より、当遺構は古墳時代後期中葉のものと考えられる。南谷25号墳との新旧関係は、遺物の時期差により当遺構の方が新しいと言える。

当古墳は、規模の上でも南谷25号墳の2倍以上である。しかしながら、南谷25号墳との接点付近では周溝の規模を縮小している。よって、(1) 当遺構の被葬者は南谷25号墳のそれよりも力があつた、しかし、(2) 南谷26号墳は南谷25号墳を意識して、後者を壊さないように築かれた、と考えることもできる。

須恵器は、山本編年Ⅱ期・陶邑編年TK10並行のものと考えられる。

南谷28号墳（挿図270～273、図版48・78）

位置 南谷28号墳は、調査区南部c24・d24・e24・c25・d25・e25グリッド、標高67.75m～68.25mの緩斜面に位置する。北東約16mにはBSI22が、北約10mにはBSI21が、北西約10mにはBSI11が、南西約10mにはBSI37が、それぞれ位置する。一方、南東側にはBS04・BSI42がある。

墳丘 墳丘は耕作などにより、削平されている。残っている部分から判断すると、当古墳は墳丘の直径約10m、高さは約50cmの円墳である。

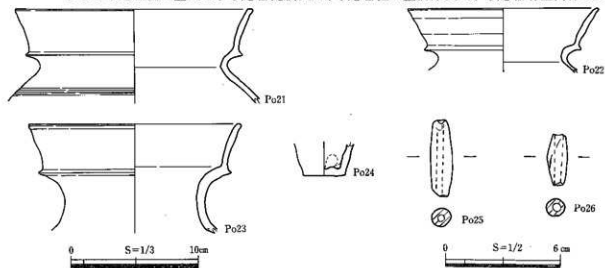
周溝 周溝の南半分も、後世の攪乱により削り取られている。残存する部分の周溝の幅は、約3mである。

周溝内 周溝西部にBSK11がある。東西1.5m、南北1.6mの円形を呈し、断面は逆台形である。

土坑 遺物は伴わなかった。埋土等も検討すると、新しい時代に掘られたものと考えられる。詳しくは、BSK11の項を参照されたい。

埋葬施設 墳丘・周溝ともに、埋葬施設はみられなかった。当遺構から南10m、d26グリッドの南東斜面に、石棺材6枚が放置されていた。これらは、安山岩で平面が2m×1m、厚さ約20cmの大きさをもつものである。28号墳に横穴式石室が存在したが、盗掘または耕作によって破壊されたと考えることもできる。

遺物 遺物としては、須恵器杯身Po1～Po9、須恵器杯蓋Po10・Po11、須恵器有蓋高杯蓋Po12、須恵器直口壺Po13、須恵器提瓶Po14、須恵器直口壺胴部Po15、須恵器有蓋高杯Po16、



挿図270 南谷28号墳出土遺物実測図(2)

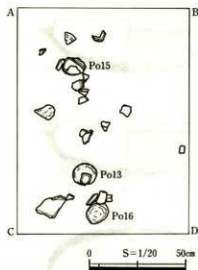
須恵器高杯杯部Po17、須恵器高杯榫部Po18、須恵器高杯脚部Po19、大型甕Po20、甕Po21・Po22、壺Po23、底部Po24、土錘Po25・Po26が、挙げられる。

これらのうち東側周溝で見つかったのは、須恵器杯身Po1、須恵器直口壺Po13・Po15、須恵器有蓋高杯Po16、須恵器高杯Po17である。これに対し、周溝西側の遺物は須恵器有蓋高杯蓋Po12、大型甕Po20である。

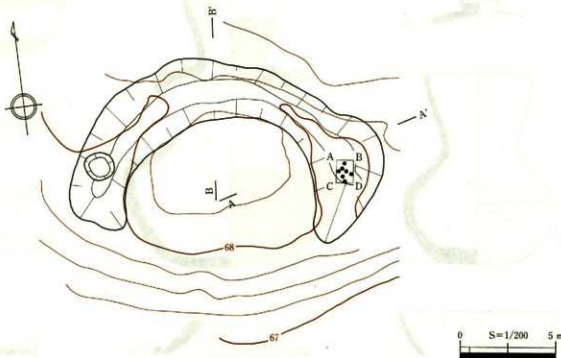
石列内の須恵器杯蓋Po11をはじめ、遺構周辺からも須恵器杯身を中心に、多くの土器がみられた。遺物の時期や位置関係を考慮すると、当古墳からの流れ込みと思われる。

時期 時期は、周溝で検出された須恵器Po13～Po16より、古墳時代後期後半と推定される。

須恵器は、山本編年Ⅲ期～Ⅳ期(古)・陶色編年TK43～TK209 並行のものと考えられる。



挿図271 南谷28号墳周溝内土器出土状況図



H=68.80m
A



H=68.80m
B



- ①暗赤褐色土(赤色粘土を含む)
- ②暗赤褐色土(大型アークを含む)
- ③暗赤褐色土(赤褐色土粒を含む)
- ④暗赤褐色土(多量の暗褐色土粒、ローム粒を含む)
- ⑤暗赤褐色土(暗褐色土粒を含む、②と比→ローム粒を多く含む)
- ⑥暗赤褐色土(粘りがあり、暗褐色土粒を含む)
- ⑦暗赤褐色土(DKPを含む)
- ⑧木の柱による擾乱

0 S=1/60 2 m

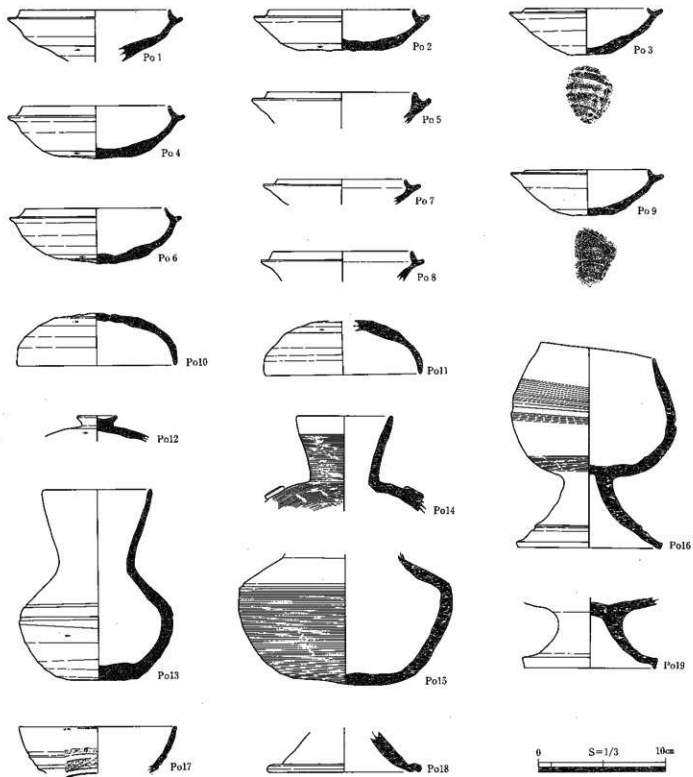


插图273 南谷28号墳出土遺物実測図(1)

第3節 南谷大山遺跡石列遺構の調査結果

石 列 (挿図274、図版48)

位 置 石列は調査区南部、d25・d26グリッドに位置する。遺構周辺は、標高約65.9m～67mの南東を向いた斜面である。当遺構は、尾根に沿って北東から南西方向を向いている。石列の南西部はBSS04と重複する。一方、南にはBSD03が走っている。

形 態 薄い石が列をなして、重なり合っている。大別すると2段からなり、両段の間には20cmほどの高低差がある。

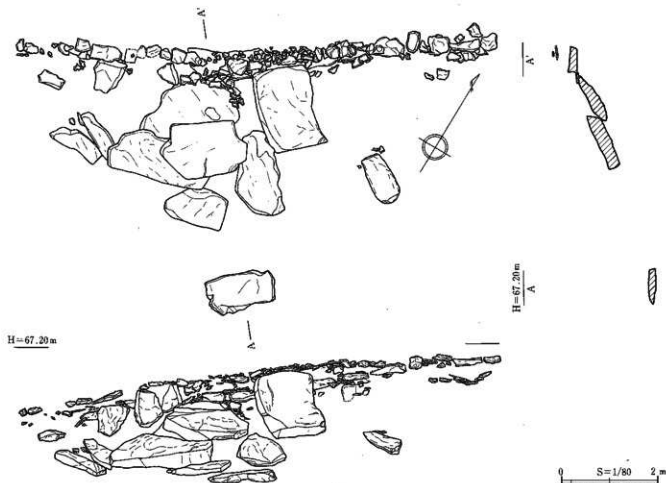
長さは約12m、幅0.25m～1mを測る。南西へ向かうほど標高が低くなっている。レベルの差は、約1mである。

当遺構はBSS04と一部で重なり、BSI42の残存部分にも南側で接する。石列と、前者との切り合いは攪乱などのため、わからなかった。位置やレベルを検討すると、当遺構がBSS04とBSI42の埋土が崩落するのを防いでいるようにも見受けられた。

約0.5m～4m下には、横穴式石室に使用されたと考えられる大型の板石が6枚、放置されていた。これらは安山岩で、南谷28号墳のものと同定される。

遺 物 須恵器杯蓋Po11などの土器が検出されたが、南谷28号墳からの流れ込みと思われる。

時 期 時期・用途ともに不明である。



挿図274 南谷大山遺跡石列遺構図

第6章 南谷ヒジリ遺跡・南谷27号墳の調査

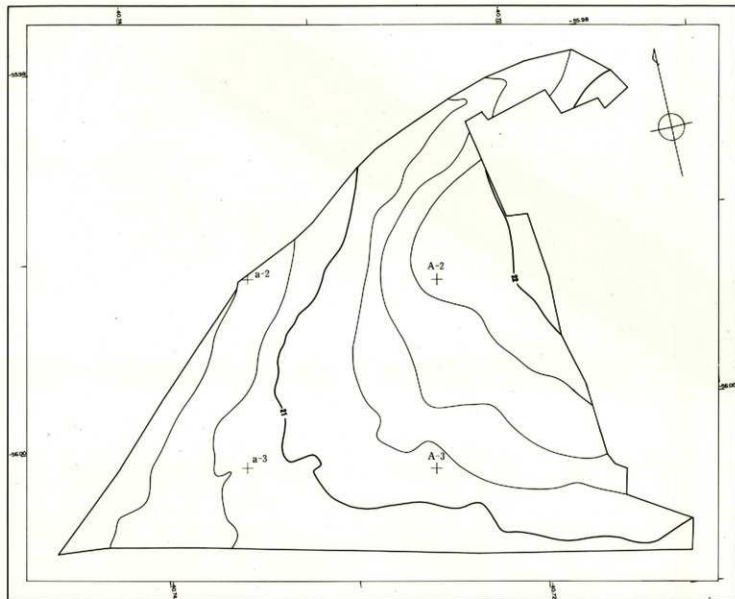
第1節 南谷ヒジリ遺跡・南谷27号墳の概要

- 位 置** 南谷ヒジリ遺跡は東郷池の北西、橋津川中流右岸の標高21m～24mの丘陵上に位置する。この丘陵は羽合平野に向かって東西に延びる舌状のものである。付近には周知の南谷遺跡、南谷大ナル遺跡があり、羽合平野を望むと古墳時代前期の大集落を持つ長瀬高浜遺跡がある。
- 1990年度調査** 南谷ヒジリ遺跡の調査は1990年度に行なったが、西側が崩壊危険区域に指定されていたため、家屋の立ちのきが終了するまで調査ができず、今年度調査することになった。1990年度の成果としては弥生時代終末から古墳時代前期の住居跡を5棟、掘立柱建物跡を3棟、土坑を4基、段状遺構を1基確認した。さらに、今年度調査のきっかけになった「コ」字状の溝状遺構も確認された。この溝は古墳の周溝の形態によく似ていることから、方墳が1基存在することが想定されて今年度調査となった。

第2節 南谷27号墳の調査結果

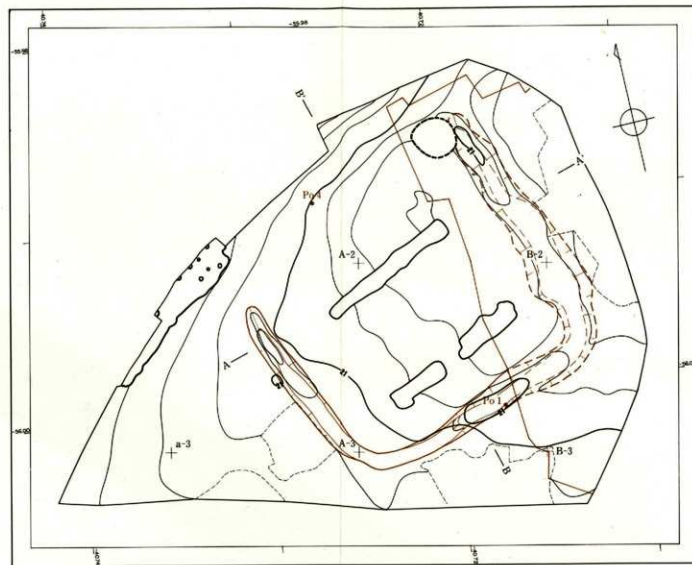
南谷27号墳 (挿図276～278、図版49～79)

- 位 置** 調査区のほとんどを占め、標高約21m～21.75mの地点に立地し、ほぼ尾根の中心を利用して築造されていた。この古墳は羽合町大字南谷地区にあるために南谷古墳群の中に入れたが、この尾根上の東側に、南谷2・3号墳があり、西側に南谷1号墳があるのみで、他の古墳とは離れている。南谷1号墳とは近接しているようであるが、円墳で石棺をもつと台帳に記載していること、近くの梨畑の斜面に石棺材があることから、南谷1号墳と南谷27号墳を区別した。
- 墳 丘** 墳丘は梨の耕作でかなりの削平を受けていた。特に、墳丘内の基盤層であるDKP層はひどく擾乱されていた。墳丘の規模は東西軸で14m、南北軸で14.5mあり、高さは南周溝底から0.5mを測り、平面形は方墳であった。
- 周 溝** 周溝は西側と東側で、だんだん浅くなって途切れてしまい、平面が「コ」字状を呈する。また、東側の周溝が切れたすぐ北側で、0.5m程の平坦面があり、その先で再び掘り下げられていた。その溝は1990年度に調査したSX01に向かって階段状に登っていく様相を呈していた。この溝が南谷27号墳に伴うものかどうかはわからなかった。それ以外には北側ではしっかりした溝は検出できず、そのままの地形を利用して古墳が作られたと考えられる。規模は南側で幅1.5m、深さ0.5m、西側で幅1.4m、深さ0.5mであった。断面は「U」字状を呈する。
- 遺 物** 出土遺物は、壺の頸部Po1、複合口縁をもつ甕Po2・Po3、小型丸底壺Po4、高杯Po5である。北西区の暗黒褐色土中から、口縁端部に平坦面をもち口縁下端が外方に突出する甕口縁Po2・Po3、風化が進んでいるが完形を保った複合口縁をもつ小型丸底壺Po4が出土している。また、南側周溝の中央付近の底面から、頸部に断面方形の貼り付け突帯をもつPo1が出土している。
- 時 期** 出土遺物より、南谷27号墳の時期は古墳時代前期と考えられる。



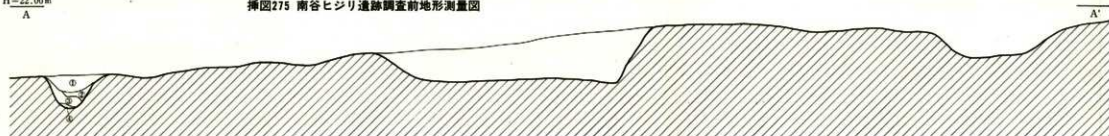
H=22.00m
A

挿図275 南谷ヒジリ遺跡調査前地形測量図

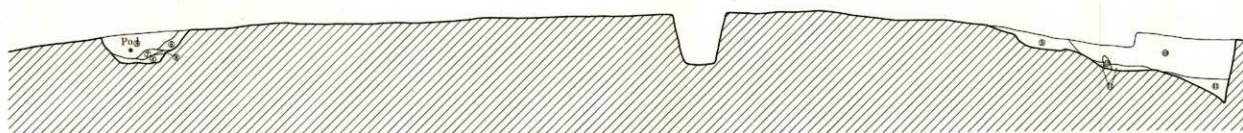


挿図276 南谷ヒジリ遺跡・南谷27号墳遺構全体図

0 S=1/200 10m



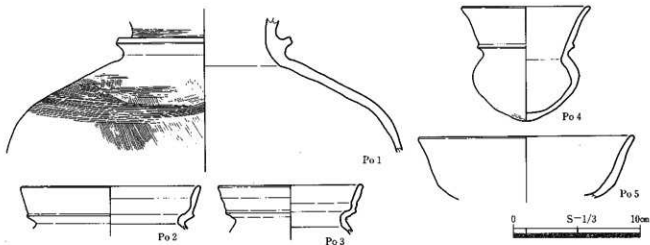
H=22.00m
B



- ①淡黒褐色土 (DKP粒、暗黒褐色土を含む)
- ②淡褐色土
- ③暗褐色土 (やや黒みを帯びている)
- ④暗黄褐色土 (粘質がある)
- ⑤暗褐色土 (DKP粒を含む)
- ⑥明灰褐色土
- ⑦暗黄褐色土 (サラサラしている)
- ⑧黄褐色土
- ⑨淡黒褐色土
- ⑩暗褐色土
- ⑪暗黄褐色土
- ⑫杉木の根による隆起

0 S=1/60 2m

挿図277 南谷27号墳土層断面図



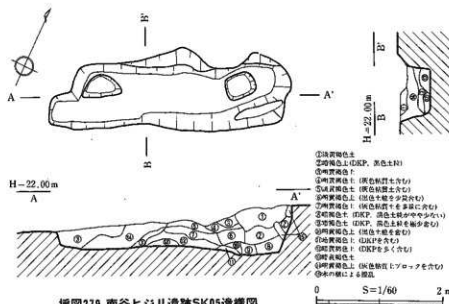
挿図278 南谷27号墳出土遺物実測図

第3節 南谷ヒジリ遺跡の調査結果

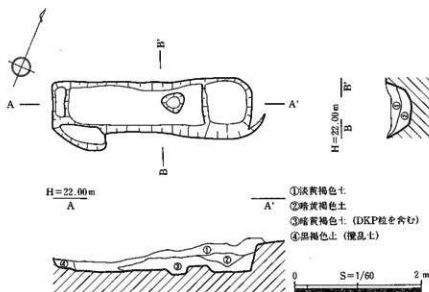
1. 土 塙

SK05 (挿図279、図版50)

- 位 置** 調査区南東端、A 3グリッドの中央南東より、北西に緩やかに下るがほぼ平坦面を成している丘陵状で、標高21.5m付近に位置する。土塙の東端は1990年度の調査区と接している。南谷27号墳の墳丘内の南寄りにある。SK07と平行し、SK06の延長線上の東側にある。
- 形 態** SK05は不整形ではあるが、長方形状をしている。規模は、長軸3.7m、短軸0.6mを測り、深さは0.2~0.72mである。
- 埋 土** 埋土は14層に分層できる。層には規則性がなく人為的に埋められた形跡がある。基盤層であるDKPによく似た土色でプランが確認できた。耕作の攪乱による掘り込みは柔らかかったが、比較的締まりの良い埋土であった。
- 時 期** 遺物の出土がなく不明である。
- 性 格** 底面も一定しないところもあり、用途は不明である。



挿図279 南谷ヒジリ遺跡SK05遺構図



挿図280 南谷ヒジリ遺跡SK06遺構図

S K 06 (挿図280、図版50)

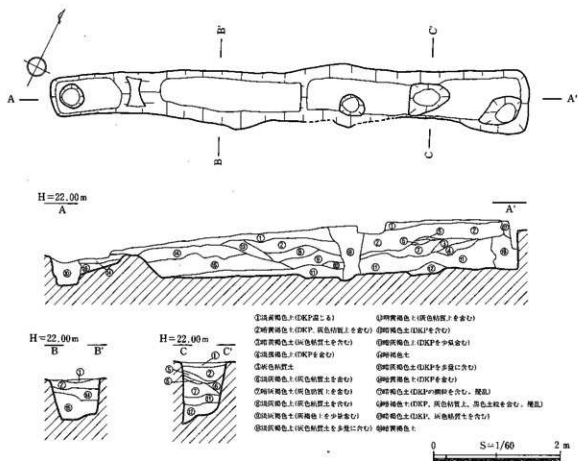
- 位 置** 調査区南側、A 3 グリッドの中央南西より、北西に緩やかに下るがほぼ平坦面を成している丘陵状で、標高21.25m付近に位置する。南谷27号墳の墳丘内の南寄りにある。S K 07と平行し、S K 05の延長線上の西側にある。
- 形 態** S K 06は不整形ではあるが、長方形状をしている。規模は、長軸3.2m、短軸0.8mを測り、深さは0.15m～0.45mである。
- 埋 土** 埋土は3層に分層できる。S K 05の層に比べると堆積の仕方に規則性はあるが、土質は良く似ていた。基盤層であるDKPによく似た土色でプランが確認できた。耕作の攪乱による掘り込みは柔らかかったが、比較的縮まりの良い埋土であった。
- 時 期** 遺物の出土がなく不明である。
- 性 格** 底面が一定せず、用途は不明である。

S K 07 (挿図281、図版50)

- 位 置** 調査区北側、a 3 グリッド～A 2 グリッドに掛けてほぼ東西に延びており、北西に緩やかに下るがほぼ平坦面を成している丘陵状で、標高21.25m～21.75m付近に位置する。南谷27号墳の墳丘内の北寄りにある。S K 05・S K 06と平行して延びる。
- 形 態** S K 07は不整形ではあるが、長方形状をしている。規模は、長軸7.6m、短軸0.6m～1.0mを測り、深さは0.3m～0.7mである。
- 埋土は20層に分層できる。S K 05の層に比べると堆積の仕方に規則性はあるが、土質は良く似ていた。基盤層であるDKPによく似た土色でプランが確認できた。耕作の攪乱による掘り込みは柔らかかったが、比較的縮まりの良い埋土であった。
- 時 期** 遺物の出土がなく不明である。
- 性 格** 底面が一定せず、用途は不明である。

2. 段状遺構

S S 02 (挿図282・283、図版50)



挿図281 南谷ヒジリ遺跡SK07遺構図

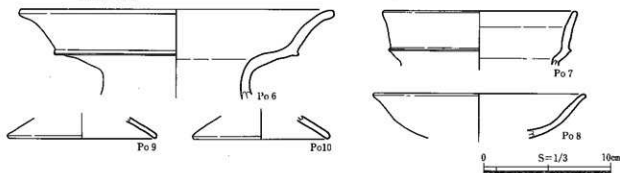
位置 調査区北側、a2グリッド～b3グリッドにかけて北東から南西に延びており、北西に緩やかに下るがほぼ平坦面を成している丘陵状で、標高20.25m～20.75m付近に位置する。南谷27号墳の墳丘から1.5m離れたところにある。北側は崩壊危険区域の工事が入っていたため遺構の広がりを確認することができなかった。

形態 SS02は一部分しか確認できなかったため、全体の形態をつかめないが、検出されている範囲では、平面が方形になると推測された。規模は、長軸9.0m以上、短軸1.5m以上を測り、深さは西隅で0.33mである。面積は13.5m²以上である。

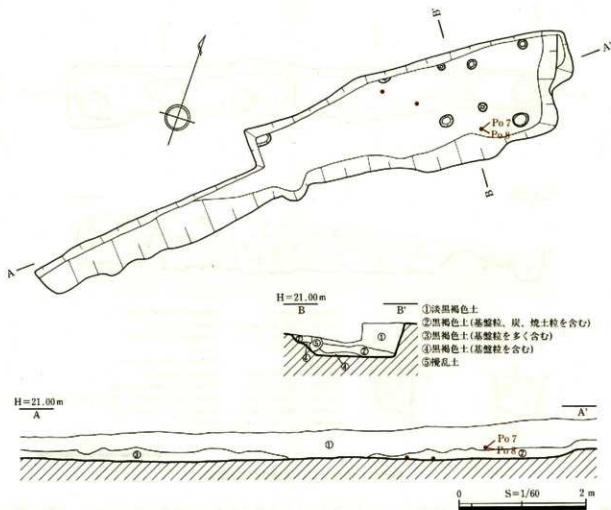
埋土 埋土は4層に分層できる。①～④層は自然堆積である。

遺物 出土遺物は、複合口縁をもつ壺Po6、同じく甕Po7、高杯の裾部Po8・Po9、同じく杯部Po10である。

床面出土土器は、床面直上から、口縁部が大きく外反して立ち上がり、端部に平坦面をもつ壺Po6が、西側隅で床面から20cm浮いた状態で、口縁部ナデ仕上げで、端部が僅かに平坦面を成し、頸部に断面方形のはりつけ突帯をもつ甕Po7と浅い碗状の高杯杯部Po8が出土している。



挿図282 南谷ヒジリ遺跡SS02出土遺物実測図



挿図283 南谷ヒジリ遺跡SS02遺構図

- 時期** 時期は床面出土土器より、古墳時代前期と考えられる。
- 性格** 底面は平坦で、住居の床面によく似ているが、壁溝、柱穴が検出できなかったので性格は不明である。

遺構外遺物について (挿図284・285、図版79)

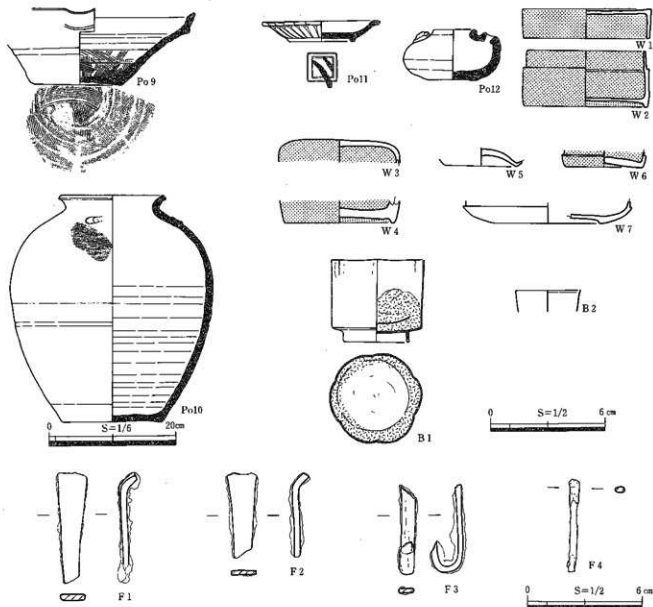
遺構外から、安山岩製石錘S1、寛永通宝1点、蔵骨器が出土している。このうち蔵骨器は、調査終了後工事中に検出されたもので、出土地点ははっきりしない。

- 蔵骨器** 蔵骨器として利用されていたものは、備前焼の甕Po10である。また、同地点で備前焼の播鉢Po9が出土しており、はっきりとはしないが、播鉢で蓋をして埋葬されたものと考えられる。

蔵骨器の内部には乾燥した褐色土と共に、モグラと思われる小動物の骨が入り込んでいた。また、ルリ釉を施した菊皿風の小皿Po11、灰釉を施した瀬戸焼の小型水差しPo12、外面赤漆・内面黒漆を施す木製合子W1・W2、黒漆が施される木製品W3・W4・W5・W6・W7、端部が花卉様になる青銅容器B1、不明銅製品B2、毛抜きと考えられる鉄器F1～F3、鉄釘状鉄器F4、布の断片が多数が出土している。F1～F3は同一個体と考えられる。

Po9は、片口の播鉢で、播り目は斜交している。

Po10は、「く」字状の口縁部をもち肩部が大きく張り、しっかりとした平底の底部をもつものである。肩部には、貼りつけの形骸化した耳が3カ所ある。また、ヘラ描き記号が施される。内面底部には、比較的大きな布の断片が残っており、布で覆われたものが入っていたも



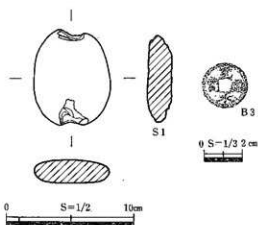
挿図285 南谷ヒシリ遺跡地内出土遺物実測図

のと考えられる。布の種類は不明であるが、織り目が細かい。

Po11は、底部外面に墨書による「二」という漢字が書かれている。Po12は、墨と考えられる黒色の付着物があり、底面は回転糸切り痕・布日痕が残る。

B1内には、和紙が入っており、また、その上に径3.8 cm程の円形の銅製品が落ち込んでいる。

時期 Po9は備前V期(新)、Po10は備前IV期と考えられ、それぞれに時期差があるが、蔵骨器として埋葬された時期は、Po9の時期であり、16世紀末～17世紀初頭と推定される。



挿図284 南谷ヒシリ遺跡遺構外出土遺物実測図

ま と め

集 落 1991年度・1992年度にかけての調査では、南谷大山遺跡で竪穴住居跡49棟、孤立柱建物跡3棟、土坑25基、段状遺構5基、溝状遺構8条、ピット群4群を検出することができた。南谷大山遺跡は、弥生時代後期後半～古墳時代中期後半にかけての、非常によくまとまった集落遺跡であり、この地域の集落構造を解明するための大変貴重な遺跡である。ここでは、1991年度から1992年度の調査のまとめとして、簡単に集落の変遷を考えてみたい。

集 落 の 変 遷 弥生時代後期後半には、大きく2カ所で住居が営まれている。A区の標高が90m付近の高い地点にAS I 01・03・04、ASK03、ASD01・02が作られている。また、B区の標高65m～77m付近のやや低い地点に、BS I 23・27・33・36・37、BSK14・15・18・19・24、BSS01・03が作られている。竪穴住居の平面形は、隅丸方形4棟、方形1棟である。

弥生時代終末には、高い地点での住居は急速に減少し、AS I 02、ASK04のみである。B区では標高79m付近の上方の平坦面で、BS I 01～04・06～08・31・35、BSK02～09が作られている。この住居群に付随して、道路として使用されたと考えられるBSD01が作られている。標高69m付近の下方の平坦面では、非常に大型の多角形住居であるBS I 21・26を中心に、小型のBS I 17・25・42、BSK16・17・23が作られている。竪穴住居の平面形は多角形のもの2棟、円形のもの1棟、隅丸方形のもの5棟、方形のもの7棟と混在した状況にある。

古墳時代前期では、遺構検出は完全にB区に限定される。BS I 10-3・12・14・15・18・20・30-5・32・38・40、BSB01～03、BSS04がこの時期に当たる。これらは、B区の先端から上方の平坦面にかけて、広い範囲で営まれている。中心となるのは大型のBS I 20・32と考えられるが、この二つの住居にも前後関係が与えられるものとする。この時期には貯蔵穴と考えられる土坑が見られなくなり、代わりに孤立柱建物跡が現れている。この時期で、貯蔵の形態及び生産物の所有形態が変化したものと考えられる。竪穴住居の平面形も隅丸方形が2棟に対し、方形住居が7棟と方形住居が主流となっている。

この時期から空白期間があり、つぎに集落が営まれるのは、古墳時代中期後半になってからである。ちょうどこの空白期間は、平野部で長瀬高浜遺跡の大集落が営まれた時期であり、南谷大山遺跡で集落が途切れることは、大変興味深い事実である。

古墳時代中期後半には、集落の範囲がB区先端部に限られている。BS I 09-10-1・10-2・11・13・16・19・22・24・28・29・30-1・30-2・30-3・39・41・43・44・45、集落を取り囲むように作られたBSD03がこの時期に当たる。この時期に特徴的に言えることは、同じ位置で竪穴住居が建て替えられていることである。BS I 11では7回、BS I 13-30では4回建て替えが確認されている。いずれの住居も最終的にはその規模が縮小傾向にある。

南 谷 古 墳 群 1991年度～1992年度にかけて、南谷古墳群で22・24～28号墳の6基の古墳を調査した。

このうち、24号墳は第1次墳丘、第2次墳丘をもつ古墳と確認された。第1次墳丘の規模は径3.5m、高さは約1mを測り、周溝状の溝も検出されている。この墳丘に伴う箱式石棺内から乳幼児の歯牙が検出されている。第1次墳丘はしばらく放置されたものと考えられるが、その期間は短いものであったと考えられる。

第2次墳丘は、第1次墳丘の規模をさらに大きくしたもので、径約10mを測る円墳である。第1次墳丘の主体部とはほぼ同じ主軸方向をもつ箱式石棺を主体部とする。

24号墳は、被葬者の性格・古墳築造の契機を考える上で、19号墳と並び大変貴重な古墳である。

25号墳は、擾乱が著しく周溝のみが検出された。径約10mを測る円墳と考えられる。26号墳と接するように検出された。

26号墳は、径約22mを測る円墳で、墳丘中心からはずれた位置で大小2つの主体部が検出されている。これらの主体部は大半が破壊されていたが箱式石棺と推定される。盛土もわずかに残っており、北側に傾斜する基盤層上に盛土が行われていたことが確認された。

25号墳から出土した須恵器は山本編年Ⅰ期・陶邑編年TK208並行期、26号墳から出土した須恵器は山本編年Ⅱ期・陶邑編年TK10並行期と考えられ、25号墳が先行するものと確認された。

26号墳は、南側で25号墳と接するように築造されているが、接する部分で周溝が途切れており、規模的にはるかに上回る26号墳が、小さな25号墳を意識していたことが窺われる。

同様な状況は、南谷古墳群中では19号墳・20号墳にもみられる。

25号墳は、そのとなりの丘陵にある宇野4号墳と同時期と考えられる。また、南谷大山遺跡のB区先端部に位置する集落ともほぼ時期を同じくしており、集落と墳墓の関係を解明するための大変貴重な資料を提供できると考える。

27号墳は、1990年に調査された南谷ヒジリ遺跡のSD01として報告されていたもので、1992年に全体の調査が行われ、古墳時代前期の一辺約15mの方墳であることが確認された。

現在のところ、南谷古墳群中では最もさかのぼる古墳である。

28号墳は、復元径約12mを測る円墳である。内部主体は不明であるが、南側斜面に大型の安山岩の板石が落ち込んでおり、横穴式石室が内包されていたと推定される。出土している須恵器は、山本編年Ⅲ期～Ⅳ期（古）・陶邑編年TK43～TK209並行期と考えられる。

南谷古墳群中では、横穴式石室を内包するものは、14～17号墳が確認され、その石室形態はC2類と考えられる。28号墳も同様な石室形態が推定される。

22号墳は、1990年にその大半が調査されていたが、1992年に残りの南東側を調査し、22号墳の全形を調査することができた。

以上簡単に調査事実在即してまとめを行ったが、十分な考察はできなかった。南谷大山遺跡の集落の様相・南谷古墳群との関係等、今後の調査研究に待つところが大きい。

最後に、ここに報告書を上梓する運びとなったが、調査の実施、報告書の作成にあたり、指導・協力及び助言いただいた各位に深甚の謝意を表します。

註・参考文献

- 註1 羽合町教育委員会『羽合町内遺跡発掘調査報告書』1989
- 2 鳥取県教育文化財団
『南谷ヒジリ遺跡・南谷夫婦塚遺跡・南谷19～23号墳
・乳母ヶ谷第2遺跡・宇野3～9号墳』1991
- 3 新日本海新聞社『鳥取県大百科事典』1984
- 4 羽合町『羽合町史』前編 1967
- 5 東郷町『東郷町史』1987
- 6 鳥取県教育研修センター『天神川流域とその周辺』1983
- 7 鳥取県埋蔵文化財センター『旧石器・縄文時代の鳥取県』1988
- 8 倉吉市教育委員会『高鼻2号墳(瀬手2号墳)
発掘調査報告書』1982
- 9 倉吉市教育委員会『伯耆国庁跡発掘調査概報(第3次)』1975
- 10 鳥取県埋蔵文化財センター『鳥取県ニュース』No.28 1990
- 11 倉吉市教育委員会『立籠遺跡群 取木遺跡・
一反半田遺跡発掘調査報告書』1984
- 12 北条町教育委員会『鳥取遺跡発掘調査報告書第1集』1983
- 13 名越勉『原始・古代』『倉吉市史』1973
- 14 倉吉市教育委員会『津田峰遺跡発掘調査報告書』1986
- 15 東伯町教育委員会『森島第1・森島第2遺跡発掘調査報告書』1987
- 16 調査町教育委員会『横塚遺跡発掘調査報告書』1986
- 17 山陰考古学研究所『山陰の前期古墳文化の研究I』1978
- 18 山陰中央新報社『さんいん古代史の周辺ト一』1978
- 19 鳥取県教育文化財団『久吉第3遺跡・只田原遺跡・
林ヶ原遺跡発掘調査報告書』1984
- 20 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』
II-VI 1981-1983
- 21 北条町教育委員会『北尾遺跡発掘調査報告書』第1集 1987
- 22 治村『治村誌』1989
- 23 米子市教育委員会『日久美遺跡』1986
- 24 佐々木謙他『倉吉福高遺跡』1970
- 25 鳥取県教育委員会『東郷町大鼻遺跡』『埋蔵文化財発掘調査概報』
1973
- 26 鳥取県教育文化財団『宇谷第1遺跡・
南谷大ナル遺跡発掘調査報告書』1992
- 27 鳥取県埋蔵文化財センター『弥生時代の鳥取県』1985
- 28 名越勉・甲斐忠彦『鳥取県東郷町出土の小銅鐸』
『考古学雑誌』第59巻2号 1973
- 29 鳥取県教育委員会『鳥取県文化財調査報告書第1集』1960
- 30 倉光清六『伯耆八橋町銅鐸出土遺跡』
『考古学雑誌』第23巻4号 1933
- 31 倉吉市教育委員会『上米遺跡発掘調査報告書II
-阿弥大寺地区-』1980
- 32 東森市良『四隅突出型埴土器。ニューサイエンス社 1989
- 註33 北条町教育委員会『土下古墳群発掘調査報告書第1集』1983
- 34 北条町教育委員会『曲古墳群発掘調査報告書』1981
- 35 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』
IV 植輪編 1982
- 36 東郷町教育委員会『津田峰遺跡発掘調査報告書』1974
- 37 東郷町教育委員会『佐美4・13号墳発掘調査報告書』1979
- 38 倉吉市教育委員会『大宮古墳発掘調査概報』1979
- 39 近藤哲雄『東伯省における横穴式石室の様相』
『鳥根考古学会誌』第4集鳥根考古学会1987
- 40 東郷町教育委員会『片平5号墳発掘調査報告書』1977
- 41 鳥取県教育委員会『鳥取県史跡古墳分布調査概報』1981
- 42 梅原未治『因伯二国に於ける古墳の調査』
『鳥取県史跡地調査報告』第二冊 1924
- 43 羽合町教育委員会『馬ノ山古墳群』1961
- 44 治村教育委員会『岡古墳群発掘調査報告書』1990
- 45 鳥取県教育委員会『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』1984
- 46 真田廣幸『伯耆国大御堂廃寺考』
『山陰考古学』1986
- 47 真田廣幸『奈良時代の伯耆国に見られる軒瓦の様相』
『考古学雑誌』66-2 1980
- 48 倉吉市教育委員会『史跡大原庵寺跡第2次発掘調査概報』1988
倉吉市教育委員会『史跡大原庵寺跡第3次発掘調査概報』1991
- 49 倉吉市教育委員会『伯耆国庁跡発掘調査概報』
第3次・第5次・第6次 1975-1978
- 50 倉吉博物館『伯耆国分寺』1983
- 51 倉吉市教育委員会『伯耆国分寺発掘調査概報』1973
- 52 佐々木謙・亀井聖人『原始古代編』『鳥取県史』1鳥取県 1972
- 53 羽合町教育委員会の御好意により、『天正14年河村郡
南谷村田地絵図全図』を拝見させていただいた。
- 54 羽合町教育委員会『南谷貝塚発掘調査報告書』1991
- 55 山本清『山陰の須恵器』『鳥根大学開学10周年記念
論文集』人文科学編 1960
- 56 田辺昭三『陶器古史群I』平安考古クラブ 1966
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 57 大栄町教育委員会『上種第5遺跡発掘調査報告書』1985